

こんな僕に彼女は必要なのだろうか？

ミズヤ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は伊真舞高校1年生、絆成 優也。

俺は主席で入学した。中学校から勉強だけで『恋愛』の『れ』の字も無かった俺にある日突然親にこんなことを言われる。

「お前は頑張っている！だからこそ恋愛の1つや2つ経験してほしい」

この言葉をきっかけに俺の人生は変わっていく

恐らくこのタイトルじゃ長いと思うので自分なりの呼び方で呼んでみてください。

ちなみに僕は『こん彼』って呼んでいます。

なろうの方でも掲載しています。

毎週土曜日 朝7時に更新しています

目次

1年生編 一学期

第1話 僕に彼女は要らない | 1

第2話 幸せって何だっけ? | 7

第3話 いつのまにか友達で | 11

第4話 過去の話 | 15

第5話 体育祭準備 | 20

第6話 体育祭 | 26

第7話 にぶい優也と申し訳程度のテスト | 36

第8話 終業式 | 44

1年生編 夏休み

第9話 天然過ぎる優也 | 49

第10話 別荘とプライベートビーチ | 55

第11話 運っていったい: | 61

第12話 夏祭り | 69

1年生編 二学期

第13話 修羅場 | 77

第14話 忘れられない誕生日〜前編〜 | 84

第15話 忘れられない誕生日〜後編〜 | 90

第16話 学校祭準備 | 101

第17話 学校祭 | 110

第18話 中間テスト | 120

第19話 ハロウィン | 127

第20話 鈍感な俺は乙女心も全く分からない | 136

第21話 いつも通りじゃない日常 | 143

第22話 クリスマスが誕生日

第23話 誕生日って…こんなに疲れるものだっけ？

1年生編 冬休み

第24話 初詣

第25話 ツツコミ放棄宣言!?

1年生編 三学期

第26話 近づく真依の卒業

第27話 優也の日常

第28話 ついにおかしくなる悠真

第29話 班決めは戦争とイコール

第30話 黒歴史

第31話 八反亭

第32話 童明寺と白井さん

第33話 自由時間

第34話 失う悲しみ

第35話 思い出の記念撮影

第36話 一年の振り返りとバレンタインデー前日

第37話 困惑する優也と手慣れてるあつし

第38話 社会経験を積もう

第39話 初バイト

第40話 犬みたいな童明寺

第41話 なんだこの展開by優也

第42話 みんなに嫌われないが好かれてる童明寺

第43話 優也と結羽

第44話 1年生編 終

151

157

170

182

188

194

198

203

207

212

217

222

226

231

237

243

248

253

258

264

271

276

280

第45話 お見舞い 287

二年生編 一学期

第46話 新たなクラス 291

第47話 変人の巣窟 297

第48話 昔を思う 302

第49話 新入生 308

第50話 露木と夕華 313

第51話 LIFE part1 317

第52話 LIFE part2 322

第53話 LIFE part3 327

第54話 LIFE part4 331

二年生編一学期 消失編(序章)

第55話 体育祭の時期らしいです 337

第56話 おやすみ 342

二年生編一学期 消失編

第57話 パーカー 347

第58話 従兄妹 352

第59話 体育祭 357

第60話 尾行 361

第61話 隠し通さなきゃいけないものがそこにある 367

第62話 大ピンチ 373

第63話 精神的外傷(トラウマ) 384

第64話 恐怖の軽音部 390

二年生編夏休み 消失編

第65話 お話(お説教) 396

第66話 柴野結羽の憂鬱 401

第67話 帰還 406

第68話 誘拐 411

第69話 喧嘩、そして親友へ 417

第70話 策士優也の救出大作戦 421

第71話 尋問 428

第72話 選択 433

第73話 柴野 437

第74話 柴野政博と優也の父 441

第75話 歓迎 446

第76話 遊びのお誘い 451

第77話 白波真依 455

第78話 想いを繋ぐ景色パート1 460

第79話 想いを繋ぐ景色パート2 465

第80話 想いを繋ぐ景色パート3 471

二年生編 二学期

第81話 ハーレムとは、経験しないとわからない苦労がある

476

第82話 人生最大のモテ期がやってきたようです(望んでない)

第83話 同時に告白されるだけで罪らしい 481

第84話 小学生の恋 486

第85話 課題が増殖中 490

第86話 発覚 501

第87話 俺の強がり 505

epilogue	613
第最終話 いつかまた、帰ってくる日まで	608
第110話 結羽の暴走	604
第109話 恋は盲目	600
第108話 本屋戦争	596
第107話 小さな見栄	593
第106話 ジャストタイミングとデート開始	589
第105話 悶える結羽と百合	585
第104話 諦められない	580
第103話 羞恥よりも独占欲が勝ってしまうようです	576
第102話 距離感	572
第101話 思いを繋ぐ景色と結羽	568
第100話 馴れ初め語り	564
第99話 愛し合う二人とすれ違う思考	560
第98話 婚約指輪	556
第97話 古風の町	552
第96話 可愛いのは正義	548
第95話 メモリーとエピソードオブ結羽	544
第94話 優也を旅行に誘いたい!	540
第93話 結羽の誕生日	534
第92話 誕生日準備	530
第91話 怒る結羽	526
第90話 ぬいぐるみ	522
第89話 相談	518
第88話 始まりのあの日	510

A
f
t
e
r



1年生編 一学期

第1話 僕に彼女は要らない

カリカリカリカリ

えんぴつ・シャーペンを走らせる音が聞こえる。

今は受験の真つ最中

俺はこの日のためにありとあらゆる娯楽を無視して、学校行事と受験勉強だけに尽くしてきた。

すべてはこの日のために…

来る日も来る日も、友人など作らず、『恋愛』なんて『れ』の字も無い。

「終了！」

??してすべてのテストが終わった。

??して後日

合格発表は校舎の外にある掲示板に貼ってあるそうだ。

えーっと俺の名前は…

「あった！」

俺の名前、きずなり絆成 ゆうや優也の名前がそこにはあった。

順位は1位、主席だ。

今までの努力が今報われた。

??んな瞬間だった。

??席で入ったと言う事は入学式にスピーチをしなくてはならない。

俺はあまり人前に立って話すのは得意じゃない。

今は入学式、そろそろ

「絆成 優也君！」

ついに定番だ。

そして俺はステージに上がって

優也「俺は1年A組の絆成 優也です」

そして、スピーチを開始した。

優也「これで終わります」

そして俺はステージから下りる。

今日はそれで終わり、下校した。

この伊真舞いままい高校は、町一番の進学校と言われているだけあって、勉強の内容もすごく難しいと言われている。

そのため今の学力を維持するためには今まで以上に勉強をしなくてはならない。

???
そして俺は家に帰ってから部屋に籠って勉強をしていた。

コンコン

ノックの音が聞こえた。

「父さんだ。入るぞ」

それだけ言っただけで父さんは静かに俺の部屋に入ってきた。

父「頑張ってるな」

優也「成績を維持したいからな」

父「そう言えばどうしてあの学校を志望したんだ？」

そう、俺には理由がある。

ただ単に制服が好きだとか、先輩が可愛いからとか言う理由じゃない明確な理由が。

その理由とは、

優也「俺はあの学校にしか無いと言う医療研究会に入ろうと思っている。だから志望した」

なぜその部に入りたいかと言うのにも理由がある。

父「もしかして、まだ七海ななみの事を気にしてるのか？あれはお前のせいじゃないと」

優也「いや、俺がしくじったからこんなことになったんだ」

俺には4歳年下の妹が居る。

名前は七海：絆成 七海だ。

しかし数年前、俺がしくじったことによつて、七海は寝たきりになつてしまった。

命に支障は無いらしいが、このまま一生目を覚まさないかもしれない。いい。

現代の医療では、それを治すことは出来ないらしい。

なら、俺が作り出す！その治療法をあみだす！だからあの高校を志望した。

父「まあ、お前が七海の為に自分の時間を削って色々行動をしてくれているのは嬉しく思う…けどな、父さんはお前にも幸せになってほしいんだ。それが父さんの最大の幸せなんだ」

優也「俺の幸せは七海が目覚ますことだよ。だから俺は七海が目覚ますまで最大限の力を尽くすんだ」

そう、俺の幸せは七海が目覚ますこと。

それ以外の幸せなど要らない。

七海が目覚ますなら死んでも良いとすら思っている。

俺はあの頃の楽しかった日々を取り戻したい。

あの、楽しかった日々を…

父「けどな、父さんは本音を言うとな、お前に折角の青春時代を謳歌してほしい。だからな、優也」

父さんは一息ついてからこう言った。

父「お前は頑張っている。だからこそ恋愛の1つや2つしてほしい」

は？俺が恋愛？

優也「あはは、父さんも面白いジョーク言うんだね！昔から俺には『恋愛』の『れ』の字すら無かったこと知ってるでしょ？」

しかも今は恋愛どころじゃない！俺にはそんな時間も無い。

俺には彼女など必要は無い。

父「まあ考えとく事だな」

それだけ言い残したら、父さんは立ち上がって、部屋から出ていった。

優也「恋愛…ね…」

次?????の日

今日は学校で自己紹介がある日。
そして部活動を決める大事な日。
残念なことに医療研究会は定員が決まっており、くじ引きで決めるらしい。

俺は運はあまり良くないから不安がつどる。

この高校に入る人のほとんどが医療研究会目的だ。
研究会と名前はなっているが、これは正式な部活だ。

この部活で発見した医療技術で世界に出回っている物は沢山ある。
最初に言った通り、定員が決まっついていて更にはほとんどの生徒が医療研究会目当て、そうなるこの学校の生徒全員が敵だ。

考え方が片寄ってるなどどうとでも言うが良い。

「俺は、ほんだ 本田 りゆうき 龍輝です」

今は自己紹介の最中。

昨日の父さんの言葉を思い返していた。

優也「恋人…か」

実は昨日言った事は建前だったりする。

本音を言うと、また大切な人を失うのが怖いと言った所だ。

先生「えーっと次は絆成！」

しかし俺の耳には届かず、まだ恋愛の事について考えていた。

先生「絆成！」

少しイラついた声で呼んできた。

優也「は、はい！」

やっと俺の耳に届き俺は自己紹介を始める。

優也「俺は絆成 優也。好きなものは他人の幸せ、特技は無し」

そう言っ俺は自己紹介を終えた。

好きなものでクラス中がざわついた。まあ他人の幸せだからな。

先生「では、部活を決めます！自分のネームプレート?????を黒板に貼ってください！」

そして俺は迷わず医療研究会に立候補した。

案の定、クラスの8割が医療研究会に立候補した。

先生「では、医療研究会は昼休みに視聴覚室でくじ引きがあるので忘れずに行ってください！」

登り休み

俺は今、視聴覚室に来ていた。

これは一種の戦闘だ。

ドキドキ

そして俺は当たりとハズレが書いてある割り箸を引いた。

この学校の全校生徒は300人強

立候補者は250人強

枠は10人

つまり、240人入れないことになる。

俺はその10人になってやる！

そして俺は割り箸を見た。

それにはこう書いていた。

『ハズレでした〜残念〜mg（ハハ）プギヤ〜』

ムカつく

バキツ

俺は思いつきりその割り箸を折った。

先生「当たり前だった人はこちらへ来ててください！」

しかし、俺は当たりを引くことが出来なかった。

その事で今までの努力はなんだったんだ〜という気持ちになる。

優也「あははは〜ほんつとついてね〜」

俺はいざというときに勝負弱い。

帰って午後の授業に戻ったが、いまいち内容が入って来なかった。

帰宅

カリカリカリカリ

俺は今自棄になって勉強をしていた。

俺が今まで頑張ったのは一瞬で否定された気分だ。

俺は七海の為にあの学校に入ったんだ。

そう言えば俺は昔、何になりたかったんだらうか？

父「優也、息抜きにコーヒーでも飲みな」

優也「置いといて」

父「優也！いつまでも引きずってないで、先の事を考えろ！」

先の事…か

父「父さんはな、お前の本当の幸せを願ってるんだ！」

それだけ言ったら父さんは部屋から出ていった。

優也「余計な…お世話だ」

朝?????

俺は目を覚まして時計を見た。

優也「つて、ヤバイ！」

どう考えても遅刻の時間だった。

俺は急いで準備して家から飛び出した。

そして十字路を走って行こうとしたとき、脇道から走ってきた女の子とぶつかった。

「いって…」

優也「いつ！大丈夫か？」

「は、はい！大丈夫です！」

中々元気な女の子だ。

中学生位だろうか？かなりの童顔だ。

「あ、遅刻するー！」

優也「ほんとだ！」

そして俺は学校に向かって走り出した。

第2話 幸せって何だっけ？

やっと着いた。

こんな早々に遅刻という快挙を成し遂げるとこになるとは思わなかった：

俺は今、学校に来ていた。

畜生！今朝のあの事があつたせいで、遅刻した！まああれが無くとも遅刻していた可能性は捨てきれないが：

俺は死ぬほど苦しい努力を積み重ねて、今の地位を獲得した訳なんだが、他人から見ると、天才と名高い俺が遅刻というミスをしたと言うことで騒ぎになりかけた。

昨夜は、幸せって何だろうかと考えていたら眠れなかった。

どうしてこんなことを考えたかというとな父さんの台詞のせいだ。

俺は父さんにこんなことを言われた。

父「父さんはな、お前の本当の幸せを願ってるんだ」

俺の本当の幸せ：か

いつからだろうか？俺自身の幸せを願わなくなったのは：

そして、俺は七海が目を覚ますことが幸せだと思うようになった。

そう言えば俺より先に走っていったあの女の子は大丈夫だろうか？

先生「えーじゃあこの問題を：優也！答えなさい！」

どうして俺はあの女の子の事を気にしてるのだろうか？

先生「優也」

普段はたいして気にも止めない筈なのに：医療研究会に入れなくて、心に余裕が出来たからだろうか？

いや、それだと余計にダメだ。七海を救うことが：俺自信の手で助けることが出来なくなってしまう。

先生「ゆ、優也？」

だいたい、いつもそうだ！大事なときほど運が下がる。

先生「優也？体調が優れないなら保健室に」

優也「あ、お構い無く」

先生「あ、ああ、分かった…つてそうはいかない！優也！この問題の答えは？」

優也「あ、すみません！聞いてませんでした」

先生「んな！」

キーンコーンカーンコーン

先生「今日の学校はここまで！」

『さようならー！』

そもそも本当の幸せって何だっけ？

俺は幸せの基準が分からない。

人によつては、大抵の人が不快に思う…そうだな…例を挙げるならば、鞭で叩かれて喜ぶ変態も居るらしい。その人にとってはこれが幸せという奴なのだろう…

この事から、人によつては感じる幸せも違う…そう分かる。

どこからどこまでが幸せで、範囲から外れると幸せじゃないと言うような基準が無いので幸せと言うのは難しい。

俺はそんなことを考えながら帰路についていると、自然と公園の前を通っていた。

この公園は昔よく七海と遊んでいた公園だ。もうあの頃は帰ってこないかもしれない…そう思うと悲しくなってくる。

七海に目を覚ましてほしい…それだけが俺の切実な願いだ。

そしてふと公園に視線を向けると、そこには今朝の女の子が居た。

長い髪が風に靡き、朱色の空がまた彼女の寂しそうな表情に花を添えて美しさをかもちだす。

そう、これはまさに！

『芸術作品』

そして少しの間眺めていると向こうもこちらに気がついたみたいでこちらに駆け寄ってきた。

「あ、今朝の人！こんなところで何してたんですか？」

優也「それはこっちの台詞だ！所で自己紹介をしてなかったな…俺は、絆成 優也！伊真舞高校の1年生だ！」

そう言ったら彼女は驚いたような表情になった。

「わ、私と同じ学年！」

は？こいつ中学生じゃねーの？

「私は、柴野^{しばの}結羽^{ゆう}！伊真舞高校の1年生です！」

は？伊真舞高校？こいつが？

俺はこいつが同じ年と言うことに驚いたが更に驚くべき真実を告げた。

こいつは俺をショック死させたいのだろうか？こいつと話していると心臓が悪い。

俺は思わず目を見開いてしまう。

童顔過ぎて、こいつの体内時間は中学校で止まってるんじゃないか？とさえ思えてくる。

俺の表情を見て不審に思ったのか、俺の顔を下から覗き込んできた。

結羽「大丈夫ですか？」

優也「あ、ああ！大丈夫だ。少しボーツとしていただけだ」

結羽「で、話を戻しますが、何でこんなところに？」

優也「たまたま通りかかってな。柴野さんは？」

結羽「ふふふ、結羽で良いですよ！私は…少し色々あって…」

少しなのか色々なのはつきりしろーとツッコミたかったがそう言う空気じゃなかったため、その言葉は胸の中にしまっておく。

優也「そうか…言いたくないなら言わなくても良いぞ」

結羽「購買の好きなパンが買えなくて…」

優也「おい！俺の心配はいつたいなんだったんだ！」

心配して損した…これからもう心配してやんねー

さっきまでの重々しい空気が一瞬にして砕け散った瞬間である。

優也「それよりそろそろ帰らなくて良いの？親御さん心配するぞ！」

結羽「分かった！じゃーね！」

いつの間にか、結羽の口調が砕けた口調になっていた。

彼女ね…まあこんなガリ勉強郎のことが好きになる女子なんて居るわけ無いよな…

縉羽「ただいまー」

父「お帰り優也！ご飯出来てるから、食べなさい」

高校生になると、恋やら恋愛やら彼女やら彼氏やらと言った、浮わついたトークで盛り上がるらしいが、俺にはそんな兆候が一切見られない：

こんな俺を好きになる人が居たら世界中が大騒ぎするレベルの話だ。

元々、『恋愛』の『れ』の字すら無い俺にはそんな人が出来る筈が無い。

俺は、ご飯をモグモグ食べながらそう考える。

優也「ごちそうさま」

俺はそれだけ言って二階に上がっていった。

そしていつも通りに猛勉強。

そう言えば俺はもうあの学校に居る意味すら無いんだったな…

俺はあの学校の医療研究会に入るためだけに受験をしたのだから。

今の俺の幸せは七海の目が覚めることだった筈なのに…

今の俺の幸せは何なのかが時々分からなくなる。

優也「とりあえず今の生活を満喫するか」

翌日

学校

結羽「優也さーん！」

俺はそそくさと立ち去る。

結羽「待ってください！」

結羽は、俺を学校内で見つけると馴れ馴れしく呼ぶようになりました。

第3話 いつものまにか友達で

学校

結羽「なぜに無視するんですか！」

優也「俺はあんまり他人とつるむ気は無い！それだけだ！」

俺に友人なんか要らない！もう親しい人があんな目に合うところなんか見たくない。

結羽「なんか今、悲しそうな表情になりました！なりましたよね！どうしてですか！私の顔を見てどうして悲しくなるんですか！」

正直鬱陶うっとうしい…しかもほとんど初対面の人に話す義理ぎりは無いだろ
う。

優也「別に、何でもねーよ！」

結羽「それなら良いのですが…どうして他人とつるまないのですか？どうして

俺は彼女が言い終わる前に壁ドンをしていた。

優也「関係ないだろ！俺とお前はほとんどお互いの事を知らない赤の他人だ！どうしてそこまで俺に付きまどって俺の事情に踏み込んで来るんだ！どうして…」

俺は気づいたら目から涙が出てきていた。

俺はなぜだかこいつを見ると七海を思い出して悲しくなる…

そうして俺は彼女から離れた。

その瞬間、彼女は走ってどこかに行った。

あーやつちまった…

つつい感情的になって色々と言ってしまった…自分でも今のしさすがに…って思うところがある。

優也「…」

そうして俺は俯うつむきながら無言で自分の教室に帰った。

そして俺は授業中も彼女の事が気になって授業に集中出来なかった。
た。

自分でもどうしてここまで彼女の事を気にかけるのか？正直分からない…ただ1つ分かっていることは

優也「俺が結羽を傷つけた…」

ただその事実だけが俺の背中に重くのし掛かる。

しかし、何で俺はこんなにも彼女の事を気にかけているのだろうか？

それは分からない…だが心配だ…

帰路

俺は今、自宅への帰路を歩いていた。

歩いていても彼女の事が気になって仕方が無い

その時

キキイン

すぐ横を見るとトラックが迫ってきていた。

次の瞬間、誰かに抱きつかれた感覚が襲って前方に力強く押された

俺は前の方に倒れて、歩道までたどり着けた。

ガタン

トラックが止まる音が聞こえた。

運転手「あぶねーな！死にてーのか！」

運転手はそう文句を言ってまた走り出した。

俺が後方を見るとそこには抱きついた結羽が居た。

普段は分からないけど、抱きつかれて初めて分かる女の子特有の柔

らかさと胸の感触にドキドキした。

暫くして結羽が避けてくれたため俺も起き上がった。

その瞬間

バチン

俺の頬を結羽は力一杯ひっぱたいてきた。

結羽「危ないでしょ！何でちゃんと信号を見ないの！どうして！私
はあなたの事を友達だと思ってるから！あなたにとつては赤の他人
かも知れないけど！私にとっては友達だから居なくなったら困る
の！悲しいの！」

結羽は泣いている。

なぜ泣いてるのは俺には分からない。

俺は高校1年生のロリっ子に助けられ、高校1年生のロリっ子に説教されて…情けない俺は…

でも…

優也「良かった…」

結羽「何が良かったのよ！全然良くないよ！」

優也「俺はお前に嫌われちゃったかと思っただから…」

自分から突き放しといて人の温もりぬくを欲ほっしてるってわがままだよな…

結羽「ほんつとバカみたい…自分から赤の他人呼ばわりしといて、赤の他人なら嫌われても関係ないんじゃない？」

彼女は少し笑顔になってそう言ってきた。

優也「ああ、あの頃の俺がバカみたいだ！俺達は赤の他人じゃない！俺達は友達だな！」

結羽「最初っからそうやって素直になっただけなら良いんです！」

俺達は向き合ったまま無言になってしまった。

気まずい

優也「そう言えば、結羽は俺の事を知りたがってたよな？」

結羽「うん、まあ…」

優也「ならさ！友達なら俺の昔の事を教えてやるよ！俺にはな年が4つ離れた妹が居るんだ」

結羽「妹さんですか？」

優也「元気な子でさ！元タインドア派の俺とは真反対の性格の女の子だ」

結羽は、うんうんと頷きながら俺の話の話を聞いている。

優也「名前は、絆成 七海。いつも俺を連れ回そうとするはた迷惑な妹だ！」

そんなある日だった…

優也「いつも通りに俺は連れ回されて家に帰る途中の出来事だった」

それは一瞬だった。

優也「居眠りしていた車が手を繋いでいた俺のすぐ横を通りすぎた

んだ」

通りすぎたなら、ぎりぎりまで危なかったけど良かったとなるはずだ！しかし注目すべき所は手を繋いでいたという所だ！

そう：俺は七海と手を繋いでいたのだ！

優也「俺は衝撃で少し後ろに飛ばされた」

そして隣を見ると七海は居なかったんだ。

そしてもつと遠くを見てみるとそこには血だらけになって倒れている七海が居た。

優也「これは俺が中学1年生の時の話だから…3年前の話だ」

そして俺と父さんは病院を当たったがこのまま一生植物人間になる可能性がある…ってよ。

優也「それで、自分で治療法を研究するために医療研究会に入部したかったんだが…落ちちやってな…ダメだった…」

結羽「そう…だったんだ…」

結羽はすごく悲しそうな声でそう言った。

優也「まあこんな暗い話は終わりにして帰ろう！」

そして俺と結羽は立ち上がって歩き出した。

そしてなぜか、結羽が俺の手を握ってきた。

そうして俺に、結羽という友達が出来ました。

なぜ手を握って来たかは結羽にしか分からない。

結羽「ほんつと、そう言う鈍感な所…ラブコメ主人公にそっくり…私、頑張るから」

第4話 過去の話

優也「友達…か」

我ながら全然似合わない言葉だと思う。

緒羽が友達になったからには七海と同じ思いはさせたくない。

?????
?年前

七海「お兄ちゃん！こつち！」

優也「おいおい！待てよ！そんなにはしやぐと転ぶぞ！」

七海「大丈夫だもーん！あ！」

そう言った瞬間、七海は転んだ。

こいつは芸人でもやってるのか？なんちゅうタイミングだ！

七海「いったーい！…えへへ」

七海はテヘツと頭に自分の拳を乗せた。

俺の妹の七海は小学4年生。顔立ちは平均以上でかなり整ってる。

可愛い自慢の妹だ。

少し元気すぎるのがたまに傷だな…インドア派の俺を容赦なく連れ回す。

まあ、七海が喜ぶならば甘んじて受け入れるとしよう！

そこ！シスコンって言うな！

優也「そんなに服を汚したら母さんにまた叱られるぞ！（俺が）」

なぜが俺が怒られる。

何で見てなかったの！とか、何でこんなになるまで泥の近くで遊んだの！とか…

知るか！何で俺が怒られるんだよ！

その点父さんは、

父「元気なのは良いことだぞ！母さんはああ言ってるけど気にしないで良いからな」

と、父さんくキラキラ（目が輝いている）

父「ほんと、優也に似なくて本当に良かったよ！七海が居なかったら普段優也は、『俺がこの部屋から出たら世界が崩れる！』とか、わけ

わかんないことを言っただけ外に出ようとしなからな…」

グサツ

父「俺には結構トゲがあった。」

父「まあ父さんは二人の幸せを心から願ってるからな！」

落として上げるの落とすの部分があれば素直に嬉しいんだがな…

部屋から出ないと言っただけもちやんと学校には行ってるからな！

俺は中学1年生。知能は平均より少し上、学力は平均よりずっと悪い。

顔立ちは…分からない…鏡を見ない主義なもんでな。鏡を見て
がっかりするのが嫌だからな…

七海「ねえ、お兄ちゃんは好きな人居る？」

優也「そうだな…お兄ちゃんの好きな人は七海だ」

七海「そうじゃなくて、恋愛対象の事だよ！」

恋愛か…考えたことも無かった。…まあまだ考えることは無いだ
ろ。もう少し後からで。

優也「お兄ちゃんには居ないな」

七海「そうなんだ！」

そしたら急に俺の手を引っ張って行った。

七海「お兄ちゃんってインドア派なのに運動神経良いよね」

おい！インドア派って言葉どこで覚えたか詳しく！

優也「一応部屋で筋トレをしてるからな」

七海「そうなの？腹筋とか割れてるの？そんな風には見えないけ
ど」

優也「うんにゃ、割れてない」

そんな他愛もない話をしてるうちに近所のスーパーに着いた。

優也「えつと頼まれてたのは…豚バラ肉、玉ねぎ、人参、じゃがい
も、カレールーか」

今日の晩御飯はカレーらしい。

俺、辛いのは苦手なんだよな…

それと相反するように七海は辛いものが好き

優也「じゃあ、七海はカレールー頼むわ！せめて中辛で頼む」

七海「了解であります！」

そして七海は走っていった。

そして俺は他の物を取りに行った。

優也「人參、玉ねぎ、じゃがいも、肉…これでよしと！七海を待つか」

七海「お兄ちゃん！」

そうして七海は満面の笑みで、カレールーをもって走ってきた。

あ、転んだ：

七海「持つてきたよ！」

優也「転んだみたいだけど大丈夫か？」

七海「大丈夫だよ！」

よし！これで揃ったな！

そしてレジまで向かった。

そしてお会計を済ませてスーパーを出て少し歩いた所で事件が起
こめた。

俺達は手をつなぎながら歩いていた。

何度も言うがシスコンでもロリコンでも無い。

その時

優也「ん？暴走車両か？」

あっちこっちにぶつかりながら走っている車が視界に映った。

優也「いや！居眠り運転だ！」

その次の瞬間

俺のすれすれのすぐ横を通りすぎていった。

そしてその場所は七海が元居た場所である。

俺は衝撃で少し飛ばされた。

そして俺はおそろおそろ後ろを見た：そこに見えたのは、七海が血だらけになって倒れている姿だった。

優也「な、七海？嘘だろ？おい！返事しろよ！」

そして近くに居た人が通報してくれ、病院に運ばれた。

「医者「命には別状はありません」

その言葉に俺達は安堵あんどした…のもつかの間…医者は次にこんなことを告げた。

医者「しかし、もう目を覚ます可能性は絶望的と言っていていいでしょう」

絶望的…その言葉はありとあらゆる人に絶望を与える言葉

両親は泣いていた。

俺の…せい…だ…

俺があのと きもつと注意を払っていれば。

こんなことには…

家

両親が喧嘩している。

母「もう付き合って居られないわ!」

そう言つて母は出ていった。

優也「俺の…俺のせいだ…」

父「優也のせいではない。自分を恨むな」

そう言っている父さんの目からは涙が出てきた。

父さんも悲しい筈だ…なのに俺の心配をしている。

現段階の医学では無理…だったよな…なら俺が作り出す。

それから俺は猛勉強をした。

唯一医療研究会という部活があると言う伊真舞高校に入学するた
めに…

俺には友達も要らない…恋人も要らない…ただ七海に目を覚ましてほしいだけだ。

そして俺は伊真舞高校に入学し、結羽に出会った。

医療研究会に入れなかったときは絶望したが、今はそんな絶望感も薄れつつある。

これが俺の過去だ。

自分で大切だと思った人は死なせない。
結羽「昼休みだよ！ 購買行かないの？」
優也「やっべ！ 戦争に出遅れた！」
俺達の日々はまだまだ続く

第5話 体育祭準備

畜生！購買戦争に負けてしまった！

結羽「えつとそんなに落ち込まないで！次があるよ！」

優也「はあ：出遅れた：」

俺も弁当があれば良いんだけど：家は父さんだけなもので朝早くに仕事に行ってしまうから弁当を作る暇は無いらしい。

俺は作るのがめんどい

結羽「わ、私のパン分けて上げるよ！」ニコツ

笑顔がまぶしい！

そんな笑顔を見せられたら断ろうにも断れない。

優也「じゃあ：ありがとう」

そうして結羽はパンを半分にしぎって俺に半分渡してきた。

結羽「はい！これは私が自信を持っておすすめするパンだよ」

そう言つて渡してきたパンは、中にイチゴジャムとカスタードクリームが入ったパンだった。

優也「じゃあいただくな」

そして俺はパンにかぶりついた。

優也「美味しい」

結羽「でしょ！」

結羽はまるで自分が褒められたかのように喜んでいる。

それほどこのパンの事が好きなのだろう。

???して俺達は昼食を終えた。

???

俺達は今、午後の授業を受けていた。

「はい！それでは、体育祭の出る競技を決めます！」

優也「体育祭？」

今、話をしていたのが俺のクラスの担任のいまの今野 はるみ春海先生

結構頼りになる？先生なのだが、不器用で結構ミスをする。

春海「はい！そろそろ体育祭なので出る競技を決めようかと！」
なるほど確かにそろそろ体育祭の時期だ。完全に忘れてた。

絶対に出なきゃいけない競技は一番最後の全員リレー
その他に自分が出る競技を1つ選ばなきゃいけない。

400m走、走り幅跳び、障害物競争の中から1つ選ぶのだ。
勿論俺は走りたくないから走り幅跳びを…

優也「走り幅跳びに立候補を」

「俺も走り幅跳び！」

ジャンケンポン

俺？パー

相手？チヨキ

うおー！ここに来て俺の運の悪さが！

仕方ない…400mを

俺？グー

他の人？パー

うおー！また！負けた！俺はどんだけ運が悪いんだ！

しかも一人負けてって普段よりも恥ずかしい！

俺はジャンケンで一度も勝ったことが無いのだ…シクシク

これで俺は強制で障害物競争か…

春海「これで全員決まりましたね！」

そして授業も終わり丁度最後の授業だったため身支度を済ませて
帰路につく。

????

帰路

優也「はあ…」

俺は自分の運の悪さに呆れてため息をつく。

俺は運で勝つと言う事が出来ないのだ。

中学ではいつも席は一番前。ジャンケンでは連戦連敗。ババ抜き
なんて人間のやる遊びじゃねー！って位運が悪い。

結羽「何ため息ついてるの？」

優也「ああ、それはな、俺の運の悪さについていつからそこに居た結
羽！」

危なかった…こいつ、最初から居ましたよ感を完全にかもちだして

俺に話しかけてきた。

こいつは、少人数のグループの中に忍び込んでもバレないんじゃないかな
いか？

結羽「うーん…今追い付いたところ」

優也「そ、そうか…所で体育祭、何に出ることになった？」

俺と結羽はべつのクラスのため結羽に直接聞く他無いのだ。

結羽「うーん私は400mかな、優也さんは？」

優也「さんつけされるとなんか調子狂うから優也で良いよ」

結羽「じゃあ優也は？」

優也「俺は…障害物競争だ…今だかつてこんなに自分の運の悪さを
恨んだことは無い」

障害物競争とかマジでだるい…

ハードル走だつて出たくないのに…

結羽「障害物競争ですか。ちよつとこの学校の障害物競争ってハ
ドつてよく聞くので気を付けて下さい」

は、ハードなのか…俺、普段激しい運動をしたことが無いからな…
不安しか無い。

そのうえ、俺は普段からインドア派だ。勝てる気がしない。

優也「はあ何とかやってみるわ」

結羽「うん！頑張つてね！」

頑張つて…か、父さん以外から言われたのは初めてか。
その時

「おー優也じゃねー」

俺の後方から声が聞こえた。

声からして俺を知ってるみたいだが

「久しぶりー！優也もこの学校に入ったのか！」

優也「どちら様で？」

「俺だよ俺！」

優也「えーつと、俺だよ俺さん？」

「ちげーよ！坂戸^{さかと} 悠真^{ゆうしん}！」

あー確かに昔そんな友人も居たような気がする。

悠真「俺……転校することになっちまった！」

優也「おう！じゃあな！」

悠真「か、軽い！そこはもう少し別れを惜しんだりしろよ！」

優也「いや、勝手にそつちが友情を押し売って来てたんだから、正直どうでも良い」

悠真「悲しいぞ！俺は……シクシク」

確かに昔、こんな会話をして転校していった記憶がある。

悠真「いやーしかし、久しぶりにあったらこんな可愛いかの……」

そして悠真はそこでしゃべるのを止めておもむろに携帯を取り出した。

ピツポツパ

プルルルル　プルルルル

優也「どこに電話をかけようとしてるかは分かるがどこにかけようとしている！」

悠真「ん？けい」

そして俺は携帯を奪って電話を切った。

悠真「何をする！」

危なかった……危うく社会から消される所だった……

こいつが何を考えて電話をかけたのかは分かる。

悠真「お前がそんな奴だとは思わなかったぞ！お前！小さい女の子をなんだと思ってる！」

優也「悠真！こいつはな！こう見えて高校1年生！それと俺達付き合っていない！」

結羽「誰が小さい女の子だ！そうだってやれ優也！……ってあれ？今さらつとバカにされたような……」

今後、勘違いされることも多そうだから注意しなくては、また社会から消されそうになるかも知れない。

※こいつはロリ顔ですが、れっきとした高校1年生です。つまり、俺が付き合っていたとしても通報される事ではありませんので勘違

いしないでください。

結羽「つて！こう見えてつて酷くないですかね！優也」

悠真「しかし、あの成績が悪かった優也がね…」

俺が勉強にうちこみ始めたきっかけになった事件はこいつが転校してから起きた事件なため、こいつは前の俺しか知らない。そのため俺に気さくに話しかけてくる。

悠真「しかし、その女の子は？」

結羽「私は、柴野 結羽！決して中学生じゃないですから！」

悠真「俺は、坂戸 悠真！よろしく」

そしたら、俺にこう耳打ちしてきた。

悠真『柴野さんって可愛いよな！かなりドスト』

ピッポッパ

悠真「ごめんなさい！」

優也「ようやくお前を社会から追放する事が出来そうだ」

悠真「優也さん、マジで洒落になってません…」

優也「まあ冗談なんだけどな」

悠真「だ、だよな！俺の友人がそんなことを思うわけ」

優也「半分くらい」

悠真「半分思ってる！」

こいつはいじり甲斐がありそうだ。

地味に友人が居る生活も良いなど思っている自分が居る。

俺は、医療研究会に入れなかった時点で絶望していたけど、今は楽しいと思えるかな？

結羽と悠真、皆クラスは違えど俺の友達だ。

次の日

春海「今日から体育祭の練習開始です！本番は2週間後それまでに体力を作りましょう！」

体力作りって面倒だな…

「位置についてーよーいーどん！」

結羽「あれ？優也は出ないの？」

優也「正直：面倒：」

俺がそう言うのと結羽は苦笑いを浮かべた。

結羽「でも、体育祭、再来週だよ！練習しなくちゃ！」

いやいや、練習しても変わらないと思いますよ！元々インドア派だし、そんな奴が勝てるほど甘くねーって。

優也「俺はいい、結羽は行かないのか？」

結羽「私は：優也が行かないなら私も行かない！」

優也「なにその俺が悪いみたいなきさは！」

仕方ない：本気を出すのは本番だけでいい。

優也「行くぞ！」

結羽「うん！」

「位置について！よーい！どん！」

ううして、俺にとって魔の2週間が始まった。

?????

結羽「優也って練習を見てたけど以外と体力あるよね！」

悠真「昔からそうだよ！こいつはいつも部屋に籠ってるくせに体力だけは人一倍あるからな」

優也「俺は筋トレだけはやってるからな」

そして2週間後、ついに体育祭が始まる。

第6話 体育祭

体育祭当日

優也「賑わってるな」

結羽「ボーツと突っ立ってないで行こうよ！」

優也「ま、まてよー！」

悠真「やれやれ」

俺は結羽に手を引かれて連れていかれる。

優也「じゃあ俺はここだからまたあとでなー！」

????

《それでは校長の挨拶です》

校長の話って長いと感じるのは俺だけではないはず。

と言うか開会式：暇だ：

なにもすることが無いからな：

暇だったからボーツとしながら聞いていた。

《これで開会式を終わります！次はプログラム一番400m走です》

400m走か：ってことは結羽が出場するんだな！確か悠真は走り幅跳びとか言っていたな。運：

その時

「位置について！よーい！どん！」

パン！と音がなった瞬間、1グループ目が走り出した。

1グループ6人で構成されていて、順番に1年生2年生3年生の順番。

どの学年も15グループずつある。

結羽は2グループ目

だから次だ

っと、1グループ目が走り終えたようだ。

そして2グループ目が定位置につく。

当然その中には結羽も居た。

「位置について！よーい！どん！」

パン！と音がなった。

その瞬間走り出す。

結羽は現在1位

そんなに最初から飛ばして大丈夫か？と思うけど…

200m走なら良いけどこれ400mもあるんだぜ？途中でバテないか心配だ。

やはり、俺の想像通り半分行った所で減速した。

そしてどンドン抜かされていき

ゴール

結果は？

1位 佐藤さん

2位 渡部さん

3位 齋藤さん

4位 芝田さん

5位 柴野さん

6位 奈乃さん

ギリギリ最下位では無かったようだ。

結羽「はあ：はあ：」

結羽が息切れしながら戻ってきた。

そしてこちらに気がついたようだ。

結羽「優也！やってしまいました！中学の時からそうなんですよ！

何も学習しなくて：最初から全力だと疲れるの分かってるのに！」

ああ！こいつ…あれだ

見た目だけじゃなく、学習能力まで中学で止まってる感じだ。

その癖

運動能力だけは一人前…なんだこのバランスの悪いステータスは

！

RPGでいうと攻撃にステータスをガン積みしてるのに、防御がめっちゃ弱くて、素早さも遅いので、初ターンで、ワンパンされるみたいな感じだ。

その運動のステータスをもう少し均等に振り分けては頂けませんかね？

優也「お、おう…次、頑張れよ！次は全員リレーもあるし、来年と再来年もあるんだ！元気出せよ！」

結羽「そうですね！分かりました！」

なんとか元気をを出してくれたようで良かった！

結羽「それでは！またあとで！」

結羽はそう言って小走りで自分の席に帰って行った。

《全グループが走り終えたので次のプログラムに行きます！》

そうしたら全員事前に配られたプログラムに目を移す。

《次のプログラムは、走り幅跳び！》

これ終わったら午前の部終了だな。

障害物競争は午後の部に入っているからゆっくりしてられるな。

障害物競争が終わったらすぐに全員リレーか！

たいして疲れが取れねーよ！

ただでさえ！障害物競争はハードだって話を聞いていたんだから

！

走り幅跳びは一学年^{ひとがくねん}4人程参加する競技である。

残りの人数は、障害物競争となる。

悠真は3番目

そして、1番目…2番目…ときて、ついに

悠真の出番が来た。

そして悠真は走り出す。

そして跳ぶ！

そして着地

さて、記録は？

悠真がこちらにやって来た。

悠真「お！優也！」

優也「悠真、記録は？」

悠真「7mだった」

すごい！

かなりとんでんじゃねーか！

確かに悠真は中学の頃から運動神経抜群で、細い川くらいなら簡単

に飛び越えることが出来るけど…

…凄まじい運動能力だ。

悠真「かなり抑えたんだよな…」

優也「うん！知ってる！」

そして全員跳び終えたようだ。

《これで午前の部終了です！これからお昼休憩を取りたいと思います！午後の部開始は1時半からです！しっかりと休憩を取って午後に備えましょう！》

休憩時、弁当は他のクラスの人と食べても良いらしい。

そのためこちらへ来る二つの影が。

悠真「来たぜ！」

結羽「一緒に食べよ！」

やはり来たか…まあ良いんだけどな。

悠真「しかし…優也もやるな！女の子に自分から来させるなんて！」

優也「呼んだ訳じゃ無い！」

結羽「へー！今日は弁当があるんだ！」

まあここにも購買があるなら良いけど無いから仕方なくな。

優也「結羽だって弁当があるだろ」

結羽「まあね」

そして一斉に全員弁当を開いた。

中身はと言うと、

悠真はガッツリ

結羽は軽め

俺は適当

結羽「おー！優也の弁当美味しそう！」

優也「結羽のも美味しそうだな！」

そう言ったらなぜか結羽は顔を赤くしてうつむいた。
何で？

結羽「いえいえ…優也の…方が…美味しそうだよ…」

ん？何？俺たちってどちらの弁当の方が美味しいかって事で争つ

てたっけ？

優也「そうか…じゃあ！」

俺は箸で玉子焼きをつかんで、結羽の口に入れた。

結羽「！／／／」

結羽は驚いて目が渦巻きになって頭から湯気が出ている。

優也「どうだ？」

結羽「あわわわ！」

悠真「ほほーう」

そして悠真の方を見ると悪い顔をしていた。

悠真「なに？この2週間でお前らもうそんな関係に？」

優也「そんな関係ってどんなだよ！」

そして俺も弁当を食べる。

結羽「あ！」

悠真「おま！」

二人とも何を驚いて…

そしてまた一口食べる。

悠真「それ：間接キスじゃ！」

結羽「／／／」ボツ

あ！結羽がショートした。

つて、ほんとだ！これ、間接キスだ！

そう考えると急に恥ずかしさが…

悠真「お！優也が照れてる！レアだな！レア優也が現れた！レア優

也は結羽に強いんだな！」

何、勝手な考察をしてるんだ！

ふと横を見ると俺の肩にもたれ掛かって気を失っている結羽が居た。

悠真「お二人のじゃまだと思うのでここら辺でおいとまさせてもら
うぜ！」

??????したらものすごい勢いで自分のクラスに戻って行った。

数分後

結羽「う、うーん」

優也「あ！目が覚めたか！」

俺が結羽に声をかけるとまた赤くなつた。

結羽「え！ええー！ゆ、優也！」

その時

《午後の部がそろそろ始まります！障害物競争に出場する人は中央にお集まり下さい！》

優也「俺、呼ばれたから行くな！」

結羽「あ！優也…」（良いところだったのに…）

《それでは全員集まったので障害物競争を開始したいと思います！》
いつの間にか障害物競争のセットがセッティングされていた。

この障害物競争は学年全員で一斉にやる競技

1年生は一番最初

そのためすぐに出番が来た。

《次のプログラムは障害物競争！それでは始まります！》

「位置について！よーい！どん！」

そして一斉に走り出す。

俺は少し遅れて走り出す。

なんか、嫌な予感がしたから。

その瞬間

ドサツと言う音が聞こえた瞬間先頭集団が消えた。

《1つ目は落とし穴…この穴に落ちた人は強制失格です！》

優也「ま、じ、か！」

つつー事はこれは…

有利が不利…不利が有利になる障害物競争…

つまり、先頭に居たら強制失格になる危険性がある…

ががー

そのような機械音がした瞬間、コースにハードルが現れた。

先頭集団は反応出来ずに躓く。

《倒したハードルはちゃんと立ててから走り出して下さい！》

これまた地味に嫌な障害物だな！

結羽「優也…かなり後ろですね」

悠真「いや、あれは逆に良い位置取りだ！これは常識外れの障害物競争！優位に立っていた方が逆に不利になる！前の方が強制失格になる可能性が高い」

ドカン！

コースに急に壁が現れて多くの人が壁にぶつかる。

《3つ目は壁です…この壁にぶつかった人は強制失格です！》

またかよ！

優也「ふう…次のはまともそうだ…」

《次は平均台です！落ちたら強制失格です！》

優也「おいこら！強制失格好きか！そんなに好きなのか！」

《いえいえ、私たちも強制失格にするのが心苦しい…》グスン

この放送は生徒会がやっているらしい。

おぎとらしい泣き方しやがって！

悠真「楽しそうだ！」

結羽「なんか、この数カ月でだいぶ元気になったんだよね」

悠真「いや、中学の時と同じだと思うけど」

結羽（そうなんだ…）

悠真「なにニヤニヤしてるんだ？」

?????
っそー！

こつちがいつ罫にはまるか分からなくてハラハラしてるのに、あつちはあるなに楽しそうに話なんかしやがって！ムカつく…悠真はあとでいじり倒そう。

なんとか渡りきれた。

次は何だ？

ドサツ

《落とし穴2》

ツーって何だ！ツーって！

シリーズ物か！ネタ切れか！

もつとあるだろ！普通のが！

《そう言う事を言う人も居ると思つて、こんなものを用意しました！》

デブーン

《サッカーボール！》

なるほど！ドリブルか！

《頭にのせて落とさないように所定の位置まで運んでください！》

そっちかー

《落としたら強制失格です！》

おい！

強制失格多すぎだろ！少しは自重しろよ！

そう言いながらも頭にボールをのせて慎重に歩を進めた。

非常に間抜けな絵面である。

そして終わって周りを見てみたら俺を含め数人しか残ってなかった。

《さあ！ラストスパートです！ここからは落とし穴に気を付けて行って下さい！》

その放送が終わった瞬間、俺の前の人達が全員落ちた。

優也「??？」

《一人以外全員落ちたのでその一人も失格にならなかつたら1位です！》

なぜか、こう言うときに落ちないのが俺であるからして

優也「ご、ゴール？」

つつーか！

こんなんでもゴールして喜べるわけねーだろ！

なんだよ！あの障害物！ふざけてんのか！

悠真「あ！終わったみたいだぜ！」

結羽「本当だ！」

悠真「優也お疲れ！」

優也「お、おう…って言うか、生徒会ふざけすぎだろ！」

生徒会は強制失格やら、落とし穴が好きか！そんなに好きなら一生

落とし穴と戯れている！

悠真「そう言えば！3年の生徒会長の真依先輩まゐって良いよな！」

優也「真依先輩？」

悠真「え！知らないのか！」

そんな信じられないって目で見られても…確かに生徒会長って肩書きがあつて有名なのかも知れないけど…

悠真「あんな可愛くて最高な子を知らないなんて！」

優也「そう言うこと！」

悠真「可愛くてポイントで、最高じゃないか！」

引いてる！結羽さんが引いていますから！あんなに素晴らしい笑顔がひきつってますから！

結羽「やっぱり男は胸ですか！そうですか！」

優也「いや、俺はべつ」

悠真「あつたり前だろ！」

優也「あんたはちよつと黙ってる！」

怒っていらつしやる！

《最後のプログラムは、全員リレーです！生徒の皆さんは中央に集まって下さい！》

結羽「うう…ふん！」

結羽は頬を膨らませたまま後ろを振り返って中央に向かつて行つた。

優也「悠真！今度生徒会と一緒に絞めるから覚悟しとけよ！」

俺はそう捨て台詞をはいて中央に向かった。

《それでは！最後のプログラムは全員リレーです！》

《位置について！よいい！どん！》

そして第1走者目が走り出した。

しかし、うちのクラスは文系の人ばかりなもので、どんどん突き放されていく。

そしてついに俺の番になった。

前の走者からバトンを受け取って次の走者のもとに向かつて走り出す。

一人辺り2000m走る。

150:100:50:

そしてバトンをパスする。

「お疲れ！」

優也「あ、ああ！」

結果は6クラス中、5位だった。

地味に最下位じゃない！

結羽「お疲れ！」

悠真「次は期末テストだな！」

優也「ああ：はあ：」

期末テスト：一学期のラスボス！

そして、体育祭も終わり、一学期も終わりに着実と近づいて行っている。

第7話 にぶい優也と申し訳程度のテスト

一週間後

俺はこの一週間…ひたすら机に張り付き猛勉強をしていた。
なぜならそれは

一週間後に期末テストがあるから
ちよくちよくあいつらは、

悠真「おーい！サッカーしようぜ！」
とか

結羽「い、一緒に近くの公園で遊ばない？／＼／＼」

おい！口ごもるな！なに照れてんだ！照れんならやるなよ！

と言った感じで来るが毎回追い返している。

俺は最近ろくに勉強をしていなかったため、今ここで取り戻さなければならぬ。遊んでいる暇はないのだ。

しかも俺達が入学した高校、伊真舞高校の中間・期末テストには魔物が潜んでいると言われている。

その訳は、直前まで楽勝だぜ！と言っていた生徒がテスト後にはぐったりとして「もうだめだ」と呟いていて惨敗していることが多々あると言う話だ。

この摩訶不思議な出来事を生徒の皆はこう呼んでいる。

学校七不思議の1つ【テストに潜む魔物】

こう呼ばれ恐れられている。

テストに潜む魔物か…それを討つ！

そのためにも猛勉強だ！

RPGも強い敵と戦うときはレベルを上げて挑むだろう？今はそのレベル上げだ。

修行を積んで必ず討つ！

カリカリカリ

シャーペンの音が部屋に響く。

部屋を静寂が支配するなかその音だけが響き渡る。

その時

ピンポーン

何だ？

優也「はーい！っってお前らか！」

悠真「来たぜ！」

結羽「一緒に勉強をっと思って…分からないところは教えてもらいたくて」

まあそれくらいなら良いんじゃないかな？

優也「はいれ」

悠真「じゃまするぜ！」

結羽「おじやまするぜ！」

見た目だと結羽の方が 幼く見える の に 礼儀正し

さだと結羽の方が大人に見える。

優也「砂糖どれくらいが良い？」

悠真「話の流れがつかめません！」

唐突過ぎたか！

じゃあ、主語を持ってきて

優也「コーヒーの砂糖どれくらいが良い？」

悠真「そう言うことか！一個で！」

結羽「私は二個！」

結羽は甘い方が好きなのかな？

優也「お待たせ！」

悠真「お前の家、コーヒーマーカー置いてるのか！スゲーな！」

まあ俺が豆から作ったコーヒーが好きだからな。

結羽「あれ？優也は砂糖入れないの？」

優也「俺はブラックが好きなんだ」

そう言いながらコーヒーを飲む。

悠真「大人だな」

結羽「ねー」

??????

数分後

悠真「優也！」

はいはい

結羽「優也！」

はいはい

「優也！優也！優也！優也！」

優也「つてお前ら！どんだけ分からねーんだよ！」

悠・結「強いて言うなら全部！」

息ぴったり過ぎんだろー！

ひうなったら自棄だ！

優也「つ、疲れた…」

優也「つ、疲れた…」

なんとか教えたぜ！

結羽「優也！」

優也「はいはい」

そして結羽に近づく。

優也「どこが分からないんだ？」

結羽「ち、近いよ」

優也「ん？」↑疲れて頭が回ってない

結羽「う、ううく／＼／＼」

なんか悠真がニヤニヤしてるような。

そしてなんか結羽がこっちを向いて目を瞑っている…気にしない

ようにしようか。

優也「これはな…つて何で結羽さんは怒っているのでしょうか？」

結羽は頬を膨らませて怒っていた。

結羽「にぶちん！」

マジでわけわからん！

結羽「ラノベ主人公そっくり！」

まてまて！

優也「俺はそこまで耳は遠くない！」

悠真「確かに」

お前は分かってくれるか！

悠真「ラノベ主人公だな！」

お前もか！

悠真「純粋な女の子の気持ちは考えたことあるのか！」

優也「わけわからないよ！」

悠真「これだからラノベ主人公は！」

優也「お前はもうラノベ主人公って言いたいだけだろ！」

マジで体力を使い果たしそう：

悠真「でも、にぶくない優也なんて気持ち悪いけどな！」

なに勝手に想像して気持ち悪いとか言ってるんだ！

結羽「確かに！」

お前ら！俺のHP削り切る気か！

????? そんなこんなでこのような一週間が続いた。

?????

「なに優也、魔物と戦う前に瀕死なんだよ！」

優也「俺にとつての魔物は友だったわ！」

「バ」愁傷さま……」

先生「それではテストを開始します！」

1 時間目：数学

2 時間目：社会

・
・
・

春海「すべてのテストが終わりました！なので明日テストを返却します！」

終わった…やっとな…

周りをみると殆どの人が魔物にやられたようだ。

?????

ぞして今、廊下を歩いていた。

「やあやあ！君！お疲れのようだね！」

なぜか俺に気さくに話しかけてくる女性が一人

優也「そうなんです！なので俺を厄介事に巻き込もうとしないです
さい！」

俺は早々に立ち去ろうとした…しかし、神はそれをさせてくれな
かった。

悠真「優也！こんなところに居たのか！」

結羽「おーい！」

悠真と結羽が駆け寄ってきた。

「あの二人は君の友達？」

優也「魔物です」

「ひどい！」

こう言うときだけ息ぴったりなんだからな…

悠真「あ、あなたは！」

優也「なに？この人を知ってるの？」

悠真「知ってるもなにもその人は生徒会長の真依先輩じゃ無いです
か！」

マジで！この人が！

結羽「デカイ」ボソツ

なんか結羽が生徒会長に嫉妬の視線を向けているんだけど！

優也「で、生徒会長さんはこんなところで何を？」

真依「生徒会長じゃなくて、白波しろなみ 真依のどちらかで呼んで」

優也「じゃあ白波さんはこんなところで何を？」

真依「私はね、君に会うために来たんだよ」

優也「真面目に答えて下さい！」

そしたら白波さんは仕方ないな…って顔をしたあとこう言った。

真依「ねえ！君は恋愛の事についてどう考えてるの？」

優也「俺は…恋愛は要らないと思います」

真依「だってさ！残念だったね」

白波さんは結羽の方に向かってそう言った。

結羽「な、何の事ですか？」

真依「そう言えば、皆の名前、聞いてなかったんだけど！」

そうか！そう言えば自己紹介をしていなかった！

優也「俺は絆成 優也です」

悠真「俺は坂戸 悠真！」

結羽「私は柴野 結羽です」

そしたら結羽がペコリと頭を下げた。

不覚にも可愛いと思つてしまった。

真依「はい、よろしく！にしても、優也君！よく先日のお祭りのゴール出来たね！」

何で驚く！え？まさか！ゴールさせないつもりだったの？怖いよこの人！

優也「にしても、あなたは何ですか！とびきりのドS何ですか？」

真依「そうだよ！私はね、相手が嫌だ！とか思うことを考えたり実行するのが好きなんだよ！」

ひ、開き直った！

もうやだ！この人！自分がドS宣言したよ！

真依「特に、優也君の様な可愛い子には余計にいじめたくなるんだよね」

白波さんがそう言った瞬間、前に結羽が飛び出してきた。

結羽「だめ！優也をいじめるのは私が許さない！」

そう言っている結羽の後ろ姿は凛々しかった。

そして、ほんのり耳が赤くなっている気がした。

真依「分かっている！奪ったりしないから安心して？」

結羽「！」

二人は何の話をしてるんだ？

真依「じゃあ私はここらで仕事もあるからおいとまさせてもらうよ〜！」

そして白波さんはすごい速さでこの場を去った。

優也「はあ…なんかどつと疲れたからすぐ帰ってー」

結羽「同じく」

悠真（真依先輩と仲良くなれるかな？）

優也「約一名、なんか俺達と違うことを考えてるやつが居るんだが…」

そうして歩き出した。

悠真「ア、ソウダ、オレヨウジガアルカラサキカエルネ」

ものすごい棒読みで帰る宣言をしたあともものすごい速さで帰っていった。

優也「なんだったんだ？あいつ」

結羽（ゆ、優也と二人きり：／／／）

なんか、結羽が今にも爆発しそうな勢いで赤くなっている。

優也「じゃあ帰るか！」

結羽「ひゃい！」

優也「嘸んだw」（ひゃいって可愛い！）

結羽「わ、笑わないで下さいよ／／／」

結羽は照れながら俺の胸をポカポカと叩いてくる。

優也「良いから帰るぞ！」

そして俺は結羽の手を引いていく。

結羽を見るとさつきより顔が赤くなっていた。

結羽「あと少しで一学期も終わりですね」

優也「そうだな！あつという間に過ぎていったな」

入学して、早々に俺が不幸を發揮して医療研究会に入れず、落ち込んでいたときに結羽と出会って友達になった。

あのとときの俺は意固地になっていたから、友達が出来るんだよ！つて言っても全然信じないと思う。

そして、悠真との再開と体育祭。

よく俺、落とし穴にはまらなかったな！

うん！色々あった！

そこそこ濃かったんじゃないかな？

結羽「これからもよろしくお願ひします！」

よろしく…か

俺には結羽がどのような気持ちを込めて言った言葉かは分からない。

だけど回答は自然に出ていた。

優也「こちらこそよろしく！」

結羽 「絶対通じてない…」ボソッ

優也 「何だつて？」

結羽 「何でもない！ラノベ主人公！」

結羽はそう叫んで足早に帰っていった。

優也 「あいつ、何怒ってたんだ？」

本当に意味が分からない。

第8話 終業式

優也「ただいま！」

俺は結羽が帰ったあと小走りで帰ってきていた。

父「お帰り」

やはり家が落ち着く。我が家に帰ってきた！って感じがするよな。帰ってきてすぐに俺は自室に戻ってきていた。

優也「生徒会長：ね」

生徒会長の白波 真依さんはとても明るい性格で人をからかうのが好きな人だ。

明るい性格つてのは見習いたい物だな。

ズズツとコーヒーをすすって手元に目を移す。

俺は今、勉強をしていた。たいてい勉強をしなくても良いときでも俺は癖が抜けなくて勉強をしてないと落ち着かなくなってしまうている様だ。

優也「んんー！」

っと背伸びをしてから時計を見る。

気がつくともう6時を回っていた。

父「ここに飯、置いとくからな」

扉の外から俺に父が呼び掛けてきた。

どうやら飯を置いていってくれたようだ。

そして俺は外に置いてあった飯を取り、食べてからまた勉強をする。

優也「今日はこちらまでにして早めに寝るか」

寝てベットに入って眠りについた。

次の日

悠真「で、どうだった？あのあと」

優也「急になんだよ！」

突然こいつは昨日どうだった？って聞いてきた。意味分からないよ！

悠真「だってよ！男女二人きりだぞ！」

優也「それがどうしたんだよ！」

悠真「まさか！何もしていないのか！男女二人きりで！」

優也「そこ強調するな！結羽と一緒に帰ることはお前と再開する前もあつたし、二人きりと言う状況もあつた！今更でしょ！」

え？こいつって俺と結羽のカップリングを望んでるの？そうなの？

しかも余計に二人きりと言う所を強調してくるし。

悠真「まさか！女として見ていなかったのか！意識したこと無かったのか！」

優也「無いと言えは嘘になるけど…でも！そう言う事は考えたことねーよ！」

悠真「これだからラノベ主人公は…」

やれやれと言った仕草をしている。

優也「ラノベ主人公言うなー！」

何かあれば一々ラノベ主人公！ラノベ主人公！つて！

その時

結羽「何の話をしているの？」

一番来てほしくない人が来た。

優也「つつーか！二人とも教室戻れ！」

????

春海「今日はテストを返します！」

今日はテスト返却日

先日行ったテストが帰ってくるドキドキの瞬間

春海「絆成さん！」

ついに俺の出番になった。

優也「はい」

そして俺はドキドキしながらテストの点数を見る。

100点

優也「良かった…」

何とか大丈夫だった。

して他のテストも返され順位は1位だった。

結羽「優也く！」

俺が廊下に出るとすぐさま泣きついてきた。

これだけですぐ何が合ったか察せたので野暮な事は聞かない。

優也「一緒に購買行こうぜ！奢るから」

結羽「悪いよ！」

しかし俺は無言を言わずに結羽の手を引いて購買まで行く。

優也「結羽は何が食いたい？」

結羽「わ、私は別に！」

結羽は遠慮して中々選んでくれない。

そう言えばいまだに手を繋いだままだったのに気がついた。

そして俺は急いで手を離す。

そしたら結羽が寂しそうな表情で「あっ」って言ってきた。

優也「どうした？」

結羽「な、何でもない！」

俺がそう聞くと、結羽はあわてて返す。何を慌てる必要があるのだろうか？

優也「一緒なので良いか？」

そうやって俺は結羽に前、分けてもらったパンを手にとって2つ買
い、1つを結羽に渡す。

そうすると結羽は「えっ!?!」と言う顔になって俺からパンを受け
取っていた。

結羽「あ、ありがとう」ボソッ

優也「? どういたしまして」

結羽「これって前一緒に食べたパン」

優也「ああ、結羽そのパン好きだったろ？」

結羽「覚えててくれたんだ」ボソッ

優也「何だって？」

結羽「何でもなーい」

このパンは結羽が好きだって言ってたなつてのを思い返ししながら選んだしな。

その時、背後から視線を感じた。

優也「少し待っててくれ」

結羽「？ 分かった」

???
? して俺は視線のする方向へと向かった。

優也「なにやってるんだ？」

悠真「み、見つかった！」

真依「やほー！優也君！元気そうだね！」

優也「あなたも元気そうですね白波さん」

悠真だけかと思つたら白波さんまでいたのか…

正直、見てくれは良くて男子から好かれる存在だけど俺からしたら疲れる。

悠真「しかし、お暑いね〜いつの間になんか関係になつたんだ？」

優也「そんな関係ってどんな関係だよ！」

真依「彼氏彼女の事だよ」

は？彼氏彼女の関係？

あの見た目が15にも満たないような女の子と、この彼女を必要ないと思なしている俺が？

優也「無いな」

悠真「おい！何で否定するんだよ！可愛そうだろ！」

優也「でもよ！こんな勉強バカで、インドア派で、恋人と言う関係を否定している俺を好きになるやつなんて居るわけが…つてなんだ！その目は！あり得ないものを見る目はやめてくれ！」

何で二人とも俺を『なんでこいつこんなに卑屈になつてんの？なんで気づかないの？』つて目で見るんだよ。

悠真「いやさ、惚れる理由は幾らでもあるよ！」

優也「例えば？」

悠真「大人っぽい雰囲気を出しているけど話しかけてみたら以外と話しやすかったり、イケメンだったり等などだ」

真依「あと、いじめると楽しい」

優也「それはあなた特有です！」

そうガヤガヤ話していると後ろから声をかけられた。

結羽「遅い！少しって言ってたよね？」

そうだった結羽のことを忘れていた。

優也「ごめんごめん！ってことでまたな！」

俺は一刻も早く話を終わらせたかったから結羽が割って入って来て良かった。

そのお陰で抜け出せたんだけど結羽には悪いことをしたな…

優也「本当にごめんな！」

結羽「じゃあ、1つお願いを聞いてくれる？」

優也「なんだ？」

結羽「手を繋いでくれる？」

優也「良い…けど」

少し恥ずかしいけど今回は俺が悪かった訳だし、すんなりと願いを受け入れた。

後

「それでは終業式を終了します」

1学期の終業式が終了した。

悠真「明日から夏休みだな！」

優也「ああ」

明日から夏休みなので夏祭りやら海やら種々なイベントがあるけど今年の夏もたぶんほとんど勉強して過ごすんだろうな。

悠真「じゃあ！今日も俺は急いで帰るから！じゃあな！」

そして悠真は急いで帰っていった。

優也「じゃあ、俺達も帰るか」

結羽「はい！」

俺達の夏休みはどうなるのやら

1年生編 夏休み 第9話 天然過ぎる優也

俺は夏休みに入ってからと言うものたいしてやる事が無いので勉強していた。

父「優也は外に遊びに行かないのか？」

優也「父さん。俺はインドア派だよ？その俺が自分から出歩くわけ無いってこと知ってるでしょ？」

俺は出来ることなら家でまったりと過ごしたい。

そう、俺はまったりと生きたいんだ！

だけど最近は…新しい出会いが合ったり、体育祭で生徒会の策略が合ったり、悠真との再開やら、ラノベ主人公と罵られたり、全然まったり出来ていない…

結羽はまだ良い…だが悠真と白波さんはクレイジーの根元みたいな所があるからな…出来ることなら関わりたくない…

その時

ピンポーン

家のチャイムがなった。

まあ大体の人物の見当はついてるけど…

優也「なんのようだ！」

悠真「いきなり辛辣だなあ〜」

気持ち悪い！なにが『なあ〜』だ！

結羽「優也、いつもながらいきなり押し掛けてごめんね」
常識人来たこれ！

たぶん結羽は良い子だから優しくしてしまうんだろうな…

結羽「何か今、子ども扱いしませんでしたか？」

優也「してない！」

「やあ！優也君！相変わらず結羽ちゃんにだけは優しいねえ〜」
その時、優也の後ろから嫌な声が聞こえた。

この口調…間違いない

優也「白波さん!?なんでここに!」

真依「ついた来たからに決まってるでしょ!」

悠真「気がついたら真依先輩に尾行されてました!」

白波さんまで居るなんて予想外だ…嫌な予感がする…俺の第6感がそう叫んでいる!

普段は結羽と悠真の二人だけで来るけど、白波さんが居ると何か面倒事に巻き込まれそう…

真依「今回来たのはそう!『海に行こう!』と言うお誘いでーす!」

優也「な、なんだってー!」

真夏の海って言ったたらあれだろ?カップルが水を掛け合ってイチャイチャする場所だろ!完全に俺達が行くのは場違いな気が…

結羽「行こうよ!優也!」

優也「お、俺は別に!」

悠真『おい!ちゃんと女の子の気持ちを考えてやれよ!』

真依『そうよ!結羽ちゃん是他でもないあなたと行きたいのよ!』
本当かな?俺と行きたいと思う物好きなんて本当に居るのかな?

真依『あなたはすごく自己評価が低いのね…』

悠真『今、俺と行きたいと思う物好きなんて本当に居るのかな?なんて考えただろ!これだからラノベ主人公は!』

優也「ラノベ主人公って言うな!」

まあ確かに夏休みが始まって一週間が経過したけど何もしていないかったからな…

まあたまには皆と楽しむのもありだな。

優也「分かった!行くよ!」

そう言ったら結羽の顔がパアツと明るくなった。

本当に俺と行きたかったのか?何故なんだろうか?

優也「で、いつ行くんだ?」

悠真「ん?今からだけど」

・
・
・

優也「はあ!？」

優也「なんで今からなんだよ！俺は何の準備も出来てねーって！ってなんで皆、あり得ないこいつ…まだ準備してなかったの？って目で見るんだよ！俺は今初めて聞いたんだ！準備が出来てなくて当然だろ！」

はあ…なんなんだこいつらは…

優也「じゃあ俺は最低限水着と財布と携帯持つてくるから待ってろ」

俺はそう言つて自室に戻った。

海行くなら最低限それだけは必要だろう。

しかし、いきなりなんだよ…少し早めに教えてくれれば俺だって十分な支度が出来たものを…

優也「終わったぞ！で、どこの海行くんだ？」

真依「私の別荘のプライベートビーチよ」

プライベートビーチ？もしかしてもしかなくても

優也「白波さんって良いとこのお嬢さん？」

真依「そこそこね…」

悠真「真依先輩！さすがっす！」

いやいや、白波さんがすごいんじゃないやなくて両親がすごいんだと思うけど。

結羽「優也と海…えへへ」

約一名自分の世界に入っている。

なぜだか知らないけど結羽が嬉しそうだと俺まで嬉しくなる。

優也「で、どうやって行くの？」

真依「電車で二駅進んで乗り換えて三駅進んでバスに乗って行く感じかな」

結構遠いな…

真依「今日はそこで泊まるつもりだけど男子は私たちに手を出さないでねー！」

優也「出しません！」

結羽「て、手を…／＼／＼で、でも…優也なら良いかなって…／＼／＼」

ボソツ

結羽が何かを唱え始めた！まずいよ！その話題で精神に異常をきたしている人が居るんですが！

優也「大丈夫か？顔赤いけど」

結羽「だ！大丈夫！」（じゃないかも…）

真依「じゃあ出発するよ！」

???
して、歩いて駅まで行き、電車に乗った。

扉配置

窓

悠 結

真 優

通路

結羽「おー！見渡す限り地平線が広がってる！すごい！景色良いね！」

結羽は電車から見る景色に大興奮のご様子。

はしゃいでる姿は見た目通りの姿。

優也「まあここら辺は田舎だしな…」

俺はそう言いながらさつき電車に乗る前に買ったコーヒーを飲む。

悠真「そう言えば田舎の空気って綺麗って良く聞くよな！心なしか

空気も美味しいし」

優也「田舎には空気を汚すものがあまり無いからだと思おうぞ」

真依「そうだね！じゃあそろそろお昼だしご飯食べましょうか」

気がつけばもうそんな時間だった。

悠真と白波さんは弁当を広げてるけど俺は次の駅で駅弁買おうかな？

結羽「ゆ、優也…その…作りすぎたから」

そう言っ一緒に食べようと誘ってきた。え？なにこの超絶展開

…理解が追い付きません！

おまけに悠真と白波さんはニヤニヤこちらを見ているし…

結羽「いや…かな？」

優也「いや、そんなこと無いよ！ありがたくいただくな」
そして箸を受け取る…訳では無かった…

結羽「あ、あーん／＼／＼」

唐揚げを箸でつまんで差し出してきた。

まるで体育祭の時の俺と結羽が入れ替わったみたいだ。

優也「あーん」

そして俺は唐揚げを頬張る。

うん！美味しい！

サクサクとした衣を噛んだ瞬間、肉汁が出てきて、その肉汁もしつこくない程よい甘み、ジューシーでいて衣はサクサク！最高だ！

俺はこんなに美味しい唐揚げは食べたことが無いと自信を持って言えるレベルの美味しさだ。

結羽「ど、どう？／＼／＼」

優也「うん！うまい！こんなうまい唐揚げ初めて食べたよ！」

結羽「本当に！」

すごく結羽は嬉しそうだ。

なんで結羽が喜んで居るのだろうか？

優也「それより、はい！あーん」

俺はお返しのあーんをしようと思いついて結羽から箸を取って唐揚げをつまんで差し出した。

結羽「ふえっ！ふえー！／＼／＼」

悠真『それ食べたなら関節キスだね』

結羽「はわわ／＼／＼」

真依『ラブラブね』

結羽「ラブっ！／＼／＼」

3人で何を話してるんだろうか？

結羽が最後大声で言った言葉も気になるな…

優也「結羽」

そして俺は結羽の方をポンポンと叩いた。

結羽「え？ムグッ！」

俺は結羽がこつちを向いた瞬間不意打ちで唐揚げを口の中に入れ

た。

結羽「な、何するの！…あ！／＼／＼」

優也「あ、本当に赤いけど大丈夫？」

そして俺は結羽の額に自分の額をくっつけた。

結羽「えっ！ええっ！」

優也「熱は無さそうかな」

そしたら、プシューと言う音と共に結羽が倒れた。

真依「そろそろ乗り換えだから結羽を連れて乗り換えしてね」

優也「分かりました」

そしたら、丁度乗り換える駅に着いて電車が止まった。

優也「しょうがねーな」

そして俺は結羽をお姫様だっこして電車を降りた。

第10話 別荘とプライベートビーチ

俺達は今、乗り換えをして二台目の電車に乗っていた。

席配置

窓

真 優

悠 結

通路

相変わらず俺の隣で気を失って居る結羽が俺の肩にもたれ掛かっていた。

しかし、なぜ急に倒れたのだろうか？謎である。

結羽は一緒に弁当を食べている時に急に顔を赤くして倒れたのだ。

優也「しかし、本当にのどかな景色だな」

真依「まあ伊真舞市から比べたらかなり田舎だからね」

悠真「優也、隣に気を失って肩にもたれ掛かっている子が居るんだぞ？言いたいこと、分かるよな！」

なにいつてるの？わかんねーよ！

悠真「はあ…これだからにぶちんは」

優也「俺はにぶちんとかラノベ主人公つてのにつっこみ飽きたんで放棄します」

真依「でも、ラブラブだよな？あーんをしあたり隣に座ったり」

優也「それは、お前らが仕向けたからだろ！あーんの所は何も言えないです」

くそ！こいつら楽しんでいやがる！

俺達がこんな会話をしているも結羽は全く目を覚ます気配が無い。

元はと言うとこいつらが仕向けたせいでこのような状況になっ
ているのである。

回想

悠真「やつと電車来たな！」

真依「乗るわよ！」

ダダダダ

優也「走ったら転びますよ!」

結羽「落ち着いて行きましようよ」

そんな俺達の忠告を無視して悠真と白波さんは急いで電車に乗っていった。

そして、俺達が着いたらもうすでに

窓

悠 ○

真 ○

通路

の、順番に座って居た。

優也「俺達は強制で隣かよ!」

結羽「優也! 私窓側が良いな!」

結羽がそう言ってきたので俺は結羽に窓側の席を譲って通路側に座った。

?????言うのが真相だ。

つまり、はめられたと言う事だ。

悠真「しかし、まだ起きないな…」

《まもなく広井瀬…広井瀬…》

もうすぐ降りてバスに乗り換えか

その時

結羽「う、うーん」

結羽が目を覚ました。

結羽「え、ええ!」

ものすごく驚いた声を出して急いで俺の肩から頭を避ける。

そして結羽を見るとものすごく真っ赤になっている。

結羽「ごめんなさい! 私…私…」

優也「良いよ! 気にしなくて」

悠・真(ほとんど優也のせいなんだけどね)

優也「それよりもほら! もうすぐバスに乗り換えるから」

結羽「分かりました」

そして駅に着いて電車が止まった。

優也「ほら！降りるぞ！」

結羽「はい！」

その時、俺は心なしか出発前よりも結羽が元気になっっているような気がした。

満面の笑みで嬉しさを最大限アピールしているような感じだ。

結羽の回りだけキラキラ輝いているように見えた。

その笑みに思わずドキツとする。

悠真「早く優也降りろよ！後ろがつつかえてるんだ」

優也「あ、ああ…ごめん」

俺は悠真の言葉でハツとなり正気に戻って電車から降りる。

真依「もしかして結羽ちゃんの満面の笑顔に見いつた？」

結羽「え？本当？」

なんか結羽がめちやくちや嬉しそうにこちらに聞いてきた。

優也「そ、そそそ、そんなことねーし！少しボーツとしてただけだし！」

結羽「そうなんだ…」

そしたら結羽はあからさまに元気を失った。

え？何？俺、ここでどう答えるのが正解だったの？

真依「じゃあ次はバスに乗って別荘の最寄りのバス停まで行ってそこから歩きね」

そして俺達はバスに乗った。

真依「本当にすぐのバス停だからすぐ着くわよ」

《次は五十嵐…五十嵐…お降りの肩はボタンを押してください》

優也「五十嵐？」

真依「五十嵐町よ」

???て本当にすぐだったな！会話する隙すら無かったよ。

真依「じゃあここからは歩きよ」

俺達はバスを降りてから森を歩いていった。

真依「もうすぐよ」

優也「もうすぐって言ってからどれだけ歩いたと思ってるんですか！」

この生徒会長は登山家が頂上がもうすぐだって言うのと同じようにこの生徒会長のもうすぐも宛にならないらしい。

でも確かに微かな塩の香りがする。

あと少しと言うのは本当らしい。

結羽「あ！見えてきた！」

悠真「海だ！綺麗な水平線が見える！」

優也「海なんて来たのは久しぶりだ！」

真依「じゃあ皆！着替えて海で遊ぶわよ！」

「おー！」

俺と悠真は先に着替え終わって二人を待っていた。

真依「優也君！」

優也「何ですか！」

真依「結羽ちゃん、将来性はあるわよ！良かったわね？」

優也「何が『良かったわね？』ですか？何が！」

そう俺が少しキツイ口調でそう言っていると暗い表情の結羽がやって来た。

結羽「汚けがされた…私…汚よごされちゃったよ…どうしよう…私…もうお嫁に行けない」

優也「何が合ったんだ!？」

真依「ひみっ」

いや、本当に何が合ったんだよ…結羽があそこまで人生のどん底みたいな顔してるのは初めて見たぞ！

つてか、何があつたかに気が向いてたけど、結羽の水着姿可愛い…これはヤバイ。

露出が多い！

悠真「お、おーい！優也さーん！生きてますか？ダメだこりゃ…」

真依「完全に意識が結羽に向いてるわね」

結羽「あ、あまりじろじろ見られると恥ずかしいんですけど…」

優也「あ、ごめん！」

俺は我に帰って直ぐ様結羽から目をそらす。

真依「じゃあ遊ぶわよ」

そしてみんなで一斉に海へ飛び込む…訳では無かった…

優也「結羽？こつち来ないのか？」

結羽「あの…私…泳げないので」

そう来たか…泳げないのか。

優也「じゃあ泳ぎ方教えてやるからこつち来てくれ！」

結羽「はい！」

声色こわいろから嬉しいと言う感情が染々と伝わってくる。

悠真「なんだかんだ言ってラブラブじゃねーか」

優也「ばた足はこうだ！つかんでやるからやってみてくれ」

真依「そうね、かなり微笑ほほえましい感じになってるわね」

結羽「難しいですね」

悠真（俺達もあいつらみたいに…）

「俺達が泳ぎの練習をしている間にあちらは良い雰囲気になってる。

彼女かあ…

『恋愛の二つや二つ経験してみてほしい』『父さんは、優也の本当の幸せを願ってるからな』

優也「恋愛…幸せ…か」

以前の俺ならばそんなものは二の次だ！って言ってすぐに切り捨ててたんだが…どうしたもんかね？これが性格が丸くなったって奴か？

簡単に切り捨てられなくなっていやがる。

結羽「どうしたの？」

優也「結羽、もしも俺がお前に告白したらどうする？」

結羽「な、ななな、にやにいきなり！」

今、盛大に囁んだな。

結羽「そ、それは嬉しいけど心の準備が…でももし告白されたら断れないかも」ボソツ

なんだか、赤くなり、ぶつぶつと呟き始めた。

優也「ん？何だって？」

結羽「くくくッ！」

そうして、結羽は今までで一番大きい声でこう叫んだ。

結羽「バカくくくッ！」

そして、別荘に帰って行った。

優也「耳が！耳がつぶれる！」

悠真「あの二人は相変わらずですね」苦笑い

真依「そうだね：中々進展しないね」苦笑い

優也「なんなんだ？一体？」

悠真「安心しろ！お前には到底理解できないことだ」

なにそれ！すっごく気になるんだけど！

そんなこんなで別荘に帰った。

第1話 運つていきたい…

俺達は今、白波さんの別荘に帰ってきていた。

結羽はあのあと事前に決めた結羽の部屋から出てこない。

本当にどうしたんだろうか？

悠真「お前…結羽に何かしたか？」

優也「してないッ！ と、思う…」

俺は特に嫌がられることをしたつもりは無いんだがな…

真依「じゃあ何か話した？」

優也「あッ、それなら、『俺がお前に告白したらどうする？』って聞きましたけど」

すると二人は急になるほどって言う顔になった。

すべてが繋がったらしい。

悠真『しかし、あれだけの反応を見せといて気付かないとは…これは手強いですな』

真依『そうね…ここまでだと予想外だわ…』

なぜか二人で耳打ちし始めた。

何の相談をしているんだろうか？

悠真「よしわかったぞ！ 今回の完全にお前が悪い！」

優也「何で！」

真依「そうね…あなたが悪いのだから、あなたが解決するのが筋^{すじ}つてもものじゃ無いかしら？」

確かに…俺には思い当たる節^{ぶし}が無いけど二人が言うならそうだ。

もしも俺が起こした問題ならば、かなりド正論だ。

あと、これじゃあ折角の夏休みのイベントが楽しめないしな。

これは結羽の為にやるんじゃないやなくて俺自信の為にやるんだ。

優也「わーったよ！ ちよっくら行ってくる！」

結羽^{????}の部屋の前に着いた。

ドキドキする。

優也「だがここで踏み留まってはダメだ！ 男優也尋常に参る！」

ガチャッ

そして扉があくくくかない。

優也「なん…だと」

これがRPGとかだと『扉は固く閉ざされている』と言う状態か！
ドアノブが一切ピクリともしない。

これじゃあ俺の決意やらドキドキやらが全て意味が無かったじゃねーか！

真依「ちよつとごめんね優也君！この扉はこのボタンを押しながら
じやなきや開かないよ」

と、白波さんが助言をしていった。

つて、何でこんなところに都合良く白波さんが居るんだ？

まあ結果的には助かったから良いけどなんか…嫌な予感がする。

まあ良いか…、今は結羽の問題を解決するのが先だ。

優也「入るぞ…」

結羽「え？ちよっ！」

しかし問答無用で中に入る。

優也「どうしたんだ？急に走って戻ってきて…」

結羽「うくくくッ！それは…」

かああくくくつとあかくなってるのが暗くても良くわかる。

元々結羽の肌が白いため赤くなると分かりやすい。

結羽「優也が重要な話を聞いていないから！」

優也「重要な話を聞いていなかったのは悪かったけど、それは結羽

の声が小さいから！」

結羽「小さいのは分かったけど…」

そして、結羽はうつむきながら目をそらしてこう言った。

結羽「恥ずかしいから…くくくッ！」

小さくても頑張つて声を出したんだと分かる声だった。

その言葉を言い終わったら更に結羽が顔を赤くした。

まるで熱でもあるんじゃないかって位、顔が耳まで赤くなって、恥ずかしいのか人差し指を合わせてモジモジしている。

その時

「はーい！ちゅうもーくー！」

後ろからそんな声がかけられて俺と結羽は一斉にそちらを向く。

優也「白波さん！なぜそこに！」

真依「こーれなんだ？」

そして白波さんは手に持っている物を見せてきた。

優也「それは鍵じゃないですか！」

嫌な予感がする。

真依「これはこの部屋の鍵なの！そして中からでは開けられない扉
になってるの！」

その瞬間俺の嫌な予感確信へと変わった。

優也「まてッ！」

真依「食事の時には開けるから！」

バンッ！カチャッ

嫌な音が聞こえた。

顔が青ざめていく。

そして俺は扉に近づいてドアノブを捻る。

カチャッ、カチャカチャカチャ

しかし、どんなに頑張っても開かない。

優也「鍵かけられた…！」

結羽「ええッ！ どうするんですか！」

優也「まあ飯の時間には開けてくれるらしいしそれまで辛抱だな」

結羽「そ、そんなあ…！」

明らかにしよんぼりした声を結羽は出した。

そんなに俺と二人きりが嫌なのかなあ？

結羽（ゆ、優也と二人きり！う、嬉しいけど、き、緊張する！）

優也「そんなに俺と二人きりが嫌なのか？」

結羽「ち、ちがつ！」

優也「じゃあ、二人きりが嬉しいのか？」

結羽「そ、それは…、ううううッ！」

更に結羽はかああくくくつと赤くなつて今にも爆発しそうだ。
??????

一方その頃

真依「ここまで計画通りに行くとは！」

悠真「ナイスです！真依先輩！」

二人は真依の立てた計画に基づき、優也と結羽を二人きりにしたのだ。

しかし、ひとつだけ予想外の事が合った！それは

真依「優也君がまさか扉の開け方を知らないとは……」

悠真「予想外ですね……」

真依「でもうまく言ったからもしかしたら……」

暗い部屋……その中に男女二人……幾らにぶい優也と言えども

真依「なにもないはずがない！」

悠真「もしかしたら今頃、うっふんな展開になってるかも！」

※彼らはまだ15歳です。

真依「そろそろご飯にするから様子を見に行きましょうか」

悠真「はい！」

紺羽の部屋の前

真依「着いたわ！少し声を聞いてみましょう」

「~~~~~ツッ！」「あ！ちよつと！」「はあはあ」

悠・真「………！これはもう確定的だ！」

この扉の向こうからヤバイ感じが漂ってきている。

二人はワクワクしながら

ツッ
ツッ
ツッ
ツッ

真依「ふ、二人とも！なにやってるの〜まだ早いわよ！」

悠真「ずるいぞ！一人で大人の階段上りやがって！」

主犯の二人が扉を開けて入ってきた。

大人の階段？

優也「悠真……お前になんてなってんだ？ってやめろ！結羽！暴れんな！」

結羽「だつてえ〜」

うるうるした瞳でこちらを見つめてくる。

はつきり言つて：可愛い。

悠真「？　つまりこうか？　優也が結羽に質問を投げ掛けている内に結羽が羞恥しうちに耐えきれなくなり、暴走して暴れていたと：：そう言う事か？」

優也「まあそうだな」

なぜか嬉しそうな声色こわいろで入ってきたと思つたらなぜか急にしよんぼりしでした：こいつら一体なんなんだ。

悠真「でも優也！それつて男としてどうなんだ！」
なにがだよ！

悠真「男女、暗いところで二人ふたりきりだぞ！」

優也「だから強調するな！」

全く：俺にはそんな気は一切無いんだ：無意味な事をしやがつて

：

つたく：

結羽「くくくツ：私は良いよ？」

優也「何が良いんだ！あと、モジモジするな！」

何結羽までこの話にのつてんだ！

結羽までボケに回つたら俺が死ぬ！

つてかこいつ天然な所あるからな

※優也も人の事、言えないくらいの天然です。

結羽「もういい！諦めたから！」

何を諦めるんだ？

優也「簡単に諦めない方が良いぞ！」

結羽「優也：私、好きな人：居るんだよね」

そつか：

優也「良かったな！」

誰だつて恋はする：だから良いはずなんだが：

何だろうか？この感情は：心が締め付けられるように痛い。

優也「じゃあ頑張れよ！じゃあ飯行くか！」

結羽「ツ！」

ドンドンドン

結羽が床を足で蹴っている。

何をそこまで怒っているのだろうか？

意味不明である。

俺には一生理解出来ないな。

優也「ほらっ！行くぞ！」

結羽「あ！ちよっ…えへへ」

なんか急に嬉しそうな声を出す結羽

すごく感情の凹凸が激しいです。

こいつのキレルラインと嬉しくなるラインが分からない…

俺は大抵相手が何をしたら嬉しいか怒るか、言動で分かるんだが…

結羽だけは分からない…

???

今回はバーベキューBBQをするらしい…

それにしても…

優也「なんだ？この肉の塊は」

悠真「え？焼くんだよ？」

結羽「このままだとうまく火が通らないから切るよ」

やはり、ここは料理上手の結羽が率先して指揮をするらしい。

じゃあ俺も久しぶりに…

優也「俺も手伝うよ」

そして俺も台所に立って、肉を手取る。

真依「それにしても、優也君まで料理出来たとはね…」

悠真「あいつの料理は死ぬほど旨いですよ！普段はめんどくさがつ

て作らないですけど」

そう言えば二人で台所に立ってるんだ！

なんか、夫婦みたいだ。

それは結羽も思ってるらしく顔を真っ赤にさせている。

でも、結羽には好きな人が居るんだよな。

結羽「優也、手際良いね！まさか料理が出来るとは！」

優也「普段はめんどくさいからやらないけどね」

料理はめんどい：正直、カップ麺とかで良いと思っっている。

しかし、俺と結羽以外料理が出来ないとは：

白波さんも出来ないとは思わなかったよ。

結羽「優也は妹が居たんだったよね？」

優也「そうだな」

結羽「目を覚ましてほしい？」

優也「当然だ」

俺は今までそれだけを目指にして勉強に尽くしてきた。

他の人には散々シスコンと言われたが俺はそれでもめげなかった。

優也「はあ：俺って運が悪いよな：」

じゃんけんで勝てない特殊能力でもあるんじゃないかって言うくらい勝てないし、運ゲーなんて、1つしか無い外れにしか行かないし：嫌になる。

結羽「そ、そんなに気を落とさないで！運なんて無くても生きていけるから！」

あ結羽がそう言うならもう少しポジティブに生きようかな？

悠真「ふう：食ったし、あれを！」

真依「ジャン！花火！」

白波さんは花火を取り出した。

結羽「花火ですか？やりたいです！」

優也「まあ良いかもな」

そして全員で閃光花火を取り出して火を着ける。

カチツ

ライターで火を着ける。

ポト

優也「：」

優也以外「：」

優也「死にたい：」

もうやだ！この人生！開始ゼロ秒で落ちるとは！落ちる速さ選手権で優勝出来んじやねーのか？

ついに閃光花火を一瞬にして終わらせる能力でも身に付いたか！
なんだよその能力！要らねー！

結羽「優也…き、気を落とさないで！もう一度やってみな？」
カチツ

ライターで火を着ける。

ポト

やはり落ちる。

優也「うわー！」

????

俺の運の悪さが証明された旅行ももうすぐ終わり。

悠真「き、聞いてくれよ！優也と俺は同じ部屋なんだが、夜間ずつとブツブツ呟いていて寝れなかつたんだけど！」

結羽「あれは優也にとつてトラウマになつたんだらうね…」

優也「俺の運…あれ？運つてなんだっけ？そもそも運つて」

真依「なるほど！これは重症ね」

悠真「ずっとあの調子なんだよ！」

もうすでに俺以外は集まっていたようだ。

今回の旅は俺にトラウマが増えました…

そして帰つたんだが。

残りの3人に同情の視線を向けられました。

第12話 夏祭り

俺はあのトラウマ旅行のあとはやはり部屋に籠って勉強していた。
運試し…う、頭が…

優也「そろそろ祭りの時期だな…」

そう、祭りの時期、夏と言えば夏祭りだ！

夏祭り…カップル…う、頭が…

優也「そう言えば結羽のやつ…『私…好きな人が居るんです』って
言ってたよな…誰なのだろうか？気になる」

あいつの事は何とも思っていないはずなのに…なぜか気になって
しまう。

胸が締め付けられるように痛いし

優也「風邪かな？」

もしかしたらずっと夜風に当たっていたせいで風邪でもひいたの
かもしれない。

まあ俺の記憶は結羽に好きな人が居たこととトラウマの事で頭が
支配されている。

その時

ピンポーン

俺の家のチャイムがなった。

そして、俺は扉を開けてこう言った。

優也「帰れ！」

結羽「ッ！分かりました…失礼しました…」

そして結羽は扉を閉めようとした。

そこを強引に扉をつかんで止める。

優也「まてまて！すまん！で、何の用だ？」

思わず悠真達かと思つて『帰れ！』と言つてしまった…

でも、仕方ないと思うんだよ！

だって普段から良い思いが無いやつらだぜ？

結羽「あの…私たちだけでお祭り行きませんか？」

妙に『私たちだけ』と言う部分を強調した喋り方で誘ってきた。

もちろん結羽ならば大歓迎な訳で

優也「分かった！いつなんだ？」

結羽「えっと…今週末の日曜日です！夜5時位で」

日曜日か

優也「分かった！」

結羽「私が向かえに行きますね！」

優也「ああ、よろしく」

結羽「はい！よろしくお願いします！」

すつごくキラキラとした表情で嬉しそうに行ってくるもんだからこっちまで嬉しくなると同時にドキツとする。

俺だつて…？男の子だし…？可愛い子の笑顔を見たらドキツとした？はしますよ…？

日曜日

あれ？浴衣とか準備した方がよかったのかな？

そう言うの全然疎^とくて分からないんだけど…ついこないだまで友達一人も居なかった俺が女の子と祭りに行くことになるうとは！

その時

ピンポーン

どうやら結羽が来たようだ。

優也「はーい」

そして扉を開けた先に写ったのは…

浴衣に身を包んで髪を珍しくまとめている天使だった。

これを可愛いと思わない男子はどうかしている！

結羽「こ、こんばんは！優也」

優也「か、可愛い…」

結羽「？いま何て言いましたか？もう一度お願いします！」
危ない…言葉に出ていたみたいだ…

声が小さくて良かった！

絶対聞こえてたら変な目で見られる所だった。

優也「いや、何でもない！じゃあ行くか！」

そして物を取りに戻ろうとしたら

結羽「待って」

と、言われた。

結羽「ど、どう？」

優也「どう？って？」

何にたいしての問いなのだろうか？

結羽「だ、だからあくくくッ！」

結羽の顔が一瞬にして真っ赤になった。

優也「あ！もしかして、浴衣の事か？それならすごく似合ってるぞ
！」

結羽「本当？」

今度はものすごく嬉しそうだ。

優也「ああ！じゃあそろそろ行こうぜ！」

結羽「うん！」

すごく可愛い：やっぱり女の子は笑顔が一番だよな！

そして財布と携帯を持って結羽とお祭り会場に向かった。

結羽「おー！賑わってますね！」

優也「早速回ろうぜ！」

そうして歩こうとした瞬間、後ろから服を引っ張られた。

優也「どうしたんだ？」

ってか、ラブコメのヒロインしかやらないと思っていた仕草を
実際やられてみたらドキツとするもんだな。

結羽「あそこに、浴衣のレンタルがある」

そう言っつて1つのお店を指差す。

確かにお店には高々と『浴衣レンタル』と書いてある。

結羽「見てみたい」

少し、結羽は顔を赤くしてうるうると期待した表情を向けてくる。
時間が経てば経つほど結羽は顔を紅潮こころもさせたままジリジリとよっ
てくる。

まあ俺には断る理由もないので、

優也「良いぞ」

承諾した。

結羽「やったー！」

俺が俺が承諾した瞬間、結羽は表情をパァ〜ツ！と明るくさせて喜びだした。

無邪気にはしゃぐ姿は子供の見た目そのままなだけどな…

????

優也「来てきたぞー！」

俺は浴衣を来てきたので今度こそ見て回ろうと結羽を探す。

結羽「あ！優也！」

その時以外と近くから結羽の声が聞こえた。

そして隣を見るとそこに結羽が居た。

優也「ここに居たのか！…じゃあそろそろ見て回るか」

そしたら、結羽が浴衣の袖をクイクイと引っ張ってきた。

そして俺が結羽の方を見るとなぜか結羽が耳元によってきて、

結羽『似合ってます…』

と、囁いてきた。

俺は思わずドキツと心臓が高鳴り、心拍数がドクドクドクと上がる。
心臓の音がうるさい。

もしかしたら結羽に聞こえてしまうかもしれない。

なんぼ彼女は要らないとは言っても、可愛い女の子には可愛いと思うし、ドキツともする。

女の子にたいして何の反応もしないと言う事は無い。

結羽「じゃあ行きましょう？優也！」

そして俺の手を引いていく。

俺たちの事を周りはどう見えてるのだろうか？

仲の良い兄弟？いや…それ以上に見られている可能性があるな…

結羽「それにしても妹さんのためにこんな楽しいイベントを全部すっぽかすなんて…も、もしかして！シスコン？」

優也「俺はシスコンじゃない！」

俺は咄嗟に叫んでしまった。

叫んでしまったあとに気がつく：周りに人が沢山いらっしやることを

こんなところで何て事を叫んでんだ！俺は！

ザワザワ

周りが騒がしくなる。

結羽「先、行きましよう？」

優也「そう：だな」

そして俺達は逃げるようにその場を後にした。

あのままだと羞恥心で死にそうだった。

?????

悠真「うーん、うまいな」

今、悠真達はお祭り会場に来ていたこ焼きを食べていた。

真依「そうね：それにしても、優也君と結羽ちゃんを誘わなくて良

かったの？」

真依はお祭り会場に来てからもその二人を誘わなかったことだけが気掛かりだった。

悠真「今回、優也を誘っても追い返されると思いました」

?????

数日前

優也「帰れ！」

結羽「ッ！分かりました：失礼しました：」

?????

確かに追い返す気満々だった様だ。

真依「でも結羽ちゃんは？」

結羽はどんなことでも快く承諾してれるため断るとは考えにくい

のだ。

悠真「結羽なら、この会場に来てます！」

真依「え？でも呼んでいないんだよね？」

そう、結羽は呼んでいないのだ。それなのに来ている物なのか？

悠真「あと、優也もね」

優也も来ていると豪語する悠真の自信は何処から来るのだろうか

?

悠真「お！居た！あそこです！」

真依「本当だ！」

悠真「尾行ですね」

真依「お主も悪どいことを考えますなあ」

〆して尾行しでした。

〆

結羽「これやりたい！」

俺は今、結羽と射的の店に居た。

優也「じゃあ、ほら！」

俺は代金を出した。

結羽「良いのに！」

優也「こういうのは男が率先して払う物だ」

そう言うと同じやありがたいがとうございませうと言って銃を構える。

パンツ！

と言う音がなつてコルクが発射される。

しかしそのコルクは当たらなかつた。

結羽「むうくくく」

あまりにも可愛そうな表情をしていたもんだから俺は

優也「おっちゃん！俺も1回！」

そしてコルク銃を構えて

優也「結羽、ほしいやつはなんだ？」

結羽「あのネックレスがほしいなつて」

〆してその要望を聞いて構え直す。

〆

真依「彼、射的の腕はどうなの？」

かっこつけて優也は取ってやるつもりみたいだがその腕が真依の

気掛かりだった。

悠真「まあ見てて下さい！」

そして悠真は少し含みのある言い方をした。

真依「あら、気になるわね！お手並み拝見と行きましようか」

?????
ンツ！

俺が射つと丁度ネックレスがかかってある箱に当たって落ちた。

優也「はい！結羽、プレゼントだ！」

そして俺はおっちゃんから受け取ったネックレスを渡す。

結羽「…さい」

優也「ん？なんだった？」

小さすぎて聞き取れなかった。

結羽「くくくッ！つけて…：…ください」

なるほど！今、こう言ったのか！

まあそれくらいなら…

優也「分かった！」

そして後ろに回って前から回してネックレスを着ける。

って、なんか、良い匂いがする。

これが女の子特有の匂いってやつか？

そう考えるとドキドキする。

優也「は、はい！出来たぞ！」

結羽「ありがとう！」

?????

悠真「優也イケメンだし、大抵の女の子は今ので惚れそうだな」

真依「そうね、男の子から女の子にプレゼントなんて良いじゃない

の！ロマンチックよ！」

人？は今のプレゼント現場を見て凄く興奮してる。

?????

優也「そろそろ飯にしようぜ！」

結羽「うん！」

そして、俺は焼きそばを結羽はたこ焼きを買った。

「いただきます！」

パクッ

うーん…

俺、個人の意見かも知れないが、お祭りの出店の料理ってイマイチの様な気がする。

でもまあ結羽が幸せそうに食べてるから俺は良いけどな。

優也「結羽！ほっぺたにソースついてるぞ！」

そして俺はティッシュを取り出して結羽の口元を拭く。

結羽「ありがとう！」

?????

悠真「惜しい！あれが米粒ならば！」

真依「ならば？」

悠真「ついてるよ！パクツができたと言うのに！」

真依「確かに！」

?? ちらは相変わらずである。

?????

優也「色々遊んだし、帰るか！」

そして帰ろうとして振り返ったとき

悠・真「うわー！」

バランスを崩した二人が物陰から倒れてきた。

優也「二人ともく？ずっと尾行をしていたのかな？」

悠真「ご、ごめんなさい！」

真依「すみませんでした！」

ったく、二人はすぐ尾行をするからな…

優也「まあ今日は機嫌が良いからここまでにしてやる！」

そんな言葉にたいして二人は啞然としていた。

優也「帰るぞ、結羽！」

そして俺は二人が色々言っているのを無視して帰った。

1年生編 二学期
第13話 修羅場

あれから数日が過ぎてついに今日、二学期が始まろうとしている。

琴「俺は登校している訳なんだが、ここを歩くと色々思い出すな…

結羽と出会ってから色々変わったんだよな…

結羽「あ！優也！」

つと噂をすればなんとやら、結羽がやって来た。

結羽「優也は生徒会入るの？」

優也「入りたくないな…」

琴「んなことを話ながら登校していた。」

春海「では、夏休み明けテストを開始します！」

そして、テストが始まった。

一時間目、二時間目と続いていき、ついに、四時間目が終わって昼休みに入った。

登休み

真依「やあ！」

優也「なんですか！いきなり！」

突然現れる生徒会長には何度驚かされたことやら…

しかし、俺に何の用だろうか？

真依「優也君！生徒会に

優也「お断りします」

真依「即答!?!」

あつたり前だ！俺は元々入る気は無いんだ。

真依「まあいいや！午後のテストもじゃあ頑張ってね！」

それだけ言っつて白波さんは立ち去る。

その時

背後からゾワゾワとした視線を感じた。

何やら睨まれているようで思わず肩をすぼめてしまう。

ジーーツ

俺はロボットの様にカクカクしながら後ろを向く。

そこには…

結羽「ジーーツ」

結羽がこちらをキラリと光ったような目でこちらを睨んできた。

優也「ゆ、結羽さん？　そこで何をしていたらっしやっているんですか？」

俺はそんな物陰でこちらを睨んできている理由が知りたかった。

俺はそんな結羽に睨まれるような事は何一つしていないと思うんだが：

結羽「別に〜？　優也がどこに行くのかな？　つてついていたら浮気現場に直面しただけだし〜」

妙に間延びした言い方でそんなことを言ってきた。

優也「つて、浮気つてなんだ！　俺は誰とも付き合ったりなんかしてないぞ！」

そう、俺は誰とも付き合ったりなんかしていないのにそんなことを言ってきた。

あと、尾行している時点でツツコミ所しか無い。

なんでわざわざ尾行なんかしちゃったの？　普通に話しかけて来れば良いのに！

結羽「……ふーん」

なぜか結羽がじと目でこちらを見てきている。

優也「なんだその目は？　俺はお前にじと目で見られるような言動をした覚えはないぞ」

結羽「……」

するとなぜか無言でこちらを見てきている。

結羽「まあ、別に？　優也が誰とも付き合ったりなんかしないって言うなら良いけど〜？」

なんか含みのある言葉だな。

結羽は俺の奥さんかよ！

俺は結羽と付き合ったりした記憶も一切無いぞ？

優也「まあ、絶対に誰とも付き合わないって言う確証は無いな」
俺がそう言うのと笑顔になった。

ちよつと怖い笑顔だけど：

結羽「誰と？：：：もしかして、私を恋愛対象として

優也「それはない」

俺は即答した。

そしたら

バチン！

なぜか頬を叩かれた。

結羽「バカくくくッ！」

そう言つて結羽は走つて去つていった。
痛い：

何もビンタすることは無いだろうに：

しかし、なんでここまで怒るんだよ！

優也「あ！もうこんな時間だ！」

？して俺は教室に戻つていった。

次の日

結局あのあと結羽と一言も話すことが無くて少し怒っているよ
うだった。

いつもの結羽の元気も無かった。

春海「今日はまずテストを返却します！」

そして全てのテストが返された。

そしたら1問だけ間違えていた。

優也「くだらない凡ミスか：

そして順位は？

今回もたぶん1：

優也「2位——っ！」

そんなバカな！この俺が1問間違えただけで2位に落ちるなんて

!

この学校はベスト10までは公表される。

その1位の人の名前を見てみた。

そこにはこう書いていた。

星野 光と書いてあった。

恐らくこれは、星野^{ほしの} 光^{ひかり}と読むのだろう。

しかし、今までこんな名前は見たことが無い。

今学期から転校してきたのだろうか？

点数は、やはり満点。

優也「これは…まずいな…」

突然のライバルの出現に衝撃を受ける。

?????
登休み

廊下に人だかりが出来ていた。

転校生でも居るのだろうか？

そして、その輪の中を見ると、廊下で本を立ち読みしている女の子が居た。

その姿は文学少女さながらの姿だった。

顔立ちはとても整っていて、それでいて清楚^{せいそ}さをかもちだしている。

はつきり言って、ドストライクだ。

うちの仲の良い女子には元気でいて色んな表情を見せる奴とか、ド

Sしか居なかったから麻痺^{まひ}していて余計に良く見えてしまっているのだろう。

悠真「おう！優也」

すると、輪の中から悠真が出てきて俺に声をかけてきた。

優也「なんだ？」

悠真「この子に目を着けるとはお目が高い！ この子は今日転校してきたものの既にかんりの有名人になって、今回お前を出し抜いて1位になった星野 光さんだ！ っておいおい！ 何急に掴んできてるんだ！ 酔う！ 酔うから！」

俺は悠真の悲鳴でハツとなる。

俺は気付かぬうちに悠真の肩を掴んで前後に揺すっていたようだ。それも仕方ないと思う。

だってなぜならこいつは

あの女の子の事を星野 光だと言ったのだから。

優也「おい！本当にあの子が星野 光なのか！」

俺は更に揺すりながら聞いた。

悠真「酔うくく！ そ、そうだよくツ…うえく」

だいぶ酔わせちやつたようだ。

俺は手を離して、もう1回星野さんを見る。

優也「凄いな…、この学校に来て一日でこんなに有名になるなんて

…」

????して俺はライバルの存在を再確認した。

俺は今、久しぶりに一人で下校していた。

久しぶりに落ち着いた下校のため普段は見えないような所もちやんと見える。

朱色の空…公園近くの帰路…

そして、公園のベンチに座る文学少女…文学少女？

そして、もう1回見返す。

やはりそこには…

星野 光が居た。

優也「あ、あなたは…星野 光さんでしたっけ？」

光「…」

しかし、何も帰ってこない。

一瞬、寝てるんじゃないかと勘違いするほど静かに読書をしていった。

優也「あ、あの…」

光「私とあなたはどんな関係？」

優也「え？」

唐突すぎて状況が把握出来ない。

どんなって言われても…そりやあ…

優也「面識は0だな」

光「なら何？私にナンパ？」

なんでそうなる…

確かに回りから見ればナンパにも見えなくは無い光景だが…

だが、俺は会ってすぐにナンパするような男じゃない。

ましてや、この俺だ。

確かに見てくれはドストライクなんだが…

ちよつと口調はきついよな…

優也「いや、少し学年1位が気になったもので…」

これは本当の事だ。

今回話しかけたのも好奇心ごうきしんから来ているものだ。

光「そう…」

かなり素そつ気けないな…

その時

「ゆ・う・や…」

後ろから声をかけられた。

かなり嫌な予感がした。

後ろを振り替えるとそこには結羽が居た。

結羽「…この女は？」

ものすごくお怒りな表情で冷めた声で言ってきた。

優也「今回のテストの1位の星野 光さんです！はい！」

くっそー！なんでこんな俺が浮気が妻にバレた夫みたいな感じにな

なってるんだ！

結羽「ふーん…」

って言うか、別に仲良かった訳じゃねーだろ！

なんでそこまでするんだ!?

結羽の様子もおかしいし、

結羽「で、何の話？」

優也「そ、それはこんな話を！」

俺は今までの経緯を説明した。

結羽「ごめんなさい！誤解してました！」

俺の言ったことをすぐに信じてくれるのがこいつの良いところだ。また、怖いなども思ったりする長所であり短所だ。

って言うか、こいつ、夏休みの頃から段々性格がおかしくなってきたねーか？

光「騒がしいんだけど…集中して本を読ませてもくれないの？」
なら、集中したいなら家帰って読めよ…とツツコミたい。

彼女はしゃべってみてやはりと言うか物静かな感じだ…ちよつと口調が強いけど。

結羽「分かった！じゃあ帰るね」

純粹だ！

結羽、純粹過ぎんだろ！

たぶん結羽は純粹に捉えて彼女の読書を邪魔しないようにと思っただろう。

そこは家帰って読めよって思えよ！

結羽「じゃあ帰ろう！」

そして、俺も結羽と同じように家に帰った。

第14話 忘れられない誕生日く前編く

今、俺と結羽は並んで歩いている。

やはり隣に並んで改めて思ったことがある。

優也「やっぱり結羽は夕日に映えるな…」

結羽「え？」

まずい！声に出してしまった様だ。

今のが聞かれていたら結構まずい！

何がまずいかって？

だってさ！それ聞かれるとじろじろ見ていたと思われるし結羽ならなおさらだ！

結羽「何か言いましたか？」

良かった！何とか聞こえていなかったようだ。

結羽「そうだ！優也！」

優也「ん？なんだ？」

突如として結羽が俺の名前を呼んできた。

結羽「こ、これからは女の子と話すときは私を通して話すこと！」
なんで？

なんでこいつに認めてもらわなくちゃ行けないんだ！

会話くらいは自由にさせてくれよ！

優也「なんで認めてもらわなくちゃ行けないんだ！」

俺は少し強い口調で言った。

結羽「くくくッ！ 知りません！バカッ！」

なんで罵られるんだ！

いつもいつもバカバカって！

優也「結羽…最近おかしいぞ？…何か変なものでも食べたのか？」

結羽「はあ…」

俺が聞くとそうため息をついてきた。

本当におかしい…なぜか最近顔は赤らめてバカって言うてくる
ことが多くなってきた。

キャラも変わってきているし…以前の優しい系で礼儀正しいキャラはどこに行つたのやら…

なんか最近の前からそうだったようにも見える。

俺も俺でときより俺自身のキャラを忘れてしまう事がある。

優也「結羽はさ、なんで最初、俺が無視していたのに何度も声をかけてきたんだ？」

そう、それは俺がじみに気になっていた事である。

あのときは結羽と関わらないように無視していた。

しかし結羽は何度も声をかけてきたのである。

結羽「そ、それは…その…わ、私ね！ゆ、優也の事が…s

悠真「よつす！優也！結羽！まだこんなところに居たのか？つて結羽さん？なんでこんなな怒って！痛って！」

結羽はすごく怒って悠真をビンタした。

しかし、なんて言おうとしていたのだろうか？

気になる…

優也「結羽？今なんて言おうと？」

結羽「知りません！」

おいおい！自分で言おうとしたのに知らないってどういう事だ！

しかし、なんでビンタしたんだ？

しかも結羽は笑顔だけどもものすごく怖い…ものすごいプレッシャーをかけてくる。

悠真「く、俺としたことがタイミングが悪かったか！」

なんで叩かれてこんなことを言ってるの？

ってか、なんでこいつ、こんな時間まで学校に居たんだろうか？

悠真「少し、仕事があつてな！」

勝手に人の心を読むな！

優也「じゃあ帰ろうか…」

俺は結羽の殺伐とした空気に耐えかねて逃げるように帰った。

?????

次の日

優也「憂鬱だ…」

今だかつてこんなに憂鬱ゆううつになったことはない。

昨日の怖かった結羽の事を思い返す。

まだ怒ってっかな？

結羽「あ！優也！おはよう！」

つと、結羽は俺を見つけてすぐにかけてよって俺にいつものように挨拶をする。

俺としては昨日の一件があったせいでは何か裏があるんじゃないかと疑うたぐってしまう。

優也「お、おう！おはよう！」

結羽「うん！おはよう！一緒に行こう？」

「?」して、一緒に登校した。

優也「???」って事があったんだ！絶対何か裏があると思うんだが！」

悠真「お、落ち着け！どうしてそこまで疑うたぐってんだよ！お前は疑うたぐりすぎだ！ってか、俺に自主的に話しかけてくるなんて珍しいと思ったからそう言うことかよ」

そう、俺は普段は絶対に自主的に話に行かない悠真に相談を持ちかけていた。

悠真「今日は誕生日だから機嫌が良いんじゃないのか？」

優也「え？結羽って今日、誕生日なのか？」

今日が結羽の誕生日だと悠真は言う。

それで機嫌が良いならすべて合点がってんがいく。

確かに少し機嫌が良くて前までのキャラが戻ってきている。

悠真「ああ、そうだぞ？あ！もしかして彼女にプレゼントか？」

優也「は？彼女？誰が誰の？」

どうしてここに来て彼女の話題が出てきたのだろうか？不明である。

俺には彼女が居ないし、誰の話なんだろうか？

悠真「はあ…これは先が長そうだ…」

悠真が俺をやれやれ…と言った顔で見ってくる。

何にたいして”先が長そう”と言っているのかは分からないが俺

はやれやれ…と呆れられるような事をした記憶が無いぞ！

ここはしっかりと指摘せねば。

優也「おい！なぜ呆れている！理由を説明してもらおう！」

そしたら悠真がこれだから優也は…って顔になって真剣な目付きでこちらを見ってくる。

悠真「これに関してはいづれ分かる。そしてこの事は俺の口からじゃなくて本人から言わせた方が良い！と言うことでノーコメントだ！」

いづれっていつのことだよ…と、ツツコミを入れようと思ったが悠真の目が今までに無いくらい真剣だったため、その言葉は飲み込んだ。

俺は悠真に聞きたかったんだけどな…って本人って誰だ？

まあ今の”かくせい覚醒悠真”がいづれ分かるって言ってるからたぶんいづれ明かされるのだろう。

優也「そう言えばさ、話を戻すけど、結羽ってどんなものが好きだと思う？」

その瞬間、悠真の真剣な表情が崩れて覚醒悠真から通常の悠真へと戻った。

そして、目がキラキラとしてこう言ってきた。

悠真「やっぱり、プレゼントか？」

まあ実際、俺はプレゼントをしようと考えているからここには一切のツツコミを入れない。

悠真「あれ？つつままないのか？いつものお前だったらプレゼントじゃない！って言うはずなんだが…」

優也「まあプレゼントをする気だし、そこは間違っちゃいないからわざわざつつままないぞ！」

そう言うと、悠真は物足りなさそうな顔をした。

え？こいつってツツコミ待ちなの？そんなにつつまんでほしいの？

いくら俺だって四六時中しじゅうくじちゅうずつとつつまんでる訳じゃねーのに！

悠真「つてとところで、どんな種類の物をプレゼントしようと考えて

るんだ？」

種類か：そう言えば考えていなかったからな…この前お祭りでネックレスをプレゼントしたしな…因みにプライベートでは毎日つけてくれてる見たいです。喜んでもらえて良かった！

じゃなくて、種類は…

悠真「なら、お菓子はどうか？」

優也「うーん…それも良いんだけど…俺的には初めて誕生日を祝ってやるわけだし、何か形に残るものが良いんじゃないかと」

女の子は皆みな甘いものが好きだと聞くし、甘いお菓子でも良いんだが、折角だしね、少しは奮発して高いものでも良いかな？って考えてるしね。

悠真「じゃあ…ハンカチはどうよ？」

優也「あ、良いかもしれないな…」

ハンカチはいい線行ってるかも。

ハンカチはもちろん形に残るし、更には日常的に使うことが出来る。良いかもしれないな。

悠真「今回も無難にアクセサリーとか」

アクセサリーか、ネックレスをプレゼントしたから今度は手首につけるやつとかか？

悠真「時計とか」

優也「なるほど！」

時計も良いかもしれない！

この学校は一応バイトが可能でしょうと思ったら出来るんだが、俺はバイトをしていないため、コスト的にはあまりよろしくないが、形には残るし、時間が分かる便利アイテムだ！

悠真「それか、心を込めて手作り？」

手作り…ねえ…少し時間は少ないがやろうと思ったら出来なくも無い。

俺の父さんは物を自作するのが趣味で大抵の道具類は揃ってるから出来ないことは無い。

でもまあここは

優也「ハンカチにするよ！」

悠真「ほうほう：ハンカチを手作りすると」

そんなことは一言も言っていないんだが：

まあそっちの線で行っても良いような気がする。

悠真「じゃあ、午後5時半に結羽宅集合！」

結羽には事前に許可は取ってあるのだろうか？

悠真「俺達には抜きありませんから心配なく！」

少し誇らしげに悠真はそう言った。

恐らくもう許可は取ってあるのだろう。

あの生徒会長と悠真はたぶん結羽宅に行ったことあるだろうが、俺は一度も行ったことが無い。

どんな家なんだろうか？

少しわくわくする。

優也「分かった！午後5時半に結羽宅だな？」

そして、俺達の会話は終わった。

第15話 忘れられない誕生日く後編く

家

もう学校は終わり、予定の時刻も迫ってきているため、俺は今支度をしていた。

優也「よし！あとはこれだな」

俺は自作のハンカチを見ながらそう言う。

我ながら中々の出来映えだ。

これを綺麗にラッピングしていく。

これはすごく大事な事なのだ。

プレゼントがむき出しで渡されるよりも、ラッピングして渡された方が数倍嬉しく感じるだろう？

要は気持ちの問題って事だ。

飯の類たぐいは白波さんが用意してくれるらしい。

やはりあの人スゲーな！…って悠真は何をするんだ？

プレゼントか？

まあいいか、なにもしてなかったら追い出すだけだからな。

優也「よし！終わった。父さん！俺、今日外で食べてくるから俺の

分はいいよ！」

そしたら奥の方からはーいと聞こえたような気がした。

??
して俺は出発した。

数分後、俺は地図を見ながら結羽宅に来るともうすでに俺以外のメンバーは来ていた。

え？まだ5時25分だよ？二人とも早くね？

悠真「お！来たか！優也！遅いぞ！」

悠真は遅いつて言ってきたけど、まだ時間前だからな！

遅いんじゃないかってまだ早いんだからな！

真依「じゃあ揃ったし、行くわよ！」

優也「まだ早いですし少し待ちましょう？」

俺がそう言うも時すでに遅し、

真依「押しちゃった…テヘツ」
何がテヘツだ！

ちつとも可愛くねーぞ！この時間ならまだ最後の仕上げとかやってんじゃねーのか？

そしたら数秒後、インターホンから声が聞こえてきた。

結羽『はい！どちら様ですか？』

さすがにまだ来るとは思っていなかったのか何者か聞いてきた。

悠真「俺俺！俺達だよ！」

結羽『あ、間に合ってまーす』

悠真が俺と言うと、結羽が間に合ってる！と返した。

お、その返し良いかも、今度使わせてもらおうと

優也「あ、ゴホツ！」

俺は咳払いをしてからこう続けた。

優也「俺だ！絆成 優也！悠真と白波さんも居るぞ！」

結羽『……………』

俺がそう言うのと数秒間沈黙が続いた。

そしてその沈黙を破ったのは結羽だった。

結羽『ええーっ！っ！』

すごい大きな叫び声がインターホンを通してではなく、扉の内側にいる結羽の声も聞こえてきた。

すごく大きな声で耳が痛い…

優也「バカッ！お前、俺達の鼓膜、潰す気か！」

俺はそう言うが、そんなことはもう聞いていないようで中で慌てているような声がインターホンを通じて聞こえてきた。

結羽『嘘っ！もう来ちゃった！どうしよう！あわわわ』

なんか申し訳ない…

まったくこいつらはもう少し人の事を考えてやれよ。

真依「あ、そうだ！優也君！結局プレゼント何にしたの？」

優也「おい！なぜ俺がプレゼントをするってことを知ってんだ！」

悠真か？

悠真なのか??

いや、こいつ以外に考えられない。

つてか、俺がここで大声で叫んだ方がヤバイな。

下手したら結羽にも聞こえてしまう。

つてか聞こえない方がおかしいな…なんてっただってインターホンがまだ切れていないからな。

優也「聞こえた…か？」

そしたらまだインターホンの前で慌てているらしき結羽の声が聞こえていた。

良かった！聞き逃したようだ。プレゼントはサプライズで渡した
いからな。

上手くできたかは分らんが…

結羽『と、取り合えず…あわわわ！何から手をつければ！』

なんか可哀想になってきた。

優也「俺達は近くのいつもの公園に居るから、準備が出来たら電話
をくれ！番号は○○○—△△△△—☆☆☆☆だ！それじゃあな！」

どう言つて生徒会長と悠真を連れて公園に向かった。

?????

悠真「ところで優也！お前つて気がきくよな！」

お前は全然気が回らないよな…回ったとしても空回りをするよな

…

真依「だって、二人は…」

悠真「なんと！」

おい！今白波さんはなんつったんだよ！

白波さんは悠真に向かつて耳打ちしたらなんか悠真がすごく驚いた。

この二人に良い思いをした覚えが無い。

その時

プルルル プルルル

優也「あ、電話だ」

そして、俺は電話を取る。

優也「はい、優也ですけど」

結羽『っ、はあはあ…結羽です…はあ…何とか終わりました…』
電話からはものすごく息切れをした結羽の声が聞こえてきた。
たぶん息切れをするくらい急いで準備をしたのだろう。
慌てなくて良かったんだがな…

優也「分かった。じゃあ向かうからな」

結羽『はい！待ってます！』

そして通話が切れた。

優也「じゃあ行くぞ！」

そして結羽の家に戻っていった。

?????
そして結羽の家についてインターホンを押した。

結羽『はい！今開けます！』

そして結羽の声が聞こえたあと扉が開いた。

そこには

「じーっ」

そこには、結羽を巨大化したような女性が居た。

優也「あ、あの…」

結羽「お母さんっ！ちよっと！」

そしたらいつもの聞きなれている声が聞こえた。

お母さん？めっちゃ瓜二つじゃねーか！

え？

少し、結羽よりも背が高くて…その…発育がい

優也「ガフツ」

いってー！

結羽のやつ俺を叩いてきやがった！

結羽「い、今、いやらしいことを考えた！そして、失礼なことを考

えた！お母さんの方が発育が良いかと思ったもん！」

ほんつとうにすみませんでしたー！

俺が考えていたことを言い当てられて申し訳ない気持ちになる。

優也「ごめんごめん！っえーつと結羽のお母さんでしたっけ？俺は

友達の絆成 優也です！それとこの二人は…

ドSとバカです！」

俺がそう自己紹介をすると後ろの二人がつかみかかってきた。

悠真「誰がバカだ！誰が！」

真依「本当のことでも初対面では言ってはならないってことを分らないの!?!」

悠真が怒っているのは分かる。

だが白波さんはもはや否定せずに肯定しているよ！

優也「はいはい、この二人は生徒会長と坂戸 悠真です！」

そうしたら、悠真は納得したけど白波さんの胸ぐらを掴む力が強くなった。

真依「私、名前じゃない！」

優也「名前：なんでしたっけ？」

真依「んな!?!」

俺はここで日頃の鬱憤うっぷんを晴らした。

優也「この生徒会長は白波 真依と言います！」

真依「知ってるじゃないの…」

そしたら後ろから突き刺さる視線を感じた。

こ、この視線は…

結羽「仲、良さそうだね？」

すぐくひきつった顔をしている結羽が居た。

た

怖いです！

ってか、これが仲良くしているように見えるか？

「はい！よろしくね、私は結羽の母の柴野 美樹です」

って美樹さんもそう自己紹介をしてきた。

そしたら家の奥の方から更なる声が聞こえてきた。

「姉ちゃん！なんか玄関がさわが…しいんだけど…姉ちゃんが男を連れ込んでる」

結羽「ちがーう！この人たちは友達！」

家の奥の方から来た男の子は結羽の事を姉ちゃんと呼んだ。

つてか

優也「結羽、弟が居たんだ」

結羽「違うよ？この子は私の従弟いとこ！隣に住んでるんだよ！」

なるほど！通りで横も柴野って表札でどちらか迷った訳だ…じゃあ何で姉ちゃんなんて呼んでんだ？

結羽「なぜか姉ちゃんって呼ぶんだよね…なんでだろう？」

らしい、結羽にも分からない事情って奴か…

しっかし可愛い顔をしてんな…青いパーカーを着てポケットに手を入れてる。

そして、すぐく髪の毛の癖がすごいです。

あちこち髪の毛がたっていて、ワックスでもつけてんじゃねーか？つて位だ。

「俺はこれが普通だ！生まれつき髪の毛が固くて、寝癖があつても中々直らないから面倒くさくて放置していたらこうなつてた」

なるほど、この子も結構苦労してるんだな…だけど結構かつこよさげに見えるな。

結羽「ほら！とうま！自己紹介！」

「へいへい、俺は柴野 冬馬とうまだ！中学一年だ！」

そして、冬馬は結羽の隣に並んだ。

こうして見てみると冬馬の方が背が高い。

冬馬が背が高いのかはたまた結羽がちっこいのか…それは分からない。

結羽「じゃあ上がって！」

そして、俺達は結羽に許可をいただいたので中にお邪魔させてもらもらった。

「???」
「お邪魔しまーす」

中はとても綺麗な感じだった。

清潔感が溢れていた。

美樹「いつも結羽がうるさいのよね…」

あ、結羽が片付けてんのね、納得したわ！

結羽「私の部屋に行きましよう」
して、結羽の部屋に向かった。

結羽の部屋についた。

中には本当に必要最低限しか置いていないような感じだ。

これが、女の子の部屋か：

結羽「私は手伝いをしてるので待つててください」
そう言つて結羽は部屋を出ていった。

その時、入れ違いで冬馬が入つてきた。

冬馬「：お前は姉ちゃんなんなんだ？」

そしたら俺に急にそんなことを言つてきた。

何つてなんもないので俺はこう答えた。

優也「良いや、ただの友達だぞ？」

俺がそう答えるとなぜか皆、俺をじと目で見てきた。

何で俺をそんな目で見るんだ？

冬馬はともかく、白波さんと悠真は知つてるだろ！俺達が友達だつて：
て：

悠真「はあ：こんな感じなのだよ：冬馬君」

冬馬「ふーん、まあ良いや」

それだけ言つて冬馬は部屋を出ていった

あいつは結局何がしたかつたんだ？

真依「優也君はいつも通りね」

いつも通りじゃない俺つてどんな俺だよ！

俺は確かにキャラが変わつてきてるかも知れないけど、いつも通りじゃないと言われる筋合いは無い。

悠真「こいつは今も昔も鈍感なままだよ」

鈍感つてなんだ！そんな鈍くなーい！

俺は確かにラノベ主人公特有の聞こえないが発生することがあるけど、それは結羽の声が小さいだけで、俺はそんなに耳が遠い訳じゃ無いだろ！

俺達がそんな話をしていると

結羽「ほんとですよ！本当に鈍い！」
俺を鈍いつて良いながら結羽が入ってきた。
結羽はエプロンをつけており、そのエプロンがとても似合っている。

桃色が少し入った可愛らしいエプロンだ。

優也「お疲れ結羽」

このときこの場に居たものたちはこう思った。

『同じ事を言われてるのに、結羽にだけ優しい』と

結羽「うんっ！もう出来るから集まってだって」

俺達にはその事を伝えに来たらしい

そう言えば、結羽つてすごく料理がうまかったよな。

バーベキュー

BBQの時も結羽が居てくれて良かった。

優也「わかった、じゃあ向かうからな」

う言つて結羽の部屋を後にしてリビングに向かった。

悠真「おお！豪華だな」

そりやそうだ、だって今日は結羽の誕生日なのだから。

美樹「助かったわ…食材の類いをそこの真依さんが用意してくださって」

少し忘れかけていたが食材は白波さんが用意してくれていたんだ。

美樹「じゃあ始めましょうか！」

美樹さんがせーのつと言う。

そして俺達は

『誕生日おめでとー！』

そしたら結羽は

結羽「ありがとう！」

いつになく嬉しそう&楽しそうだ。

ニパアと笑顔を浮かべている。

しかし、結羽は誕生日にも関わらず手伝いとは…感心だなあ。

結羽は楽しそうに美樹さんや冬馬と話をしている。

この笑顔を見ただけでも来た甲斐はあった。

悠真「これプレゼントな」

そうして悠真は1つの箱を手渡した。

それを結羽は笑顔を受けとる。

つてか、悠真はプレゼント用意していたんだ。

そりやそうだよな、用意してないわけ無いよな。

結羽「開けて良い？」

悠真「おう！」

そして、結羽は箱を明け始める。

そして箱が開いて結羽が中ものを見ると急に赤面せきめんした。

まて！なに渡した！

結羽が赤面するものっていったい？…気になる…

結羽「な、ななな、なに考えてるの！」

悠真「良いじゃねーか！可愛いと思うぞ？」

すぐ結羽が可愛くなるものに興味津々です。

となると、アクセサリーの類い？アクセサリーで、そんな赤面する

ものっていったい？

悠真「それに…」

何かを耳打ちしているようだ。

結羽「わ！分かりました…」

そして、結羽はその中ものを取り出して、自分につける。

優也「ぶふっ！」

飲んでいたお茶を盛大に吹き出してしまふ。

真依「これは…」

冬馬「おおー！」

美樹「ふふっ」

悠真「予想通り」

すぐ結羽の顔が赤くなっていく。

今にも爆発しそうな勢いで

結羽「くくくッ！恥ずかしいですのでもう取って良いですよね？

ね？」

すごく赤くなつた状態で俺達に取つても良いかと聞いてくる。

この状況で恥じらいを持たない人なんて居るのだろうか？

この状況を知ったら結羽が恥じらうのも納得出来るはず…

なぜなら今、結羽は猫耳をつけているのだから。

結羽「あうくくっ」

はつきり言おう、可愛い…

現実で猫耳をつけている美少女を拝めることになるとは思っていないが、ものすごく可愛い。

そしてその状況で見つめられるとドキツとする。

悠真「今、優也、可愛いと思つたらろ？」

優也「思つてない！」

ちよつと可愛くて料理も出来るこいつをお嫁にもらう人つて幸せだなんて思つただけだ。

結羽「ほ、本当に可愛くなるのかな？…ニヤクツ」
!?

そこでのニヤは反則並みに破壊力が高い。

大抵の男子なら落ちるだろう一言だ。

しかも結羽だ…

その瞬間俺の顔が熱くなつていくのを感じた。

悠真「あ、優也が照れた！」

結羽「ふふっ」

なんか結羽は猫耳に慣れたみたいだけど俺としては依然として即死しそう。

そう言えば、俺のプレゼントがまだだった。

果たして俺は意識を保てるのだろうか？

優也「次は俺からのプレゼントだ」

そしてラツピングされたハンカチを手渡した。

そしたら悠真の時以上に屈託無い笑顔を見せてきた。

やはり結羽の笑顔は攻撃力が高い。

結羽「ありがとう！」

そして開けて良い？と聞いてきたから良いよとかえした。

そして結羽は中のハンカチを手取る。

結羽「可愛いハンカチ！」

一応喜んでもらえたみたいで良かった。

これで、可愛くないからいらなとか言われた日にはもう一生立ち直れないだろう。

まあ結羽がすごく嬉しそうだから良かった。

悠真「お前のだからなのかもよ」

優也「そうだと良いよな」

そして、パーティーも終わった。

?????
お関

結羽「今日は本当にありがとうございました！」

そうやって結羽は頭をペコリと下げてきた。

優也「こちらこそ！楽しかったからな」

悠真「ああ」

真依「だね」

俺達がそう言うのと結羽はまたもや笑顔になって

結羽「それでは！明日また学校で会いましょう！さようなら！」

『さようならー！』

こうして結羽の、忘れられない誕生日が終わりを告げた。

第16話 学校祭準備

春海「はい！ちゅうもーく！これから学校祭の出し物を決めます！」

現在、春海先生が黒板の前に立つて学校祭の出し物について話し合いを始めようとしていた。

高校の学校祭はクラスで何か出し物をするらしい。

それ以外にもバンドを行ったり、ダンスを披露したりと色々あるらしい。

「はーいー！うちはメイド喫茶がいいと思います！」

その瞬間その提案をした男子は女子から大ブーイングされていた。

正直、目をそらしたくなるような光景だ。

全方位からのブーイングのため、その中間地点に座っている俺としては俺がブーイングされている気分になる。

春海「ま、まあ候補として入れておきますね」

若干、あの笑顔が絶えない春海先生も苦笑いを浮かべている。

それも知らずに提案した男子はメイド喫茶について熱く語っている。

正直、男が見てもドン引きするほどだ。

優也「それなら喫茶店で良いじゃねーか」

そしたら全男子から睨まれた。『こいつ、本当に空気読めねー奴だな。良いところも何もないってその案』

良いところも何も絶対通らないってその案
え？なに？あなた達にはあと少して押しきれそうだとか思ってたわけ？

そしたら、女子からは歓声が上がった。

俺がメイド喫茶をやると言う流れをぶち壊したからだろうか？よくわからない。

春海「では、喫茶店で良いですか？」

女子「異議なし！」

そうして女子は賛同したが。

男子「ちよつと待った！」

男子の方から待ったがかかった。

まだ何かあるのだろうか？

男子「おい！空気を潰したのは優也！お前なんだからお前が女子とじゃんけんしてこい！お前が勝ったらメイド喫茶だ」

あ、この時点でメイド喫茶の案は完全に潰れましたわ。

優也「わーっただよ！」

『最初はグーじゃんけんポン』

優也↓パー

女子↓チヨキ

ふっ、どんなもんだ俺の運の悪さは！

今日も絶好調だぜ！

グスン

少し自分でそんなことを思ってた悲しくなってきた。

春海「では、喫茶店と言う事で良いですね？」

そして、喫茶店になった。

俺は負けたときかなり睨まれた。怖いです。肩身が狭いです。

?????
放課後

優也「と言う事があったんだよ…」

結羽「そ、それは災難だったね…」

全くだ、人の気も知らずに、少しは女子の気持ちも考えてやれよ。

優也「そっちは何に決まったんだ？」

結羽「私のクラスはお化け屋敷」

おおー！お化け屋敷か

定番だけど盛り上がるよな。

やっぱり学校祭の醍醐味だいごみだったら色々なクラスの出し物を見て廻まわる事だろ！

結羽「あ、あの…学校祭は一緒に

悠真「よう！優也！学校祭は一緒に廻ろうぜ！」

優也「ことわる！」

悠真は結羽が言いかけた言葉を遮ってそんなことを言ってきた。
悠真はいつもタイミングが悪い。

そして、なんて言おうとしたのかを聞けずじまいで終わると言うのがパターン化されている。

結羽「うううくくくッ」

そして結羽は顔を真っ赤にして頬を膨らます。

そして大きく息を吸って

結羽「バカくくッゴホッゴホッ」

キーン

耳にしばらく残るような耳鳴りがする。

女の子の大声って耳に悪いと思う。

結羽はあまりにも大きな声を出したためむせてしまったらしい。

優也「どうしたんだよ！」

ここ最近バカと言われてないと思ったらここに来たか…

悠真「すまん！今、お取り込み中でしたか！」

そして悠真は走って去っていった。

何がお取り込み中だ！俺達はそんな関係じゃない！

って言うかまた二人きりになったな。

結羽「え、えと…その…好きです！」

結羽が急にそんなことを言ってきた。

ああ、たぶん友達だとかlikeだとかそんなんだろ。

優也「おう！俺も好きだぞ？」

とりあえずそう返しておいた。

ここで無愛想な事とか嫌いだとか言ったらめんどくさくなるのま
ちがい無しだからな。

まあ俺自身も結羽の事は友達として好きだからな。

結羽「絶対意味を履き違えてる…」

優也「ん？何だって？」

こいつの声はちよくちよく小さくて聞こえないことがある。

俺としてはもう少し大きな声で話してほしいものだ。

結羽「何でもない！」

と、ここまでがいつもの流れだ。
俺としては気になるんだけどな：

結羽が言いたくないのなら仕方がない。

優也「そうだ！結羽！学校祭は一緒に廻ろうぜ！」

俺は突然とそんなことを思い付いて提案してみた。

結羽と一緒に居るのは楽しいし俺が回りたいと言うのもあるんだけどな。

俺がそう提案したら結羽は急に顔をパアーツと明るくした。

本当こいつは感情が顔に現れやすい。

結羽「喜んで！」

そして、俺達は学校祭と一緒に廻ることになった。

すぐく結羽が嬉しそうだ。

結羽「優也と廻れる：優也と廻れる：ふふふっ！」

何かぶつぶつと呟いて笑っている。

だが楽しみと言う事だけは伝わってくる。

優也「じゃあそろそろ分岐点だな。つて父さん今日、仕事で帰って来ないんだ：弁当でも買うかな」

俺がそんなことを呟いていると結羽が

結羽「それじゃ栄養バランス悪いよ！私がつってあげるからそれ食べなさい！」

少し強い口調だが俺のためを思っていると言う事は分かる。

優也「じゃあそうさせてもらうかな」

？したら、結羽は『よろしい』とでも言いたげな顔をしていた。
象?????

結羽「以外と食材はある：」

結羽は現在俺ん家の冷蔵庫の前でぶつぶつと呟いて、これとこれと…とか言いながら食材を取り出していた。

以外と俺ん家は食材が結構ある。

父さんが割引とかに目が無くて、いつも二人暮らしだから悪くなるの分かっているのにもいつも大量に買ってくる。

注意してるんだけど直らないんだよな…

優也「結羽って普段から料理するのか？」

結羽「うん、よくするよ。仕事でお母さんが遅くなる事が多くて、よくとうまが食べに来るからね」

そうか…

毎日料理をするのって大変だろうな…

しかも親が遅くなる事が多いって、それでいて隣に住んでいる従弟がよく来るって…

俺にも毎日来る従弟が居たらよく飯を作っていたんだろうか？

結羽「出来たよ！」

結羽が作ってくれたのはチャーハンだった。

しかもパラッパラで、まるでプロが作ったかのようなチャーハンだ。

たぶん文字で書いたらパラパラになるんだろうけど、俺が書くとしたらパラとパラの間に『ッ』を入れたくなる出来映えだ。

優也「結羽、お前すごいな！」

結羽の料理の腕前は知っていたが、改めて結羽の料理の上手さを感じる。

そしたらすぐ嬉しそうにしている。

結羽「ありがとう！さあ！冷めない内に食べて」

優也「じゃあ、いただきます」

結羽「どうぞ！」

そして俺はチャーハンをスプーンですくって口に入れる。

美味しい

その感想しか出てこない。

俺にもう少しメシテロの実力があれば気の利いた感想が言えるんだろうけど…

優也「うん！美味しい！」

結羽「ありがとう！」

結羽の声にも嬉しさの感情が混じってるように感じた。

??????

優也「ご馳走さま！」

結羽「お粗末様でした！」

俺は食べ終わった。

結羽の料理が美味しくて許されるのなら毎日食べたいくらいだった。

優也「こんなに美味しい料理を作れるなんて、結羽はいいお嫁さんになれるな」

俺は率直な気持ちを言ってみた。

結羽「くくくッ！」

そしたら、カアッツと耳まで赤くして俯うつむいてしまった。

何か気にさわるような事を言ってしまったのだろうか？それなら謝らなくてはならない。

優也「えーつとその…ごめんな」

そしたら結羽がえ？と言った顔でこっちを見てきた。

結羽「な、なんで謝るの？」

優也「何か気にさわるような事を言ったかな？つて」

そしたら結羽はすごく困惑した表情をしていた。

優也「だつてうつむいたから」

俺がそう言うのと肩をひくひくささせて怒っていた。

結羽「バカくくくッ！」

毎度ながら耳が痛い。

つて言うか近所迷惑だろ。

結羽「鈍い優也は知らない！」

そう言つて結羽は家を飛び出していった。

どうしたんだろうか？

次の日

俺は昼休みに購買に来ていた。

しかし、俺は昨日食べた結羽の料理が忘れられない。

もう一回、あの味が食べたいと思うくらい。

そして、俺はいつものパンを買って廊下を歩いていた。

そしたら一人の女の子が購買に歩いていくのが見えた。
しかし、俺ですべて売り切れてしまったのだ。

優也「購買、売り切れたぞ！」

俺がそう言うのと女の子は振り返った。

その子は、星野 光だった。

光「なら、あなたの持っているパンを賭けて勝負しましょう」
どうしてそうなった。

光「私が勝ったら私がそのパンを買う。あなたが勝ったらあなたのもの。良いわね？」

優也「ちなみにどんな勝負を？」

光「それは…」

ゴクリ

と、喉を鳴らす。

光「じゃんけんよ」

じゃんけんよ……じゃんけんよ……じゃんけんよ

その言葉が脳内で木霊する。こだま

俺はじゃんけんでいい思いをした覚えが何一つない。

正直断りたい。

優也「こ、このパンやるから、勝負はお預けで良いか？」

俺はそう、やんわりと断った。

しかし星野さんは

光「それじゃ公平じゃないからじゃんけんしましょう」

こいつ、変な事を気にする奴だな。

仕方ない……なるようになれ！だ。

光「それじゃあ行くわよ！じゃんけん、ポン」

ポンと星野さんが言ったのと同時に俺はチョコキを繰り出した。

どうせ星野さんの出してくるのはグーだろうと諦め半分、結果を見た。

結果は…

優也↓チョコキ

光↓パー

優也「……………」

光「……………」

フアツ!

優也「か、かあったあ」

少し力の抜けた感じで言った。

だってよ!俺が勝つとは思って居なかったから…

光「ま、負けた…」

俺に負けた星野さんに同情する。

優也「ほら!星野さん!」

そして、俺はパンを半分にしちぎって渡す。

かつて結羽にやってもらったように

光「お情けは要らないわ!」

優也「お情けじゃなくて、俺は俺自身がこのままだと気持ち悪いから半分やるだけだ。決してお情けなんかじゃない」

俺はそう断言した。

星野さんは結構な強がりらしい。

お腹が空いているはずなのに

光「わかったわ。じゃあいただきますこうかしら」

そして、星野さんは俺からパンを受けとりこう言った。

光「ありがとう…」

その時

普段クールで表情一つ変えない女の子なのに、その時だけ頬をほんのり赤く染めて、照れながら言ってきた。

優也「お!他の表情出来んじゃない!ならもう少し色んな表情をしていった方が友達出来ると思うぞ」

光「…………ツ!何なんなのよ!いったい!いきなりそんなことを言ってきて」

おっしやる通りです…

俺はいきなりそんなことを言ったからビックリされてもおかしくない。

優也「んじやーな!」

そして、俺は教室に戻っていった。

呪「美味しい…」

教室

春海「では、これからメニューを決めます！」

午後の授業

学校祭の準備のため色々な事を話し合わなくてはならない。

そして、今は喫茶店に出すメニューを決めようとしているところだ。

春海「では、何か案はありますか？」

そうだな…まあ俺としては絶対に譲れないのが

優也「コーヒー」

俺は冷たいテンションでそう言った。

反対したものの全員にコーヒーの素晴らしさを延々と語るつもりでもある。

春海「で、では、コーヒーを決定しても良いですか？」

そしたら特に反対意見も出なかったので

春海「では、コーヒーは決定します！」

そして決定した。

心の中でガッツポーズを決める。

コーヒーは俺の好物なのだ。

春海「他にはありませんか？」

数十分後

春海「では、メニューは以上でよろしいですか？」

そしてすべてのメニューが決まった。

俺はなぜかクラスの者共ものどもに料理が出来ると知られているので、俺は厨房に回るようになった。

そして休憩時間に結羽と見て廻る感じだ。

楽しみだ。

第17話 学校祭

学校祭当日

俺はいつものように登校していた。
そしたらいつものように俺と違う道から結羽がやってくる。
これはもう、見慣れた光景だ。

結羽「あ、おはようございます！」

つと結羽は元気に挨拶をしてくる。

元気に挨拶をしてもらえるところも元気になる気がする。

優也「おう、おはよう。今日は朝から元気だな」

俺がそう言ったら結羽は急にうつ向いて指をもじもじとさせながらこう言ってきた。

結羽「一緒に廻るの：楽しみだったから：」

結羽は言い終わったあとこっちを見て満面の笑みになった。

そんなに楽しみだったのか？

まあ：うちのクラスは料理できる人があまりいないから客が一段落するまで逃がしてはくれないだろうけど。

そんなことを話していると校門が見えてきた。

校門の門も学校祭風に飾り付けてある。

そして校門の先には、色々な出店が準備をしていた。

うちの学校は、校舎の入り口まで校門から距離がある。

そして校門から入り口までは真っ直ぐな道が延びていて、ど真ん中には噴水がある。少し豪華な作りだ。

その道を挟んで両方に出店が並んでいる。

そんな準備中の出店を横目に校舎の中に入っていく。

やはりと言うか、校舎の中も装飾が施ほどこされていた。

至るところに輪っかの飾りがあり、天井の蛍光灯には色々な色のシートがつけられており、かなり言い雰囲気になっていた。壁にも蛍光灯の光があたって綺麗な色になっていた。

結羽「校内の装飾を見るだけでも楽しいね」

確かにこの光景は何度見ても見飽きる事は無いであろう。
そして俺は「だな」と返しておく。

結羽「私このクラスだから！またあとでね」
どうして俺達は一旦分かれた。

「?????」
「おつち、ワツフルとコーヒー」

「こつちは、ミルクティーね！」
かなり忙しい。

なぜかここだけ人気で行列ができているレベルだ。

もしかしたら、結羽には悪いが一緒に廻れ無くなってしまいかも知れない。もつと回転率上げなければ。

お菓子などを作ったりもしているが注文数は基本的にお茶かコーヒーの類が多い。

更にお茶一杯で友達と話し込んで居座る人も居るわけで、中々回転率が上がらない。

優也「まだまだ休憩はお預けになりそうか？」

「まあ、そうだな。ってまさかお前！彼女と約束でもしてるのか？」

優也「していない。…」

と、思うが、それに近いことはしたと思う。

結羽との約束があるからな。

「なら、上がって良いぜ！後は俺達に任せて彼女さんと行きな！」
なにそのカツコいいけど、フラグになりかねない台詞は！

優也「ありがとう！モブA」

「モブA言うな！俺にはれっきとした○○^ピって名前があるんだぞ！って規制音やめろ！俺の名前はそんなに卑猥じゃない！」

その瞬間

店内に結羽が入ってきた。

ってか、あいつ並んでいたのか！それと、お化け屋敷どうした!?

優也「俺、あの客の相手をしたら上がるわ」

そして、前を向きながら手を降って結羽の元に向かう。

まあ、俺、厨房なんだが、少し話をしたかったから勝手に出てきた。

ちゃんとエプロンも脱いだよ。

そして、結羽は俺を見つけると笑顔になった。

結羽「あ、ゆ、優也！」

優也「何でここに居るんだ？」

俺は頭をコツンと軽く叩く

結羽「うう…だって、会いたくなつて…」

優也「何？」

あ、もう流れが読めた。

どうせ結羽がここで大声でさけ…

結羽「バカ…」

ばない!?

小声…っ!

俺はてつきり「バカくくくッ！」っと叫ばれて周りに注目されるパターンかと思いきや小声で来ましたか。

もしかして、ついに結羽も場所をわきまえると言うことを覚えたか

!

結羽がまた一つ新しく覚えたのは嬉しいぞ!

優也「何にするんだ？」

結羽「コーヒー（砂糖×2）で！」

???
して俺は結羽の注文をメモして厨房に戻った。

俺はコーヒーを淹れて戻ってきた。

俺が戻つてくると、結羽は周りを見回していた。

この人混みで一人と言うのはやはり心細いのだろうか？

確かに中は混んでいて、とてもじゃないが俺一人では入る勇気が無い。

それを考えれば一人で入ってきた結羽ってスゲー。

優也「お待たせしました。コーヒー（砂糖×2）です」

そうして結羽の前にコーヒーを置く。

そしたら周りに気を取られていて気づかなかつたのかコーヒーが置かれるカチャンという音で一瞬ビクツてなつてから俺の方を見て

きた。

結羽「あ、ありがとう」

そして結羽はコーヒーを一口すすする。

結羽「それにしても、人気だね」

確かに、なぜかここはすごく混んでいる。

外の出店に行ってる人は少しだけだろう。

よっぽど外の出店の方が美味しい料理を食べられるだろうに…

優也「ああ…そうだな」

危あやうく見て廻れないところだった…

まあ…このあとは思う存分おもぞんぶん見て廻れるんだけどな。

優也「それ飲んだら行くぞ」

「うんー」と嬉しそうな声で結羽が相槌あいづちをうつ。

そして結羽はコーヒーを飲み干して立ち上がった。

結羽「うん！ はいこれお代」

そして結羽から受け取ってカウンターに立っている人に渡す。

優也「じゃあ行くぞ」

そして店を出た。

出たのは良いが、最初はどこに行くか…悩む所である。

クラスの出し物一覧は、

◇◇◇◇◇

一年生エリア

1—A…喫茶店 in 優也

1—B…お化け屋敷 in 結羽

1—C…リアル脱出ゲーム in 光

1—D…迷路 in 悠真

二年生エリア

2—B…クレープ屋

2—C…型抜き

三年生エリア

3—B…美術展

3—C……喫茶店

3—D……お化け屋敷

特別エリア

2—A……演劇

2—D……演劇

3—A……アニメアフレコ

任意……バンド

任意……マジック

任意……コント

生徒会企画……クイズ i n 真依

◇◇◇◇◇

とりあえずこんな感じだ。

演劇とかはまだやらないらしいし、一番遊べるとしたらここ、一年生エリアだよな。俺のクラス以外遊べるし。それによって客が集まってるのかもしれないが。

優也「とりあえず出店行って飯食わね?!俺、ずっと食ってないから腹へったし…」

結羽「ふふふっ、そうだね。私もコーヒー以外口にしていないからお腹がへったよ」

そうして意見が合致して出店で、まず飯を食べることになった。

出店は、たこ焼き、お好み焼き、焼きそば等々などなどある。

ほとんどお祭りに似たメニューだな。

そして、俺はたこ焼きを買って、結羽は焼きそばを買い、近くのテーブルで食べることにした。

席につくとすぐに焼きそばを食べ始めた。

結羽って料理を美味しそうに食べるんだよな…

優也「中々うまいな」

今回の出店の料理は当たりだったらしい。

やっぱりたこ焼きは、焼きたてのアツアツの時がうまい。

これはたこ焼きに限ったことでは無い。

世の中の料理のほとんどに言えることであろう。

結羽「うん」

その時、横から声をかけられた。

「はーい！君たち少し時間良い？」

なんだろうか？

まあ今は飯を食べていただけだから時間はあるんだけど…

優也「良いですよ」

俺がそう言う時「ありがとうございます」と言っただけでカメラを取り出した。

「一枚良いですか？生徒会で使いたいのので」

と、言ってきた。

「ってかこの人も生徒会なのかよ。」

優也「そうなんですか。俺は良いですよ」

結羽はと言うと、なぜかキツと睨み付けていた。

「ありがとうございます！」

カシヤツ

「どうだろうか？綺麗に撮れたのだろうか？」

「ありがとうございます！名前をうかがっても良いですか？」

かなり礼儀正しい言葉使いだな。

良かった…生徒会にああいう人ばかりだと、生徒会の未来が心配でならないからね。

優也「俺は絆成 優也」

結羽「柴野 結羽」

結羽はまだムスツとしている。本当にどうしたのだろうか？

「あー！あなた達が！」

ん？なんか知ってるような口振りになったぞ？

「いつも会長があなた達の事を話しているから名前は知ってたんです！へー！あなた達が！」

そんなに俺達の事を話していたのか？

なんか恥ずかしいな。

「私、神乃 夕華です！副会長です！勝手に会長が私を次期会長にする気みたいです」

あの会長：そんなことをしていたのか…
その時

真依「やあやあ！君たち、今、私の噂うわさをしていなかったかい？」
横から白波さんがわいて出てきた。

いつもながら陽気ようきな話し方である。

夕華「あ！会長もここに居たんですか」

優也「白波さんは神出鬼没しんしゅつきぼつですね」

本当にこの会長はどこにでも現れる。

しかも、忘れかけた頃に急に現れるから心臓に悪い。

結羽「で、何で来たの？」

いつもより低いテンションでそう言う結羽。

確かになぜここに来たかは気になるが、怖いです！結羽さんの表情が暗くて怖いです！

絵で書くとしたら顔の上半分がサーツてうす黒い色で塗られている感じの顔です！

そして、無理に笑顔を作っている感じもヤバイです！やんでるんですか？とでも疑いたくなる表情

今、下手なことを言ったら洒落しゃれにならなそうだ。

真依「いやねー、二人を見かけたから来たって神野ちゃんが居たん
だよね」

うん、これぞ無難ぶなんな解答って感じだな。

これなら結羽を怒らせずに済みそうだ。

結羽「ふーん：私たち、次廻らなくちゃ行けないから行くね？」

ううして俺は黒い表情を浮かべた結羽に連行れんぎょうされていった。

人が見えなくなったところで漸ようやく元の表情に戻った結羽と今は

演劇部の会場に居た。

演劇部の演劇は少し前に終わってしまい、次は2—Aの演劇が始まるようだ。

演劇部の会場はステージのように観客席が階段状になっていて後ろの席からでも見やすいようになってる。

なぜ、来ているのかという結羽が演劇を見たい！

と、言ってきたためここに來ることにしたのだ。

あと1・2分いちにで始まるらしい。

そして俺達は席についた。

結羽「楽しみ」

結羽はすごく嬉しそうにそんなことを言ってくる。

その笑顔は男に向けてはいけないと思います。

優也「だな」

と、俺は結羽に返す。

隣同士で座って左右には誰も居ない。

『では、2—Aの演劇、始まりまーす』

そしてついに電気が消えた。

ガーーーー

機械音のような音がしたあとカーテンが開き、うっすらとステージの上に人影が見える。

そして、その人影にスポットライトが向けられる。

「今日は皆様お集まりいただきありがとうございます。それでは2—Aの演劇、お楽しみください」

そして、手を腹に当ててお辞儀をしてはける。

そして、演劇が始まった。

結羽「おもしろかった！」

結羽は嬉しそうにしている、足取りも軽いようでスキップしている。

おもしろかったなら良かった。

優也「次はどこにする？」

結羽「なんか、二・三年生にさんのエリアはいきずらいから一年生エリアにしない？」

確かに、俺達一年生にとっては上級生のエリアに行くと言うのはハードルが高い。

一年生エリアには知り合いも何人かいるし行きやすさが全然違う。へたれで豆腐メンタルな俺達にとっては一年生エリアが一番行きやすいのだ。

優也「なら、1-Dに行こうぜ。悠真も居るだろうし」

確か、1-Dは迷路だったか？どんな迷路だか気になるし、行ったら面白そうだしな。

結羽「うん、じゃあそこいこう」

1-D

悠真「ふわーあ」

あいつ！やる気あんのか！

俺達がついてから一番最初に見かけたのは欠伸あくびをしている悠真だった。

受付をやっているようだが、一切のやる気を感じない。

俺達が目の前にやって来ると

悠真「あーい、二名様ですねーこちらへ」

優也「やる気あんのか！」

俺が悠真にそう言うと言った様子でロボットのようになんか俺達の顔を交互に見る。

悠真「いやー！これはその！デート客という事でおまけしておくから頼む！これは内密にしてくれ！」

優也「違う！そんな気づかい、いらねーよ！」

俺がそうつつこむが結羽は赤くなつてうつつむいてしまった。

そして、結羽はデートと言う単語を否定しようとはしない。

優也「結羽さん？」

結羽「ひゃい！」

すごく大きな声で返事した。

しかし、今のところで驚く要素はどこにあったのだろうか？

結羽が声を裏返して囁む時は大抵驚いた時だ。

悠真「じゃあ、頑張ってきてね」

今の頑張つてにはどのような意味が込められていたのかは今の俺

には知るよしは無かったが、結羽は分かったのだろうか？

????

数分後

結羽「難しかった…優也がこんなに迷路得意だったとは！」

結羽は途中から右も左も分からなくなってたからな。

俺はこの教室の出入り口の配置から計算して進んだだけなんだけどな。

優也「今日は楽しかったか？」

結羽「はい！」

それなら良かった。

俺も楽しかったし、クラスメイトには感謝だな。

優也「お疲れ」

結羽「うん、優也も…ね」

そして、俺はお疲れと言う意味も込めて頭を撫なでた。

結羽「ひゃう…うう〜」

結羽は一瞬変な声を出したとものすごく真っ赤になってしまった。

少しの間撫でてると結羽か『えへへ〜』って言っていて正直可愛い
と思っってしまった俺がいた。

なんだこの可愛い小動物は!?

????

優也「じゃあな！」

結羽「うん！」

そして、いつもの曲がり角で別れて家に帰る。

だんだん漸く、『幸せ』の意味が分かってきた気がする。

これが、この日々が幸せなんだ。

俺の『幸せ』はこう言う事を指すんだな。

こうして俺の『幸せ』な日が終わりをつけた。

第18話 中間テスト

学校祭も終わって本格的に秋の気候になってきた。
まだ本当に寒いわけでは無いけど少し肌寒い。

そして、俺はブレずに勉強を

まあ、あと1週間で中間テストだから仕方がない。

本来ならば2週間前からテスト勉強をしたかったのだが…

学校祭が終わったあと毎日毎日、交互に悠真と白波さんが冷やかしに来たもんで全く勉強がはかどらなかつた…

さすがに1週間前と言う事で来なくなって漸くしょうや落ち着いて勉強が出来るもんですよ！

今回は前回とは違って俺に教えてくれと頼み込んで来るやつは居ない…

ピンポーン

居たわ…

そして、俺は自室から出てインターホンの所に向かう。

優也「はい！どちら様ですか？」

『結羽です！今回も勉強教えてもらおうかな？』と』

こいつだけは変わっていないようだ。

優也「ああ、良いぞ」

そう言っつて俺は玄関を開ける。

優也「上がってくれ」

俺は結羽に入るようにうなが促す。

結羽「お邪魔します」

そう言っつて結羽は俺の家に入った。

結羽「そういえば、何でいつも優也のお父さん居ないんですか？お父さんは居るんですよね？」

優也「それは父さんが朝早くから夜まで仕事をしているからだ。たまたま最近の仕事量も多くで俺が寝た後に帰ってくることも珍しくない」

俺がそう説明すると結羽は『そうなんだあ』と、相槌を打ってくる。

俺にはそんな適当っぽい返事でも返事をしてくれる話し相手がいることは幸せな事だと思う。

今までの俺はクラスでボツチで浮いた存在だった。いつも一人で居るからだな。

それで、近寄るやつも居なかった。だけど

今、俺には話し相手が居る。これってかなりの進歩じゃないか？

結羽「寂しくないの？」

優也「大丈夫だ」

俺は留守番慣れてるからな。

???

俺達は俺の部屋で勉強をしていた。

優也「えーつとここがこうで、これがこう。これはこうなってるからこうなるんだ」

俺は適当な紙に問題の解き方を書きながら説明しているので、自然と『こう』と言う言葉を連発していた。

我ながら教え下手だ：

教えるのがうまい人ならばもう少しくまく説明出来るんだろうけど…

結羽「優也って勉強すごい出来るよね！」

結羽がそう言ってきたから俺は『ああ』と返す。

そしたら結羽がしんみりした顔でこう言ってきた。

結羽「それも七海ちゃんのために築きあげてきたんだよね」

何で結羽がしんみりする必要があるんだ？それは俺の問題なのに。

優也「ああ、だが何で結羽がしんみりする必要があるんだ？」

結羽「だって、わ…し…わ…らな…くを…し…なんて」

結羽が細々と呟いたので声は途切れ途切れでしか聞こえなかった。

結羽「ひやうっ」

俺は今にも泣き出しそうな結羽を反射的に撫でていた。

優也「大丈夫だ！今の俺にはお前らが居る！それだけでも心の支えになるんだ。俺は大丈夫だから泣くなよ」

俺がそう言うのと結羽は小さく頷き『うん』と言った。
優也「じゃあこの話しはおしまいにして勉強を再開しようぜ」
結羽「うん」

次の日

春海「それではテストを開始します」

そして、次々と俺達の机に問題用紙、回答用紙が配られる。

春海「始め！」

その合図と共に一斉に問題を解き始める。

今回はテスト勉強の時間が少なかつたから不安である。

そして、前回のテストの時に彗星すいせいの如く現れた星野 光。今回こそは勝ちたいんだがな。

光は前回のテストで俺から一位を奪い去っていった。学力は俺と同等どうとうだろう。

春海「そこまで！」

今回の範囲はどれも難しい範囲だったらしい。魔物の事もあるだろろが難しい事も相あまって、かなり落ち込んでいる人が多い。

そして、すべてのテストが終わり、下校していた。
現在、俺は一人で下校中

悠真は用事があるとか言ってたな。

結羽は今日、母が仕事で帰りが遅くなるらしいから毎日のように晩御飯を食べに来る冬馬の飯を作らなくてはならないらしい。

その時

公園のベンチで座り本を読んでいる女の子が目に入った。

目を凝こらすとその女の子は星野さんだった。

星野さんっていつも一人で本を読んでいる。まるで他の人との関わりを避けているみたい。話しかけたら返してはくれるけどあまり仲良くなりたくないと言う感じだ。

その姿はまるで昔の俺みたいだ。

昔の俺は人を寄せ付けようとせず切りはなそうとしていた。

結羽が居たから今の俺が居るんだよな。

しかし、人を寄せ付けようとしなくていいところ、昔の俺を見ているみたいで放つとけない。

そして、俺は星野さんに近づいて行つた。

光「何の用？」

優也「いつも一人で本を読んでいるけどどうしてなんだ？」

光「あなたには関係ない」

似たような事をいつてるよ。

優也「す、少し気になつてな」

光「赤の他人に話す義理は無い」

あのときの俺も

俺はあまり他人とつるむ気は無い！

俺とお前はほとんどお互いの事を知らない赤の他人だ！

今となつちや何であるときこんなことを言ったのか馬鹿馬鹿しくなる。

あのとき結羽に助けてもらつた俺だからこそ分かる気持ちつてのがある。

光「わかつたら早く帰つたら？」

優也「いいや、俺は帰らないね！俺つて以外と頑固な所があるから気になつた事は聞かすにはいられないんだ」

光「迷惑な性格ね…」

そしたらいきなり星野さんはベンチから立ち上がった。

そして、こちらに向き直つた。

光「何でそこまで私の事情を知りたがるのかしら？」

優也「星野さんを見ると昔の自分を見ている気分になるんだ」

光「そう、だけど私はあなたとは違うわ。私はあなたのように輝いて無いもの…」

優也「え？なに？」

光「何でもないわ」

後半部分の声が小さすぎてよく聞こえなかった。

星野さんは何をもって違うと言ったのだろうか？

優也「まあ、確かに違うな」

光「でしよ？なら」

優也「心が」

光「…… え？」

星野さんは意表をつかれたみたい顔になって硬直してしまった。

優也「俺には分かる。星野さんにとっては他人の幸せだった。だがそれは俺の妹だと。昔の俺の好きなことは他人の幸せだった。だがそれは俺の妹に向けて放った言葉なんだ。星野さんと話してて分かったよ。星野さんは昔の俺みたいに他人を無理に遠ざける事はしなくて、むしろ楽しんでるように見えた。」

光「何よそれ：それにしても、ふつつ、他人の幸せってナルシスト？しかも妹に向けて放ったって相当なシスコンね」

優也「俺はシスコンじゃない！」

星野さんの言葉は落ち着いていて感情を表そうとはしないが、その表情は楽しそうだ。

「だけど、俺ってそんなにシスコンっぽいかな？」

光「でも、そうね：少しはあなたの口車に乗ってあげましょうか？」

「それでは、さようなら」

星野さんは勢いよく振り返り帰っていく。

勢いよく振り返ったので髪の毛が綺麗なウェーブを描いた。

そして心なしか振り向き様に微笑ほほえんだように思った。

優也「あ、ああ、さようなら」

本当は結構明るい子なのかもしれない。

?????
オスト返却日

今回もベスト10まで公表される。

先程すべてのテストが返されたので順位が貼ってある掲示板の所に来ていた。

優也「ふう…」

何とか一位だった：

星野さんは二位、少しミスをしたら抜かされてしまいそうだった。言うことは星野さん、何かミスったのか？

あの学力なら同一になってもおかしくないと思うんだが。

俺が掲示板を見ているとそこに悠真がやって来た。

悠真「お！お前、王の座を取り戻したな！」

優也「まあ、今回はかなり不安ではあったが満点だ」

この学校にはずば抜けて点数が高い2名が居る。その2名が俺と星野さんだ。

因ちなみに三位との差は、今回の場合『15点』だ。まあ、今回は難しかったから仕方ないよね。

星野さんは掲示板を見に来ていないが、彼女曰く『そんなものに興味が無い』だそう。相変わらず落ち着いた突き放し声である。

でも、人間関係は改善しようと頑張ってるらしい。この前クラスの人に話しかけようとしてあわあわして、たぶんこれがアニメなら目をぐるぐる回していたのが可笑しくて思わず吹き出しそうになってしまった。

まあ、あいつ、言葉はきついけども、ちゃんと他人の話を聞いて取り入れたり、実行したりはするみたいだ。

言い回しがいつも遠回しなんだよな。しかも、かなり素直じゃない。

俺と悠真が雑談をしているとそこにどす黒いオーラを放った人物がやって来た。

その人物は結羽だった。

優也「どうしたんだよ！結羽」

結羽「う、うう、テスト…ヤバイ…」

ほんとこいついつもヤバイヤバイ言ってるけど、よくこの学校、受かったよな。

悠真「よくこの学校受かったな」

言ったく！包み隠さず言ったく！今それ言うか！瀕死の相手にとどめの一撃を放ちやがった！

悠真、少しは状況を考えろよ！

結羽「う、うう：ユウ、ウ、ヤ、あく」

とどめ一撃を刺され、結羽は涙目になってこちらを見ている。

少し、同情してしまう。

さすがに可哀想だと思つてしまったから。

何かフオローしてやらねば！だが、何を言つてやれば元気つけることが出来る？

優也「え、えつと……そうだ！結羽には勉強が出来なくとも結羽にはちゃんと結羽の長所があるから安心しろ！」

結羽「たとえばどんな？」

ギクツて肩を震わせる。

俺は何も思い付かなかつたため適当に並べた言葉なのでそこを考えていなかった。

優也「えーと……」

その時、俺の脳裏に俺と結羽が友達になつた時の事が浮かぶ。

優也「人を救うことが出来る」

結羽「？ どう言うこと？」

優也「つまりだ。持ち前の優しきで他人とすぐに仲良くなれる。友達付き合いが得意つて感じかな？」

結羽「そう……そんな風に思われてるんだ……」

結羽は頬を赤く染め、ゆらゆらと左右に揺れている。

優也「まあ、そろそろ、次の授業が始まるから教室に戻ろうぜ」

そして、そこで解散して、自分の教室に戻つた。

第19話 ハロウィン

だいぶ寒くなってきた今日この頃

吐く息も白い

寒いと目が覚めね？え？覚めない？

まあ、良い、とにかくだ。

とにかくだ。

なぜこんなことを言い出したのかと言うと。

優也「寒いなかご苦労様です」

俺ん家のストーブの前で三人震えていた。

一人目は結羽だ。そして、二人目が悠真。最後に白波さんだ。

なぜそこまでして俺ん家に来たのかと言うと

?????
プルルルプルルル

突如として自室で勉強をしていたら固定電話機がなった。

今は父さんも仕事に行っているので仕方なく電話を取りに行き

優也「はい、どちら様ですか？」

『あ、俺、俺俺！』

優也「あ、間に合ってます」

ガチャ

ふう…こんなに早く結羽の家で学んだテクを使うことになるとは思わなかった。

まさか、俺の家におれおれ詐欺を仕掛けようとする輩やからが現れるとは…

そしたら、

プルルルプルルル

今度はなんだよ…

優也「あい、どちら様ですか？」

少し適当な言葉で電話に出た。

『あ、私、私私！』

優也「あ、間に合ってます」

まさか同じ日に似たような電話が来るとは…
今のはなんだ？

わたしわたし詐欺とでも言うべきか？

語録ごろ悪いな。

そしたら

プルルプルルル

なんだよ同じような時間帯に三回も

優也「間に合ってます」

『え？ちよーえええ？待って！どう言うこと？』

めちやくちや慌てた声を放ってきた。

この声は恐らく

優也「あ、結羽か…ビックリした」

『ビックリしたのはこっちだよ！急に訳の分からないことを言って切ろうとするんだもん』

ほんつとうにすみませんでしたー！

俺は電話の前で綺麗な土下座を決める。

相手には見えていないけどね。

優也「で、なんのようだ？」

『そうそう、今日ハロウィンでしょ？だからパーティーしようって誘ったんだけど悠真と白波さんは急に切られたって私に泣きついてきたんだよ？』

あ、もしかして

優也「おれおれ詐欺をしてきた奴とわたしわたし詐欺をしてきたやつらか」

『何そのわたしわたし詐欺って語録悪いよ！』

優也「気にしないでくれ」

紛まぎらわしいあいつらが悪い。

優也「で、どこでやるんだ？」

『優也ん家』

優也「……」

『優也ん家』

優也「二度まで言わなくとも聞こえてるわ！何で毎回俺の家なんだ！」

『優也ん家の方が何かと都合が良いんだよ』

何で俺ん家だと都合が良いのだろう。悠真とか白波さんの家って言う手は無かったのだろうか？

『取り合えず今から向かうね』

優也「え？ちよ！」

ガチャ

き、切られた…あいつら、本気で来るつもりらしい。

学校行つてきて、帰つてきてすぐに勉強を初めて、電話来て……つて学校で言えば良かったじゃねーか！

そしたら

ピンポーン

電話を切られたすぐあとにインターホンがなった。

もしかしてあいつら俺の家の前で待ち構えていたんじゃないだろうな！

優也「はーい」

『悠真です！』

『真依です！』

あ、結羽は来てなさそうだな。

ってことは結羽が電話している間に結羽を置いてきたのか！

優也「結羽を連れてこい」

どうしてインターホンを切った。

ぞ?????として、結羽を連れて戻ってきた三人は俺の家に入るや否や即行でストーブの前に行き占領した。

優也「どうするんだ？パーティー…家なんも無いぞ」

真依「だ、だだだ、大丈夫よ！ここにあるわ」

おおー！それはありがたい！これで1食分浮く。

悠真「とにかく寒い。俺達、お前に閉め出されてからもうダツシユで結羽を迎えに行つたんだからな！」

そんな逆ギレされても……今回は完全にお前らが悪い。
俺は目を半開きにして悠真を見る。

結羽「そ、そんなに怒らないで下さい。なれてますので」
なれてるって……悲しい……

俺は同情の意味を込めて結羽の肩をとんとんと叩く。

結羽「え？何でそんな同情の視線を送って来るの？」

優也「だって……なあ？」

可哀想に……

優也「で、これから準備を始める訳だけでも、人数少なくてね？」

結羽「しょうがないよ……だって……私たち知り合い少ないもん
……」

悲しい事実である……

優也「そうだ！結羽、冬馬を連れてこいよ！人数は多い方が楽しい
だろ？」

悠真「お、お前がそんなことを言うなんて……明日は槍が降るのか
な？」

なんだよこいつ！俺が珍しく乗り気になってやってんのに！

優也「とにかくだ。連れてきたらどうだ？」

結羽「うん！わかった！連れてくる！」

そしたらストーブから離れて玄関から出ていった。

優也「よしっ！俺も行きますか！」

悠真「ん？優也はどこいくんだ？」

優也「ちよつとな」

そして、俺も結羽のあとを追うように玄関に向かった。

優也「……お前、何やってんだ？」

結羽「ぎぶいいい」

結羽が声を震わせながら言ってきた。

なるほど、寒くて戻ってきたのか……ってこいつらどうやって来たん
だ？

優也「ほらよ、これ貸してやる」

俺は着ていたコートを脱いで結羽に羽織らせた。

結羽「え？良いの？」

優也「ああ、じゃあ行くぞ」

そして、俺は結羽と共に外に出た。

????? 結羽「そう言えば優也はどこか行くんですか？」

相変わらずこいつは敬語タメ定まらないやつだ。

優也「ちよつとな、俺はこつちに用事があるからまたあとでな」
そうやって結羽と別れる。

俺が向かっている先…そこは…
いつもの公園だ。

優也「俺の読み通りなら…あ！居た」

そう、俺が探していた人は

優也「星野さん！やっぱりここに居た！」

星野さんだ。

光「何よ」

相変わらず口調が冷たい。

光「あ、あなたは、ナルシストでシスコンでロリコンの優也」

いつの間に星野さんの中でそんな長い二つ名がついていたの
だろう？

取り合えず

優也「俺はナルシストでもシスコンでもロリコンでも無い！」

俺はそういうのには全く興味が無い。

光「まあ、良いわ。で、何のよう？」

優也「そうだった！完全に忘れるところだった」

そして、俺は一回息を吐いてから吸い直して

優也「星野さん、パーティー来る気は無い？」

そう、俺がなぜここに来たかと言うと星野さんをパーティーに誘う
ためだ。

光「何の？」

優也「ハロウィン」

光「……………」

そして、暫しの間があった。
何この状況…とても気まずい…

その沈黙を破ったのは星野さんだった。

光「行かないわ」

と、星野さんが言った。

断られた。

優也「何でだ？」

光「だって、私、興味ないもの」

星野さんは相変わらずである…

なんと言うか…星野さんらしいと言うか…何一つ変わってないよ
うなつて言うか…

優也「そうか…俺さ、星野さんと仲良くなるチャンスだと思ったん
だがな」

光「あら、何いつてるのかしら？私に偉そうにあれこれ言った癖に」

『あ、あ~~~~~』と俺は心の中で発狂する。

恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい

なんなんだよ！あのとときの俺は！

今思い返してみると死ぬほど恥ずかしい。

光「それに、お互い無視出来ないような関係になつてるんだし、こ
れ以上仲良くなる必要は無いんじゃないの？」

優也「それでも、星野さんに友達と呼んでもらえる関係になりたい」

光「なら良いわよ。『友達』」

え？

い、今、俺のことを友達って！

光「友達、何してるのよ友達、用が済んだならさっさと帰ったらど
うなの？友達」

あ、あれ？

光「友達、あなたのパーティーには行く気は無いから帰ったら？」

優也「って、ちがーう！」

光「何がよ。ちゃんとあなたの事を『友達』と呼んであげたわよ？」
優也「違う！俺は友達って思ってただけで別に友達って名

前じゃないから！友達って呼ばなくて良い！」

光「分かつてるわよ優也」

じゃあ、最初からそうしろよ…

優也「しつかし困ったな〜 このまま手ぶらで帰るのもな〜」
なんて言えば良いんだろうか〜」

俺は超絶棒読みで星野さんに向けて言った。

光「わ、分かったわよ！行くわよ！」

よっしゃ！

???, 心の中でガッツポーズをした。

優也「ただいま」

結羽「あ！優也！」

俺が帰ると結羽と冬馬も居て既に支度を始めていた。

俺が入った瞬間、結羽がキッチンから飛び出して来た。

料理をほうって置いて良いのだろうか？

悠真「そう言えば少し用事があるとかなんとか行って出ていったが何してきたんだ？」

優也「ああ、それは」

光「お、お邪魔します」

そう言つて光が部屋に入ってきた。

そして、結羽と目が合う。

結羽「これはこれは、学園の秀才の星野 光さんでは無いですか？

秀才がこんなところに居て良いんですか？」

光「お気を使わずに、あなたとは違つて私は天才ですのでこんなこと位では学力は下がりませんわ。そんなことよりあなたの方がヤバイのでは？すぐに家に帰って勉強してくれば少しは学力もましになると思いますけど？」

怖い…この二人怖いです。

笑顔なのに黒い…作り笑顔感が半端ないです。

しかもお互いの間にバチバチと火花が散っています。

どうしてお互いの事をそんなにけなし合うのかが意味不明です。

冬馬「待つて！落ちついて！姉ちゃん！」

優也「そうだ！まずは落ち着け！」

結・光「優也はちよつと黙ってて！」

思い切り怒鳴られた…だと！

この二人はなぜか仲が悪いな。

真依「あらま…」

悠真「とうの本人が理由に気がつかないとは」

あの二人は黙って見てるし…

その間もずつと争い続ける二人

そしたら急にこちらを向き

結・光「どっちの方が好きなの！」

どういう意味だこれは！

取り合えず、途中から話の論点がずれていたことは理解した。

取り合えずここは無難に

優也「どっちも好きだぞ？」

その瞬間ピキツと言う音がしたような錯覚を覚えた。そして時間が止まったような…

あれ？俺これ、何かとてつもないことをやらかしたんじゃ！

そして、時は動き出す。

結羽と光以外の人は皆、あちやー…つて頭を押さえている。

結羽「そう…優也がそんな人だとは思わなかった」

表情に感情が見えなく、声も冷めている。

光「ふーん」

星野さんにいたってはそれ以上なにもしやべらない…星野さんの無言の圧力は何よりも怖いです。

悠真「優也、お前それ、最悪の回答だぞ」

え？マジで？

最悪の回答…なにされるか分からない恐怖…

今まで悪感情の中の1つ【悲しみ】の最高値は経験したことあるけど…これは悪感情の中の1つ【恐怖】の最高値だぞ。

そして、俺が後ずさりしているとタイミングを合わせたかの用な夕

イミングで

緒・光「バカくくくツ」

優也「痛ててて……」

悠真「我慢しろ……自業自得だ」

結局、二人は飯を食ってる時も仲が悪いままだった。

悠真はなぜこうなったか知っているようだったが教えてはくれなかった。

俺はあの後、数発叩かれて頭が痛いし耳なりが未だにする。

そして皆が帰った後、俺は部屋で考えても見たが全然理由が思い付かなかった。

優也「あれはいつたいたんだっただ？」

兎「はあ……優也ってかなり鈍感ね」

結羽「あれが優也の欠点だね」

二人は別の道を歩きながらも同じ話題でため息をつく。

結羽「次こそは！」

光「私が」

「勝つ！」

第20話 鈍感な俺は乙女心も全く分からない

授業中

さて、どうしたものか…

あのハロウインの後、なんとか結羽と星野さんの仲を取り持つ方法は無いかと思案しあんしていた。

しかし、

優也「なんも思い付かねー!」

そして、クラスの全員が俺に注目する。

優也「あ、すみません…」

しまった…口に出していたらしい。

つてか、まず、ああなつた原因が分からない。

そんな風に考えているうちにいつの間にか授業が終わり昼食を取ろうと準備をする人、購買にかけていく人がちらほら見えた。

取り合えず、俺も腹が減ったので購買に行くことにした。

購買部

俺は取り合えず購買戦争をあきらめた状態で購買部に来ていた。

そして購買部を見ると列が出来ている。

やはりか…これは予想していたからたいして驚かない。

そして列に向かおうとしたその時、後ろから声をかけられた。

悠真「お! 優也!」

優也「なんだ…悠真か…」

こいつと居ていい思いしたことがあまり無いため、あんまり一緒に居たくない人物である。

だが、丁度良いかも知れない。

優也「悠真さ、星野さんと結羽がなぜ怒っていたか心当たり無い?」

悠真「あはは…」↑心当たりありすぎて反応に困っている人なぜか悠真はなんとも言えない顔になって笑っている。

なんなんだその反応は! どっちなんだよ!

優也「で、どうなんだ?」

俺がそう聞くと、悠真が俺の肩に手を置いて耳元でこう言ってきた。

悠真「もう少し、あいつらの事を見てやれよ。お前、鈍いんだからどうせ、一人じゃなにもわかんないかも知れないけどな？」

こいつ……アドバイスに見せかけて、実は俺のことをバカにしてるな。

しかも、若干じゃっかん楽しんでるようにも見える。

優也「ほっとけ」

俺はそう言つて悠真の手を振りほどき購買の列に並んだ。

悠真「やれやれ……先は長そうだ……」

お?????その後、俺はパンを買つて食べ、午後の授業も終わり、後は帰るだけだ。

そして、俺は今玄関目指して歩いていった。

その時

真依「おおー！優也君じゃないか」

そこに白波さんがやって来た。

そう言えば学校の廊下で会うのは久しぶりのような気がする。

優也「で、なんのようですか？」

真依「いやあ、あの後大丈夫だったかな？つて仲悪くなったりとか」

あの後と言うとハロウインの時の事か？

つて言うか白波さんがなんでそんなことを気にする必要があるんだ？

だ？

真依「あ、そんなことよりも私、急いでるから、行かなくちゃ！」

やはり生徒会長ともなるとかなり忙しいんだなあ

その時

「かあ〜い〜ちよ〜」

少し遠くの方から半ギレの声が聞こえてきた。

真依「ま、まずい！」

優也「ちよつとちよつと、何やったんですか？」

そうしている間にも半ギレのおぞましい雰囲気近づいてきて、つ

いには薄暗い霧まで現れた。

これは本能的に危険を感知しているのだろう。

「かあくいくちよく？見つけましたよお？」

その半ギレの人物とは神野さんだった。

夕香「会長！何抜け出してきてんですか！こっちは忙しいと言うのに！会長だつて分かつてるじゃないですか！」

あー…分かつてしまった…分かりたくないけど分かつてしまった。うん、これあれだ。

優也「今回は白波さんが悪い。いや、いつも悪いか」

真依「ちよつとひどくない？」

優也「神野さん、こう言うことですよね？」

この時期は生徒会が忙しくなりほとんど毎日ギリギリまで学校に缶詰め状態に

白波さんはいやになり抜け出して俺と遭遇

神野さんは白波さんが居なくなつたことに気がつき追ってきて今に至ると

夕香「まあ、だいたいそんなものですね」

優也「どうしてこの時期は忙しいんですか？」

夕香「それはね…生徒達の仲違いよ…」

ん？待てよ？

優也「なんでそれで生徒会が？」

真依「以前の会長がお人好しでね…悩みを聞いたり生徒達の問題を解決したりしていたのよ…で、それが今も続いているね…こっちはいい迷惑よ…」

なるほど…

きつと以前の生徒会長は優しくて人望があつた人だったんだろうな…

でも、それらすべてが生徒会の所に来るつて大変だな…

夕香「全く…会長は会長としての自覚を持ってください！」

全くだ。白波さんは一切自覚がない。

真依「だ、だつてえ〜」

優也「あ、それよりも、さっきの続き話しましょうか」

夕香「ん？続き？」

真依「あ、そうよ！先日の奴だけでも、二人の事をどう思ってるのよ！」

どうって、そりゃ

優也「友達？」

真依「そう言うことじゃなくて、異性として好きかどうか？という事よ！」

異性としてか……

優也「どうなんだろうな？ 正直、そう言うのあんまりわかんない」

夕香「？ ？ どう言うこと？」

あ、この話を知らない神野さんは頭に？はてなマークを浮かべている。

真依「神野ちゃん：実はかくかくしかじかでね」

夕香「そうなんですか？この男、サイテー過ぎますね」

ええ！なんでそうなるんだ！白波さんに何を吹き込まれたんだ？

夕香「とにかく、この問題は長引きそうなので柴野さんと星野さん？に謝ってきて下さい」

くっそー！何が悪かったんだよ！

どこが悪かったのかが分からないのは困る。反省して次に繋げようが無い。

優也「わ、わかりました：謝ってきます……」

?????

優也「結羽、ごめん！」

結羽「ふーん：わかってないでしょ？何が悪かったか。それなのに謝らないで！」

優也「と言う感じで追い返されました」

夕香「とにかく全部悪いので一つ一つあげてたらきりがありません」

そ、そんなにか！

俺、そんなにほとんど関わった事の無い人に言われるほど悪いか？

優也「どうすりやいいんだ！」

夕香「とにかく、あなたは乙女心を学んできてください！あなたの欠点はそこだと思えます」

うーん…一理ある

だが、しょうがないと思うんだ！あいつらの態度がわかりずらすぎるんだ！

俺に何をしてほしいんだよ…

これは俺に限らず、この世の男性ならば一度は乙女心について悩んだ事があるはず。

象?????

今日、父さんは仕事が早く終わり、今父さんと飯を食べていた。

折角だし、大人の意見でも聞こうかな？

優也「なあ、父さん、乙女心ってなんだと思う？」

父「おお！お前もついにそういうのを気にするようになったか！良い徴候だ！」
ちようこう

そう言って父さんはニヤニヤしている。

そうやって父さんはいつも俺をちやかすから相談するのが嫌なんだよな…

父「そうだなあ…俺も乙女心について考えた時期もあつたな。お前にとっては辛い話かも知れないが、今でこそ母さんはあんなだが、昔の母さんは優しくしておしとやかでいい人だったんだ。そして、あの…結羽ちゃん？だっけ？あの子みたいに気が難しかったんだ」

急に父さんは昔の母さんの話をしだした。

昔の母さんも結羽みたいだったらしい。

父「俺はどうにか頑張つて成功したが、優也は今のままだが良い。結羽ちゃんも今の優也が好きなんだと思うぞ？結羽ちゃんだけじゃない。優也の周りにいる人皆、今の優也が好きなんだと思う」

そうなのか？

結羽にはしよっちゅうバカって言われるし、悠真と白波さんには呆れられるし、星野さんの反応はよく分からないし、神野さんに至って

はあつてすぐに俺の全部が悪いと言われる始末

これで好すかれてると思うか？

まあ、確かにあれだけなつていて、俺から離れていかないのが不思議であり。たまにうざいと思うことはあるな。

やはり、乙女心はわかりづらい。悠真も教えてくれれば良いのに…

優也「…そうなのかな？…わかった。ありがとう」

優?????

優也「ほんつとうにごめん！」

結羽「だから、何もわかってないのに謝らないで！」

優也「ああ、分わからない。乙女心と言うのは一切これっぽっちもな

！

だが

優也「出来る範囲での配慮はする。わかる範囲でだが、俺は確かに前、結羽に言われた通り俺はアホでバカで鈍感だ」

今まで俺が言われ否定していた事をすべて肯定こうていする。

優也「ラノベ主人公でも何でも好きに言うといい
それでも

優也「それでも、お前らが満足出来なければ、俺から離れていくと良い」

「やっぱり、優也は優也だな」

そう、後ろから声が聞こえた。

俺が振り返るとそこに居たのは

優也「お前ら、聞いていたのか？」

悠真、星野さん、白波さん、神野さんが居た。

結羽「うん！それでこそ優也だよね」

光「はあ…なんと言うか…本当、バカよね？」

優也「言つとけ」

真依「かつこよかったよー」

夕香「今の台詞、かつこ良かったので生徒会新聞に乗せて良いですか？」

優也「どんな風にですか？」

夕香「見出しはこれです」

一年生生徒

『廊下で愛のプロポーズ!?!』

優也「ダメだ。そもそも、これを記事にさせる気は無い」

夕香「なんでですか!」

優也「そもそも、俺はプロポーズをしていたわけじゃ無い!」

夕香「えーっ!でも、今の言葉、どう聞いてもプロポーズでしたよ?」

優也「まず、付き合つてすらいねーよ!」

結羽「ぶ、ぷろ」

結羽は顔を林檎りんごのように真っ赤にさせて顔を手で覆おおっている。

結羽も本気にするんじゃないねー!

皆、俺達のやり取りを聞いて笑っている。

この笑顔を見て、俺は1つ確信した。

皆が俺から離れていくのは少なくとも1年や2年じゃないかなり先の話になりそうだ。

第21話 いつも通りじゃない日常

時は11月中旬

今まさに、秋から冬に変わろうとしている時期。

そして、11月と言えば、『期末テスト』ついにこの時が来てしまったか：

そして、例のごとく家で勉強。そして、こちらも例のごとく結羽も居る。

今回もテスト、ヤバイらしい。

毎回思うけど、なんでこいつ、この学校入ったし：

結羽「優也、ここどうやって解くの？」

優也「それは、ここをこうして、これを解けば解けるよ」

俺は一学期までだったら、少し凡ミスをしても順位は一位だったけど、二学期では星野さんも居ることだし、俺が一位を取るためにはかなり頑張らなくてはならない。

そして、今は結羽を利用して、自分の復習の最終チェックをしている。

結羽に完璧に説明出来た時点で、その場所は完璧だと言う事だ。

結羽「優也はすごいね。勉強こんなに出来て」

優也「俺だって最初からこんなに出来た訳じゃない」

中学から死ぬほど勉強したからな。

まあ、それが今役に立ってるって事だな。

結羽「わくわくらくらくない。数学？理科？なにそれ美味しいの？」

優也「数学なら悠真に聞いてこい。あいつ、唯一数学では俺についてこれるからな」

中学時代、悠真に勉強を教えてもらってたのが懐かしいぜ。

結羽は頭を手で抱え込んでうずくまってしまった。

優也「数学と理科が苦手なのはわかったけど、逆に何が一番得意なんだ？」

結羽「ん？英語だよ」

こりやまた驚いた。

漢字とかダメダメの癖に英語は得意なんだ。

結羽「じゃあ、昔の勉強が出来なかった？時の優也の一番得意だった教科は？」

昔の得意だった教科か…

確か…

優也「理科だな」

結羽「へえ…そうなんだ！意外！」

優也「なあ？ブーメランって知ってるか？」

????

結羽「今日はありがとう！」

優也「少しは自分で考えろよ…」

結羽「優也の教えかたが良くてすごく分かりやすいから、どうしても頼っちゃうんだよね」

っ！こいつ…

こんなことを言われたら悪い気がしないじゃねーか。

ひそかにこいつになら毎回来られても良いかな？って思っ
まっている。

結羽「じゃあね」

優也「ああ、じゃあな」

そして結羽は自分の家へ帰った。

?????

テスト当日

今回もいつも通りの定期テスト

しかし、今回の範囲は少し量が多かったな。少し勉強した程度じゃ全然好点数なんて取れない。

そして、テスト監督の先生から始めの合図を告げられる。

その瞬間、いつも通り、テスト時静かなので鉛筆シャーペン音がよく響く。

そして俺もペンと言う武器を持って魔物に攻撃する。

先生「終了！」

そしてテストが終わる。

少し難しかったが、解けない程ではなかった。
?して、すべてのテストが終了した。

廊下

俺は帰るために廊下を歩いていった。

myライバル星野さんはいつも通り「点数に興味ないわ」って言う
んだろうな。

そして、結羽はいつも通り「優也あーっ!」って泣きついてく
んのかな?

その時

結羽「優也!」

やっぱり

そしてこのまま泣きついてくんのかな?

結羽「やったよ!いつもより出来た!」

優也「明日は地球最後の日か:この人生、最悪な事もあったけど楽
しかった:あr」

結羽「なに最後の遺言を言ってるの!?!しかもそれって酷くない?私
の事をなんだと思ってるの?酷いよ!優也!」

いや、ごめん。まさか結羽がテストの点数が良くなるとは...

まあ、今回は結羽も頑張ってたからな。毎日俺の家に押し入って勉
強していたからな。おかげで俺はへとへとだ:まあ、バカと変なやつ
が居なかったらまだ良かったが。

結羽は頬を膨らませて怒っている。

優也「わるいわるい。だからそんな怒んなって」

結羽「優也はいつもそうだよ:いつも私の事をバカにして!」

優也「ごめんごめん:その代わり何でも一つ、言うことを聞くから
:いな?」

と、俺は結羽の頭を撫でる。

すると、結羽はうつむいてしまった。

結羽「むう:いな、何でも?」

優也「おうっ!」

結羽「じゃ、じゃあ」

と、結羽は両手の人差し指を合わせてもじもじしながら

結羽「じゃあ、今度の休日、デートして！」

と、上目使いで行って来た。

でーと？でー…と？デート！

うーん。まあ、いいか。

優也「良いぞ」

結羽「やったー！」

と、本気で喜ぶ結羽。

そんなに俺とデート出来ることが嬉しいのだろうか？

優也「じゃあ今度の休日な。じゃあ帰るぞ」

結羽「うん！」

そして結羽は俺の後ろについてきた。

休日

俺は少し早くに家を出て待ち合わせ場所に来ていた。

両者共にお互いの家を知ってるから向かえに行けば良いかな？と、

思ったけど、結羽に「こう言うのは雰囲気的大事だから」と言われ、初

めてまともに会話したあの公園で待ち合わせることにした。

少し早く出すぎたかな？

家に居ても勉強くらいしかやること無いし、ゲーム機も一応ある

が、数年間触ってないので埃を被ってる上に、暫くゲームなんて買っ

てないから旧型のゲーム機しかない。

|| 暇なのである。

少しスマホでニュースでも見てるか。

数分後

結羽「ごめん！待った？」

優也「あ、いや、そんなに待ってないぞ？それに、まだ集合時刻3

0分以上前だからな」

うん。けっして遅くない。むしろ早くつきすぎた。

結羽「ちよつと髪の設定に時間がかかっちゃって」

まあ、しょうがないよね？女の子だからな。

と、結羽を真っ直ぐ見る。

優也「…」

俺は絶句した。

結羽「ど、どうしたの？も、もしかして服にどこかおかしなところが？」

優也「か、」

結羽「か？」

優也「可愛い…」

結羽「本当！」

本当だ。マジで可愛い。

何回か結羽の私服を見たことがあるが、それよりも格段に可愛い。

天使だ！

結羽って本気でおしやれするところまで可愛くなれるんだな！

優也「すごく可愛いぞ」

結羽「えへへ…なんか面と向かって言われると照れるね」

確かに…言ってるこっちは照れると言うより恥ずかしいと言う感じだ。

結羽「じゃあ行こう！」

優也「ああ」

ゾ?????ョツピングセンター

俺達は早速この街最大のショツピングセンターに来ていた。

と言うか大型の店っていつていつたらここ以外無い。

後は小さい電気屋、コンビニ等がある。

ここは田舎と言う程でもないが都会でもない。どちらかと言えば田舎よりの街だ。

優也「何か買うのか？」

結羽「新しい服でも買おうかな？って」
なるほど…で、俺居る意味ある？

優也「買ってきな？俺待ってるから」

結羽「分かってない！」

俺が待ってるといった瞬間、大きい声で言われてしまった。

結羽「それじゃデートの意味無い！デートの定番知ってる？」

いや、知らないんだが、そんな顔を近くして言わなくとも全然分かるから。

今、俺と結羽の距離は俺が少し前に動いたら唇がふれ合いそうな距離だ。

結羽「デートの定番、一つ目！遊園地！」

うん。まあ、これは分かる。

結羽「二つ目は手を握る！」

うーん…分かるような…分からないような？

俺はさ、手を繋ぐ？と言われたらよほどの他人じゃなきや断らない。

出会って10秒で手を繋ぐ？と言われたら流石に引かざる終えないけど。

結羽「そして三つ目！シヨツピング♪」

ノリノリだなあ…

だが、恋人同士でシヨツピングって俺にはちよつと他の人とも出来るから他の事をした方が良いように思えてくる。

結羽「分かってないよ！彼氏が彼女の服選びを手伝う！これが醍醐味なんでしょ！」

優也「うーん…そんなもんか？」

結羽「そうだよ！」

優也「まあ、結羽がそこまで言うなら行くが」

まあ、俺もデートをokしたわけだし、最後まで付き合っただるか。

結羽「これとこれ、どっちが似合う？」

うーん…どっちも可愛いんだよな…結羽ってなに着ても可愛くなると思うんだよ。

優也「どっちもってのはダメ？」

そうすると、結羽が試着室から出てきた。

結羽「んもう！優也はさつきからそればっか！」

いや、だってよ…選べないんだよ…

結羽「逆に優也の好きな服って何？」

うーん…そうだ！

優也「清楚なのが好きなんだよ」

結羽「それは知ってる。だから清楚なので攻めてみたのに中々どっち付かずなんじゃん！」

優也「んなこと言われてもよ…うん。結羽がなに着ても似合うのが悪い」

結羽「はうう…」

結羽は急に顔を真っ赤にしてうつ向いてしまった。
気を悪くさせただろうか？

結羽「もういい！知らない！これで良い」

そしたら選択肢の中の一つを適当に選んでいってしまった。

でもさ？何でも似合う女の子ってさ？なんか、良いよね？

俺達^{?????}は服屋からでて違うコーナーに行こうかな？と移動していた。

その時

結羽が急に立ち止まってしまった。

なんだろう？と思ってたたら、俺を引っ張ってT字路の角の壁に隠れた。

優也「なんだよ？」

そして結羽はなにも言わず指を指す。

そこには悠真と白波さんが居た。

二人で何をしているんだろう？

そしたら結羽はいきなり

結羽「少し買い物してくるから待ってて」

優也「じゃあ着いていくよ」

まあ、さつき定番リストに載ってたからな。

結羽「い、いや…その…これから買いに行くのは…だから」

結羽はすごく真っ赤になりながらそう言ったがはつきり聞こえなかった。

優也「？」

結羽「だ、だからこれからか下着を買いに行くの！」

なんと！

でもまあ

優也「俺は気にしないぞ？」

結羽「私が気にするの！」

ああ、そう言うことか：

優也「ならまってるよ」

そして結羽はタタタと行ってしまった。

俺の記憶が正しかったらレディースの下着コーナーはあっちじゃ

無いはずだけど。

それより、あの絶壁に下着なんて要るのか？

そんなことを考えていると結羽はもう見えなくなつた。

第22話 クリスマスが誕生日

side 結羽

私と優也でデート…優也からしたらもと擬きなんだろうけど…をしていたとき

なんと珍しいプライベートの悠真と白波さんコンビが居た。そのため少し気になってしまったのだ。

だから優也には悪いけど…し、下着を…買いにいくと言つて悠真達の方へ向かった。

そして追っていると二人はお土産コーナーに入つていった。

何でお土産？

悠真「…には…が…な？」

真依「い…ん…ない？…も…と…お…よ？」

二人から遠いいため、二人の会話がよく聞こえないけど二人はどうやら品定めをしているようだ。

いつそのこと堂々と話しかけるか？

まあ、私は怪しいことをしているわけじゃ無いから良いんだけどね。

よし、出よう。

そして私は二人に近づいて声をかける。

結羽「二人とも何してるの？」

私がそう問いかけるとすぐに返事が帰ってきた。

悠真「ああ、結羽も来てたのか。…なら結羽も手伝つてくれるか？」
手伝う？何をだろう？

真依「悠真君によればね？12月25日が優也君の誕生日なんだつて！クリスマスが誕生日ってなんか良いよね？あ、だけど私だったら嫌だな…」

へえ〜！丁度クリスマス生まれなんだ！

これでまたひとつ優也の事を知れた…ふふふ…

まあ、凶器染みた思考はこれくらいにして私は率直な問いを投げ掛ける。

結羽「何で嫌なんですか？」

真依「だって、クリスマスプレゼントと誕生日プレゼントを一緒に
されそうじゃない？」

あー、確かにそうかも。

子供にとつてはそれは深刻な問題だよね？

悠真「まあ、結羽に知らせなかつたのには理由があるんだがな…バ
レたらしょうがない」

ん？理由？

悠真「すぐに表情とかに出るから優也にバレそう。バレたらあ
いっ、ことごとく祝われるのを嫌がるからその時点でパーティー計画が
水の泡だ」

あ、なんか…すみません…分かりやすく…すみません…

真依「まあ、と言う事なのよ。まあ、結羽ちゃんにも直前に教える
つもりだったんだけどね」

よ、よかつた…

ハブられてたらどうしようかと思つた…

結羽「で、誰を計画してるんですか？」

悠真「俺が知つてる範囲での最近優也が仲良くしてる面子だな。こ
この3人は勿論。星野さんもかな？」

うげっ！

星野 光まで…うう…

まあ、しょうがない！だけど、星野さんには最終的に勝つて見せる
！

あとは…あ！そうだ！

結羽「その日、とうまも誘つて良い？お母さんがクリスマスだと言
うのに遅くなるらしいから」

私がそう言うのと、悠真はすぐにOKしてくれた。

じゃあ、そうと決まれば、プレゼントをどうするかだよね。

私はいつももらつてばかりだからたまには返さない

お祭りの時にもらつたネックレスと誕生日にもらつた優也手作り
のハンカチは私の宝物になってます。

悠真「うーん…そうだ！結羽もさ手作りをしてみたらどうだ？手作りの方が喜んでもらえると思うぞ？」

な、なるほど…

結羽「お菓子とかを作って血を少量混ぜるんだね？」

悠真「おい！そのヤンデレ的な発想やめろ！」

結羽「や、やだなく冗談ですよ」

と、笑いながら返す。

悠真「いや、マジで最近の結羽を見てると冗談に思えないんだが？」
え？

周りからはそんな風に見えるの？

そこまで病んでた？そんな行動をした覚えが無いんだけど…

た、確かに優也の事は好きだけどそこまで病むほどでは無いと言うか…丁度いい位と言いますか…まあ、優也が、鈍すぎるから一回なつてやろうか？と、思ったことはあつたけど私にはそんな度胸は無かつたと言いますか…

うーん…でも、私が手作りして喜んでもらえるかな？

悠真「とりあえず、考えておくと良いと思うよ？まだ11月だから」

結羽「うん。そうするよ」

「どう言つて私は悠真達と別れて優也の所に戻った。」

side 優也

暇だな…

世の女性の彼氏の気持ちがよく分かったような気がするよ。

女性の買い物って長いよな？

と言うか、結羽の奴、どこ行つたんだ？さつき…

なんか、下着買いに行く！とか言つて逆方向向かつたし。

最近のあいつの言動がおかしいのと何か関係あるのだろうか？

やっぱり、女心はよくわからん…

そーいや中学の頃も一回だけ悠真に「お前は女心を全くもって理解していない」と言われたっけか？

あれ？言われたのってどのタイミングだっけ？いつだっけ？

俺がそんなことを考えていると結羽が手を振りながら駆け寄ってきた。

そんな彼氏彼女的な乗りやめろ！

ただでさえ結羽の見た目が幼いため、周りからの視線が冷ややかになつて落ちて着かないんだから。

もう少し見た目なんかならんのか？

どんな服を着ても幼さが消えない結羽に言ってもしょうがないか。

結羽「むう…今、なんか失礼なことを考えなかった？」

だ、か、ら、何でいつもこいつは俺の心を読んでくるんですかね？

優也「そ、それより、他に行きたい場所とか無いのか？」

俺はとっさに話をずらした。

我ながらひどいごまかし方だ。

結羽「そうだね…じゃあ優也は何も買ってないけどどうするの？」

そういえば何も買ってないな。

よしっ！

優也「じゃあ父さんが遅いときのためのカップ麺でも買い足して

「優也？」…すみません」

俺がカップ麺でも買おうかな？と言ったら結羽のトーンの低い声に圧倒され、とっさに謝った。

結羽「優也のお父さんが遅いときは私が料理を作る！優也に拒否権は無い！」

優也「いや、まあ、断る話でも無いんだがな。結羽の作った飯を食べられるんだから俺にとつては良いことしか無いわけで…」

俺がそこまで言うと言つて結羽の顔が耳まで赤くなつてうつ向いているのに気がついた。

結羽「い、いつもそうやって…純粹に言ってくるところ…ずるい…」

何やら小声で結羽は何かを言つたようで俺には聞こえなかった。

優也「ん？何か言つたか？」

結羽「し、知らないもん！そんなラノベ主人公補正がガツツリかかっている優也なんて知らないもん！」

もんつて…なにげに結羽が使うと可愛いな…幼さが際立つ。

つてカラノベ主人公補正ってなんだよ！

ったく…いつもわけわからん事を言いやがって…

結羽「と、とにかく…次、どこにいく？」

特に行きたいところってのが思い付かないが…

その時

きゆうく

と、可愛らしい音が聞こえてきた。

結羽を見ると顔を真っ赤にしてお腹を押さえている。

なるほど…

優也「飯でも食いに行くか？」

俺がそう言っていると結羽は小さく頷いた。

???

俺達は適当に近くにあつたカフェに来ていた。

ふーん…色々な物があるな。

コーヒート、パスタにするかな？

あ、あわなそう…なんちゆうアンマッチングだ。

優也「結羽は決まったか？」

結羽「み、魅力的なメニューばかりで目移りする！」

ふーん…まあ、嬉しそうで何よりだ。

結羽「じゃあメロンソーダとホットケーキで…あとパフエも！」

甘いものばかりだな。

優也「結羽。甘いものばかり食べてると太るぞ？」

結羽「優也…そういう話は女の子にするものじゃないよ？デリカ

シーが無いよ？」

あ、それはすまん…

俺はもう少し女の子の心を理解してやりたいな…

今までは女の子に関わることなんて無かったから気にしなかった

けど…

そんな話をしていると注文した物が届いた。

結羽「美味しい〜」

本当に美味しいものを食べたなら人間って表情が緩むもんなんだな

…はじめて知った。

そして俺もパスタとコーヒーを食べる。

うん。

分かりきってたけど合わない。

だけど俺はコーヒーが好きだから関係ないのだ。

まあ、元々は父さんが好きでコーヒーマーカーを買って俺も飲んでるうちに好きになったって感じなんだけだな。

結羽「優也ってさ。いつもコーヒーを飲んでるイメージがある」

まあ、おおかたそのイメージで合っている。

いつも俺はコーヒーを飲むくらい好きなのだ。

???
して食べ終わった。

???
俺がレジに向かうと

結羽「いつも私が奢ってもらってるから今日は私が！」

と、言ってきた。

だが、こう言うときは男として引き下がってはいけないような気がする。

優也「良いから。こう言うときは男が奢るもんだから。幸い、小遣いはあまり使わないから結構あるし」

まあ、最近は今までに無いレベルの早さで無くなって来てるんだがな。

結羽「で、でも」

優也「素直に奢られる」

???
う言って俺が奢ってやった。

???
結羽「今日は私のわがままに付き合ってくれてありがとう」

と、お礼を言ってきた。

べつに礼を言われたくて付き合ったわけじゃないんだけどな。

優也「良いつて。これくらいならいつでも付き合ってるよ」

そして「じゃーな」と言って家に帰った。

第23話 誕生日って…こんなに疲れるものだけ
？

side 優也

はあ：今日で二学期も終わりか：

なんか二学期は色々濃かったと思う。

結羽の誕生日があったり学校祭があったり

そしてこの時期がやって参りましたよ？

明日は俺の誕生日なんだが、悠真がお節介を焼く気しかない。

今日は12月24日。クリスマスイブだ。

そして終業式があり、やっと冬休みに入るのだが：

明日は俺の誕生日

毎年この時期になると

ピンポーン

悠真「happy birthday 優也！」

：

真「お引き取り願おう」

と言った感じのやり取りがあった。

悠真が転校してからは来年からはしっこくされずに済む！って

思ってたんだけどな：

今年は悠真だけじゃなく白波さんまでもが居る。

絶対白波さんなら悠真から話を聞いた瞬間、面白がって悠真と来る

だろう。

結羽も例外では無い。

他の二人とは違う考えで来るだろうが、祝われるのが大の苦手だ。

はあ：今日来たら今日は父さんも休みだし五月蠅くなる：

具体的にどののように五月蠅いのかと言うと、「本命はどの子なんだ

？」って感じに面白がって俺に聞いてくる。

はあ：憂鬱だ：

明日が誕生日だと言うのにこの憂鬱感…そうそう無いと思うよ？

俺はひっそりと身内だけに祝われていたらそれで幸せだから。
わざわざ騒がしくする必要は無いと思う。

明日は…ね？

うん…来ないでほしい…

まあ、単純に年を取りたくない…まあ、この年で言うなつて話だけ
どさあ…悠真が以前暴れ回ったんすよ。あれは七海もさすがに引い
ていたな…

元々、騒がしくしたいタイプじゃないし…

??りあえず、今日の復習でもして寝るか…

?????ide結羽

うーん…どうしようかな？

明日へと迫った優也の誕生日

プレゼントがいつこうに思い付きません！

だって…いつもの優也を、見てて全然欲が分からないんだもん…

優也って本当に欲が少ないよね？

いや、あるね…シスコン…

それ以外思い当たらないよお…

妹…いつそ、優也に「お兄ちゃん♡」って言ってみる？

結羽「ああああああああああつっつっ！」

自分で想像しながらも恥ずかしくなり自分が今横になっている
ベットを叩く。

うう…こ、これはかなりの強敵…

本当に優也は欲を出さない…だからこう言うときに困る…

はあ…

「ねえちやーん！お腹すいた〜！」

私が考え事をしてしているとリビングの方からとうまの声でした。
どうやらお腹がすいたようだ。

うーんそうだね。何か作ってみよう。お守りとか？

??う考えながら私はご飯を作りに向かった。

??????

次の日

悠真「ぐへへへ…ターゲット確認…これより家の主に気が付かれな
いように行動し、奴が府防備にドアを開けた瞬間突入するぞ！」

真依「おー！」

結羽「二人とも？不審者みたいだよ？だから優也に閉め出されるん
だぞ？」

そう…私達は一回、優也の家に行ったのだ。

~~~~~

回想

ピンポーン

私達がインターホンを押すと中から優也が出てきた。

優也「へーい…お引き取り願おう」

ガチャ

そして優也は閉めようとする。

悠真「ぐ、ぐへへ…まあまあ、良いじゃないですか！」

真依「そうそう！減るものじゃありませんし！ぐへへ」

二人がぐへへと言う声を出しながら優也の閉めようとするドアを  
押さえている。

結羽「ね、ねえ？それはもう、不審者だよ？」

さすがにこの光景には悠真の扱いになれている優也でも引いてい  
る。

優也「き、きもちわりい…俺やだおまえら…」

うん。私も嫌だこの人たち

出来ることならこの人たちとは無関係でありたくなってきた…

優也「は、離せ！」

一人対二人の力比べ…

あれ？少しずつ閉まってきたくない？

悠真「ゆ、結羽も手伝え！」

と、私にも願ってきた。

結羽「優也さん？この人たち誰でしょうね？存じ上げないです」  
と、私が優也に向けて言うと

優也「お、俺も知りません！なので！お ひきとり を！」  
そして完全にドアが閉まった。

〇〇想終了

〇〇〇〇〇〇  
そんなコントチックな事があつたのだ。

悠真「ど、どこがいけなかったんだ！」

うーん。

あえて言うなら…全て？

真依「とりあえず浸入しなくては！」

：ねえ…私このメンバー嫌だ…よく優也はいつもつつこんで居られるよね？

やっと優也のつつこみの辛さが分かったよ。

結羽「まず、二人が居たらもう入れてくれないだろうね？」

私は率直に思ったことを言った。

悠真「よし！まず結羽だけで行って開けさせる。そこに突入でどうだ！」

もうやだあ…この人全然話を聞いてくれない…

真依「それよ！それなら行けるわ！」

〇〇〇〇〇〇  
私は純粋に優也が過労死しないのがすごいと思つてしまった。

〇〇〇〇〇〇  
と言うわけでやることになりました！

はあ…協力してる自分が嫌になってくる。

私は覚悟を決めてインターホンを押した。

〇〇〇〇  
ピンポン

〇〇〇〇〇〇  
side 優也

なんだつたんだよ…さつきのは…

あれは予想してなかったぞ…

まさかぐへへって言いながら来るとは…変態じゃん！

取り合えずコーヒーでも飲むか…

しかし気の毒な事をしちやつたな…



少し結羽もおかしいところあるけどあの中だったら確実に常識人だからな。

結羽だけでもあげてやるべきだったのではないか？

結羽：大丈夫かな？

その時

ピンポーン

ん？またあいつらか？まあ、良い。結羽だけでも入れてやるか。そしてドアを開けるとそこには結羽しか居なかった。

優也「あれ？結羽？他のみんなは？」

俺がそう聞くと

結羽「え、えーと…ゆ、優也が入れてくれないから帰るって！」なるほどそれなら安心だな！

だけど油断するな俺！

さっと結羽を入れてさっと閉じるんだ！

行くぞ！

そして俺は結羽の手を掴んで引つ張る。

結羽「ちよ！ゆ、優也あ…そ、そんないきなり…」

その時

「今だあつ！」

だだだだ！

と、音と煙をあげてこちらに走ってくる二つの人影が見えた。

俺はその光景に唾然とする。

そしてその二つの人影に突き飛ばされてリビングへ続く扉を閉め忘れたためリビングまで飛んだ。

そして俺は結羽の手を繋いだままだったためもちろん結羽も飛ばされた。

そして俺は結羽を抱き抱えるようにしてかばってから着地した。フローリングの摩擦が痛いです。

だけどこれくらいで結羽が怪我をしないなら別に良い。

結羽「ゆゆゆ、優也！」

と、結羽は今のこの状況を見て慌てている。

抱き抱えているだけなんだが…慌てるような所…あつたか？

まあ、良いか…

取り合えず今はすることがある。

俺は抱き締めていた結羽をそつと横に置いて立ち上がった。

手を話したときに結羽が「あ…」と寂しげな声を出したのは気のせいだろうか？

取り合えず、俺だけじゃなく結羽まで突き飛ばしたあいつらには制裁を加えてやらないとな。

悠真「なあ…何でそんなに怖い顔をしているんですかね？」

と、俺は真顔で悠真と白波さんに近づく

俺は真顔で近づいているだけなんだけどねえ？不思議だねえ？

優也「まあ、いい。仕方ないから入れ」

そして俺は二人を許し、中に入れる。

悠真「おー！優也優しいな！」  
うるさい！

結羽「うん！優也は何だかんだ言つて優しいよね？」  
んな訳無いだろ…

結羽「え？本当に優しいよ？」

俺が優しい？ははっ…笑っちゃうぜ

結羽「んもう…優也は自分を過小評価しすぎ！」

優也「おいまて！先から俺の心と会話するのをそろそろやめようか？」

俺達がそんな会話をしているとキッチンから父さんが現れた。

父「あれ？今日は随分お客さんが多いな」

と、父さんは嬉しそうに言った。

たぶん自分の子供が友達を連れてきて嬉しいんだろう…だがしかし！それは間違っている！

正しく言うなら…そう！

押し掛けてきた

が、正しい。

はは、俺が自分で連れてくるわけが無いだろうか？

父「所で優也、お前はどっちの子が本命なんだ？」  
やっぱり聞いてきた。

しかし俺が答えるわけが無いだろう？

そもそもとして本命が居ない。

その時

ピンポーン

あれ？なんかまたチャイムが

誰だろう？

優也「はい！」

そしてドアを開けるとそこには異様なコンビが居た。

冬馬「久しぶり…優也」

光「まともに話すのは久しぶりね」

なぜか冬馬と星野さんが居た。

え？あのメンバーだけじゃないの？

え？え？

俺が目で困惑しているのを語っていると、結羽が説明してくれた。

結羽「私達は先に準備をするために来たの。だからとうまには先に  
行つてくるって先に来たの。そこの読書バカは単に遅れてきただけ  
だから気にしないで」

あ、なるほど…つて！読書バカ？ちよつと口が悪くなつてませんか  
？

光「あーら。ごきげんよう？勉強もロクに出来なくていつも下の順  
位を取っているあなたよりはこの読書バカの方が上だと思っただけ？」

なんか結羽と星野さんの間で火花が！火花が散っている！

こ、こわい…

まずなぜあの結羽が毒舌なのかわからないけどとにかく怖い。

そこで

父「おおー！増えたな！じゃあ改めてどの子が本命なんだ？」

…えーと…地雷を投下しましたかね？

一瞬世界が止まったような気がしました。

その直後、俺に結羽と星野さんは集まってきた。こう言ってきた。

結羽「もちろん私よね？」

光「いいえ、私よね？」

ねえ？

これ：俺の人生、詰んだって奴？これ  
まず想像してみよう

想像 結羽

優也「まあ、結羽かな？」

結羽「ゆ、優也あ…」

星野さん「そう…その小娘がそんなに好きなら一緒に地獄に落と  
してやるわ！」

b a t e n d

ダメだあつ！

結羽を選んだ時点でここで結羽もろとも星野さんに消し炭にされ  
る！

じゃあ…今度は…

想像 星野さん

優也「まあ、星野さんかな？」

星野さん「ふふつ、ありがとう。優也」

結羽「ふーん………なら、私しか見られないようにしてあ  
げる」

優也「う、うわああああつ！」

b a t e n d

正直星野さん e n d が一番怖い…

今、俺の想像の中の結羽がヤンデレになったぞ！

うぐぐ…あ！そうだ！あと一人女性が居るじゃ無いか！

想像 白波さん

優也「まあ、白波さんかな？」

白波さん「え？そこで私選ぶの？」

優也「もちろんさあ！」

星野さん「ねえ？優也。覚悟は良い？」

結羽「私しか見られないようにしてあげる。ふふふ。アハハハハ」

優也「う、うわあああつ！」

b a t e n d

や、やべえよ！

何がヤバイって…そりや…やべえよ！（語彙力0）

怖いのが二人に増えるだけじゃねーか！

ここはいつそのこと…

想像

優也「俺…実は…悠真の事が」

悠真「お、お前…そんな性癖が…さすがの俺でも引くぞ…」

白波さん「うん…今、優也君から距離を置こうかなって思ってるからね」

結羽「へー…」

星野さん「ふーん…」

「なら」

「女の子を恋愛対象として見られるように教育してあげないとね」

b a t e n d

！  
し、死んでしまう…って言うか、これ、がちの詰みゲーじゃねーか

誰選んでもダメ。男が好きみたいな演技をしても引かれて友達を無くし、更に二人には…これ以上想像してはいけない。

ん？待てよ！俺ってそもそも本命なんて居ないよな？

まあ、消去法で見られるとしたら…

白波さん：無いな：結羽：無いな：

となると星野さんだけなんだが：まあ、そこまででは無いな。  
じゃあ、これだ！

誰か一人を選んでもダメなら選ばなきやいい！

優也「いや、居ないぞ？」

俺はそう言い切った。

結羽「ぐぬぬ：」

光「ぐぬぬ」

ふう：なんとか一難去った：

そこで辺りの緊迫した空気が消えた。

見ると父さんはすでに料理に戻っていた。

父「出来たぞ！優也。手伝ってくれ」

いや、もうね？

主人公じゃないんだから：こんなイベントはもうやめてほしい：  
まるでハーレム見たいじゃないか：俺、勘違いしちゃうよ？モテて  
るって

：自虐です：悲しいかな：

そして俺はキッチンに料理を取りに向かった。

悠・真「懸命な判断だ」

??人はそう呟いた。

??  
響「happy birthday Yuya！」

なぜか英語口調で最後まで言い切った皆

やはり、ノリについていけません：

悠真「んじゃ、これ俺からのプレゼントな」

と、一つの箱を悠真に渡された。

そうして俺は少々怪しみながらも箱を開けてみる。

その中に入っていたのは

優也「あのさあ：いくら温厚な俺でも怒るよ？」

悠真「温厚？誰が？ごふっ！」

俺は悠真に膝けりをお見舞いしてやった。

悠真「良いから着けろって！」

嫌だ！俺は絶対につけない！

優也「大体なあ…結羽が猫耳だったから、今度は優也に犬耳♪って言う発想がおかしいんだよ！あれは結羽だから似合ったんだ！」

結羽「に、似合う…」

俺がそう言うのと結羽は顔を耳まで真っ赤にした。

そして白波さんがにやにやしなながら近づいてきた。

優也「な、何をするつもりでございましょうか？ま、まさか犬耳を俺に着けようって魂胆じゃ！や、やめろー！」

そして俺は成されるがままに犬耳をつけられた。悠真、マジ許さん。

そして結羽は顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

星野さんは「こ、これは萌える」とか呟いている。

俺はすぐに犬耳を外した。

真依「じゃあ私からも」

…嫌な予感がするのは俺だけかな？

そして貰った箱を開けるとそこには

優也「犬耳じゃねーか！」

そして俺は箱に入っていた犬耳を投げる。

真依「あぁー！私の買った犬耳があー！」

合計プレゼント 犬耳×2になりました。

冬馬「じゃあこれ俺な」

年下にもらうのは少し気が引けるけど貰っておこう。

そして俺は貰った箱を開ける。

…

優也「犬耳じゃねーか！（2回目）」

悠真「なんでえー！」

俺はなんか一つくらいはと思い、キープしていた悠真から貰った犬耳を投げた。

なぜかって？

だって年下から貰ったものだから。

今のところ犬耳×3しかもらってないぞ。

冬馬「いやいや、こつちが本命ね」

と、別の箱を渡してきた。

うんうん。ちゃんとまとものを用意するなんてわか…

優也「うさ耳じゃねーか！種類が違ければ良いって訳じゃねーんだぞ！こら！」

と、言いながらちやつかりキープする。

年下から貰ったからね。

光「じゃあ私ね」

なんか嫌な予感がするが、箱を開けてみた。

そこには本が入っていた。

裏表紙が上になっていたため本をひっくり返してタイトルを見る。

優也「えーと、獣耳大百科？なんだこれは」

光「ふふふ、それは優也にも獣耳の良さをわかってもらおうと、あー

！私の獣耳大百科が！」

俺は星野さんが言い終わる前に俺は獣耳大百科を投げる。

優也「おい！何でそんなにさつきから獣耳推しなんだよ！」

父「父さんは良いと思うぞ？」

優也「俺がよくないの！何？裏で口裏合わせてきてんの？さつきから獣耳獣耳って！はあ…はあ…」

俺が突っ込み疲れて息を切らすと結羽が背中を撫でてくれた。

マジで優しい結羽さんを君たち見習ったらどうだ？

結羽「じゃあ、私が最後ね」

そして袋を渡してきた。

優也「獣耳関連じゃ無いよな？」

結羽「違うよ！」

そして俺はその言葉を信じて袋を開けるとそこにはお守りが入っていた。

そして真ん中には子犬がかかかっている。

結羽「て、手作りしてみたんだ…」

そしてうつむいた結羽の頭を撫でる。



すると結羽の肩がびくつと跳ねた。

優也「ありがとう」

微笑みながらそう言う満面の笑みで

結羽「どういたしまして！」

その時、優也と結羽の周りには薔薇色のオーラが見えたそうなの、

光「く、手強い…」

その時

悠真「あれ？これ、獣耳じゃないか？」

と、悠真は子犬の耳を指しながら言った。

結羽「あっ！」

優也「はあ…お前らとは違って純粋な気持ちで作ったんだ。そんなのに怒るほど俺は鬼じゃない。むしろお前らのが続いたから人生で一番嬉しく感じたわ！」

すると、結羽はまたもや顔を赤くさせた。

悠真「よし！プレゼント贈呈会も終わったし、遠慮せずに食うぞ！」

優也「お前は少しは遠慮しろ！」

そして俺の誕生日は終わりを告げた。

1年生編 冬休み  
第24話 初詣

side 優也

俺は前日の誕生日の疲れを癒すために：なんと！なななんと！  
勉強をしていました。

あのね？長年の習慣ってなかなか変えられないよね？

俺くらいになるともう勉強が一種の楽しみたいに感じる。

その時

キンコン♪

と、LINEの通知音があった。

俺は悠真か結羽、白波さんと星野さん位しか交換してないからたぶんその誰かなのだろう。

そして携帯の画面を見ると案の定結羽からだった。

えっと？

『今日？の初詣、皆で神社に行きませんか？』

ほうほう：夜に神社に行こうとな？

まあ、いつか：

一年の始めに疲れた原因が居るのは少し気に食わんがしょうがないだろう：うん、しょうがない。

と言うわけでこう返した。

『しょうがない』

『え？』

間違えたー！

直前まで心のなかでしょうがないと連呼していたから間違えてしょうがないって返しちやった。

そのままだといやいや行く見たいじゃないか！いや、実際そうなんだけど、じゃなくてだな！

『いや、違うんだ。間違えた』

と、慌てて返した。

一瞬、心配させちゃったかな？

『ああ、いいよ。俺も行く』

『あ、はい。分かりました。では、0時に居真舞神社で待ち合わせましょう』

『了解』

そして携帯を閉じた。

所でさ…

前日貰ったこの大量の獣耳、捨てずに居るんだがどうしたら良い？と、たくさんの獣耳を見つめながら言った。

なんだかなあ…

あいつら…絶対裏で何かやってただろ。

と、俺は獣耳から目を外しベットに横になる。

冬休みに入ったことから心のそこから休む事が出来る。

頭のおかしいのに会わなくて済むのだ。まあ、あとで会うことになるんだけどな。

「これは俺じゃなく結羽がやった方が絵になるだろうに」

??????  
side 結羽

お、送っちゃった…

ほ、他の人に頼まれたからって、じ、自分で誘っちゃった…どうしよう…恥ずかしくて穴があいたら入りたい…

どうしてだろう…普通に話すことは出来るのに…メールを送っただけでこんなにドキドキするなんて…

あ、あのおときも結構ドキドキしてて覚えていないし…

「もしもの時のためにLINE交換しよう?」

「ふえっ!う、うん…」(ゆ、優也のLINE ID…えへへ)

あのおときもかなりドキドキしててあまり記憶が…へ、変なこと口走ってないよね?

そ、それにしても優也の誕生日の犬耳優也…か、可愛かった…

あ、後で初詣に行くときに会える…そう思うだけで胸が高まる。

優也…あの事、覚えてるかな?…まあ、あの調子だと忘れてる可

能性の方が大きいんだけど。

side優也

「ふわああ…」

俺は大きなあくびをした。

理由は単純明快。眠いのだ…

俺は夜に弱いたため、ずっと起きてるって事が出来ない。

中学の時に勉強に熱心に取り組み始めた時だって朝早くに起きて勉強して、12時には寝るって言う生活をしてきたから今はものすごく眠いです…

それなのに皆より早く居真舞神社に来て待っている俺ってすごい

と、その時

「おーい…起きてますか？ゆう や さ ん？」

と言う聞き覚えのある声が聞こえてきた。

この声は…

「悠真か…」

「あつたり〜見ないでよくわかったな！それとあけおめ」

まあな。お前の声をどれだけ聞いてきたと思ってるんだ？

声は声がそこそこ高い俺の声を少し低くしたような声

この俺が悠真の声を聞き間違える訳が無い。

中学からの付き合いだからな。

「ああ、あけおめ。そう言えば結羽の他にあとは誰が居るんだ？」

と、俺が聞くと悠真は首を横に降った。

「今回は気軽にしようと言うことで俺達と冬馬くんの4人のみでの初詣となっております！」

…え？

いや、俺はてつきりドSな生徒会長とか、清楚系の文学少女らも来ると思ってたんだが。

でもまあ、冬馬は結羽の弟だからな。そこは絶対に来ると思ってた。

しかしまあ、カップルとかで初詣に来ている人は着物を着たりして  
いるのに俺達はいつも通りの服装。普段着なのである。

俺達だけ浮いてるなあ…

と、見回しながら屋台の方にも目をやる。

くじ引き：お守り：等々、初詣らしいラインナップ。

俺は今までくじ引きでいい思いをしたことが無い。と言うか運で  
勝てたのは星野さんだけだからな。

お守り：お守りかあ…

と、俺は悠真の方を見る。

「厄払いのためにもお守りを買っておくか」

「おい！俺を見ながら言うのは止めてもらおうか」

俺がそう言うとすぐに悠真からツツコミが入った。

まあ、冗談だよ。3割位

まあ、冗談はさておき何を願おうかまだ決めていないのだ。

強いて言うなら？

うーん…七海の怪我が治り

「シスコン」

俺が心のなかでそんなことを考えていると横から冷めた声で「シス  
コン」と言う言葉が聞こえてきた。

んな！俺はシスコンじゃない！

俺はそう思いながら声のした方をキツと睨むとそこには結羽とと  
ても眠そうな冬馬が居た。

結羽はとても冷たい目でこちらを見ており、冬馬はいかにも眠そう  
で目をこすって半分落ちかけている。

冬馬：お前とは気が合いそうだ。

しかし、なぜここまでこのバカ二人は元気なんだろうか？

「俺はシスコンだけど？」

と、寝ぼけた状態の冬馬が結羽の「シスコン」と言う言葉に反応し  
た。

「冬馬はシスコンじゃないでしょ…姉ちゃんが怖いつても逃げ込  
んで来てたじゃない。私が姉ちゃんだったらいつでも言つてたく

らい」

と、そんな結羽の言葉に反応したのか冬馬の意識が覚醒したようだ。

と言うかここまでポワポワしていた冬馬は見たことなかったな。つて、冬馬には本当のお姉ちゃんが居るのか。

はじめて知った：

「こ、怖い…」

冬馬が本気で怯えてる！

「まあ、とうまのお姉ちゃんは相当厳しかったからね」

厳しい姉ちゃんは俺も嫌だな。

「よっしゃーもう皆集まったことだしお参りに行こうぜ」

そして神社に向かって歩き出す。

しかしまあ、この時期によくもまあ着物を着れるよな。寒いだろう

俺はそう思い、コートとマフラーを結羽と冬馬に手渡しした。

「え？でもそれじゃ優也が」

と、結羽が言うので俺はこう答えた。

「お前らが寒がつてる方が俺は辛いんだ」

と、俺は結羽の言葉を遮るようにして言った。

すると冬馬にコートを渡した。

冬馬はそのコートを受けとり羽織る。

そして結羽は俺と渡した少し長めのマフラーを広げながら言った。

「これだけ長さがあつたら一緒に巻けるんじゃない？」

さすがの俺でもかなりこの言葉は驚いた。

だってよ。相合い傘でもヤバイのにマフラーを一緒につて：思わ

ず俺達は恋人かつ！つてツツコミそうになった。

とりあえずここはお断りしておこう…

「いや…やっぱりさ、人目とかあるしさ」

「やっぱり…私の事なんて…」

なあ、なぜ俺の誕生日の時の妄想の中の結羽がヤンデレになつているか教えよう。

その日のスープが真っ赤でした…あれは本当に恐怖すら感じた。

恐る恐る聞いてみると彼女は「血だよ?」と言い張るのです。

しかし数秒後、やつとトマトだと認めてくれました。やつとひと安心。

しかし俺は思った。あ那时的結羽の顔、本気になったらヤンデレになりそうだと…怖い

「い、いや。そんなこと無いから。よーし!二人で使おうか!」

そして結局俺が折れることになった。

まあ、結羽には結構料理を作ってもらって感謝してる。しかも元々旨かった料理が更に上手くなってきている。

そして俺は結羽の首と俺の首の回りをぐるっと一周させる感じに巻いた。

俺と結羽の間が真っ赤なマフラーによって繋がっている。

そのためお互いの体の密着度が高くなるのだが、結羽の体がすごく温かい。

見ると結羽の顔は真っ赤になっていた。

そして俺達は顔を背けながら歩いた。

?????  
俺達は賽銭箱の前に立って5円を入れる。

なぜ5円かって?ご縁がありますようにと言う意味が籠っているからだ。

そして目を瞑り

パンパン

2回手を叩いて礼をする。

この時に何かを願うのだが。俺が普通に考えると七海が元気になりますようにだ。

だけどな…

そうだ!

皆の願いが叶いますように。

これで決定だ。

「おい。何を願ったんだよ」

と、悠真は俺に聞いてきた。

知らないのか？他人に願い事を教えると叶わなくなるんだぞ？  
まあ、ここは適当に

「悠真の願いだけは絶対に叶いませんようにだ」  
と、俺が言う

「ひびいー」

「のけぞった。」

「?????」  
俺達はお守りのコーナーに来ていた。

おみくじを引いてもいいんだがな。どうせ大凶だろ。

と言うことで俺はお守りを買って来た。もちろん結羽も

俺はもちろん運氣上昇のお守り

で、結羽はと言うと

「恋愛成就：好きな人でも居るのか？」

「そそそ、そんなこと無いよ？」

と、あからさまに動揺する結羽

あれ？本当にいるパターンか？

まあ、前もそんなことを言っていたからな。

と、俺はさりげなく二人分の金額を支払う。

「いつも優也が払ってばかり！たまには私に任せてよ！」

と、なんとも他人を思った文句？を言ってきた。

俺としては気遣いは嬉しいんだが男としてそれはどうなんだ？女の子に払ってもらって。俺にだって男としてのプライドがある。

だからここは譲れないポイントではある。だから俺は勢いよく結羽の方を向いて

「あのなあ……」

そう、今俺と結羽は一つのマフラーを一緒に巻いている状態だ。そのため結羽の方向を勢いよく向いたらどうなるか分かるだろう。

そう、近い…近いのだ。ん？お約束はどうしたかって？そんなもん現実で起こるわけ無いじゃないですか。

でも少しでも近づいたら唇が触れ合いそうな距離だ。

結羽も顔を赤くして俺と目を合わせられないでいる。



「あーと……ごめん！」

そう言つて俺は前を見る。

すると横から「あつ……」と寂しげな声が聞こえたような気がした。

「な、何で謝るのよ……バカ……」

「ん？なんか言つたか？」

何か聞こえた気がしたから俺は結羽に聞いてみた。

「知りません。そんなラノベ主人公なんて」

と、結羽は少し不機嫌な感じで言った。

と言うかお前らそのラノベ主人公つて言葉好きだよな。まあ、もう

今さらだから突つ込まないけど

「んじゃ、おっちゃん。これで頼む」

そして俺は結羽が気づかないうちに支払つておく。

結羽はと言うとぶんぶんと可愛らしく怒っている。

いや、全然結羽が怒つても怖くないよね？ちよつと病まれたら危険

だけどそれ以外はなんと言うか可愛らしいよね。うん。

その可愛らしい姿を見るためだけに怒らせた位だ。

「そうやって結局優也が払っちゃう……嬉しいけど今はその気遣いは余

計かも……」

と、何やら俺には聞き取れない声で呟いた結羽

え？なに？結羽の声はモスキート音なの？俺の聴覚は高齢者並み

なの？ちよつとそれはヤバイな！

他の人は普通に聞こえてるの？この声、そうだとしたら耳がかなり

遠いじゃないか！

と、俺は少々疑問を持ちつつお守りの屋台を離れ、おみくじを引き

に向かう。

まあ、俺が運でいい思いをしたこと無いから期待はしないでおく

わ。

と思ひ、若干諦めつつおみくじを引く。

そして結羽も俺に続しておみくじを引く。

そして開くとそこにはなんと

『大吉。あなたの頑張り次第で恋が成就するかも？』

余計なお世話だ！

だいたい俺が誰に恋をするってんだよ！はあ…バカバカしい…  
はじめて出た大吉に心を弾ませたさ。けどな。内容が余計なお  
世話だ！

すると隣で結羽もおみくじを開いて確認している。

すると途端に結羽の顔が真っ赤になってゆで上がってしまった。

い、いつたいどんな無いようなんだ！結羽がそんなに恥ずかしがる  
なんて

そして俺は少し覗いてみた。

『大吉 今年は思い人とよりいつそう近づけるかも。もしかしたら付  
き合えたり!!』

ほう。内容はほとんど俺のと同じだな。

だけどどこに恥ずかしがる要素があるんだ？

すると俺の視線に気がついたのか。「ひっ！」と言う可愛らしい声  
をあげて結羽はおみくじを隠す。

いや、もう隠しても無駄だけどね。うん

「うう…」

結羽はバックにおみくじを入れてから顔を両手でおおって首を  
振っている。

なんか恥ずかしいからこのマフラーやめたいんですが…他の人の  
目もあるし。

と、その時、悠真と冬馬がこちらによってきた。

「おい、優也。結羽。初日の出を一緒に見に行こうぜ」

「うん。いい感じのスポットを見つけてきたんだ」

と、悠真と冬馬が言ってきた。

ほう…初日の出とな？良いね。そう言うの。これで父さんが言っ  
てた青春つてのをクリアにしてくれないですかね？やっぱり恋人を  
作らなきゃダメ？

厳しいな…この俺に恋人を作れってのがまず酷だ。

俺にだって中学一年の頃。好きな女子位いたさ。

「好きです。付き合ってくださいー！」

と、俺

「無理です。なんとなく嫌です」

と、相手の女の子。

俺はその時のショックを未だに覚えている。まあ、結構七海が事故にあう日の近くだったと思う。

と言うか、なんとなくくって何だよ！なんとなくくって！もつとましな理由なら分かるけどなんとなくくって…何か？生理的に無理ってか？ふざけんじゃねーぞ！

と言う感じで、俺はもう「告白なんて二度とするものかつ！」と言う感じで拗ねってしまったのだ。我ながら子供っぽいな…

「行こう？優也！」

と、手を急に繋いで引つ張るように走り出した。

と、結羽はやはりバランスを崩して倒れそうになった。

そして俺は慌てて結羽の腕を引く。

そしてなんとか転ばずに済んだ。

「気を付けろよ」

と言う感じのやり取りをしていると悠真がニヤニヤしながらこちらを見ている。

なに見てんだ。見るな！この野郎っ！

そして冬馬に目をやると冬馬の口元が動いていることに気がついた。

「冬馬、なに食ってんだ？」

と、俺が聞くとポケットの中に入っていたものを差し出しながら言ってきた。

「はめはま。ひふ？」 訳『あめ玉。要る？』

「要らないよ。ってか、この時間に食べて大丈夫か？虫歯とかになんないのか？」

「ああ、俺はそう言うのにはならないから」

うん、確信した。これはなるパターンだ。

こう言うことを言うやつに限って虫歯になるんだよな…これが

そう言うやり取りをしているとついによく景色が見える丘にたど

り着いた。

だいぶ空も白くなってきた。もうそろそろ太陽が上がって来るの  
だろう。

そして四人で見ているとついに太陽がうつすらと見えてきた。

率直な感想としてはキレイだと言うことだ。

太陽の光に照らされて空が輝いて見える。

朝焼けと言う奴だろうか？オレンジ色の光がとてもキレイだ。

「キレイ…」

と、結羽は呟いた。

「そうだな」

と、俺も同意する。

その時、悠真が耳元でこう言ってきた。

「こう言うときはこの景色より君のほうがキレイだと言うんだ」

…は？

ちよつと待て！それはおかしい！

第一に好きでもない人にそんなこと言われたら気持ち悪いだろ！

なに？俺に言わせて嘲笑おうとしているのか？ふざけんなよ！

「言わない」

「言え！」

「だから言わねーっの！」

と、俺達がこんな話をしていると冬馬が鞆からカメラを取り出した。

「一緒に撮らない？」

と、冬馬が提案してきた。

これは言わなくてすむパターンだ！

そして一瞬で俺は承諾。結羽も承諾し、悠真は渋々承諾した。

「セット完了。はい。チーズ」

カシャツと言う音と共に目映い光が俺達を包む。

そして皆で確認しにいくと、キレイに写っていた。

「じゃあ、帰るか…俺は寝るから連絡を寄越すなよ」

と、忠告し帰った。

なぜか最近俺の家の方向から結羽が帰るため最後まで帰りが一  
緒だった。

三学期はどうなることやら…

## 第25話 ツツコミ放棄宣言!?

side 優也

「あのなあ…暇さえあれば俺んちに集合するのやめね?俺んちはハ○公じゃねーんだよ」

今日は冬休み最終日。今日くらいはのんびり過ごすぞ〜!と、意気込んでたのも束の間。結羽を初めとし、悠真や白波さんが押し掛けてきたのだ。

くっそう…いつも俺の家を某有名な集合場所と勘違いしてるんじゃないか?

「まあ、それよりもさあ!雪合戦しようぜ?」

と、悠真は親指を立てながら言ってきた。

「なんだ?そのサッカーしようぜ?的ナノリは」

お前は某超次元サッカーアニメの主人公か!!

と、俺は心のなかで突っ込んだ。

なに?皆、俺の突っ込み待ちなの?ねえ?突っ込んで欲しいの?

「雪合戦しよう!優也くん」

「もう疲れたんでそれで良いです…」

と、俺は白波さんの言葉に適当に返す。

なんか悠真と白波さんが俺の左右に居るんだが、左右で俺の方向に身乗り出してきている。それを見て結羽は苦笑い。

結羽:お前だけだ分かってくれるのは…グスン…

???  
?言うわけで雪合戦をすることになったのだが

「おい…なんだこの悪意を感じるチーム分けは!」

そう。とてつもなく悪意を感じるのだ。

このチーム分けを見れば誰だって悪意を感じるだろう。

なぜなら俺が一人で他3人が相手、3対1なのだ。

ねえ?なにこれ、俺っていじめられてたんだっけ?

てつきりさあ悠真の事だから面白がって結羽と俺を一緒にすると  
思ってたんだけど?

ねえ、ふたを開けてみたらあら不思議。合戦と言うよりリンチですね？分かります。わかりたくないけど分かります。

悠真、てんめえええっ！おぼえてろよー！

「じゃあ、よーい・スタート」

そして開始された。

予想通り俺に雪玉が集中的に飛んでくる。

当然ながら俺には避けて雪玉を投げるなんて高等テクニクなど無いので逃げ回る事しか出来ない。

なんか結羽だけ何もしていないがそれが唯一の救いだらう。

責めて戦力が分散してくれば良いんだけどな。

そして俺は逃げることしか出来ないのだ。結羽…ただ苦笑いして  
るくらいなら俺に加勢してくれると嬉しいのだが…

??んな感じで俺らの雪合戦は幕を閉じた。

????

「はあ…ひどい目にあった…」

俺はあのあと流石に普段筋トレをしていると言ってもそこまで外に出ないと言う行動のせいで体力の無さが浮き彫りになり、捕まった俺は雪玉をぶつけられたのだ。

そして俺は今、近くのベンチにて結羽と一緒に座っている。

悠真と白波さんはどうしたかって？あの二人…元気だよね。あれ  
だけ走り回ったのに…俺が体力が無いだけなのだけれども…

俺は徒競走的なのは瞬発力が高いってだけですぐに体力が切れて  
しまう。

走り込むべきなのだろうか？いやいや…昔からこんな怠惰だった  
訳じゃないよ？うん。ちゃんと運動をやってましたとも。ジュニア  
サッカーチームだっけ？メインでは無かったけど補欠として頑張っ  
てました！

キツク力だけは高かったんだぞ？

悠真はまだやってんのかな？俺は勉強に本格的に力を入れ始めた  
ときに同時に辞めてしまった。

まあ、そんな訳で、あの元気いっぱいあいつの二人は今、雪だるまを作っ

て遊んでんのかな？

結羽は隣で自分のバックから出したお茶を飲みながら二人の様子を見ている。

と言うか俺の隣にずっと居るけど、結羽は遊ばなくて良いのかな？  
せつかくだし遊んだ方が良いと俺は思うんだけど。

と、そんな感じで俺が結羽を見ていると俺の視線に気が付いたのか、俺の方を向いて優しく微笑む。

その笑顔を見ているとこのままで良いかな…と勝手にしてしまう。

と、ふと向こうの二人を見るとなんか二人でこそこそと話し合っている。

そして先程二人が作っていた雪だるまを見ると、大小二つの雪玉があった。

大きい方は体の3分の2もある。でけー

ってか乗せてないみたいだけど、そんなにでかいの乗つけられるか？  
小さい方だつて半分あるんだから…

持ち上がらないだろ…

と、そう思っていると悠真が持ち上げ始めた。おいおい、嘘だろ？

と、思っていると雪玉を投げた！

そして上手いこと乗った。

悠真は「ふいっつ」と額の汗を袖で拭く動作をする。

俺はあまりの光景に立ち上がり、開いた口が閉まらなかった。

い、いつものことだよな？こいつらがちよつと常識を踏み越えてるのはいつものことだよな？

うん。そう言うことにしておこう。

「ゆ、優也…き、気持ちには分かるけど気にしないでおこう？…ね？」

と言うか結羽の優しい言葉で俺は我に帰る。

そして俺は結羽を見る。すると、やはりと言うかなんとと言うか、結羽の笑顔もひきつっていた。

もう知らねーぞ？俺達は気にしないことにした。いちいちツッコんでるところの体力が持たないんだよ！

と、俺は心の中でツッコミ放棄宣言をする。



結羽も気にしないことにして、何も無かったかのように本を読み始める。

なんかさ、可愛い女の子ってなにやっても絵になるよね。うん。でもヤンデレはやめてほしい。あれが演技だとしたらすごいよ？

その後数分間遊んでいた二人だが、流石に疲れてきたらしくこちらに寄ってきた。

俺は二人に事前に買っておいたスポドリを投げ渡す。

そして二人は上手いこと胸の前でキャッチし蓋を開けて飲み始める。

「そろそろ帰らね？もう夕方だし」

俺は提案する。

「そうだな」

と、悠真

「そうね」

「そうだね」

白波さんと結羽も同意する。

「そう言えば今日も優也のお父さんは遅いんだよね？ご飯作るよ！」

と、言ってくる結羽。ありがたい。だが、毎回作っててもらっては申し訳なくなる。

なんかお礼をしたいな。こう見えて俺は借りは返すタイプの人間だからな。

「おい！優也！今日もって言ったか？今日もって！いつも作ってもらってんのか？完全なるフラグ立ってんじゃない！」

「たまにだけど。ってかフラグってなんだ？何のフラグだよ！」

マジで意味わからん…ってか料理を作ってもらって立つフラグってなんだよ！

と、俺が返すと皆がやれやれ…と言った表情でこちらを見て来る。なんだ？その視線は！どんな意味が混もってんだよ！

「今に始まったことじゃないから別に気にしてないよーだ」

と、いかにも怒った口調で言う結羽

「そうだ！今から結羽の家にお邪魔しても良いか？」

と、俺が言うと、頭に？を浮かべた様子で一瞬間があった。  
そして結羽は「良いけど」とうなずく。

「じゃあ普段作ってもらってばかりだから今日は俺が作るよ」  
と言うと結羽は顔を赤くして顔をそらしてしまった。

他の二人はにやにやと期待が混ざったような視線でこちらを見る。  
くる。

そして結羽は顔を赤くしながら何かを呟いている。何？何か俺、おかしなこと言ったか？

最近俺、料理してないし、忘れられがちかも知れないけど一応人並みには料理出来るんだぜ？なのにこの反応っておかしくないですか？

結羽は理由を聞いてきた。

すると、二人が結羽に近づいて何かを耳打ちする。

そしたら結羽の顔が更に赤くなっていく。

何か変なこと吹き込んでないよな？

思ったら結羽はこちらを向いて小さくうなずいた。

あ?????のあと二人と別れ、俺は結羽と一緒に結羽の家に来ていた。

今日は偶然結羽の母親も遅いらしい。そのため結羽と冬馬と俺しか今、この家に居ない。

ってか料理は久々だな。結羽と出会う前はほとんどコンビニ弁当だったし、気が向いて作っても簡単な朝食みたいな夕食になっていた。  
た。

そして俺は今、炒飯を作っている。

ジューと言うご飯を炒める音が食欲をそそる。

しかしまあ、結羽ほどの料理のバリエーションは無い。

あれはすごいわ。

今、俺が作っているような炒飯に、チンジャオロース、プルコギ、餃子（手作り）、ハンバーグ（手作り）、オムレツ、オムライス等々、挙げたらキリがないほどのバリエーションの料理を作っていたんだ。  
結羽ってすごいよね。手間を惜しまない結羽には感心するよ。

そして俺はフライパンを振る。

すると、炒飯が宙を舞い再びフライパンの中へ

そして出来た炒飯を三枚の皿に盛り付ける。

その皿を結羽と冬馬が待つテーブルに置く。

そして置き終わって俺も席につく。

そして頂きますを合掌して食べ始める。

結構好評だった。よかった。まずいとか言われたらどうしようか  
と思った。

なぜか途中で結羽があーんをしようとしてきたが俺は華麗にス  
ルーした。

すると、結羽は頬を膨らまして俺の腕をぽかぽかと叩き始めた。

冬馬はと言うと気にしないで黙々と食べていた。

食べ終わって別れの挨拶をして自分の家に帰った俺は疲労がピー  
クに達していたためベットに飛び込むや否やの○太並の早さで眠り  
についた。

1年生編 三学期  
第26話 近づく真依の卒業

side 優也

ついに今日から三学期、長いようで長かった一年生もいよいよ終わりを告げる時期だ。

そして俺達の二学年上である白波さんは卒業をする。

白波さんが今後進学をするのか卒業をするのかは知らないが今学期でお別れと言うことになる。

まあ、あの人の事だからたまにフラフラと遊びに来たりするかもしれないが、まあ、それでも名目上はお別れになる。

「ねえ、優也」

と、隣で登校路を歩いている結羽が突然話しかけてきた。

「なんだ？」

「白波さん、卒業だね。なんか知り合いが卒業つてなると考え深いよね」

「だな」

と、俺は簡素な返事を返す。

とりあえず眠いから適当に済ませたかったのだ。

「ふわああ…」

「ずいぶん眠たそうだね？どうかしたの？いつもの優也らしくないよ」

それもそのはずだ。悠真、あいつまじで許さん。

夜遅い時間に急に<sup>悠</sup>あいつ<sup>真</sup>が俺にLINEを送ってきやがったんだ。

それで少しは返したりもしてたんだが、眠きなってきたスルーしようと思ったんだ。

あいつのことだし次の日問い詰められるだけだと思って寝ようとしたんだ。

そしたら急に

キンコン

キンコン

キンコンキンコンキンコン

と、うるさく間髪入れずに送ってくるようになったんだ。

俺は眠い目を擦りながら携帯に目を向けLINEを確認したところ、つい数分前まで途切れることなく送りあっていた俺の返信がなにかがあったかのように途切れたこと二より不審に思った悠真が心配して「おいつ!?大丈夫か!?優也く!」と何個も送られてきたんだ。

無茶ぶりだとは分かっちゃいるが、察しろ。(自称)親友なんだろう?とまあ、うるさいので付き合っつてやったら思いの外長くなりまして、それで睡眠時間が削られ眠いつて言う事だ。

「やあ、お二人さん。今日も仲良く登校かい?」

と、急に後ろから声が聞こえてきた。

俺たちは後ろを振り向くとそこにいたのは悠真だった。

こいつは夜型なんだが、その生活習慣と言うのが遅寝、早起きなのだ。とても変則的な生活習慣である。

そのお陰か、こいつは眠くなさそうだ。こっちの気も知らずに。

と言うかこいつ、また面白がって仲良くとか言っただな:俺は平気なんだがそう言うことをいうと結羽が大変なことになる。

「ち、違うんだよー!こ、これはいつもの事で仲良くとか言うのは関係なくて!」

ほら、言わんこっちゃない。

結羽が悠真の言葉に反応し慌てて弁解を試みている。

俺からしたらどこに慌てる要素があるのが全く理解できない。

全く女心というのは難しいものだ。

「悠真、なぜあんな時間にLINEを送ってきたんだ?お陰でこっちは寝不足だ:」

と、俺は眠い目を擦りながら問いかけた。

「いやあ、急にLINEしたくなっちゃってな。だけど誰かを巻き込むのは申し訳ないから優也にLINEしたんだ」

なるほど:そんな理由で俺の睡眠時間が犠牲に:って!

「今、の言い方だと俺なら迷惑をかけていいかのように聞こえるん

だが!？」

「しっかし今日はいい天気ダナー」

「ねえっ?!急に露骨に話をそらそうとしないで!？」

俺が問いかけると誤魔化すように悠真は話をそらそうとしてきた。

否定してくれないってことはそう言うことなの!?!え?俺って悠真の中ではそう言うキャラだったの!?

う、くそう…こいつには今度痛い目を見させなければいけないようだな。

ぞ?????だ。  
ぞして歩いていると学校に着いた。

そしていつも通り結羽と悠真と別れて自分の教室へと向かう。

1年生の教室は3階、3年生の教室は2階にあるので途中で三年生の様子がうかがえる。

皆受験モードになり、SHRが始まる前の時間を活用して勉強をする人、面接の練習をする人、様々な人がいる。まあ、就職をするのか何もしていない人も居るには居るが…

そしてそれらを流し見していると白波さんを見かけた。

彼女は自分の教室にて勉強をしていた。とても静かに集中して勉強しているため、賑やかに面接練習をしている声もまるで入ってきていない様だった。

もしかして俺等の前だと気を許せているのかな?他の人の前ではこんなに真面目な生徒会長なのかな?

いやいや、なに考えてんだ!自意識過剰にも程がある。

とりあえず自分の教室に入らないといけないな。

ぞして俺はそのまま階段を上り3階にある教室に向かった。

1?????年のフロアは3年のフロアと違って賑やかで楽しそうに友達と話したりしている姿がうかがえる。

なあ、何で俺の友達って女子が過半数を越えてるんだ?

しかも学校の皆は当然、中学の冬馬の事を知っている人は少ないため、最近結羽や白波さん、星野さんと話をしていると周りの視線が痛

い。

学校の皆からしたら男友達は悠真だけで他は女子に見えるの  
だろう。

言つとくがリア充とかじゃないぞ？ちよつとあいつ等が異常に絡  
んでくるだけで

あいつ等に恋愛感情を抱いたことが一度もないからな。それだけ  
は勘違いしてはいけない。

つてか何で俺、こんな説明口調になつてんだ？

そしてそんなこんなしていると先生がやって来てSHRが終わり、  
始業式が始まる。

始業式では国歌を歌つたり校歌を歌う。そしてなんといつても校  
長先生のあの長い話だろう。

寝ている人がちらほら見えたが気にしないことにした。

なぜなら遠くの方に視界の端で居眠りを見つかつて怒られている  
悠真が見えたからだ。だから俺は考えることをやめた。

そして教室に帰つてきた俺たちは今、LHRを受けていた。

「無事に誰一人欠けることなく三学期を迎えられたことを先生は嬉し  
く思います！」

と、述べる春海先生。

まあ、先生なら皆そう言うよな。

俺の席は一番後ろで端だ。そんな席はボツチにとって最高の場所。  
わざわざ話しかけるやつなんて俺の目の前のやつ位だ。名前は覚え  
ていないが、

つてか俺等は小学生かよ!?!俺等の年齢で病院送りになるような  
事故を起こすやつなんて居るのか?!

ぞんなんこんなでLHRも終わり、あとは帰るだけになった。

俺は自分から絡みたくないが、向こうが待てと言うから仕方なく  
待っているのだ。

「お！優也、待ってくれてたのか！」

「お前が待てと言つたんだろ？」

と、俺は悠真に簡単なツツコミを入れる。  
すると後ろから結羽と白波さんが着いてきた。

「優也くん。こう言うのはキツチリ守るよね。フムフム。関心だ」  
と、頷く白波さん。

「じゃあ揃ったんだし、帰ろ！」  
ってかフムフムって実際に口に出す人初めて見た…

「じゃあ揃ったんだし、帰ろ！」  
と、催促する結羽。

ツツコミを放棄したい俺だが反射的にツツコんでしまう。

??  
して結羽の声と同時に俺等は歩き出した。

今日  
今日は午前授業だったため早い時間に帰ることが出来る素晴らしい日だ。

こいつらが居なければ、だが

こいつらが居るせいで俺はモテているように周りから見られてるんじゃないか？

悠真？あいつは自分は関係無さそうに俺達とは距離を置いて歩いている。

結羽は純粹に俺の隣を歩いているっぽいから良いとして、白波さんは完全に状況を理解しつつ面白がっている様子だ。

「悠真…こつちこい！」

と、俺は後方で距離を置いている悠真を連れ戻そうとする。

すると「しょうがないなあ…」と、言ったご様子でこつちに来た。

うざい…なんなんだよ…

「優也も嫉妬せれて大変だねえ」

「完全に原因、あなたですよね？こんな状況で俺を一人にしないでください。視線と言う凶器で刺されてしまいます」

普通に視線って心への殺傷能力があると思うんだ。

そんな中一人にされたら更に俺に対しての妬み嫉みの視線が集中してしまうじゃ無いですか…

「んじゃこいで解散だな。俺こつちだから」

そして悠真は俺達とは別の道に入っていく。



「じゃーね。優也くん」

そして白波さんも別の道に入っていく。

あの二人、俺をからかって何が楽しいのか分からないな…

そして現在、俺と結羽の二人きりとなった。

最近はギリギリまで着いてくんだよな。何がしたいのかが分からん。

そして暫く歩くうちにいつも別れているところに着く。

「んじゃ。また明日なく！」

と言って俺は手を左右に振る。

そしたら結羽も「また明日！」と言って小走りで走って帰っていく。

「いつもの事だが、疲れた…」

そして一日が終わりを告げた。

## 第27話 優也の日常

side 優也

今日は祝日

当然俺はゆつくり…出来るわけも無いんだな

「なあ、優也。俺、お前のことがすk」

「お引き取り願います」

俺は悠真に少し食いぎみにそう言いはなった。

「つたく、ジョーダンだよ。ジョーダン。ちよつとしたジョークさ」

こいつ…いきなりなんなんだよ。

唐突にこいつは俺の家に押し掛けてきて何をしてもなく、ただ俺のベットに寝転がって本を読んでいる。

正直こいつが何を思って俺の家に来たのかが分からない。

それとこいつしか来なかったことに驚きだ。

結羽だけでも来ると思ってたんだが

「よし、俺が今日来た理由を発表しようと思います!」

「ずいぶん唐突だな!」

そして悠真は俺の突っ込みをスルーして話し出した。

多分適当に来たかっただけとかそんなんだろ。

「もうすぐで3年生の中でも親しい舞先輩が卒業じゃん?」

「親しいって所が気に食わないがそうだな」

じゃんって…

「で、卒業したら会える頻度が下がって寂しいじゃん?」

「あ、いや、別n」

「じゃん?」

「あ、はい」

こいつ威圧してきたぞ?

こいつ白波さんの事好きすぎだろ!

「で、何か最後に思い出に残るようなことをしたいじゃん?」

「……」

「で、卒業祝を計画しますじゃん!」

「なんだその語尾はーっ!!」

これはさすがに突っ込ませろ!

今までの自然な流れではまだ許そう。だが、

おかしいじゃねーか!なんだよ”しますじゃん”って!

「はあ、要するになにもしないまま白波さんとお別れってのは寂しいから卒業祝を開こうと言うことだな?」

「イエースー!」

こいつのテンションおかしくね?

何このハイテンション。

話し出すときは真面目だったのに何で急にハイテンションになっ  
てんだ?こいつ情緒不安定か?

でもさ、これだけが理由だと結羽が来ていない理由にはならないよ  
な。

「一応結羽ちゃんも誘ったんだけどね。用事があるとか言って断られ  
た」

と、説明する悠真

へー。珍しいこともあるもんだな。

「用事ってなんだろうな」

「そこまではおれも知らん…って、優也。お前、結羽ちゃんの事気にな  
るのか?」

なんかにやけている悠真

殴りたい。この笑顔

何を考えているかは知らんが、ロクでもない事なのだろうから無視  
をすることにした。

「ところで発案者様は大体の事は決めてきたのだろうか?」

「ああ、ちよつとな」

と、テーブルの上に大きな紙を広げる悠真

俺は一体なんだろうかと、思っただけを除き込んだ。

そこにはこう書いていた。

『ねえねえ、何か書いていると思っただけ?残念。構想など一切書いてい  
ません』

俺はこれを見た瞬間、無言になって立ち上がり、悠真の方向を向いた。

「こ、怖いです優也さん。無言で近づきながら手をポキポキ鳴らすのをやめてください」

そう言うが俺は歩みを止めない。

そして

「や、やめろー！うわああああっ！」

その時、悠真の悲鳴が響き渡ったと言う。

?????

「大体こんな感じで良いかな？」

と、悠真はペンを走らせるのをやめる。

俺達は先程の紙の裏面を利用し、卒業祝いの計画を練っていた。

「つて、いつも通り俺ん家なのな。それで俺と結羽が料理…あれ？悠真は何をするんだ？」

「白波さんの話し相手を…」

「ちよつとはこつちに貢献しろよ！」

そんな一人だけ楽はさせねーぞ！

そして俺は無理矢理にでも悠真に仕事を与えるため、高速でペンを走らせる。

そして書き終わってペンを奥と、悠真が紙を覗き込んだ。

「な！」

「お前の仕事は俺達の雑用だ。俺等から比べたら楽な方だろ？お前に無理に仕事を与えてもさb」

「そんなことをしてお前の良心が痛まないのか！」

「ええええっ！」

こいつ、食いぎみに言っつきやがった。

なんてやつだ。一人だけ楽しようだなんて。

大体、だいぶ考慮したつてのに、何文句あんだよ！

これくらいで良心は痛まねーよ。寧ろスーっとしてるくらいだ。

「文句言わずに働け」

俺がそう言うとう悠真は立ち上がって紙を持ってドアに向かう。

「あ、そう言えば俺、用事があるんだった。と言うことでさらばだ」  
そう言つて部屋から出ようとする悠真

しかし、俺は悠真の手首をガツと掴んで阻止した。

いやいやいや、今のはバカでも分かるくらい嘘だつてわかるぞ！だ  
いたい、棒読みな時点でなぜ俺を騙せると思つたし。

「優也。離してくれないか？」

「ことわるー！」

即答だった。

話したら超高速で逃げるに決まつてる。

だから俺はこいつの手首を話さない。

「お、お前、以外と握力強いな。インドアの癖に。痛いぞ？」

「まあ、筋トレだけはしてるからなつて、インドアは余計だ」

そう言つて俺は更につかむ手に力を込める。

「痛い痛い！ギブギブ！やりますから！丁重に雑用を受けることを承  
諾させて頂きますから！この手を離してください！」

そして懇願してくる悠真を尻目に部屋の中に引きずり込み、部屋の  
中であつたロープで手足を縛り上げる。

「な、何でお前の家にロープなんて」

「白波さんが「必要になつたら使つてね」つて言う感じで置いていつた  
んだが、こんな感じで使うことになろうとはな」

ロープを持ち歩いている白波さんに驚きでした。

「じゃあ、帰るからほどいてくれないか？」

「良いけど紙は置いていけよ。書き直されたら困るし」

「へーい」

そんな感じで渋々悠真は帰つていった。

「余計な労力を使った気がする」

## 第28話 ついにおかしくなる悠真

side 優也

「よ！優也」

「なんだ。悠真か…」

「なにその残念そうな反応は！」

「そうなどではなく実際に残念なんだよ！」

「って言うかいきなりなんだよ。廊下でばったり会うなり話しかけやがって、」

「そろそろ宿泊研修だろ？優也どこ行くのかな？って」

「あ、そう言えばそろそろそんな時期だっけ？」

「ってか何でこの時期に？」

「こつちではまだその話は上がってないな」

「そうか。あ、ちなみに作者が宿泊研修の事を忘れてて無理矢理冬季にしたわけじゃ無いからな？」

「メタイ！」

と、俺は悠真に突っ込む。

しかし宿泊研修か…どこ行くんだっけ？

「確か季谷魔市だったはず」

季谷魔？ああ、あそこか

季谷魔市

人口10000人弱と言う小さな町で

田舎なため、空気も澄んでいて、食べ物美味しい良い町だ。

「楽しみだよな」

「まあ、そうだな」

こつちではその話題は一切まだ上がっていない。

正直、俺も楽しみなどころはある。

「それはそうと、俺らってさ、皆別のクラスだよな？」

「そうだな。綺麗にバラバラだな。」

「同じ班にはなれないし、同じ部屋にもなれないわけだ」

「まあ、そうだな」

「何て言うことだ！なぜ俺達は皆バラバラなんだ!？」

俺はなぜバラバラの俺達が仲良く？なれたのかが不思議で仕方ない。だって、クラス違ったら接点無いだろ？

結羽と知り合ったのだって偶然だし、星野さんに知り合ったのだって偶然

悠真は…会いたくなかった

「ちよつと、会いたくなかったについて詳しく聞こうじゃないか！」

「さも当然のように俺の心を読むな！」

と、普通に大声で話しているので俺達はいつの間にか注目を集めていた。

それを感じ、俺は咄嗟に声を小さくする。

「んで、お前のクラスはどうだったんだ？その口ぶりからすると決まったんだろ？」

と、なにやら悠真は視線のことに気がついてなくて、いきなり俺が声を潜めた事を不思議がり一瞬考えた。

すると、悠真も視線に気がついたようだ。

すると悠真は大きく息を吸い込む。

「俺はだな！れk」

「声がデケーよ！」

と、ついつい勢いで大声でツツコミを入れてしまった。

こいつ、人目を集めてるって知りながらわざとやったな！

俺は人目を集めるのが好きじゃないってのに…ただでさえ、いつも美少女を連れて歩いて人目を集めに集めまくってもうお腹一杯だと言うのに…

と、思いながら周囲に「すみません」と頭を下げ謝罪する。

「すまんすまん。俺は歴史館に行くんだ。季谷魔の歴史館ってここらで有名だから一度行ってみたくてな」

ほう…それは面白そうだな。

いや、歴史館なんて楽しいもんでも無いだろうけど悠真がお勧めするなら信頼できる。

こいつはふざけたり、ふざけたり、ふざけたりするけどこいつのお

勧めにハズレがあつたためしがない。つまり信用できるってことだ。  
俺の班が誰とになるかはわからないけど出来るなら俺も行ってみようかな？ 歴史館

キーンコーンカーンコーン

と、なんともなタイミングで予鈴が鳴る。

「んじや、またな」

と、手をヒラヒラと降って走っていく悠真

さてと、次は科学だっけか？ 物理実験室に移動だったかな？ んじや、行きますか。

?????  
放課後

現在、俺は一人で下校している。

なぜ一人で下校してるかって？

確かに、いつもは結羽か悠真は必ずと言って良いほど付いてる。

なのになぜその二人が居ないかと言うと、俺にもわからないのです。

いやさ、ワケわからんのだよ。

俺が下校しようと玄関に着いたとき、LINEにこう送られてきた。

「私、今日は一緒に帰れないかも」

まあ、わかる。結羽のはまともな文章だ。しかし悠真はと言うと

「俺は今、絶対的境地に立っている。お前と帰ることなど出来ない」

・・・中二病かな？

ちよつと頭のネジが数本飛んでしまったようだ。

さすがの俺でも解読出来なかつたよ。うん

一緒に帰れないと言う意思表示は分かる。だけど、なんでその結果がこの文章に成るんだ！ おかしいだろ！

となると、へんな文章になつてるが、用事があると考えてるのが一番自然だ。

絶対的境地、例えその絶対的境地がヤバイことだとして、その状況



下で携帯なんていじれるのか？いや、握ることも不可能に近いだろう。

よってこの言葉はふざけて送ったと推測する。

と、その時ふと空を見上げる。

空は雲に覆われて雲行きが怪しい、いつ降りだしてもおかしくない空だ。

そう思っていると、案の定雨が降ってきた。

折り畳み傘持っていて良かったぜ：

そして少し歩くと、なんと星野さんが居た。

屋根の下で雨宿りしてる感じだ。

恐らく傘が無いのだろう。だから少し雨が収まるまで待つてる感じか。

生憎、これは良くなりそうもない雨だな。

「そう思ってた星野さんに近づくとすると

「何かしら？天然タラシさん？」

「タラシじゃないわ！」

失礼な！俺は別にそんなことしてないぞ！天然ってのが気になるが、それは絶対にしていないと言い切れる。だって事実、してないからな。

「とりあえず、傘無いなら送っていく」

すると、星野さんの顔が赤くなったような気がしたが、暇潰しに読んでいた本で顔を隠したため、顔はあまり見えなかった。

「そう言うところが天然タラシなのよね」

「なんか言ったか？」

「なにも言っていないわ。ラノベ主人公さん」

「~~色々~~にその言葉聞いたな」

?????  
after

「私は相合い傘をしてもらって、家にまで送ってもらったのよ。あなたはそんなことしてもらったことないでしょ？」

「うぐっそ、それは…」

「つまり私の勝ちってことよ」

「こいつらは何を争っているんだ？」

## 第29話 班決めは戦争とイコール

side 優也

授業中

「はーい！皆さん！」

と、春海先生

今日は時間割にLHRが入っていた。

俺にとつては何をするのかももう分かりきっていた。

そう、何をするかと言うと

「皆さんお待ちかね。宿泊研修の班決めです！」

すると、ワーギヤーと盛り上がる教室。

そう、体育祭、文化祭に続いてのビックイイベント。それが宿泊研修  
Or 修学旅行だ。

そして、そのビックイイベントのすべてを左右するとも言えるイベント。それが班決めだ。

班決めはとても重要なイベントだ。

俺にとつちやどうでもいいが、班は好きなやつと組める。そう、それはまさしく戦争と言っても過言では無い。

と言ってもほとんど男側が盛り上がってるだけだが…

それを見ながら女性陣はちよつと引ききみだ。

そう、ほとんどこの祭り戦争は男側の女性の取り合いだ。

そして、その一番人気は端で教室を見回しながら事の顛末てんまつを見守る

少女咲峰さきみね 菜乃華なのかだ。

あ、目があつた。

実は俺は女性陣の取り合いには参加せず、自席に座り本を読んでい  
た。

そのため本が一段落し、顔を上げた拍子に目が合ってしまったの  
だ。

すると、咲峰さんは一瞬考えるような素振りをしてからテーブルに  
手を着く。

すると、咲峰さん取り合いじゃんけんは終了し、そこら辺一帯は阿



キーンコーンカーンコーン

と、タイミング良くチャイムがなった。

「逃げるぞー！」

と、俺は咲峰さんの手を引いて走り出した。

なるべく教室に居たくない空気だったのだ。

俺は咲峰さんを連れて屋上に来ていた。

「さて、私をこんなところに連れ出してなにするつもり？もしかして、二人だからって」

「しねえよ」

と、低いトーンでツツコミを入れた。

「ってか、なんで教室であんなことした」

「面白そうだったから？」

こいつ…おかげで俺が教室に居づらくなつたじゃないか！

「じゃあ、そろそろ本題に入ってちょうだい」

と、やつと本題に入れそうなので本題に入ることにした。

「じゃあ聞けど、何で俺と班を組もうと思った？」

「それはあなたが不思議だったから。あなたがあの男子の輪の中に入っていかなかったから、あなたとなら安心じゃないかな？って思ったから」

から多いな。

「ってか、それだけで安心って思うのはどうかと思うぞ。俺は咲峰さんを騙して何かしようとしてるのかも知れないぞ」

俺がそう言うのと咲峰さんは微笑してからこう言った。

「そんなこといつてる人が本当にそんなことするのかしらねえ？」

と、言ってきたから俺は「俺の負けだ」と言わんばかりに笑ってからこう言った。

「違いねえ」

そして俺のパーティーに咲峰 菜乃華が加わった。

「あがし、組むのは良いが人数あと2人足りないぞ？」

「まあ、そこら辺は適当に決めちゃって良いわよ」  
適当につて：なんだよ

人任せにしゃがって：それだけじゃなく、俺の平穩まで脅かしや  
がって

クラス一番人気の方が誘ってきたせいで俺の居場所が危ういんで  
すが。

「適当に：ねえ」

俺が仲良くしてる男女ね：

まだ仲良くしてる方なのは堂明寺と白井さん位だな。

堂明寺：本名堂明寺 どうみょうじ あつし。

寺の一人息子で時折俺に絡んでくる変わり者

白井さん：本名白井 しらい つみき。

結構消極的な女の子で、元氣つぽさがある結羽とは対極的な性格の  
娘だ。

取り合えずこの二人を誘ってみるか

「え？???」  
「え？俺を？良いが、お前彼女はどうした？浮気か？」

「してねーし居ねーよ！」

こいつ、いったいどんな勘違いを…

「あはは。まあ、冗談だけだな。さすがにあんなことになったのはお  
前も咲峰さんも同情するわ」

わかってくれりゃ良いんだ。

—※—※—※—※—※—※—

「わ、わわわ、私？え、えと：その…」

俺と白井さんが知り合ったきっかけは堂明寺何だよな。堂明寺に  
紹介されて一緒に話す間柄になった。

「ああ、頼む。白井さんだけが最後の希望なんだ！」

ここまで頼み込んだら断れる人なんてごく少数のはず。まともな  
精神では断れないはず（ゲス）

「わ、分かりました、えと、えと、よろしくお願い、します」  
と言う感じで二人確保したのだった。

## 第30話 黒歴史

side 優也

当日

「皆さん！盛り上がっていますか〜？」

と、春海先生

まあ、大部分のひとは盛り上がっている。

だが、俺と咲峰さんはだいぶ冷めていた。

もともとボツチの俺とクールな咲峰さんではこのテンションに着いていけません。

盛り上がってる…盛り上がっているが、俺に槍が刺さっているような気がする。

まあ、良い。俺には関係無い。恨まれたって関係ねえ。

「では、そろそろバスに乗ります！」

ドスブスグサアッ！

「ぐっ！」

きつちり急所に当ててくるんですが…それに俺は注目を浴びるのが一番嫌いなんだよ！

と、そんな青い顔をしている俺を見つけて咲峰さん、堂明寺は必死に笑いをこらえていた。

いったいどうしてこうなった。

今起こった事を嘘偽り無く話すぜ。俺は普通にバスの席に座ろうと思っただけだ。

「あの…俺のとなりって堂明寺だったはず何ですが」

「そうね」

「それがどうして咲峰さんが隣に座ったのでしょうか？」

「変えたのよ」

え？変えた？

変わったじゃなく、変えた？そーいや不自然に実行委員を申し出たことがあったような…

そう思い、俺が疑いの眼差しを咲峰さんに送ると、不自然に目を逸

らした。

「職権乱用かあつ！」

と頬をつねる俺

「痛い痛い！」

「どうしてこんなことをしたんだ！」

「私が信用しているのはあなただけよ。それにあなた、そんなことしてて良いの？」

どういうことだ？

と、思うと、咲峰さんはその答えを教えるように指を指す。

するとそこには憎悪の塊が居た。

「咲峰さんのほっぺたを触るなんて羨ましい！」

「死ね！優也！」

「この浮気やろう！」

俺はどういうイメージなんだよ…

と言うか恨みがすごい。

と言うか浮気つて…なんか決まり文句の様で突っ込む気も失せた。

そして俺が咲峰さんから手を離すも、憎悪の念は途絶えることは無かった。

????????  
それから暫くして

「それではレクを開始します」

と、実行委員の一人が立ち上がる。

「内容は単純明解。隣の人とじゃんけんをして、負けた方が勝った人に黒歴史暴露」

うわあ…最上級に嫌な命令だ。

俺は黒歴史こそ少ないが、何個かしかない黒歴史がめちやくちや恥ずかしいのだ。

負けるわけにやいかねえ

「それでは行きます」

しかし、俺は忘れていた。俺の特性を

「最初はグーじゃんけんポン」



俺はポンの掛け声と共にグーを出した。

そして咲峰さんを見ると咲峰さんはパーを出してた。

「ふっ」

すると、咲峰さんの顔が悪い顔になった。

「悪いね〜」

「その言葉は自分の顔を見てから言った方が良いと思うぞ」

畜生！忘れていた。俺の運のステータスは最低値だったんだ。

「さてさて？君の k u r o r e k i s i を教えてくれるかな？」

バカにしやがって

そして仕方ないから話し出す。

「あれは中学の何年生だったかな？まあ、そこは良いんだけどよ。不良に襲われている女の子を助けたことがあんだよ。ヒーローぶって。それが今になってみれば恥ずかしいのなんのって」

あの頃はヒーローになりたいと本気で思っていた。そんな自分が恥ずかしい

「武器は？どうせ年上だったんでしょ？それとも君は武器を使わず追い払うことが出来る超人だったの？」

こいつ、その時見てたんじゃないか？って位的確なこと言ってきたやがる。

「サッカーボールだ」

「え？」

「脚力だけは自信が有ったからな。丁度サッカー帰りだったから蹴ってぶつけたら気絶した」

めっちゃはずい…

「ふーん。君、以外とイケメンなことするじゃん」

「さあさあ、この話しはおしまい！」

と、慌てて話しを変える。

あの子、あの後大丈夫だったかな…あの後一度も会ったことがないからその後を知らない。

無事、その後を平和に暮らしているなら俺の黒歴史も無駄じゃなかったってことだ。

「さて、そろそろ見えてきました。観光の名所。季谷魔市です！」

今は冬で雪に覆われているにも関わらず、活気のある町

同じ田舎の居真舞とは大違いだ。

「まず、今回止まる宿にチェックインしてから自主研修に向かいます」  
そうしてバスから降りる。

寒いが肌に刺すような寒さではなく、優しく気持ちいい寒さ

そのお陰でそこまで嫌な寒さだとは思わない。

「では、屋度にチェックインしに行きます」

どうしてチェックインを済ませ、自主研修に向かった。

?????

「あず、どこ行くんだ？」

と、俺のしおりを覗き込みながら聞く堂明寺

「そうね。そろそろお昼だし何か食べましょうか」

「そうだな。じゃあ行くか」

そして俺達は食事しに向かう。

俺達の選んだ食事所は八反亭、由来は知らん。

ここでは米が上手いと評判なため、ここの店のおすすめ料理は丼も  
のだ。

ここは水がすごく評判なので、その水で作った野菜を食いながら  
育った牛や豚などの家畜はとて油が乗っててジューシーに仕上が  
るらしい。

だから肉も評判だ。

その時、横目で見てしまった。

路地裏でかつあげされている男の子を

「助けなくて良いの？」

「ふつ、サッカーボールも無いし、俺に助ける道理が無い。つまり、お  
前の思惑は失敗に終わったんだ！」

すると、バックからサッカーボールを取り出す咲峰さん。

さっきまであまり入ってないバックのように萎んでましたよね？

何でそんな中から何でボールが出てくるんですかね？

「さあ」

と言ってサッカーボールを渡してくる咲峰さんはあ…

「もう、どうにでもなれ！」

パシユーションと獲物めがけて飛んでいくサッカーボールすると、ガツンと不良に当たり気絶した。

暫くサッカーをしてなかったが、脚力は健在だったようだ。

「大丈夫か？今度は捕まんよ」

そう言って手をヒラヒラと降って去ろうとする。しかし、

「あの、あなたの名前は」

「絆成 優也だ」

「ありがとうございます！俺、河野こうの 健人たけとと言います！本当にありがとうございました」

??して手をヒラヒラと降って去る。

????

「やっぱり優也だな。仕向けられたとしてもちやんと助けるところが変わってない。なあ、結羽」

「何でそこで私に振るの!?!」

「あの気がつかない鈍感男はどう思う?」

「優しすぎます。だから勘違いする。だからああいう態度はダメだと思おう。けどああいうところがすきになったのかも」

変わってないね。優也

### 第31話 八反亭

side 優也

またやってしまった。

そそのかされたからってまた助けてしまった。

しかも咲峰さんの前で：死にたい。

これ、ずっとバカにされるやつじゃねーか。

「ふーん」

咲峰さんは俺が恥ずかしがってるのを知つての事か、にやにやしてきている。

やめて！絆成さんのライフはもう零よ！

くつそ：どうしてこうなった。

「お二人さーん！早く来ないと置いてくぞー！」

と、俺たちがそんなやり取りをしてる間にだいぶ進んで遠くから童明寺が叫んできた。

「行きます、よ」

と、静かに言葉を発する白井さん

して俺と咲峰さんは急いで二人のもとに向かった。

八反亭

俺達は八反亭に来ていた。

外装は木で造られて、ビックリド○キーを連想するような造り。

内装は畳などがあって、和風を思わせる。

中に入ったとたん良い匂いが俺の鼻腔をくすぐった。

炭が焼ける香ばしい匂い。

それだけで俺の食欲はどんどん増していった。

「旨そうだな」

と、童明寺が呟いた。

俺もたった今思ってたところだ。

と、見回してみると

なんかこつちに手を振っている見慣れた顔が見えた。

俺は関わりたくないので気がつかないふりをした。

「さて、どこに座ろうかな」

と、俺が知らないふりをしていると、見慣れたそいつはこっちに来て頭をハリセンで叩いた。

「おい！無視するな！」

めんどくせえ…

「この体は現在使われておりません」

「怖いわ！お前は電話か！と言うかお前がボケてどうする！ボケは俺の十八番だろ！」

知らねーよ。俺がツツコミみたいな言い方すんなよ。

俺だって好きでお前に突っ込んでんじやねーんだぞ。

「悠真もこの店だったのか…」

俺はあからさまにがっかりする。

「よし、うちの班と食わないか？」

「断る！」

即答だった。

絶対に俺の唯一心が休まる昼食タイムが失われてしまうじゃないか！

それだけはダメだ！

「そうか…んじやーな」

やけに素直だ。

何か裏があるんじゃないかと勘ぐってしまう。

「なんか気持ち悪いなお前」

と、俺はちよつと悠真のことを心配した面持ちでそう言った。

「なんか変なものでも食べたか？」

「失礼な！」

と、切れの良いツツコミを見せてくれる悠真

もうさ、悠真ツツコミで良いよ。もう疲れたよパト○ツシュ

「ま、まあ、取り合えず腹が減ったし適当な席についてなんか頼もうぜ」

と、当初の目的を再確認させてくれる童明寺

そうだよ！俺達は飯を食いに来たんだよ！こんなところでコントをやってる場合じゃねーよ。

そしてじゃーな。と、言つて手を降つてから悠真達と違う席に座る。

「腹が空きすぎてメニュー表見ただけで全部美味しそうに見える」

と童明寺がそんな感想を述べた。

「はい。どれも美味しそう、です」

とゆつくりと言葉を並べる白井さん

何となくこの旅行中の癒しになりそうな雰囲気を漂わせてるよ。

だってあれだよ？俺の班はクラス一の人気者のくせして俺に近寄つてきて俺をおもちゃとして扱うやつと、男だぜ？

「何となく理不尽な事を言われた気がする」

「私は何となく不快なことを言われた気がする」

ねえ…：そこのお二人さん。平然と人の心を読まないで頂きたい。

つてかなんで俺つて心を読まれることが多いんだ？

そしてメニューを決めた。

俺と童明寺はガッツリ丼もの。咲峰さんは定食。白井さんはあっさりサラダにした。

意外だった。

咲峰さんはあの体型からは想像がつかないような量を食べていた。

意外と食うんだな。

それに対して白井さんは

「大丈夫なのか？白井さん。少なくないか？サラダだけつて」

「いいんです。私はサラダが好き、なので。これだけで充分、です」

まあ、白井さんが良いんなら俺は別に良いんだけどな。

と言うか旨いなこれ。

肉がジュシーで噛んだ瞬間に肉汁が溢れ出してくる。

そして、上にかかっているタレも絶妙だ。

ここの店で良かったと思える至福の時間だ。

「うめえな。これ」

「あら本当」

「美味しい、です」

3人とも口調がまるつきし違うから実際に見てなくても誰が喋ったか分かるな。

三人でキャツキャツしているなか、俺は静かに黙々と食べる。

「そう言えば優也」

突然声をかけられた俺は『ん?』と童明寺の方を向く。

「お前さ、よく女子と一緒に居ること多いけどさ…気になってる子って居るのか?」

え?

うーん…それっていつものメンバーのなかでってこと?

結羽は…最近急に怖くなったんだよな…まるで何かに影響されたみたいに

と言うわけで結羽は怖いから無しで

星野さんは気難しい所もあるけどたまにデレるんだよな。あれが俗に言うツンデレって感じか?

一番までも俺としては別に付き合っても言いような人なんだがなんだろう。いざ付き合うと考えると胸が苦しくなるような。これじゃないような感覚が襲う。

取り合えず保留かな?

ってことは

「居ないな」

白波さん?知らない子ですね。論外です。

「ってかさ、女子も居る前で聞き出すのはどうかと思うんだが」

ってかなんでこんな時に聞いてきたんだ?

「ふーん。まあ、お前がそう思うなら良いんじゃないか?好きにすれば…だけど、お前がいつまでそういう態度を取ってられるかな彼女たち」

そう言っつてニヤニヤと笑う童明寺

なんだよ。言いたいことがあるならばつきり言えよ。

「でもちよっとお気の毒、ですよ。この鈍感」

「な!?!」

白井さんが俺へちよつと怒つただと？

あののほほんとした白井さんが!?

「お前もそう言うこと言えたんだな。良いぞもつと言ってやれ」と、もつと言えと促す童明寺

おいまで、俺への文句大会じゃねーぞ!?

「え、えーと…バカ、アホ…えとえと…鈍感男」  
なんかかわいい

童明寺に頭を撫でられてて幸せそうにしている。

もしかして白井さんって

「さて、三人とも、じゃれあつてないで行くわよ」  
そして俺達は八反亭を後にした。



### 第32話 童明寺と白井さん

side 優也

「次は歴史館？」

次は噂の歴史館である。

悠真に教えてもらっていたので提案したらそのまま通ったと言うことだ。

ちなみに悠真との時間はずらしておいた。

どうして悠真の時間がわかったのかって？

伝つてがあるんですよ。伝つてが

俺に友達が居るのかって？何いつてるんですか…友達は結羽達を含めて五人（結羽、悠真、星野さん、童明寺、白井さん）だけに決まってるじゃないですか？

え？白波さんと咲峰さん？

咲峰さんは輝きすぎて俺では釣り合わないと言いますか…白波さん？知らない人ですね。

悠真のグループメンバーだと名乗る人物に接触して教えてもらったんですよ。

友達じゃない人に教えてくれるなんてやさしーっ！

はあ…辛い

って言うか綺麗に俺達四人はクラスが別れてるんだな。

クラスが違うもの同士仲良くなるのってすごくね？部活とかもやってないんだぜ？

そして歩いていると歴史館に着いた。

予想通りのよくある歴史館って感じがするな。

と言うかホテルにめっちゃ近いな。徒歩5分だ。

ホテルに集合だが、ちよつとは寄り道しても問題無さそうだな。何か近くで土産でも買っていくか。

そうおもいながら俺達は歴史館に入っていた。

結果から言うと悠真との接触は避けれたが、何とそこには結羽が居た。

「ゆゆゆ、優也！ひ、久しぶり」

「久しぶりって、今朝学校で会ったばかりだろ」

「これが久しぶりと言うならばただけ久しぶりの範囲狭いんだよ。」

「そ、そんなことはどうでも良いのっ！」

「何でこいつこんなにも動揺してるんだ？」

「ただど前のめりになって腕を真っ直ぐしたに下ろしてこっちに抗議してきている姿は可愛いかもしれん。」

「夫婦漫才？」

「と、ニヤニヤしながら咲峰さんは言ってきた。」

「え、え？」

「と、おどおどし始める結羽。」

「それじゃ肯定してるみたいじゃないか。」

「ふ、ふうふう」

「と、目を回す結羽」

「反応は可愛いけどここはちゃんと否定してくれ  
それじゃないと俺が困る。」

「でも結羽に期待は出来ないか……  
なら」

「違うわー！」

「と、俺が否定した。」

「すると、結羽は『え？』と言った。」

「は？」

「あ、い、いや。違うの！うん！私達は何でも無いから！」

「と、意味深な反応をしながら言った。」

「何その反応。」

「結羽行くよ」

「あ、うん。わかった」

「そして結羽は結羽の友人と思わしき人物に呼ばれてたたと少し  
走ってからこっちに振り替えて立ち止まった。」

「じゃーね」

「そう言って微笑んでから友達の方に向かった。」

すると、童明寺が口を開いた。

「何であれで付き合わないかね…」

と、やれやれと言った様子で言った。

「いや、結羽には好きな人が居るらしいし」

すると、皆がやれやれと俺から目をそらした。

なに!?!これって俺が悪いのか？

「まあ、そんな鈍感男は置いておいて行くか」

と、童明寺は進行方向に体を向ける。

「つて、お前も鈍感だろ」

俺も童明寺に言い返す。

実は白井さんは童明寺の事が好きらしいのだが、童明寺は全く気がついた様子を見せない。

ちよつと白井さんが可愛そうだと思ったり

「違うよ」

と童明寺は静かに言った。

「俺はお前とは違って鈍感じゃない。そう！お前とは違って…な」

うざい！言い方がうざい！

つてか鈍感じゃないってどういう意味だ？

「俺は今のこの関係が好きなんだな」

ああ、なるほど…好意には気がついてはいるがこの関係を保つていたいってことね…

つて白井さん！あなた遠回しにフラれてますよ！

俺は見ていられなくなつて白井さんの事を一瞬見てから目をそらした。

「何で今、一瞬見たん、ですか!」

これまでに聞いたことの無いような白井さんの大声だった。

「さて、この話はこれくらいにして中を見ていくぞ!」

そして童明寺の後を着いていく。

やはり中は小難しい内容ばかりで人によっては退屈に感じる内容だっただろう。

でも大変勉強になった。

途中白井さんがうとうととして倒れかけたところを童明寺が受け止めて、それに気がついた白井さんが真っ赤になりながら謝ってたのはちよつと面白かったかな。

「ふい〜。見応えあったな」

童明寺は歴史系の物が好きらしい。

それもあつて一番得意な強化は世界史や日本史らしい。

満足げにうなづく童明寺

さて、色々中を見て回ったけど時間はたっぷり余ってるな。

どうしようか…

つてか今更だけど寒いな。

ホットコーヒーでも飲みたい。

と、手頃なところにホットコーヒー有りの自販機見つけた。

だから、俺が買いに行こうとすると

「あ、優也。俺らも宜しく」

と、頼まれてしまった。

しょうがねーな。

と、ホットコーヒーを四人分買った。

そして皆の所に戻って皆にホットコーヒーを渡す。

「サンキュー…って何だその手は」

渡したあと童明寺に手を差し出す。

その手に童明寺は手を重ねる。

「ちげーよ！何重ねてんだよ！」

「え!?そういう流れじゃなかった?」

何いってんだ…

「代金200円になります」

「おい！あそこにちゃんと140円って書いてあるだろうが！60円どうしたんだ！ぼったくりか!?!」

って何でこいつちよつと離れた位置から代金見えてんだよ。目良すぎかよ。

「バイト代」

と、俺は淡々と言った。

「何のバイトだよ」

「パシリ代」

「パシリ代って何だよ！」

うん。一回ボケってやってみたかったんだよね。俺がボケてもちゃんと童明寺がつつこんでくれるから安心？だな。

と、渋々俺に200円渡す童明寺

「はい。お釣60円になります」

「返すんかい！ってかただの両替だよな？」

そこに気がつくとは貴様…天才か！

いやー。ちよつと100円玉の枚数が心持たなくなってきたな。

そして俺は買ってきた缶タイプのホットコーヒーを開けて飲む。

うん。やっぱり冬はホットコーヒーだよな。暖まる。

「んじや。何かお土産でも選ぶか」

と、俺達はコンビニに入ってお土産を選ぶ。

俺はクッキーにした。

そして俺達はコンビニを後にして少し早いホテルの集合場所に向かった。

### 第33話 自由時間

side 優也

「よし、良いくらいの時間だな」

と、俺は腕時計を見ながら誰に話しかけるのではなくそう言った。  
ホテル前に集合。

現時刻は集合時間の10分前

まあ、良いくらいじゃないですかね？

「そう言えば気になってたんだけどよ」

急に話しかけてくる童明寺

「なんだ？」

「そう言えばお前と咲峰さんってグル組むくらい仲良かったっけ？」

本当今更な疑問だな。

まあ、中が良かったわけでもなし。それどころか今まで話したこと  
もなかった。あの時突然こっちに来たんだ。

「まあ、利害の一致だ。理由はそれ以上でもそれ以下でも無い」

と、冷静に言った。

そして童明寺は「ふーん」と言ってからスマホを取り出してゲーム  
を始めた。

何のゲームしてんだ？と思って少し画面を覗き込む。

「これなんてゲームだ？」

「え!? 優もお前、このゲームの事知らないのか!? 最近流行してるのに」

「つてもな…俺ゲームやんねえし」

と、頭をかく。

「お前！ スマホは何をするためにあると思ってるんだよ！」

「少なくともゲームをするためにあるんじゃないやねーよ」

と、俺はあきれ気味に言った。

「つたく…ゲームはサブで本命は電話等だろ。」

まあ、ゲームをすることの方が多すぎてゲーム機のイメージはある  
かもしれないけど携帯は携帯電話だからな。

そして白井さんがこっちに来て俺と反対側に立って童明寺のスマ

ホ画面を覗き込む。

さあーつて。お邪魔虫は退散しましょうかね？

と、俺は離れていく。

すると、誰かにぶつかった。

「あ、すまん」

「あ！お前はクラスのマドンナをさらった絆成 優也！」

こちらら好きで組んでんじゃねーよ。

「ああ、本田 龍輝じゃないか。1話で登場したつきり作者に忘れられていた」

「まあ、メタいのは置いておこう…だが、名前も出てるちゃんとしたキャラなんだぞ！俺は！」

「いや、お前はMOBだからな」

「え、」

そして龍輝は砂となって飛んでいった。

あともう少して集合時刻だ。

その時

「セーフ！」

と、悠真が来た。

何着いたとたん決めポーズしてんだよ。

他の3人がひいてんじゃねーか。

特に女子。他人のフリをしている。

そしてそれに続いて結羽の班や星野さんの班がやって来た。

「じゃ、皆集まったみたいだね」

春海先生はそう言って他の担任の方へ向かう。

そして話し合っ

「んじゃ、集まったみたいなのでこれからホテルで暫しの間自由時間を取りたいと思います。ですが一旦自室に荷物を置いてからにしてください。それとくれぐれも異性の階に行かないようにしてください。見つければ指導部の先生がありがたいーいお話を聞かせてくれますよ」

そう言われたので指導部の先生を見る。

するとニコニコしているものの、その笑顔の奥に恐ろしいものを感じた。

きつと見つければお話説教されるだろう。

「あ?????」  
「よし、絶対に女子の階には行かないようにしよう。」

「はい、リーチだ」

「うわあああつ！優也！絶対に次は童明寺に揃うカード引かせんなよ」

「そんな無茶な」

「まあ、無理だよな。男子に目もくれず女友達ばかり作ってるタラシには」

「いや、今それ関係ないだろ」

「あ、タラシは否定しないんだな」

「あ、それと俺はタラシじゃない」

なんか言われすぎて平然とスルーしてしまった。

今現在、俺と童明寺が悠真の部屋に来てババ抜きをしていた。それで俺は悠真と童明寺にいじられ続けていると言うわけだ。

悲しいな…癒しが欲しい癒しが

「つーかき。お前。ちよつと突き放しすぎなんじゃねーの？」

と、突然言う悠真

何の事だよ。

「結羽達が可哀想だ」

うーんどういう意味かは知らんが

「そんな突き放してるつもりはねーんだけどな」

そう言う。

「まあ、良いじゃねーか」

そう言いながら俺から引いた一枚と自分の持ってた一枚をあわせ  
てカードの山の上に投げ捨てた。

「あ、上がりねー」

と、童明寺は得意気にそう言った。

「優也！」



「いや！無茶ぶりにもほどがあんだろ！」

「おじや、そろそろ飯だし行くか」

?????

晩飯は少しの付け合わせと刺身。そしてしゃぶしゃぶだ。

めっちゃうまいな。

「おい、お前の肉寄越せ！」

と、龍輝が俺の皿から一枚肉を取っていく。

「んじや、俺もお前からもらうな」

そして俺も龍輝の皿から一枚肉を取る。

「何をする！」

「いや、お前から始めたんだろ」

???  
して俺達は肉がなくなるまで続けた。

食べた後、俺達は自室へ戻ってきた。

「そろそろ入浴タイムだな。俺は入るがお前は どうする？」

「お前：そういう趣味が？」

「どうしてそう言う思考に至るんだ！」

俺はただ単に友達を温泉に誘っただけだ。何もおかしいところはない。

それなのにこいつと来たら…

「俺は行くからな」

と、無視して浴場に向かう。

すると、後からドタドタとあわてて着いてきた音が聞こえてため息を着いたのはまた別の話し。

### 第34話 失う悲しみ

side 優也

あー。気持ち良かった。

風呂に入って疲れも汗と一緒に流れたような気がする。

それにしても温泉なんて久々過ぎてその広さに驚いてしまった。

童明寺と悠真はさっきまでサウナ耐久勝負をしてグロッキー状  
況だ。

まだ自由時間はあるな。

何するかね。

「な、あ。ゆう、や」

と、かなりのピンチの悠真が話しかけてきた。

やれやれ

と、思っただけ悠真を持ち上げて肩を貸す。

「女子部屋行こうぜ」

と、どや顔をしながら言ってきた。

俺はあきれて言葉も出なかったためそれを表現するため俺は肩に  
関節技をかけた。

「ぐわあああつー！いてててー！や、やめてー！」

グキッ

「ぐっふっ」

あ、やり過ぎちゃった。

まあ良い。戻すか

グキッ

「があつー！」

床の上を転がりながら悶え苦しむ悠真

そんな元気なら大丈夫だな。

「で、何でそんなことを言い出したんだ？」

「良く俺のこの状態を見て話を続けようと思ったな」

と、腕をグルグルと回しながら言ってくる。

よし、サウナでのダメージが消えたようで良かった。

最初からこれを狙っていたのだよ。

「女子の部屋って男のロマ：優也さん。その…いつでも外せるようにスタンバイするのやめてください。まあ、お前からは考え付かないような丁寧な仕事ではめてくださったから良いですけど」

まあ、将来の志望が医師なんだからそれくらいの知識は持つとかな  
いとな。

整形外科か!?

「取り合えず言いたいことは分かった。だが、行かないぞ。お話を聞かされた  
て聞かされたくないからな」

そして腕を離す。

「お願いだ！万が一見つかったときに俺一人だけでお話を聞かされた  
くないからな」

道連れじゃねーか。

そんなことのために行きたくねーよ。

そんなわけで俺は無視をして椅子に座ろうとする。

しかし、悠真が俺の片腕をガシツと掴んできた。

「離せ。俺は行かないと言ったはず」

「そうかそうか着いてきてくれるか」

ダメだ。こいつに日本語通じてない。

そして俺の襟を掴んで引っ張っていく。

めろ。離せ。

そして俺はなし崩し的に（童明寺も巻き込んで）連れてこられてしま  
った。

今現在女子フロアの入り口。

やはりと言うかなんと言うか先生が徘徊しているな。

そうだ。

この二人がタイミングを伺うのに夢中になってるうちに逃げてしま  
えば…

そしてゆつくりと後ずさる。

その瞬間

後ろからガシツと捕まれた。

恐る恐る後ろを見てみるとそこにはどす黒い笑みを浮かべて俺を  
押さえてる龍輝が居た。

こいつっ！最近やっとな格的に出番を貰えるようになったからっ  
て調子にのってんじゃねーぞ！

そして逃げられなくなりました。

いや、こいつはちよつと痛め付けても良いだろう。

そして俺は龍輝の腕を掴んで背負い投げした。

そしたら龍輝は女子フロアまで飛んで行った。

そして先生がやって来て龍輝が女子フロアに居るのを見られてし  
まい連行されていった。

それを見た二人は青ざめた。

「優也：お前のお陰で目が覚めたよ」

と、俺に握手を求めてくる悠真

それを俺は華麗にスルーする。

「はいはい。んじゃ部屋に戻るぞ」

龍輝：お前の犠牲は無駄にしない。

そして俺達は回れ右をして部屋に戻る。

?????  
部屋割りは任意で二人部屋だ。

その為、俺は童明寺と一緒にになったから四六時中こいつと一緒に居  
ることになる。

そして「男子二人きり。何も無いはずはなく」

「勝手に俺の思考を捏造するな」

勝手に思考に入ってこられたが、気にせず説明を続ける。

部屋は和室だ。

畳の部屋ってなんと言うか日本人の心にマッチしているのか落ち  
着く。

そして部屋で俺は本を読み始める。

一方童明寺は窓から外を眺めている。

大人しくしてればあいつもイケメンでもっとモテるんだけどな。

まあ、実際にこいつはモテている。白井さんが良い例だ。だが、告白される度にこいつは断っているらしい。

童明寺曰く「俺は孤高の一匹狼。彼女なんて要らないのさ」らしい。だけど俺は何かを隠している気がする。

だってその言葉を言うときは決まって一瞬悲しそうな表情になる。まあ、俺にとつちやこいつが付き合おうが付き合うまいがどうだって良い。

だけど今のままだと絶対に白井さんからの告白も断ると思う。どうにかなんないかね。

「なあ、優也」

と、突然童明寺は話しかけてきた。

「なんだ？」

と、問う。

しかし

「いや、何でもない。俺もう疲れたから寝るわ。もう少しで消灯時間だし」

と、布団に入る。

ちよつと何言いかけたのか分からないけど、俺も疲れたから寝ようかな。

そして電気を消す。

「今日は月光が明るいな」

晴れていたため良く月が出ている。

今日は満月では無いがかなりの明るさだ。

そして俺はふと窓から身を乗り出して空を見上げる。

「うわあ」

と、俺は思わず声をあげてしまった。

そう。俺の視界に映ったものが原因だ。

それは満天の星空だった。

一つ一つがギラギラと強い輝きを持っている。

これは絶対に居真舞では見ることの出来ない景色。

俺は思わず写真を撮ってしまった。

「七海がもし目が覚めたらこの景色を見せてやろう。きっとあいつなら喜ぶぞ」

そう言いながら俺は七海が喜んでいる姿を想像する。  
すると、自然に涙が溢れてきた。

「何で…何で涙が…」

と、袖で涙を拭きながら呟く。

「七海…今も必死に戦ってたんだよな」

だったら俺がこんな所で泣いている場合じゃない。

「七海の分まで今を全力で楽しんで土産話を作るから。絶対に死なないでくれ」

そして俺はもう一度涙を拭いて布団に入る。

(優也…もう…俺はもう失いたくないんだよ。妹さんを失ったお前になら分かるだろ。この気持ち)

そして俺は眠りについた。

## 第35話 思い出の記念撮影

side 優也

「朝…か」

宿泊研修最終日

俺は早くに目が覚めた。

と言うか童明寺の軒いびきが五月蠅い。

良く自分の家じゃないのにこんなにも熟睡できるよな。俺では考えられない事だ。

俺は自宅以外ではあまり寝られないのだ。

まだ外は暗いがこれは冬だからであって現時刻は朝4時。

夏なら完全に明るくなっている時間なので朝と言っても問題はないだろう。

今日のスケジュールは朝6時。朝食を昨日の晩飯の場所で食べる。

朝9時。2日目の自主研修

13時。観光名所巡り（景色の良い場所で記念撮影）

14時。帰りのバスに乗車

16時30分。学校に到着

と言う流れだ。

と言うか大部早く目覚めたから暇だな。

顔洗ってくるか。

俺は基本冷水で顔を洗う。

しかし、この時期。まだ冷水で洗うのは少し寒いな。

「ふわああっ」

と、欠伸をする。

しっかし、寝起きだからってひどい顔だな。

寝癖が酷いな。結羽ん所の冬馬見たいになってんな。

まあ、冬馬みたいには髪は固くないからすぐに直るけどな。

そして俺は戻ろうとドアをあける。

「ぐわっ！」

と、悲鳴がすぐそこで聞こえた。





もそこそこの点は取ってるらしい。

「んじや、飯食いに行くか」

時刻を見ると既に時刻は11時50分を回っていた。  
なのでもう食いに行くことにした。

昼はハンバーガーだ。

そして歩くこと約10分。

ついにマ〇クに着いたがなんと、ここらに飯屋が少ないので混みに  
混みまくっていた。

これ、時間までに間に合うのか？

「混んでるわね…」

すると、走って童明寺が寄ってきた。

そう言えば少し前からどっか行ってたな。

「はいよ」

と、飲み物を渡してくる童明寺

恐らく近くの自販機で買ってきたのだろう。

「サンキュ」

そう言って受けとる。

たまには役に立つじゃねーか。

すると童明寺は手を差し出してきた。

「なに？」

「210円」

金を払えって？

「優也君。君は少し勘違いをしているよ」

勘違い？

「俺は君にこのジュースを奢るとは一言も言っていない」

「悪徳業者か!？」

手口がそのまま悪徳業者だ。

因みに書類に印鑑を押ししてくれと言われたとき、書類の内容をさら  
らつとで良いから読んでおかないと後で酷いことになる場合もある  
から注意。

「と言うかそつちの二人はどうなんだ？」

何故か童明寺は俺にしか請求してきてないのだ。

「つみきは俺の幼馴染みだし、可愛いから良い」

そう言う和白井さんは顔を真っ赤にした。

童明寺は白井さんが童明寺の事が好きだって知ってる的なニュアンスの言葉を言っていたし、絶対面白がってるな。可哀想だろ！

「咲峰さんはクラスのアイドル的存在だから何となく」

思ったよりさらっとした理由に少しいらっとした。

そしてついに俺達の番が来て照り焼きハンバーガーを食べた。

俺はハンバーガーでは照り焼きが一番好きだ。

食べ終わった後は直ぐに集合地点に向かった。

そこで集まったクラスから記念写真を撮って、自由な人と写真を撮れる。もとい自由時間だ。

俺達のクラスは一番最初に集まったので最初に記念撮影。

俺は背の高さはあまり高い方ではない。

中の下位だから。男子と女子で

…女男…

…女男…

…女男…

と並ぶとして俺は真ん中の列の女子側。つまりは真ん中ら辺。

あまり目立つのが嫌いな俺は集合写真とかが嫌いだ。理由としては目立つと言うのが大きい。

そして俺達は写真を撮り終わって俺が景色を見ていると悠真と結羽の撮影も終わったようでごつちに寄ってくる。

「一緒に撮ろうぜー」

と、言ってくる悠真

その場から離れようとしたが悠真にガシツと手首を捕まれてしまつて連れていかれる。

「じゃあ撮ろう」

そう言つて横一列に並んでスマホのカメラを内カメラにしてカメラを持ち上げる。

悠真が自撮りの体制になっている。

「って何で俺が真ん中なんだよ  
ってか結羽が近い。」

悠真が居るのに結羽が近いせいでドキドキしてしまう。

結羽には好きな人が居るんだ結羽には好きな人が居るんだ。

そう言い聞かせて心を落ち着かせる。

そして肩を組んでくる悠真。

だが悠真よ組み返してはやらねーぞ。それに

「なに組んで来てんだよ」

迷惑そうに抗議するが悠真はまるで人の話を聞かない。

そして

「はい。チーズ」

そしてパシャッと写真が取られる。

見ると俺が迷惑そうにジト目で悠真を見ているのがハッキリと  
写っていた。

なんか恥ずかしい。

そしてじゃーなどと、俺達から離れていく悠真

「さて、俺も行きますかね」

そして俺も歩き出したとき、不意に後ろから袖を引っ張られた。

見てみると袖を引っ張ってきていたのは結羽だった。

「どうした?」

「あの…私と一緒に写真を撮ってくれないですか?」

と、昔のようによそよそしい敬語で話しかけてくる結羽

可愛い。可愛いんだが。

「写真なら悠真に送ってもらえば良いじゃないか」

そう言う袖を掴む力が強くなった。

「二人で撮りたいんです。……ダメ…ですか?」

これはもう俺の本能が断つてはいけなと言っている。

それ以前に俺の男の血がこんな断れるわけないだろ!と叫んで  
いる…:ような気がする。

「ああ、良いぞ」

そう言っって持ち場に着く。

そして結羽は携帯を取り出して内カメラにして持ち上げる。しかし、どうやら結羽の身長が足りないせいで上手く撮れないようだ。

仕方ない。

「ほら、貸せ」

そう言つて結羽から携帯を受けつて自撮りの体制に入る。

ちよつと距離が遠いせいで見切れるな…

そして俺は結羽に寄つていく。

うーんもうちよつと。

そんなことを考えていると肩がぶつかつてしまう。

「あ、すまん」

と、謝る。

「うん良いよ」

すぐに許してくれた。

そして良い感じに収まりそうだったのでシャツターを切つた。

パシャ

そして写真を表示させて結羽に手渡す。

その写真を見ながらえへへと笑つて。一瞬難しい顔になつたと思つたらまた顔が緩む。

端から見たら少しホラーだぞ。

そして俺達は帰りのバスに乗つた。

帰りはほとんどの人が寝てて、咲峰さんも窓に寄りかかつて寝てた。

白井さんは童明寺に寄りかかつて寝ていて、そんな童明寺も寝ているのは少し微笑ましいと思つた。

そんなこんなで俺達の一泊二日の宿泊研修が幕を閉じた。

### 第36話 一年の振り返りとバレンタインデー前日

side 優也

さて、描写は無かったが中間テストも終わり（メタイ）残す所、一年生はあと期末テストと三年生を送る会。そして卒業式のみで終了。短かったようで長かったな。それとどっかの誰かさんのせいで長く感じたな。

俺の高校生活は結羽と知り合うところから始まったんだったな。

それから劇的に変化した気がする。

悠真と知り合ったり、ドS生徒会長の落とし穴強制失格障害物競争をやったりと

そして二学期には星野さんと知り合ったり、最近出てないが副生徒会長、神乃さんと知り合ったり。

色々大変だったけど…結果的に

この一年。良かったなと思える気がする。

「ゆ、優也がデレただと!?!」

いい雰囲気ぶち壊しだ!

「なあ、今回で最終回だっけ?」

「いいや、まだ、続くぞ」

俺は今現在、一年間を振り返りながら悠真と童明寺と話していた。ちなみに会話は上から順に悠真、童明寺だ。

因みに今日は日曜。世の学生さんは日曜が一番憂鬱なのでは無いでしょうか？

「と言うか何でそんな最終回みたいな閉め方をしたんだよ」

「そもそも何でこんな会話になったんだ？」

数分前の事なのに忘れてはこのバカ二人のために解説しよう。

あれは昼前の事だった。

いつもの如く親父は朝早くから出勤。結羽は土日は自分から来ない。来てくれても良いのにな。あの美味しい飯が食えるなら。↑飯目的

そのため、近くのコンビニで何か昼飯を買ってこようとしていると

—※—※—※—回想—※—※—※—

ピンポーン

突然呼び鈴が鳴った。

ん？新聞か？

そう思い、ドアを開けながらこう言う。

「間に合ってます」

「なにが!!?」

二人ドアの先に居たのだが、二人とも同じ表情をしている。お前ら仲良いな。

玄関に居た二人つてのが悠真と童明寺だ。

何でもやることなく暇してたところ、二人がぼったりと出くわして二人とも暇だったため俺の家に来ることにしたらしい。

何故か宿泊研修以来、この二人は馬が合い仲良くなったらしい。

つて俺の家はあみゅーずめんとぱーくじゃねーって何回も言ってるのに。↑言っていないです。

そんなこんなで（家に）突撃された訳なんだが俺の部屋で話しているとこんな話に成った。

「俺等は人生で初めての高一だった訳なんだが」

「初めてじゃなかったらヤバイから」

留年とか絶対にしたくない。

もう一回同じ学年とかダルすぎる。

「どうだった?」

唐突な質問だった。

「残念だった」

「同じく」

悠真がそう呟くと童明寺もそれに同調して頷く。

何で残念なんだよ。

と言うか短いな。もつとこう。何か色々と思ったこと無いのかよ。

「この言葉には色々という意味がふくまれてんだよ」

「同じく」

「悠真の言っている意味がわからなくてだいぶ困っているんだが、と言うかナチュラルに心読むな。それと童明寺は同じくしか言えないのか」

「それよりも」「早く」「優也はどうだったんだ?」

「やっぱり仲良いな!」

—※—※—※—回想 終—※—※—※—

そんな経緯があつて冒頭戻る。

「ああ、そうだったな。俺が唐突に聞いたんだった」

と、童明寺が今思い出したかのように手を叩く。

「そんなことより」

と、悠真

なにがそんなことよりだよ。

「明日バレンタインだぜ」

と、カレンダーを見る。

確かに明日は2月14日。バレンタインデーだった。

まあ、関係ないけどな。

そう思いながらコーヒーを啜る。

ホットコーヒーは暖まるし美味しいし良いな。

「確かにバレンタインだがそれが?」

と、童明寺も冷たくあしらう。

「おい！それでも男か！明日は男にとつても女にとつても一世一大の大イベント！女が男にチョコを渡す。そしてなし崩し的に告白して恋人になる二人。」

そんなロマンがあるもんじゃろ!!」

「いや、そんなに暑く語られても。俺等興味ないし」

勿論俺が興味ないのは当たり前なんだが、童明寺もこう言うの興味無かったんだな。

と言うか悠真の暴走が激しすぎて論点が明後日の方向に飛んでいってしまってるぞ。

「取り合えずそんな話をするために話変えたのか？」

若干童明寺もあきれぎみである。

「モテているお前らにはモテない俺の気持ちなど分からねーよ」

モテないやつ嫉妬じゃねーか。そんな俺等にぶつけられても。

ってか俺ってモテたのか？そんなこと無いと思うけどな。

多分悠真の妄想だろう。

童明寺はモテてるからチョコの数は凄まじい事になりそうだな。

「と言うか俺は孤高の一匹狼。彼女など必要ないのだ」

ほらまた。悲しげな表情になった。

その表情になんの意味が込められてるか分からないが、何かがあるんだろう。

「んじゃそろそろ昼だし飯でも恵んでくれね？」

なんて奴だ。

勝手に上がり込んで飯をつくれだ？

「ああ、俺にも頼む。」

童明寺まで。

くそ！このままこいつらの言うことを正直に聞くのは少し癪だな。よし。良いことを思い付いた。

「わーったよ。作ってきてやるから待ってろって」

そして台所に向かう。

そして俺はチャーハンを作った。





ありがとう

因みに祖父はまだ生きています。

### 第37話 困惑する優也と手慣れたあつし

side 優也

翌朝

今日は2月14日月曜日。バレンタインだ。

まあ、なぜか今日は結羽に出会うことなく一人で来た。

でまあ、登校一発目で俺は頭を抱えてしまった。

俺は俺の靴箱の前で頭を抱えている。

そして俺の近くでもう一人。俺と同じく頭を抱えている人が

「ああ…」

何を隠そうその人物は童明寺だ。

恐らく俺と童明寺は同じことを考えているだろう。

「この大量のチョコレート山。どうしようか」

俺と童明寺はハモった。

そう。

開口一番に俺の視界に写り込んできたのは俺の靴箱を開けた瞬間、靴箱から大量に滝のように溢れだしてくるチョコレートだった。

その直後、童明寺も同じように靴箱をあけると俺と同じような状況になって居るのを見て思わず吹き出しそうになったのは伏せておく。

いやー。しかしこれだけの量。どうすっかな。

自分で食べるにはちよつと堪えるぞ。

俺は甘いものは好きな方である。

ビターも甘いのも好きだが、普通のチョコってそんなに食べれないんだよな。

結羽に分けるか？

しっかし。ホワイトデーに返すの大変だな。

すると横で手慣れた手つきで袋にチョコ達を入れてその中の一つをかじり始める童明寺

その場で食べるのはどうなんだろうか？

「今食べるのか？」

と、俺が聞くと

「ああ。腹減ってたからな。お前も食うか？」

と、チョコを半分に割って渡してくる。

そしてそれをかじる。

うん。美味しい。

俺のあまり得意じゃない甘ったるさはあまりなく、簡単に食べられるような味わいだ。

こんなの誰が作ったんだ？

と、俺の考えていることが分かったのかその答えを教えてください。

「つみきだ」

なるほど。白井さんか。

確かにこの味わいはなんと言うか愛を感じるよね。

「毎年俺の好みを覚えてきてだんだん美味くなってるんだ」

そう言いながらも一口かじる。

だけどうして白井さんのだって分かったんだ？

「あいつにはラッピングの癖があるんだ」

ラッピングの癖？

「例えばこう」

と、ラッピングシートを見せる童明寺。

「一旦跡を着けて折りやすくしてんだ。折り紙の要領だな。それ故、こうして跡がくつきりと残ってるんだ」

リボンにも癖があるらしい。

「通常リボン結びは上に輪が二つ合って下に紐があるんだ。だがつみきの場合はあいつ、料理出来んに細かい作業が苦手なんだな。左は普通なのに右だけ上下逆さなんだ」

すごいな。白井さんのことならすべてお見通しって貫禄だな。

「そして決めてはこれ。このシールだ」

と、見せてくる童明寺

なんと言うか可愛らしいと言うか愛情が溢れまくってるってか。

良い子だ。白井さん

「飾り付けにこのシールを使うんだ。一体何枚持ってるんだ？」

いや、めっちゃ見てるな！

「どんだけ見てんだよ。」

「まあ、他にもエトセトラエトセトラって感じで数えきれないくらい癖はあるが…ってどうした？優也。そんなに驚いて」

「いや、まあ。ストーカー暦何年だ？」

「んー。まあ、そうだな約10年かな」

「マジか。こいつ、幼稚園・小学校の頃から白井さんをストーカーしてたのか。」

と、少し引いた目で見てみると童明寺が焦りだした。

「いや、違うから！本当に！だから引かないで！ストーカーなんてしたことないから！」

でもこれだけ白井さんの事を知ってるって怪しいな。

「もしかして白井さんの事が好きなのか？」

俺が問うと急に童明寺がむせ出した。

飲み物なんて飲んでないのに…まさか！チョコでむせたのか。

そうして俺は近くの自販機でお茶をかって手渡す。

それを勢い良く飲んでいく童明寺

「ぶはー。なに言い出すんだよ優也」

と、抗議の目を向けられる。

「つてかさつちだつて柴野さんの事が好きなんじゃないのか？」

と、聞かれた。

なので思ってることを一語一句正確に伝えてみた。

「あのさ。常日頃から思ってたんだけど。恋ってどんな感情なんだ？。」と

すると童明寺はポカーンとしてこっちを見てきた。

なんだその目は。摩訶不思議な存在を見たような顔をして

「あのさ。あなたは勉強魔神さんでしたよね？」

そのあだ名は気に食わんがニユアンス的にはそうだ。

「勉強で他の事そつちのけだったから恋がどんな感情かを忘れてしまったと？」

「まあ、そうだな」

すると童明寺は「これは手強いな」や「どうすれば」等と呟き出し

た。

「はあ、そう言うことか。勉強も出来て家事料理も出来るパーフェクト男の癖に女心が全く分からなかったのはそのせいか。つまりはお前は恋心を代償に学力をしようかーん！したと言うことか」

いや、いつてる意味が全くわからん。

なんだよしようかーん！ってテンションおかしすぎだろ。

つまりは分かりやすく言うと、恋や交流をそっちのけで勉学に励んでいたせいで恋心を忘れてしまったと言うことだ。

今の俺じゃ恋をしてもそれに気がつくことが出来ない。

「とりあえず時間も時間だし教室行くか」

あ、そのまま食べながら直行するんですね。分かります。

なんで童明寺に今食うのか聞くと、最近ベタつきすぎてる白井さんを幻滅させて離れさせるのが目的らしい。

なぜそこまで徹底する。

そしてそれをどう思ってるのか聞くと

「いつもの事だからなれました。それより美味しく食べてくれる。と考えると嬉しいな…」

完全に無意味である。

「あ、はいこれ。絆成君に」

と、言つてバレンティンチョコをくれた。ちよつとそこは配慮してほしかったな。どうせ義理なんだから。

まあ、童明寺は童明寺で本命と気がついてるか怪しいけどな。

放課後

帰るか。

そう思つて支度をする。

そして玄関にいくと結羽が待っていた。

「優也。一緒に帰ろ？」

少しいつもと違う気がした。

緊張の声色が入つてたような。

「あ、あの。優也。これ」

帰り道で突然とチョコを渡してきた。  
義理だと分かっちゃいるがありがたく受けとる。

「ありがとう」

そうお礼を言って受け取って袋に入れる。

あ、そうだ。忘れるところだった。

「結羽。あのさ俺さすごいチョコをもらったんだよ。俺一人じゃ食べきれない自信なくてさ」

そう言っ袋を見せる。

すると一瞬結羽の目がジト目になった気がした。

「だからさ今から一緒に食べにk」「あ、私用事があるから急ぐね」

そう言っ走り去ってしまった。

俺は引き留めようとしたが結羽は止まらなかった。

地味に瞬発力はたけーのな。

結局こうなるのか。

「優也のバカ…」

胃室

俺は自室で今日もらったチョコの確認をしていた。

手紙付きの物も何個あったのでその人たちにはお返しできるけど他は出来なさそうだな。

とりあえず結羽のを食べてみる。

そして噛むと、その瞬間甘さとほんのりと俺の好きなビターな味わいも感じる。

結構甘いが、そこまでしつこくない。

俺の事をどんだけ知ってたんだ？まあ、俺の為に料理を作ったりや、嫌でも好みは覚えるわな。

まあ、とりあえず何が言いたいかって言う。

「美味しい」

そしてこのチョコだけ特別甘く感じた。

### 第38話 社会経験を積もう

side 優也

恋って何だろうな…

俺はそれを考えていた。

結構哲学染みた事を言ってるが、俺は本気でそう思っている。

童明寺に呆れられたあの日の次の日、放課後に色々恋愛について調べたり、小説等を読んでみたりした。

だけど分からないんだ。恋と言う感情が

「なにやってんだ？優也そんなところでうろろして」

「ああ、父さん。何でもないよ」

と、父さんの問いに対して返す。

今日はまたまた祝日なのだが、珍しく父さんが会社休みだ。

ちなみに祖父は居酒屋をやっているのだが、継ぐのが嫌だからこっちに来たとか。

それで良いのか父さん!?

「そう言えば彼女は出来たのか?」

と、突然聞かれて転びそうになった。

あまりにも俺の今の思考にピンポイントな発言だったためだ。

「父さん。恋の感情ってなんだ?」

すると父さんは訝しげな目でみつめてきた。

なんだ?その目は

「これは重症だな」

すると父さんは俺の肩を掴んできた。

「そんなお前には社会経験が必要だと思うんだ。だからバイト。始めよう」

は?

なんでいきなり。

まあ、最近出費が激しいからバイトするのは良いんだが

俺、絆成 優也はバイト始めるってよ。

??????



コンビニ

「えー。ここにバイトしに来た理由は？」

と、フランクに聞いてくるコンビニ店長

こう言う雰囲気の話の方が良いと思う。話しやすくして

「社会経験を積むためです」

そう言う店長はうなずき始めた。

「良いねえ。僕は向上心のある子は好きだよ」

そう言うてなにかをスラスラーつと書いていく店長

「はい。採用ね」

はやっ！

え？これだけ？

もつとこうなんかあるんじゃないのか？

色々と

これで良いのか？店長!?お気楽にも程がある。

「制服を用意しておくからね。また明日来てね」

あれ？面接って何だっけ？

合格の判定が甘すぎねーか？

でもまあ、店長がこう言ってるんだし良いのだろう。

次の日

裏口から入ってこいと言われたので裏口からコンビニに入る。

もちろん放課後だ。

俺が学生だと言うことを話したら放課後で良いと言ってくれた。

改めて入るとなると緊張するな。

そう思いながら入った。

入ると直ぐに店長に会った。

「やあやあ。絆成くん。来たね。じゃあ店長室に行こうか」

そして店長室に案内される。

店長室に着くとタンスの中から一式の制服を取り出して渡してきた。  
た。

志願書の項目に身長項目があったからそれを参考に作ったんだ



俺が入ったら下着姿で着替え中と思われる女性がそこに居たのだ。使用中になつてないことから考えて急いでて変え忘れたのだろうか？

にしても

「ヤバい…殺される」

逃げるべきだろうか？ここから

いや、ここから逃げただけじゃ心許ない。別の市、県。いや、海外に！

「あわわわわ！」

そんなことを考えていると後ろからガチャつと音がなった。

錆び付いたロボットのようにならぬと見ると不思議なものを見る目で首を傾げてこちらを見てきていた。

「なにやってるんですか？」

と、おっとりとした口調で話す彼女

すると遅いと思つたのか店長が迎えに来た。

「あ、絆成くん。そんなところで頭抱えてうずくまってどうしたんだい？」

そう言った後、俺の後ろの人に気がついたようで

「如月…またか？またなのか？遅刻」

「いやいやー。わたしから遅刻を取つたら何が残ると言うんですか？最低な奴だな。」

「それよりてんちよー。この人誰ですか？」

「ああ、この人は今日来たばかりのバイト。絆成 優也くんだよ」

そう言うと思ひ出したと言わんばかりに手をポンつと叩いた。

「君が新しいバイトさんかー。わたしは同じくバイトの如月さくら咲桜ー。高ー。よろしくー」

同い年だつたんだ。

「それでねー。てんちよー。ゆーや君がわたしの着替えを覗いたんです！」

「こいつばらしやがった！」

「まーた如月。ここの表記変え忘れたろ。君自信が気にしないとはい

え、女の子だと言う自覚を持った方が良いぞ」

「はーい。てんちよー」

あ、あれ？それだけ？

俺はてつきり『如月の着替えを見ただど？このラッキースケベ野郎。俺だつてラッキースケベにあつたとこ無いのにぶつ殺してやる！』って感じで地の果てまで追いかけられるかと思つたのに

「それじゃ、ちようど良く如月も来たことだし。今は北村さんがレジやってるから如月が絆成くんに仕事を教えてあげて。それじゃ」

「はーい。じゃあゆーや君。この咲桜ちゃんが手取り足取り色々教えてあげるよー」

「不穏な言い回しやめろ」

そうして俺のバイトライフが始まったとさ

## 第39話 初バイト

side 優也

そう言えばさつき北村さんとか言ってたけどこの時間に他にシフトの入ってる人なのかな？

そんなことを着替えながら考えていた。

なんか如月さんは遅刻が多いみたいなこと言ってたし、大丈夫なのだろうか？

「ゆーや君！終わった？」

「まだだ」

と、さつきから件くだんの人物は急かしてくる。

もう少し静かに待てないのだろうか？

と云うかなんでそこでじっと待ってる。

まあ、あまり待たせてもあれだしな…急ぐか

「おおー。制服着ると一気に心が引き締まるな」

そうして俺は更衣室から出ると

「なにやってんだ？」

「う、うう…だって。わたしの事をほったらかして窓からどこかに行っちゃったんじゃないかって」

「いや、どこの世界線だよ」

俺が出ると如月さんがもじもじしながらうずくまっていた。

なんでその考えに至った。

その前に更衣室の窓、かなり高めに設定されて俺が背伸びして腕伸ばしても頭一つ分位届かないよ。

そんなところからわざわざ脱出しようなんて、怪我したいDMのやることだ。

「はいはい。それじゃ俺に仕事を教えてください。如月先輩」

すると余程先輩と言う響きを気に入ったのか目をキラキラ輝かせた。

そ、そんなに嬉しかったのか？俺にはわからない感覚だな。

「ではついてきたまえ！後輩くん」

調子に乗った。

「あ?????」  
「ここがレジだよ!」

「いや、見れば分かるんだけど」

すると横に女性店員が立っていることに気がついた。

そして向こうも俺の視線に気がついたようでこちらを見る。

「あ、どうも…」

と、ペコリとお辞儀してくるので俺もお辞儀した。

「あ、どうもしほさーん」

と、敬礼する如月さん。

何故に敬礼?

悠真達と別種の変人の臭いがする。

「あなたが新しいバイト?」

「はい。そうです」

「そう。あたしは北村 志穂」

と、自己紹介してきた。

「あ、どうも。俺は絆成 優也です」

「志穂さんは高校二年生なんだよ!私の高校の先輩!」

そう言っレジから出ていく如月さん

そして俺も如月さんについていく。

「ここが飲料棚の裏側!」

そこは段ボールに入ってる飲み物だったり棚においてある飲み物  
だったりあつて、棚に追加できるようになってる所だった。

そして何より、飲料を置いてあるだけあつて少し寒い。大きな冷蔵  
庫って感じた。

コーラやサイダーその他諸々、有名なのからマイナーなものまで。

そしてビールやらのお酒もある。

「じゃ、次はフライヤーの使い方かな?」

「う言っレジの奥の部屋に連れていかれる。」

「?????」  
「これがフライヤー」

と、手を向ける如月さん

「これでコロッケとかをあげるんだよ。ほら、ここのボタンを押せば放っておくだけで勝手に上がってくるから」  
なるほど便利だ。

「あとはレジ打ちだね」

この後も色々教えてもらったけど、教え方が丁寧に非常に分かりやすかった。

「教えてくれてありがとうな」

そう言うとニコツと笑って如月さんは「いえいえ」と言う。

「これも私の仕事ですから」

そしてそれだけで今日のバイトは終わりの時間を迎えた。

北村さんは俺が来て如月さんが俺に付くだろうから、人手が足りなくなるから昼間でって条件で来てみたいで昼で上がった。

そして俺等は引き継ぎをしていた。

「よし。こんなかな」

そう言ってタイムカードを押しに行く。

「これでよし。着替えるか」

そして更衣室前で立ち止まる。

注意深く表記を見る。

使用中じゃ無いらしいな。

そして恐る恐る扉に近づいて耳を扉に当てる。

音が聞こえない。

よし、居ない可能性が高いな。

「なにやってるの」

と、後ろから声が聞こえる。

後ろを見ると如月さんが居た。

「いや、その」

「そんなにわたしの着替えを見たかったのかな」

と、ニヤニヤしてくる。

「こいつ…ムカつくな…」

「如月さん…俺はそんな変態じゃないぞ」





「あ、家ここだからありがとう」  
そう言つてドアに向かう如月

「おい。如月」

そう言つて如月に近づく。

「ん？どうした…の？」

俺が無言で近づいてきてるのを見て少しづつ後退る。

そしてドアにぶつかつて後ろには行けなくなった。

それを見て俺は壁ドンをする。

「ひっ」

と、声を出す如月

「ちよ、ちよつと怖いなく。なんて」

そして如月の耳元で

「本当に襲つてやろうか？」

と囁いた。

その瞬間、如月の肩がビクツとはねた。

そして如月から離れる。

如月の顔は赤くなつてた。

「冗談だ。じゃーな」

そう言つてヒラヒラと手を振つて歩き出す。

俺は思い出したように立ち止まる。

そして如月の方に顔だけ向ける。

「俺以外にああいう事言うのやめた方が良いぞ。どうなつても知らん」

そう言つたら、ペタンと力が抜けたように尻餅を付く如月

そして俺はまた歩き出した。

「なんか悔しい…」

そして如月は家に入った。

## 第40話 犬みたいな童明寺

side 優也

学校

俺はいつも通り、購買で買ったパンを一人寂しく廊下で食べていた。

今日は雨降ってるな。生憎の天気だ。

ちなみに童明寺は雨の方が好きみたいだ。

お前は犬か！

やっぱサンドイッチってうまいなく。

ゆつくりと食べながら遠くを見る。

「あれって悠真だよなく」

そう言えばあいつって部活とか入ってるのかな？

よく用事が…とか言ってるし、なんかの係りとか入ってるのかな？

すると突然悠真が胸ぐらを捕まれた。

悠真は両手を胸の前に付き出してヘラヘラと笑いながらなにかを言っている。

「まったく…」

「おい、悠真。なにやってる」

と、俺は悠真に近づいて話しかける。

「んー？知らん」

「しらんってなんだゴルア」

「ちよーど良い。てめえも金だせやあなるほどね。」

カツアゲに会ってたのか。

んー。しゃしゃり出てきたのは良いものの、俺一人の力じゃどうしようもないな。

「で、悠真はそこでなにしてた？」

と、最初に戻るわけである。

「いや、取り合えずこいつ引き剥がしてくんない？」

その状況でよくそんな冷静で居られるよな。肝が座ってる。

さーつてと

「俺にそんなこと言われても困るんだけど。その前にこの人数程度、お前一人で十分だろ」

そう言うのと悠真は頭をポリポリと掻き始めた。

「俺はもうそう言うことから身を引いたんだよ。ケンカで誰かを助けるのは優也。お前しか居ない」

いや、俺はまともなケンカで勝った試しが無いぞ。

「は？いま、なんつった。俺ら程度？じゃあ証明してみろよ！」

そして悠真を殴る不良。

何故こんな人たちがここに合格出来たのかが不思議でならない。

悠真はやられるがまだまだ。

俺じゃ勝てないしなく。

例えばボールがあつても校内で暴力事件を起こすのもなく

その時、タイミングを見計らったかのようなタイミングでそいつは現れた。

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん！」

「呼んでないし、その前に何で濡れてんだ。びしょびしょじゃないか童明寺」

「いやー。校庭走り回ってたらいつの間にかびしょびしょになつた」

だからお前は犬か！

こいつは前世が犬だったんじゃないのか？

「まあ、取り合えず俺が何とかしてやる！」

「お前になにが出るってんだ！」

すると童明寺は軽く殴りかかる。

「びしょびしょで気持ち悪いよ拳！」

「地味に嫌なやつだ！」

「うわつつめた！」

「あ、あの変人。気持ち悪いぞ」

「逃げましようよ」

そして逃げていく不良達

「winner」

と、ピースをする童明寺

まあ、今回は助かった訳だが

「童明寺。風邪引くぞ」

「いやいや、優也。あつしには白井さんが居るから。風邪引いたら看病してもらえるさ」

一瞬なるほどと思ったけど、それって普通無いよな。

ちなみに童明寺と白井さん家って隣らしい。なんと言う運命

「それよりも、悠真は何であんなやつらに絡まれたんだ?」

「んー。知らん」

それしか言えないのか?

「まあ、良いや。ジャージに着替えてこよつと」

そう言つて童明寺は更衣室に向かう。

お気楽な奴だな。

「そう言えば最近放課後どこかに行ってるらしいじゃないか?どこいってんだ?」

何故悠真がそれを!

ああ、結羽か

最近結羽と下校してないからな。寂しがつてんのかな?

と言つても今日もシフト入つてんだよな。

午後は俺と如月だけだっけか。

でもバイト中に面白がられて来られるのは嫌だしな

「ちよつとな」

???、適当にはぐらかすことにした。

「?????」  
「いらつしやーませー」

相変わらず適当だな。

俺は今、如月とレジに立っていた。

「いらつしやいませー!」

と、俺も言う。

なんつーか。今日は客入りが少なくて暇だな。

ってかもう一個のレジ放ったらかしてこっちに寄ってくんな。

「あの。お願いします」

「はい。わかりました」

そしてレジに置かれた商品をバーコードリーダーで会計していく。

「会計615円で…す…」

俺は顔を見て驚いた。

なぜなら

「ゆ、結羽!?!」

「ゆ、優也!?!」

すると俺と結羽の驚いた声を聞いて一度離れていった如月が戻ってきた。

「え? 何々? あ、常連さーん」

何で覚えてんだよ

「いや、言わないでえっ!」

と、必死に訴えかける結羽

意外だな。結羽がコンビニの常連だなんて…

それも弁当をなんて

「え、えっとお…とうまが…」

パシリが!

従姉なんだろ! それなのに年下の従弟にパシリにされて良いのか!?

ん?!

「あいつ、二つも弁当を食べるのか?」

と、ニヤニヤしながら言った。

すると

「そう!」

「いや、無理があるだろ」

二つもなんて、高校生の俺だってキツイぞ。

「うう…優也がいじめるう…」

と言うか話し込んでるな。

まあ、他に客は居ないから良いんだけどな。

「所でお二人って…付き合ってた？」

「いや、別に」

「そ、そそそ、そうだよ！わわわ私と優也がなんてえ！」

「落ち着け！」

何で毎回こうなるの？動揺しなきゃ死んじゃうの？

「そうなんだ〜」

するとニヤニヤしだす如月

嫌な予感がする。

「私はこの前、ゆーや君に送ってもらったときに、壁ドンされておs」

「それ以上はダメだ！」

と、必死に如月の口を押さえる。

「壁…ドン」

すう呟いた。

「ふ、ふん。だ。優也が誰と恋をしようとする私には関係ないもんね」

「なんだ？嫉妬してるのか？」

「何でこんなときだけ鋭いのよおっ！」

まあ、なぜ嫉妬してんのかはさっぱりだけどな。

「そうだ。結羽。俺、もう終わりだから一緒に帰らないか？」

と、取り合えず機嫌を取ってみる。

こんなんで機嫌とれるかは分からないけどな。

「ゆ、優也が一緒に良いってどうしても言うなら…」

なにチラチラこっち見てんだよ。

地味に可愛いじゃねーか。

「ああ、どうしてもだ」

そう言うのと頬を赤らめた。

「そ、それじゃ待ってるから」

そう言っ出ていってしまった。

中で待ってれば良いのに

結羽もかなりの厚着をしてたけどそれでも少し寒いだろうに

そして急いでバイト上がって結羽と帰りました。

そして何故か絶対今日も『優也のご飯作るのおっ！』

って言ってその好意に甘えて食べさせてもらった。

## 第41話 なんだこの展開by優也

side 優也

休日。特にやる事が無い俺は買い物に来ていた。  
まあ買うものつてのが本なんだが、俺の好きな作家さんの新作が出たと言うことでかなり楽しみである。

ちなみに俺の趣味は勉強だけじゃなく読書もある。  
色々なジャンルを読んでいるが、最近は恋愛ものとかも結構読んでいるが難しいな。

読んでれば恋について勉強出来るかと思ったが、これがさっぱりなんだわ。

そして俺はいつも来てる本屋に着いた。

さーつてと、あの作家さんの新作はどこに置いてあつかな。

と、新作コーナーに向かう。

良いよな。こう言う本屋の雰囲気つて

本に囲まれた空間つて地味に好きなんだよな。

「つと、有った有った」

探し始めて数分でお目当ての本を見つけることが出来た。

そして手を伸ばす。

すると誰かの手とぶつかる。

「え?」

と、横を見るとそこには北村さんが居た。

「あ、北村さん」

「ん? 絆成さん」

何でここに? と一瞬思ったがその疑問もすぐに消え、理由がわかった。

「北村さんもこの本を?」

「もつてことはあなたもなのね?」

ん? そう言えば恋愛小説に『本を取ろうとしたら手がぶつかり合つて』つてのが有ったような気がするな。

でも俺はドキドキ何てしてないけどな。



それは北村さんも同じようで、冷静に書籍を一冊手に取る。

「あたしはこの作家さんが好きなんで楽しみだったんですよ」

「あ！俺も！俺もこの作家さんが好きで買いに来たんですよ！」

と、少し興奮ぎみに喋る。

いや、今の俺のキャラに見会わないとわかっちゃいるよ？

だけど、俺は好きなものを話すとき少し興奮気味になるんだよな。

「あ、あなたもだったのね！案外あたし達って似た者同士なのかも知れないわね」

と、俺たちは意気投合した。

まさか俺と同じ感性の人が間近に居たとは

「あ、そうだ。この後お茶していかない？」

と、誘われた。

まあ、断る理由も無いし…と言うのは建前で、バイト仲間の如月とは良く喋ったりしてるけど、同じバイト仲間の北村さんとはゆっくり話したことは無かったからな。話してみたいってのが本音だな。

「ああ、良いですよ」

「どう言っても俺も書籍を一冊手に取って会計を済ませる。」

喫茶店

俺達は近くの喫茶店に来ていた。

ゆっくりとした昼も良いなと思う。

因みに如月は今日シフトが入っている。

俺と北村さんが休みな分、如月が入ってるのは必然だ。

「あたしはコーヒーかな。絆成さんは？」

「俺もコーヒーだな」

と言うか、バイト始めて数日経つけど、未だに北村さんの絆成さんって呼び名慣れないな。

店長も絆成君って読んでくるけど、君だからまだ大丈夫だけど、さんって慣れないな。

そして注文したコーヒーが届く。

「そう言えば絆成さんって高校どこ通ってるの？」

「ああ、伊真舞高校だ」

「え!?あの伊真高!」

と驚く北村さん

まあ、町一番の高校だからな。

昔の俺だったら考えらんなかったな。

必ず一教科は赤点で、順位は下から数えた方が早い。

そんな俺だったからな。

「そう言う北村さんは?確か如月と同じ学校何でしたよね?」

「そうね。あたしは春風高校。女子高」

ああ、あそこか。

珠に春風の制服の女子を帰路で見かける事がある。

まあ、結構近いからな。

伊真高から歩いて10分だ。

結構つかめっちゃ近いな。

「つてか春高も結構偏差値高くなかったっけ?あいつそんなに頭良かったっけ?」

「咲桜はああ見えて結構頭は良いんだよね。一年生ではトップ5に入るレベル」

マジでか!?

いや、ごめんね?普段があんなだから授業中もふざけてるのかと思ってた。

さすがにそれは無いか。

「ほんととあの子、伊真高に行けたんだけどね。あたしと同じ高校に行くって言って聞かなくて」

北村さんにとって如月は自分に着いてくる可愛い後輩って感じらしい。

優しい目をしてる。

そう言う関係って良いなと思う。

俺の良く会話する先輩は…

ダメだ!白波さんが思い浮かんだ。

と言うかそもそも白波さん以外居なかった。

「あつれ〜？ゆーや君としほさんじゃ無いですか〜」  
と、聞き覚えのある声がした。

そして声が見た方を見るとそこには件の如月が立っていた。  
「どうしたの？」

「と言うか何でここに？」

「いやー。お二人がここでお茶してるのが見えたからねー」

ああ、そうか。

ここは窓側の席だから見えるのか。

今はバイト帰りか。

「なに？デートですか〜？幾らしほさんでもゆーや君は渡せませんよー」

いや、何の話だよ。

つてかデートじゃないし

「なに咲桜。絆成さんと付き合ったりしてるの？」

「んー。してない？」

良かった。そこふざけなくて

「じゃあついに好きにでもなった？」

いやいや、そんなことあるわけ無いだ

「そうだね〜。好きだよ？」

「え!？」

ちよつと待つて!〜という

「バイト仲間として」

「ああ、うん。知ってたよ。知ってたけど驚いてみた」

するとニヤニヤしながら俺の隣に座ってグイッと近づいてきた。  
「なんですか？その顔は

「もしかして〜。あつちの方の好きを期待してた〜？」

「いや、別に」

「そう言う割には顔が赤いよー」

ニヤニヤしやがって…ムカつくな

この間の仕返しか？

「それはお前の顔が近いからであつて」

「いやいや、わかるよー。男の子だもんねー」

口調がうざいな…

俺の周りには性格が特殊な人しか集まらないのか!?

「そんなに反応してくれるのは嬉しいなく。これはそのお礼」

と、言う俺の頬に柔らかい感触がした。

俺は思わず一瞬、思考停止してしまう。

そして思考が戻ったら俺は思わずすごい勢いで後ろに下がる。対して下がれないけど

「ななな、お前!？」

「あ、あんたねえ…」

と言う反応を浮かべる俺と北村さん。

「どう? やっぱり可愛い反応を見せてくれるね」

だが、当の本人は何も気にしてない様子。

そのふてぶてしい態度が少し癩しやくだな。

何か仕返して赤面させてやらないと気がすまない。

でも目の前に北村さんが居るからちよつと抵抗あるな。

いや、しかし。ここでやり返さなければ行けないと言う衝動に

ちよつと隣に如月が居るし

「如月」

「ん? どうした? つてキャッ!」

俺は如月を押し倒す。

するとやはり赤面しだす如月。

「どうだ? これで懲りたらむやみやたらに男を煽らないことだ」

そうして離れようとすると

「うわっ!」

服の袖を引っ張られた。

「良いよ?」

何が良いんですかねえ?

「ふふっ。冗談じようだーん! 前に似たような事やられたからその仕返し〜」

これはしてやられたな。

俺の仕返し大作戦は無意に終わったのです。

「あなた達…公衆の面前でなにやってるの？」

と、お怒りモードの北村さんが言ってきた。

普段おちやらけている如月の肩が震えていた。

本気で怯えていらっしやる。

「所でいつまでそうやってるかしら？」

「すみません！」

そう言って飛び退く。

「ゆーや君。今のはセクハラだよね？」

如月にも説教されるとはショックなんだが

「あなたも何でこんなところでその…きききき、キスなんかしたの」

キスって言うのを恥ずかしがってるな。

「んー。ん？何となく？」

「あんたにとつてのきききき、キスってその程度だったのね」

と、呆れている北村さん

「まあ、良いじゃ無いですか」

と、言っちゃっかり俺のコーヒーを飲む如月

あーもう。何でも良いや…

「あなた達…ほんとに付き合ってるのよね？」

そんな感じでこの後ずつと問い詰められた。

小話

期末テストも無事終わりを告げた。  
今回もいつも通りの点数だった。

「優也あ…」

結羽もいつも通りのようだ。

これでも留年しないくらい点数は取ってるらしい。  
今回も俺に泣きついてきて教えてあげた。

俺の順位は、やはりと言うか星野さんと同率一位だ。

「優也。いつも私に勉強教えてくれてありがとう」

「急にどうした!?!」

「いや、何でもないよ!」

と言って走ってく。

「あ、おい! 待てよ!」

俺はこの何でもない日常が好きだ。

## 第42話 みんなに嫌われないが好かれてる童明寺

side 優也

今日はホワイトデー

まだ給料日前のこの時期。

正直この量を買うのは厳しかった。

お陰で給料日まで10日以上残したこの状況で、俺の貯金にまで手が延びてしまうとは…

実は中学の頃はたいしてお金を使ってなかったから、お小遣いを貰ってたけど使ってなかったからたんまり貯金されてるんだよ。

それなのに結構使ってしまった。

「ん？優也。なんだ？その大きな袋は」

と、隣に来た童明寺が聞いてきた。

そう言う童明寺は学生鞆以外にも持っておらず、手ぶらだったのだ。

「今日はホワイトデーだぞ？」

そう言う

「あー。そうだったけ？まあ、どうでも良いけど」

こいつ、返さない気だな。

普段からこう言うやつだが、これはどうかと思うんだが…

「俺にチョコレートなど渡してきたやつなど居ないんだよ」

「…」

俺は童明寺の肩を掴む。

「じゃあお前あれはなんだ!? わざわざ宅急便で俺宛に送ってきたあの箱の中身は何だったんだああっ？」

と、俺は童明寺の肩を揺らしながら言った。

「あの後、俺は結羽と悠真と共に哀れみの目を向けられながら一緒に食べたんだからな！」

そう言う、童明寺がドンマイ。と、肩を叩いてきた。

「いや、お前のせいだから」  
と、手を離す。

これもみんなに嫌われる作戦か：  
こんなんでもモテてるから不思議でならない。  
ほんと、何でだろうね。

「あ、そろそろいかなくちやならないな」  
腑に落ちないがまあ、良いだろう。

??  
して童明寺を手放して教室に向かった。

??  
は昼休み放課後を利用して色々な人にスーパーで買ったクッキーを渡し廻っていた。

さすがに送り主が分からないと無理だが、

「はい。白井さん」

と、俺は他の人にやったように白井さんにもクッキーを渡す。

すると白井さんは両手で丁寧に受け取って「ありがとう」と言う。

良い子なんだけどな。

何で童明寺は突き放した態度を取るんだろうか？

後二個

あれ？

後は結羽に渡して終わりのはずなんだが…あ！数ミスった。

どうしようか後の一個

すると童明寺が視界に入る。

まあ、適当に余ったのは童明寺に渡しとくか。

「ホラよ童明寺」

と、クッキーを渡す。

「なんだ？これは」

「やるよ。余ったし」

??  
してその場から立ち去る。

side つみき

私は絆成君からホワイトデーのクッキーをもらった後、直ぐに帰ろうと準備していた。

やっぱりと言うかなんと言うか童明寺君は今年もお返し無し。



なれたからもう良いけど

すると絆成君が童明寺君にクッキーを渡しているのが見えた。

そしてそのクッキーを持って立ち上がったと思ったらしばらくの間、固まってしまった。

そして硬直が溶けた後、私のもとに近づいてきた。

「つみぎ」

と、呼んでくる。

「これ、貰いもんなんだが要るか？」

と、クッキーを手渡してくる。

童明寺君が誰かに物をあげようとするのを始めてみたから驚いている。

でもそれは絆成君から童明寺君にあげたものであって…

「じゃあ一緒に食べない？」

「まあ、お前がどうしてもって言うなら」

「うんー…どうしても！」

??して一緒に帰った。

??ide 優也

「優也ー！」

と、声をかけてくる結羽

俺は結羽の方を見る。

「あれ、童明寺君がつみきちゃんにあげないことを予期して一個多く買ったでしょ」

と、確信を突いた質問を繰り出してきた。

よく心を読まれるから心まで嘘をついたのに…

でもなんか悔しかったため、俺はこう言った。

「さあな」

「さあなって…でも優しいんだね」

そう言って途中まで一緒に帰る。

「んじゃ、俺バイトだからこのまま行くからな」

と言って別れようとした時にあることを思い出した。

「つと、忘れるところだった。結羽。はい」

と、クツキーを渡す。

「ありがとう優也」

「どうして俺と結羽は別れた。」

「?????」

「あれれ〜？今日は随分お疲れモードだねえ〜どうしたの？」

「そうだ。俺は疲れてるんだ。仕事に集中させてくれ〜」

俺がぐったりしていると如月が声をかけてきた。

「ねえゆうや君。もしかして好きな人に告ったの？よしよし。だいじょーぶだからね。ゆうや君には私が」

「おい、なぜその流れで話を進めようとする。と言うか反応が俺がフられる前提な事について話し合おうじゃないか」

これが俺の職場だ。

退屈することもないが、かなり疲れると言うのが本音だ。

如月は嬉々として俺をからかってくる。

正直やめてほしい。

すると一人の女性がコンビニに入ってきた。

そして女性はこつちを見るなり飛んできた。

「やあやあ、久しぶりだね。絆成君？だっけ？」

と、気さくに話しかけてくる人物は

「ああ、白波さんにいつも振り回されてる神野さんじゃないですか」

神乃 夕華。生徒会副会長。いつも会長である白波さんに振り回

されており、いつも白波さんを強制連行しているのを見かける。

「あれ？そつちの子は？」

と、神乃さんの後ろに隠れてる女の子を見る。

すると慌てて死角に逃げ込んで時折チラチラとこちらを見てきている。

「ああ、あの子は私の妹。露木つゆぎって言うんだけどね。極度の人見知りのせいで家族以外には口を開いたりしない子なのよ。気にしないであげて？」

露木ちゃんか…

「分かりました」

「ありがとねー」

そう言っつて神乃さん達は手短かに買い物を買わせて帰っていった。

そして俺も上がる時間となり、夜遅いのでいつものごとく、如月を家まで送ってやった。

## 第43話 優也と結羽

side 優也

卒業式までもう一週間も無い。

つい先日、また俺の家で会議を開いた。

議題は前回と同じく卒業祝いだ。

今回はちゃんと結羽も来れた。

それで今は何やってるのかと言うと、企画書の作成である。

何で俺がこんなことをしなきゃいけないんだよ。

参加者は俺、悠真、結羽、星野さん、白波さん、そして冬馬

そして今回はカラオケに行くらしいんだが、無理矢理演奏を入れられた。

カラオケボックスについてしばらく歌ったら演奏開始、当初は悠真一人の演奏だったはずなんだが、冬馬がピアノが出来ると知って、ちよūd折り返みのキーボードがあつたので冬馬も参加することになった。

ちなみに悠真がギター、冬馬がキーボードで、何故か結羽まで飛び火して歌う事となっていた。

まあ、とりまこんな感じだ。

後は俺の家に集合でバレないように連れてくる必要がある。

俺と結羽は色々支度があるから出来ない。

そうなると悠真か冬馬になるんだが、冬馬曰く「何で部外者の俺がそんなことしなくちゃいけないんだよ…第一、俺がキーボードをやらなくちゃいけないくちやならないんだよ。俺は部外者だ！」と、嘆いていたから恐らくそこは悠真がやることになるだろう。

あいつ嘘苦手だけど大丈夫か？

「あー！もうやってらんね…」

今日は休日、部屋で企画書を書いていた俺は企画書を投げて部屋中にばらまかれた企画書を無視して机に突っ伏す。

???????? のまま瞼を閉じる。

side 結羽

ピンポーン

あれ？反応がないな…

もう思ってもう一回呼び鈴を鳴らす。だけど反応が無い。

いつもなら直ぐに出てくるのに…

うーん。留守なのかな？

そう思っただアを引いてみると、これがなんと開いてしまった。

「ふむ。これは事件の臭い」

なんか思考が白波さんに侵食されてきてる気がする。

悪影響だ。

でも優也のお父さんが仕事だとしても優也はバイト無いって言うたから休日に出歩かないインドア派の優也は居るはずなんだけどな。

ふむ。これは本格的に事件の臭いが…ってちがーう！

ヤバイなあ…これは本格的に白波さん病にかかってしまっているかもしれない。

でもどうしたんだろう？

そう思っただアに入っただア優也の部屋に直行する。

すると優也の部屋のなかは大量の紙が散らかっていた。

それを一枚拾っただア見てみると企画書のようだった。

なんだかんだ押し付けられた仕事もやるどころは優しいな。と思しながら紙を回収していく。

回収していく内に優也が机に突っ伏していることに気がついた。

耳を澄ますとスースーと寝息が聞こえてきた。

か、可愛い…

そして私はちやうど優也が横を向いたタイミングでスマホのシャッターをきった。

それを見てニヤニヤと顔が緩んでしまう。

ダメダメ…こんなところ優也に見られたら絶対変なやつだと思われちゃう。

そして企画書を回収して机の上に置いた。

「ん？うーん…」

その瞬間、優也が起きた。

「あ、ごめんね。起こしちゃった？」

「いや、別に。…ところで何でゆーがここに？」

まだ寝ぼけているのか結羽のうの発音が上手く出来てない。

可愛い。

ダメダメ。こんなこと考えてちゃ

「ああ、そうそう。企画書の事で話し合おうと思って来たらインターホン押しても出てこないし、ドアは開いてるしで心配したんだから」

「ああ、それはすまん」

と言つて頭を掻く優也

でも企画書の話し合いは口実に過ぎないんだけどね。

どうしたものかな…この唐変木。

「でも部屋が荒れてたけどどうしたの？」

「ああ、なかなか思い付かなくてな。カラオケの後、何するか…晩飯とかも食べるらしいから店のリサーチとかもな」

なんか優也が一番張り切ってるような気がするのは私だけかな？

ってリサーチ!?そんなこともしてたの!?

時間をかけて最高の企画を考えていてくれたんだね。

なんだかんだ言つてそう言う優しいところも好きなんだけどね。

「じゃあ気晴らししようよ。気晴らしをしたら頭の回転がよくなるかもよー」

そう提案すると優也は「そうだな」と言つて伸びをした。

「で、何するんだ？」

「こんなこともあるうかと思つてケーキ作ってきたんだ」

そう言つて私がついてきた箱を見せた。

「ケーキか…ん？今作つたつて？」

「そうだよ。結構お菓子作りとか好きなんだよね」

「これが女子力と言うやつなのか」

と、まじまじと私を見てくる。

そんなに見られると照れちゃうよ。

かと思つたら急に優也の顔が青ざめた。

「まさか結羽さん。チョコじゃ無いですよね？」

「違うよ？イチゴのショートケーキ。勿論生クリームだよ」  
そう言うのと心底安心したような顔になる優也

「良かったあ…童明寺が送ってきた大量のチョコを食べてからしばらくチョコは食べたくなかったんだよ」

あー。分かるかも

あれだけチョコ食べたなら具合悪くなっちゃうよね。

「童明寺のチョコ嫌いはどうにかなんないかねえ…」

「え？童明寺君ってチョコ嫌いだったの!？」

衝撃の事実!?

「ああ、あいつは白井さんの作ったチョコしか食べない。何故か白井さんのチョコは食べれるらしいが」

つみきちちゃんのチョコすごい!?

そして私と優也はケーキを食べた。

「なんかやる気が出てきたような気がするよ。ありがとな」

そう言つて再び机に向かう優也

頑張つて。心の中でそう呟いて優也を見守るのだった。

## 第44話 一年生編 終

side 優也

卒業式。それは最上級生と在校生の別れを意味し、同時に最上級生の新たな一步を踏み出す重要な式となっている。

まあ、俺はそんな重くは捉えてないけどな。

まあ、なぜそんな事を言い出したのかと言うと、今が絶賛卒業式の真つ最中だからだ。

とは言つても校長先生の長い長い話を聞いて、国歌を歌つて校歌を歌つて互いに歌を歌い会うくらいなものだ。

特に校長先生の話を聞いているときは眠くなってくる。

まあ、イニシャルDとイニシャルSは完全に寝てたからな。

でも歌うときには起きてて何それすげえって思った。

どうなつてんだろうな。こいつらの危機管理能力

そして卒業式は終わった。

そして俺は今現在、廊下を歩いていた。

するとある人影を見かけた。

あれは白井さんと神乃さんか？

ふたり仲良さそうに歩いていた。

「あ、絆成君」

と、声をかけられた。

この声は神野さんだな。

「何ですか？」

そう言えば、ここで白波さんと会つちやつたけど、俺が誘うべきなのだろうか？

でも神野さんも居るし、

そんな事を考えてると神野さんが一瞬考えるような仕草をした後ウィンクして白波さんに向き直った。

「このあと実は絆成君と遊ぶ約束をしていたんです。会長もどうですか？」

と、白波さんに提案した。



え？そんな約束した覚えは無いんだが  
でも何か考えがあるのかも知れない。

ここは乗り掛かった船だ。乗ってやろうじゃないか。

「そうなんですよ。どうです？」

「あれ？君たちちつていつからそんなに仲良くなつてたっけ？」

ぐ、痛いところ突いてきやがった。

確かに俺と神野さんなんて全然付き合いもない。

だからどうしても不自然になる。

そして俺がどうしようかと悩んでると神野さんがまた口を開いた。

「いやー。ここらで彼等と仲良くなつてみようかなうって。ほら、会

長のお気に入りなんでしょ？」

そう言う和白波さんは府に落ちたようだ。

助かった。とアイコンタクトするとまたウインクする神野さん

まるで『どういたしまして』と言ってるようだった。

「そうね。じゃあ優也君の家にお邪魔しようかしら？」

あれ？白波さんつてこんなに大人しかつたっけ？

まあ、さすがの白波さんでもこう言うこともあるよな。

そして俺達は俺の家へと向かった。

歩いている途中、みんなにLINEを送った。

『白波さんにたまたま会ったから連れていく』

『わかった』

『了解した』

『へーい』

???言おう感じのやり取りがあつた。

????

ぞんなこんなで俺の家に着いた。

一応結羽は信頼してるから後で返してもらおうと言う条件付きで鍵  
を渡しておいたから。飾り付けはしているだろう。

後は悠真だが、結羽従姉弟と共にふざけずにやれば良いんだけ  
ど

そして俺は一度深く深呼吸してから自宅の扉を開けた。

こんなに自宅の扉を開けるのに緊張したことは恐らく一度もないだろう。

そして俺が扉を開け、リビングの扉を開けるとパンっ！

と、綺麗に破裂音が鳴った。

その音の招待を探ると周りに皆が居て、各々クラッカーを持っていた。

『白波さん（真依先輩）！卒業おめでとうございます！』

そして冬馬を見ると複雑そうな表情をしていた。

（俺は何でここにいなきやいけないんだ。部外者だろ）

と言う心の声が聞こえてくるようだ。

「皆々ありがとう」

と、結羽と星野さんに抱きつく白波さん

神野さんはやけに落ち着いている。

まるで最初から知ってたかのように

ん？知ってた？

まさか

「悠真、」

そう言うと「ギクツ」と言った。

口で言うやつ始めて見た。

でもこれで確信した。

俺はジト目で悠真を見つめる。

「神野さん。謎が解けましたよ」

「ん？何？謎って」

「ずっと不思議だったんですよ。なぜここまで事がスムーズに進むのか」

「しかし、悠真の態度で分かりました。あなたは最初から知っていたんです。これから何をするか、ある人物に聞いて。そしてあなたはスムーズに進むように誘導した」

「そ、その人物って？」

そして俺は親指と人差し指だけ伸ばして顎に添えて真ん中に行く。

「神野さんにばらした犯人。それはお前だ板戸 悠真」

そして悠真を指差す。

「お、俺!?! ってか名字間違えてんぞ。板戸じゃなくて坂戸だからな」  
「悠真。お前は自分で連れてくるのが面倒くさかった。だが、連れてくるのをすつぽかすわけにもいかない。そこで神野さんに偶然会ったお前はある作戦を思い付いた」

そして俺はテーブルをドンツと叩いてからこう言いになった。

「副会長の神野さんに連れてきて貰おう! って。そりやそうだ。副会長が会長を制御してるってのは学校全体で知られていることだからな。神野さんの誘いを断るわけがない。そう思ったんだろ?」

「ぐ、すべては優也。お前の言う通りだ。俺は神野さんに連れてきてもらおうと思つて神野さんに伝えたのだ」

勝つた。そう思つて俺はガツツポーズをする。

別に咎めようと思つてなど無い。ちよつとした遊び心だ。

すると、冬馬がボソツと呟いた。

「なんだこれ」

「じゃあ気を取り直して遊びにいきましょう真依先輩」

と、悠真が流れを修正する。

「え、ええ。そうね」

と、戸惑いながら同意する白波さん

そして俺達は俺が事前に決めたカラオケ屋に向かった。

カラオケ屋に入るや否や早速歌い出す悠真。

有名なアニメの曲だ。

悠真は結構上手い部類だ。

そして歌い終わると、それに続いて白波さんが歌い出した。

星野さんは携帯を弄つていて、俺は皆をボーッと見ていた。

結羽は俺の横に座つて俺の横顔を覗き込んできている。そんなこととして何が楽しいのだろうか?

「じゃあ、そろそろやろうか!」

そう言つて悠真はバッグの中からギターを取り出した。

それに連れてため息を付きながらもキーボードを取り出す冬馬。

そして結羽はおどおどしながらもマイクを手取る。

「これから俺達で演奏します！」

「う言ううとパチパチと拍手が起こった。」

「ジャラーン

演奏が終わった。

凄いな。こんなに完成させてきたのか。

有名な曲ばかりだったけど凄く出来た。

「凄かったよー！」

「うん。結羽ちゃんは歌上手いし他の二人も楽器上手いね」

「うん」

俺は二人に同意するように頷く。

「クール気取ってないで何か言ったらどうだ？」

と、肩を組んで頬をつついてくる。

イラッ

正直凄いなと思った俺の気持ちを返してほしい。

「じゃあ、引き続き歌おうか」

「次はまだ一度も歌ってない優也君が良いと思いまーす！」

と、白波さんが言ってきた。

「ちよーそれは」

と、焦り出す悠真

「うん！私も優也が良いと思う！」

と、結羽まで

「考え直せ！皆！」

そう言われてイラッとした。

「やってやるよ。歌ってやるよ」

「はあ…」

と、耳を塞ぐ悠真

「ウーッ

歌

歌いきった。

そして周りを見てみると苦笑いしている皆が  
なんだその笑顔は

「ま、まあ、誰にだって得意不得意があるわよね」

「う、うん」

「そ、そうね」

「は、はは」

上から白波さん、結羽、星野さん、冬馬。

「良い歌声だったじゃん！」

『ええっ！』

と、神野さんが言ったことによつて驚く皆

「私、絆成君の歌声好きだな」

「ま、まあ、人それぞれ感性が違うからな」

と、頷く悠真

おい、それはどう言うことだ。

「じゃあ、気を取り直して歌おうぜ」

前も悠真とカラオケ来たときにこう言う反応されたな。

そんな感じでカラオケを時間一杯満喫してレストランに向かった。

レストランは事前に俺がりサーチ済みだ。

ん？ツンデレ？誰がですかねえ？俺はただ仕事しごとをしたまですよ？

「改めまして、卒業おめでとうございます」

と、結羽。

「結局最後の最後まで私は会長に振り回されてたんですけどね」

と、ストローでジュースをチビチビ飲みながら言う神乃さん

よく見たら普段から苦勞してるもんね。この人も

「仕事はほっぴり出すし、絆成君には迷惑をかけるし」

でもと続ける。

「私は会長に感謝してるんですよ。すぐに仕事をほっぴり出すけどなんだかんだ言って期日までに終わらせますし、司会の事も人一倍頑張ってくれてるのが伝わりますし、何より会長が居ると場が盛り上がるんですよ」

と、途中から照れくさそうにしながら言う神乃さん  
「みんな会長。いえ、白波さんの事が大好きなんですよ！じゃないと  
この場に居ません。勿論私も。会長が居なくなつて寂しくなります  
ね」

静かにはなるだろうn

いっ！

と、俺は声にならない悲鳴をあげる。

隣に座っている結羽が足を踏みつけてきた。

雰囲気壊すようなことは考えないでとでも言いたげだ。

「夕香！」

そう言つて白波さんは神乃さんを抱きしめる。

「ありがとう。私もみんなのこと大好きだよ。みんなに祝ってもらえ  
て私は幸せ者だなあ」

じゃあ、と言つて悠真は立ち上がる。

「もう一度、白波さんの卒業を祝つて」

『カンパニー！』

ちなみにレストランなので声は小さめです。

そして俺達の一年は終了した。

## 第45話 お見舞い

side 優也

春休み。

長期休暇の中で一番短い休みだ。

つい先日、終業式も終わり、俺達も春休みになった。

春休みだからと言ってやることがある訳じゃない。

勉強することしか出来ない。

二年生ではクラス替えがあるから何組になるんだろうか。

二年生と言えば最初に学力テストがあるから、その勉強をしておかないとな。

そして春休みもバイトがある。

そして今日もバイトである。

ちなみに今日は北村さんと二人でレジをやっている。

「ありがしたー」

「ちよつと弛たるんできてるんじゃないかしらっ。」

適当に挨拶する俺とそんな俺をジト眼で見ってくる北村さん

休みの日にバイトするのはめんどくさいよねっ

その上如月は「友達とシヨッピング行ってくるっ」って言ってたから羨ましいぜこん畜生！

まあ、こんなこと言っても仕方ないか。

「なあ、北村さんが感じた如月の第一印象ってどんなでしたか？」

「適当。だけど物事はきちつとやりこなす子だと思っただわ。根は真面目なのかもしれないわね。どうしてあんなお茶掣てるのかは分からないけど」

「そうだったんですか。俺はうざいと思いましたよ」

そう言うのと北村さんは笑いながら「それもあるわね」と言った。

「それにしても根は真面目か……」

思い返してみればそうだ。

いつも態度は気だるげでやる気のなさをアピールしてくるが仕事は丁寧だ。

そのギャップが凄い。

やる気になったたら如月は多分すごい優秀なんだろう。

「そう言えばさつき休憩室で読んでた本はなんですか？」

「例の先生の最新作よ」

「あー！俺もそれ読みました！今回も面白かったですね。つつい読み込んでしまいました」

そう言うと同調してくれる北村さん。

北村さんと俺は本の趣味が合うからその話題で盛り上がることもある。

俺と北村さんの好きな作家がおなじなので同じ本を持っていたり、たまたま持つてなかったら貸し借りすることもある。

一番馬が合うのは北村さんかもしれない。

まあ、先輩だし学校も違うけどな。

「そう言えば絆成さんって春休みどこかに行くの？」

「いんや。ほとんどバイトだ」

「悲しいわね」

んなこといわれたって…

「そうだな。最近は行けてなかったし七海の見舞いでも行くか。遠い病院だからそうそう行けないけど」

近くにも病院はあるが、長期に渡る延命設備が整ってるのがそこしか無かったってだけだ。

一回見舞いに行くだけでも途中で一泊することになる距離だ。

「絆成さんって妹が居たんですか」

「ああ、今は遠い病院に入院している」

「そうなんですか」

「ああ」

どうして今日のバイトは終わった。

????

久しぶりだな…

俺は今、親父の車に乗っている。

車に揺られながら七海を思い出す。



もうかれこれ約一年は来てなかったな。

「しかし驚いたな。優也から行きたいと言いつ出すなんて」  
「別に良いだろそんなの」

今までは親父が言い出して着いていくって感じだったんだが、今回は俺から言い出した。

今回も当然泊まりで来ている。

そしてだんだんと七海が入院している病院が見えてきた。

「久しぶりだな(´▽`)/」

病院に着いたら俺達は七海の病室へ向かう。

そして病室に着いたらノックしてから入る。

今もなお安らかな顔で眠っている。

そして俺は持ってきた花を花瓶に飾る。

「ヒスイラン翡翠蘭だ。好きだったよなお前、」

—※—※—※—回想—※—※—※—

「あ！お兄ちゃん。見てみて」

「ん？なんだ？」

そして俺は七海が指を指している方を見る。

そこには翡翠蘭があった。

そうか。ここは花屋の前だったのか。

「ねーねー。ヒスイランの花言葉って知ってる？」

「んー。なんだ？」

「『上品な美しさ』と『華やかな恋』、『個人的』ってのがあったって」  
「」

「ふーん。華やかな恋か：そう言うのに興味あるのか？」

「へ!?あ、いや違うのお兄ちゃん！無いと言えは嘘になるけど…」

と、語尾が弱くなっていく。

「上品な美しさとか良いよね。後、個人的って個性を大事につて意味だと思っただよね。個性は大事だからね。私はヒスイランが花の中で一番好き」

—※—※—※—回想 終—※—※—※—

「そう言えば俺は良い仲間に出会ったんだ。結羽、童明寺、白井さん、

星野さん」

「目が覚めたら紹介するよ」

俺は静寂のなか一人話続ける。

親父はホテルのチェックインに向かった。

「七海。死なないでくれ」

そう言うのと七海の目から涙が出てきた気がした。

「優也そろそろ面会時間終了だ」

???として俺達は病院を後にした。

「ああ、後もう少しで二年生が始まるからいっぱい食って力つけろよ」

「余計なお世話だ」

と、俺は冷静に突っ込む。

今は夕飯を食べている。

先ほど風呂には入ってきた。

後は飯を食って寝るだけだ。

「美味しいな」

「ああ」

俺は物綺羅棒に返す。

明日また同じ道を通って帰ることとなる。

そして飯を食べてから眠りについた。

二年生か…

二年生には先生もクラスも変わる。

先生は誰になるんだろう。

春海先生は一年生担当の先生だから絶対に担任になることはない。

クラスメイトはどうなるか…だな。

そして俺は深い眠りについた。

次の日、俺達は朝イチで帰った。

二年生編 一学期  
第46話 新たなクラス

俺の名前は絆成 優也。年は16。居間舞高校の新二年生だ。

去年は色々あった。

新しい出会いに特殊な友達。時には友の陰謀にはめられた時もあったが幸せと言う言葉が一番似合う年になったんじゃないかな？

まずっ！遅れる。

新学期そうそう遅刻なんて嫌だぞ。

と、走る。

デジャブである。

そして交差点を突き抜ける。俺は、そう！風だ。

「優也。おは…って！無視しないで〜！」

と、文句を垂れながら結羽が着いてくる。

ってかいつも思ってたんだが、なんで俺がここに来ると必ず結羽に遭遇すんだ？待ち伏せされてね？

そして駆け抜けていく。

結果から言うのだいぶ急いだけあって、だいぶ時間が余るくらいには着いた。

クラスは…またAか。

メンバーは…ん？

あれれ？童明寺…白井…柴野…。げっ本田も居る。

坂戸と星野は無いな。

担任の名前は…今倉 信壺？

ああ、俺達が来る前から居た先生だな。

「やったー！優也と同じクラス」

「ああ、そうだな」

渡乱が待っていいそうだな。

?????

教室に来ると既に何人か居た。

その中には童明寺と白井さんも

「うーっす」

と、入ってきた男。

やる気無さそうなトーンの声だ。

すると席の人数揃った。

ガラガラ

と、もう一回扉が開いた。

そつちを見るとそこには先生と思わしき人物が居た。

「おーい。お前ら席に出席番号貼ってあるから座れ〜！」  
そう言われて俺達は席に座る。

「今日は始業式終わった後、自己紹介と係決めするぞ」  
そして先生に促されて廊下に出席番号順に並ぶ。

「あれから始業式だ。」

「何で初日から注意しなくちやならない」  
「?????」

なんと童明寺が堂々と寝ていたのだ。

これには他の先生方もあきれていた。

「じゃあ早速自己紹介をするぞ。僕は今倉 真壺いまくら しんいちです。よろしくお願  
いします」

と、礼儀正しく挨拶する今倉先生。

「次は出席番号順に自己紹介だ。まず藍馬あいまから」

「藍馬 勇人ゆうとです。よろしくお願いします」

そんな感じで自己紹介が始まった。

「絆成 優也ゆうたです。よろしくお願いします」

取り合えず礼儀正しく言う。

第一印象が大切だ。

「胡桃沢 玲香くるみざわ れいか。よろしく」

と、突き放すような口調で言った。

俺の後ろの子だ。

そして何人か進んで

「柴野 結羽ゆいです。よろしくお願いします」

まあ、後で知ることになるしあまり聞いてなくても良いか。

「し、白井 ちゆみちゆみです。よろしくお願いします」

あ、噛んだ。

「童明寺 あつしあつしだ」

相変わらず突き放すような口調だな。

「本田 龍輝りゅうきです。よろしくお願いします〜！」

そんな感じで最後まで自己紹介が終わった。

何で知り合い四人も居るんだよ。

「やったね優也。隣！」

結羽と隣になりました。

どんな偶然？

「じゃあ次は係決めだ」

係は適当なので良い。

出来ることなら簡単な担当。

教科連絡が良い。だが、HR委員長はダメだ。面倒だし

なので俺は数学の教科連絡に立候補した。

他には結羽と龍輝か…

これは満二人

誰かが負けなければならぬ。

「じゃあその三人、前に出てきてじゃんけん」

と先生は言った。

ちよつと、これは…

俺の負けが確定したところでじゃんけんが始まる。

「残念だったなこの係は俺と結羽ちゃんで満喫させてもらうぜ」

何か悔しい。

こいつ、何かの手違いで負けねえかな？

『最初はグーじゃんけん』

ポンの合図と共に俺達は手を出す。

俺↓グー

結羽↓パー

龍輝↓グー

うおっ！

龍輝負けた！

そして龍輝を見ると苦虫を噛み潰したような表情になってた。

結羽は喜んで席に戻っていった。

さあ、第2回戦だ。

どうせ負けるだろう。

そして結羽を見てみる。

ああ、結羽からの威圧感がすごい。俺が運ゲー苦手だつての分かつ

てるだろうに…

だけどな…あんな顔で見られたら俺が負けるとちよつと可哀想な気がするな。

んじや、なれないことだけどやってみつか。

「龍輝。俺はグーを出す」

そう、俺が運で勝てないなら心理戦をすれば良いのだ。

—※—※—※—龍輝の思考—※—※—※—

な、なんだって〜っ！

どういうつもりだ優也。宣言だなんて…

まさか！畏か！ふふ。お前の考えはまるわかりだぜえっ！

恐らくグーを宣言したことにより俺が信じ込んでパーを出したところをチョコキで潰す気だったんだろうがそうはいかねえぜ。

相手がチョコキを出してくるならグーで対抗すれば

—※—※—※—龍輝の思考 終—※—※—※—

「じゃーいくぞー」

と、俺はぶつきらぼうにそう言った。

『じゃんけん』

ポンの合図と共に俺と龍輝はグーチョコキパーのどれかの形で手を出す。

俺↓グー

龍輝↓グー

やっぱりな思った通りだ。

「なあ、お前。俺今グー出すって言ったよな？」

まあ、仕向けたのは俺だがわざとらしく煽ってみる。すると、「おおーっ」と歓声が上がった。

そんなに俺が負けないのが珍しいか？

その通りです。

「ぐ、ぐぬぬ」

「次こそは生かせよ。次もグーだしてやっから」

—※—※—※—龍輝の思考—※—※—※—

えっ…まじで

優也のやつ。俺をはめやがったな。

だが、甘いなこの俺にもう一度チャンスを与えてしまったのは大きなミスだぜ。

こうなったらばか正直なお前に免じてこの俺の神の手。パーでお前を負かしてやろう。

さあ、今こそお前に引導を渡してやる。

—※—※—※—龍輝の思考 終—※—※—※—

「じゃー」

『あいこでしょ』

の合図と共に俺と龍輝はグーチョキパーのどれかの形で手を出す。

俺↓チョキ

龍輝↓パー

「うおおおくっ！」

とまた歓声上がる。

何とか勝てたな。よし、これで結羽に怒られずに済む。

「だ、騙したな！」

と、俺に声をかけてくる。

そして俺は大きく息を吐いてからこう言う。

「あのなあ、俺が二度もばか正直にグーを出すと思ったか？騙される方が悪いんだよバカ」

そうやって俺は自分の席に戻った。

初めてやってみたが意外とうまく行ったな。

「じゃあ数学の教科連絡は柴野と絆成だな」

龍輝。可哀想だが、お前は俺の犠牲になったのだ。

そんな感じで俺達の新たな一年が始まった。



## 第47話 変人の巣窟

side 優也

昼休み。

なんで始業式だと言うのにフルで授業があるんだよ。

と、心の中で文句を言いながら購買に向かっていた。

その時

きやああつ！

と、数人の女子の声が聞こえてきた。

悲鳴？いや、これはちよつと違うような気がする。

そして俺は気になって声の聞こえた方に向かった。

そこに居たのは数人の女子に囲まれているただのイケメンだった。

なんだ…ただのイケメンか。

そして素通りをして行こうとする。

「あ、優也！」

また厄介なのに捕まったな。

「なんだ結羽。お前も俺なんかよりあのイケメンの輪に混ざってきたらどうだ？」

「ううん…私は良いの。それに…」

「それに？」

「くっつ！なんでもない」

そして顔を赤くしてどこかに行ってしまった。

不思議なやつだな。

すると後ろから視線を感じた。

後ろを見してみるとイケメンがこっちを睨んできていた。

「僕よりも平凡な人を選ぶと言うのか」

なんかやばくね？

するとイケメンは近寄ってきた。

「僕の名前は新藤 京哉。今日転校してきたんだ。君は？」

と、突然聞いてもないのに自己紹介を始め、俺に自己紹介を求めてきた。

「絆成 優也」

「優也か。我がライバルとしてその名を胸に刻んでおこう」

いや、勝手にライバル認定しないで欲しいのですが

何故か俺の周りがどんどん変人の巣窟になっていく。

そしてビシツと俺を指さす。

新藤：中身が残念だ。

クリスマスプレゼントにゲームだと思ってプレゼントの包装を開けたらお菓子だった時のようなガツカリ具合だ。

見た目が良くても中身が残念だと台無しだよな。

「刻まなくて良いので関わらないで下さい」

すると遠くの方に道明寺の姿が見えた。

そしていい案を思いついた。

「あつちに俺よりあんたのライバルに似合う奴が居ますよ」

と、指さす。

童明寺に擦り付ける。

「そうか。じゃあ行ってくる」

と、新藤とか言うイケメンは童明寺の方に向かった。

ふう、一難去ったな…

遠くで困った様子の童明寺がこちらを見て助けを求めている。

助けに行きますか？

はい

いいえ ↑

即答だった。

この間、僅か0, 1秒

そして気が付かなかったフリをしてその場を後にする。

少し歩くと購買に着いた。

そこで俺はいつものサンドイッチを買って適当に食べる場所を探  
す。

すると白井さんが見えた。

「あ！絆成君！」

と、声を掛けてくる。

「童明寺君が何処に居るか知りませんか？」

「ああ、あいつなら今頃幸せの国へ旅立ってると思うぜ」

そして俺は童明寺が花畑でどじょうすくいしながら腹踊りしている姿を想像しながら合掌した。

そして吹き出しそうになる。

「ふええ〜。た、旅立って私達を置いてですかあっ!？」

と、目をうるうるさせる白井さん。

「という訳で楽しんでるんだから邪魔しないでやれ」

と、肩をとんと叩く。

「じゃあ、絆成君でいいです。私とお昼どうですか？」

そう来たか…

でも悠真と昼飯の約束をしてしまったってんだよな…どうしようか？

悠真との約束は大事だ

白井さんの約束に乗ろう ↑

またしても即決だった。

この間、僅か0, 01秒

「んじゃ白井さんが迷惑じゃ無ければご一緒しようかな？」

「うん！じゃあ行こう」

と、俺の手を引く白井さん。

偶に童明寺と白井さんと飯を食べたりしてるが、白井さんと2人つてのは初めてだ。

そして屋上に向かう。

二人と食べる時は屋上で食べている。

??????

「?????ら辺で食べましょうか」

そして白井さんはブルーシートを広げる。

昼飯時になつたらいつも持っているバッグの中にブルーシートが入っている。

その上に座る。

そして俺はサンドイッチを取り出し、白井さんは弁当を取り出した。

「おー。今日も美味そうだな」

と、感嘆かんとんの声をあげる。

白井さんの弁当は全て白井さんの手作りだ。

「絆成君はちゃんとしたご飯を食べないと偏りますよ?」

と、皿を取り出して何個か取り分けてくれる白井さん

「これあげます」

「白井さんって面倒見が良いよな」

「そうですか?」

と、首を傾げる白井さん

「これなら童明寺もイチコロだな」

と、親指を立てると顔を一気に真っ赤にした。

そして白井さんの取り分けてくれたおかずを白井さんに貰った箸で食べる。

美味い。

白井さんと食べる時はいつもくれる。

ちなみに童明寺も弁当だが、その弁当は白井さんが作ってるらしい。もうお前ら付き合っちゃえよ。

そしてサンドイッチも食べる。

道明寺の事を少し考えてみる。

あいつはモテるのにそれを嫌い、みんなを突き放し、告白されたら必ず断る。

断つたら必ず悲しい顔になる。

最近なんかは俺と良くつるんでるせいで俺の事が好きなんじゃないかと言う噂まで立ってきてる始末。迷惑な。

悲しい顔をするくらいなら断らなければ良いのに

昔に何があったかは俺は知らない。

だが、このままズルズルと行くのも良くない気がする。

その時

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

やべっ！急いで食わないと

「絆成君は童明寺君と真逆ですよね」

「え？」

「だって私を突き放そうとしないから」

そして白井さんは立ち上がってブルーシートを片付ける。

「また一緒に食べましょう」

そう言っって屋上を後にする白井さん。

そして俺は時計を見る。

「急ぐか」

## 第48話 昔を思う

side 優也

「終わり！」

やっと数学のテストが終わった。

この点数でクラス分けをするらしい。

そしてその点数は次の数学で発表される。

平均点の上か下かだ。

そしてテストが回収されたあと結羽の方を見てみるとダラーンと机に倒れ込んでいる。

可哀想になってくるな。

ちなみに道明寺もそこそこの点数は取れる。真ん中くらいだ。白井さんが教えてるからだ。

「それじゃHR始めるぞー」

うちの担任、今倉先生は数学の担任だ。

その為、今の時間は数学だったからそのままHRに移れる。

そしてHRが終わる。

そして教室を出ようとすると結羽に声をかけられた。

「優也。一緒に帰ろう？」

「ああ、分かった」

そして一緒に廊下を歩いて校門を出る。

校門の前には以前見たことがあるような気がする女の子が居た。

誰だっけ？

と、考える。

「でね。…って聞いている？優也」

「ああ、聞いている聞いている。確か、お前の父ちゃんは超能力者として各国を渡り歩いているって言う話だったよな？」

「どういう世界観?!なんでそうなったの?!やっぱり聞いてなかったんじゃない…」

確かに結羽の言う通りだ。

俺はぼんやりして聞いていなかった。だからちよつとしたボケを

したんだが、なんともまあ適切なツツコミをありがとう。

「で、どんな話だったわけ？」

「もう！今週末、何か予定ある？」

「ああ、忙しいね。勉強しなきゃいけないんだからな」

「じゃあ暇なんだね。買い物に付き合っただけいいけど？」

「こちとら忙しいって言うてるのに：勝手に決めつけやがって」

「良いも何も忙しいって」

「じゃあ今週末の土曜日に公園前集合ね」

勝手に物事が進んでいってるような気がするよ？俺はいいとも何も言っていないぞ？

まあ、別に断る理由も無いんだけどな。バイトも無いし

最近は如月の奴とシフトが上手く合わさらないから北村さんに如月が寂しがるとか言われたな。関係ないけどな。

さーって。今日は始業式だったんだが、キリ悪く金曜日なのだ。だから明日が土曜日。

なんでこんな回りくどい言い回しをするのだろうか？普通に明日って言えば良いのに

しかし、主張を全無視されるのも辛い所があるな。

まあ、久しぶりに付き合っただけやるか：

「分かった」

そう言っただけで帰った。

どうしても俺の通学路上にあるT字路で分かれることになるんだ  
けどな。

次????  
の日

今日はいつてもより早く目が覚めてしまっただけだからまだ時間には早いけど来てしまった。

今日は何を買いに行くのかはまだ聞かされてない。

俺達は良くこの公演を待ち合わせ場所になっている。理由は単純明快。みんなこの公園が好きだからだ。

そして暇なのでスマホで調べ物をしていた。

検索スペースにはこう書かれている。

『出かけるのに最適な場所』

「つて何調べてんだか…」

一人では出かけることも無いくせに…

”バカバカしい” そう思つて電源ボタンを押そうとすると

「なーに見てるの？」

と、真横から声がした。

「うわああっ!!」

驚いて転びそうになりながらも直ぐに電源を切つてポケットに入る。

「な、なんだ…結羽か…」

「なんだじゃないよ！何回呼んでも返事が無いんだもん！」

大層お怒りのご様子である。

「凄い熱中してスマホを見ていたよね？何見てたの？」

「えーつとそれは…」

言えない…完全に今調べていたことは俺の柄にも合わないことだ。言つたら笑われるのは確實

そして俺が口ごもっていると結羽がまた口を開いた。

「何か面白いゲームを見つけたの？」

それこそ俺の柄に合わない。俺以外の人なら有り得るかもしれないが

「それとも…彼女とのLINE?」

何言つてるんだこいつ？

「ないない。俺に彼女なんて居ると思うか？そもそもとして俺を好きになる物好きなんか居ねーよ」

「ここに居るんだけどな…」

「ん？何か言つたか？」

「ううん。なんでもない」

たまに結羽の声は小さくて聞こえないことがある。

「それより良かったー」

「良かったとは？」



「もし優也に彼女が居たら…」

「居たら？」

その瞬間表情が暗くなった。

正直その先を聞くのは怖い。だが人間の心は不思議なもので心霊番組も怖くて見たくないのに何故か見てしまう。それと同じで俺はいつの間にか聞いていた。

「……………なんでも…ないよ！」

凄いその先が気になるんだけど!?

だけどホッとしている自分が居る。やっぱり怖いことは聞くもんじゃないね。

「それより行こう！」

そう言つて俺の手首を掴んで走つていく結羽

そしてそれについて行くように走る。

少し走るとスーパーに着いた。

「そう言えば何を買いに来たんだ？」

そう聞くと結羽の足がピタツと止まった。

(優也と出かけたかったから買い物つて言っちゃったけど何も考えなかった…どうしよう…そ、そうだ！あれがあった)

「ん？どうした？」

「ううん。なんでもない。今日はCDを買いに来たの」

そう言えば結羽の部屋には小さいCDレコーダーがあったな。よく音楽を聞くのかな？

「へえー。どんな曲だ？」

「LIFEつて言う高校生バンドの曲」

「ライフ…ねえ…」

「ん？どうしたの？」

「いや、なんでもない」

気のせい…だよな？

「どんなバンドなんだ？」

「四人組んだけど四つの楽器だけで出してるとは思えないほどの色んな音を奏でるロックバンドなんだ」

偶然…だよな？

俺が立ちつくしていると思議そうな眼差しを向けられる。  
それによって我に帰った俺は結羽について行った。

CDシヨップなんて久々に来たな。

CDシヨップに着くやいなや奥の方に走って言ってしまった。

そして結羽を追って俺も奥の方に行くと思聴をしている結羽が居た。

「ん？あ、優也。優也も聞いてみる？」

と、付けていたヘッドホンを外して差し出してくる。

それを受け取って俺も付けてみた。

その瞬間、衝撃が走った。

入ってる曲は恐らくLIFEの物だろう。

確かに結羽の言う通り色々な音が聞こえる。

でも邪魔をしていない。いい曲だ。

これだけで四人の仲の良さが伝わってくる。

そしてヘッドホンを外した。

「いい曲だな」

「でしょ？このバンド好きなんだよね」

「だけどこれで確信を持った。」

『バンド組もうぜ！』

『良いなそれ！』

『俺もやりたい！』

『悪いが俺はパスだ』

『右に同じくだ』

『えー良いじゃんかよ。なあ』

『やりたいなら』四人で「やれば良いじゃねーかよ！』

元気にしてるかな？太陽、神大、優来、凌太

俺はある四人の友達のことを思い出していた。

「ん？優也。どうしたの」

「いや、なんでもない」

「じゃあこれ買ってくる」

そう言つて走つてレジに向かつていく。

さて、明後日入学式だな。どんな奴が入ってくるのだろうか？

常識人ならお近づきになりたい。

「まあ、まずは明後日になつてからだな」

そして結羽が戻つてきて一緒に帰つた。

## 第49話 新入生

side 優也

月曜日

今日は入学式。

そんな日でも俺らにとつちや普通の日だ。

入学式には在校生は参加しない。そして通常授業だ。

なんてめんどくさい。どうせなら在校生も入学式に出席して2時間位潰れてくれれば良いのに

まあ、そんなことを言っても仕方が無い。

とりあえず普通の人だ。普通の人が欲しい。

俺の周りはバカとバカ悠真とバカ白波さんと気難しい女の子二人に、傍から見ればカッポルの幼馴染に、掴みどころのない奴。そして普通の人オンリーワ。あれ？普通の人は俺の周りには少なすぎね？

そして昼休みになったんだが、入学生は校内を見て廻っている事になっっている。そのため何人かは先程から見かけている。

だが、こんな偶然あつていいものなのだろうか？

「やあやあ。我がライバル絆成 優也君」

京哉だった。

「あ、フルで覚えてくれてどうも」

「ここで君と出会えて嬉しいよ。やはり僕と君はライバルとして互いに」

以下略だ。3分もよく嘸まずにペラペラと喋り続けられるもんだな。と感心してしまうほどだったため略した。

「あ、そうですか。それではこれで」

と適当に流して去ろうとすると後ろから掴まれた。

「どうせなんだ。これから人気者同士語り合おうじゃないか」

まだなんかあるのかこいつは…

と言うか人気者は自分のことを人気者って言うか？

とりあえず俺にとつちや面倒くさいことこの上ないのでどうにかして切り抜きたい。

そして少し考えると脳裏にある一つの作戦が浮かんだ。

「あつちにお前のことが好きすぎてお前と今すぐにも話さないと死んでしまいそうだと言っている女の子が居たぞ？俺を見て嫉妬で変なオーラが出てしまっている。俺の為にも話してやってくれ。でないと俺はあの女の子に殺されてしまいかもしれない」

「それは大変だ！自分が殺されてしまうかもしれない時に他人の心配をするなんて！それでこそ我がライバル絆成 優也君！」

「興奮しなくていいんでさっさと行ってくれないですかね？」

「感動した！我がライバルに不足なし！」

話聞いてくれない…

「待っててくれ。子猫ちゃん！今、あなたの王子、新藤 京哉が今行くぞ！」

と言つてもものすごいスピードで走つて行つてしまった。

だがこれらは全て嘘八百。全て俺が作った話だ。

あつちには女の子なんて居ないし、そもそも話さなかったら死ぬなんて無いしそのため嫉妬に狂った女の子に俺が殺される心配もない。

計画通り。

恐らく今の俺の顔は非常にゲス顔になっているだろう。だがそんなのはどうでもいい。今のうちにここから離れよう。

そしてイケてる面をしているだけの性格が残念な男。略してイケメンが帰ってくる前に急ぎ足でその場を去った。

?????

おどおどして飯を買おうと購買に向かっているとふらふらと挙動不審気味に歩いている女の子が居た。

おどおどして気が弱そうだ。

そして他の人にぶつかるとおやまり倒してぶつかられた人も困つてしまっている。

やがてついに俺の近くまでやってきた。

すると彼女の顔がはつきり見えて驚いた。

あの子は…神乃さんの妹

「き、君！」

と、思わず声を掛けてしまった。  
するとビクウっ！と肩を震わせて固まってしまった。

そして俺の事を見るやいなや自分の肩を抱いて俺から離れていく。

「わ、私の事を食べても美味しくないですよ」

は？・何言ってるんだ？・こいつ

「わ、私はまだ小さいですし幼いですし」

「ちよつと待て！なんで俺が君を食べるんだよ！」

「う、うう：もうちよつと清い体で居たかったです。あの：もうちよつとしたら多分もつと美味しくなると思うので待つてくれませんか？」

「話聞いてくれ」

と言うか今サラツと凄いいこと言わなかったか？

「とりあえずなんで俺が君を食べると思ってるんだよ」

「だ、だって：男の人はみんなケダモノだってお姉ちゃんのお友達が凄いい偏見だな。」

「とりあえず俺は見境なくそういうことはしねーから」

「本当に？本当ですか？」

何度も尋ねてきた。

「ああ、本当だ」

そんな話をしてしていると遠くからおーい！と言う声が聞こえてきた。

「良かった。ここに居た：ん？あ！絆成君」

すると向こうが俺に気がついて声を掛けてきた。

「そういうあなたは神乃さんじゃ無いですか！」

神乃さんだった。

「ありがとう。この子を捕まえててくれて。この子危なっかしいから…」

そう言つて妹さんの頭を撫でる神乃さん。

微笑ましい姉妹だな。

「ん。お姉ちゃん：私はもう子どもじゃないんだからあ」

そう言いながらも嬉しそうな妹さん

「でもよく逃げなかったね。この子は人見知りだからすぐ逃げるの

に」

「その代わり凄い勘違いをされそうになったけどな」

そう言うのと神乃さんは頭にハテナを浮かべた。

「それより」

俺が何勘違いされそうになったのかは気にならないのか。

「一緒にご飯食べない？」

それよりの内容はご飯のお誘いだった。

「なんでですか？」

ハモった。

それを見て神乃さんはくすりと笑いながらこう言った。

「だってついこないだ会った時はあんなにおびえてたのに今は隠れもしないじゃない」

そう言われて二人で顔を見合わせる。

「あ、」

そうハモった後、すぐさま妹さんは神乃さんの後ろに隠れた。

「怖いです」

「：なあ、なんか嫌われるようなことしましたかねえ？」

「強○される！」

そう妹さんが言うのと神乃さんはジト目で見ながら妹さんの事を腕の中に隠した。

「しねーよ」

「じゃあレ○プされる！」

「一緒だよ！」

そう言うのと神乃さんは笑った。

「ここまで他人と話してる露木ちゃん初めて見たよ」

そうか。それは良かったですね。俺は賛同出来ません。

「それよりもえーと：神乃さん妹」

「露木でいいです」

「じゃあ露木ちゃん。さっきの言ってた話は本当か？」

「はい。お姉ちゃんのお友達が確かに言っていました」

「そうか」

「今度あったら説教だな。」

「ん?????  
くしゅん」

「ん? どうした? 白波くん、風邪か?」

「いえ、多分誰かが噂をしたのでしよう。それよりも震えが止まりません」

「ほ、本当に大丈夫か?」

「はい」

「お大事にな」

「ありがとうございます」

「?????」

「それよりもお昼、どうするんですか?」

「あ、じゃあそちらがご迷惑じゃないなら」

「じゃあ決まりだね!」

そうして俺達は歩き出した。

あれ? 何か忘れているような。



## 第50話 露木と夕華

side 優也

俺は神乃さんに着いて行ってどこで食べるのかを決めていた。と言つても俺はついて行つてただけで特に何もしていない。

変わった事といえば、露木ちゃんの態度が初めてあつた時に戻ってしまったというくらいだ。

どうしたら心を開いてくれるかね。

「どこで食べようか？」

と神乃さんは問いかけてくる。

「とりあえず強○魔を撒きましょう。じゃないと私達の貞操が危ないです」

「まだそれ言うか」

露木ちゃん曰く、もう既に男イコール強○魔として公式が成り立つてしまつてゐるらしい。

「絆成くんはいい人だよ。ちよつと女タラシでいつも5、6人位の女の子を連れて歩いてるだけだよ」

「ひっ!？」

「神乃さーん。不安を煽るような嘘はやめてください。連れて歩いてるのはいつも1人2人です」

「まったく…この人は…白波さんが憑依してきてるんじゃない？」

その可能性は充分に考えられる。

「あ、いい場所発見」

そこは校庭の裏校舎の近くで、人目には付きにくいものの桜が満開でとてもいい場所だった。

それにこの季節だ。春の心地よい風が吹いている。

「んじや、ここで食べましょうか」

そう言つて座ろうとすると俺はある失態に気がついた。

何故なら今の俺は手ぶらなのだ。

普段なら弁当も持つてきていない俺は購買に行つてサンドイッチでも買つている頃であろう。

だが今日はこの人たちに捕まってしまった為、俺は買う暇もなくこっちに來てしまった。

サーっと顔が青ざめていくのが分かる。

今から買いに行つてここに戻つてくる時間など無い。だがしかし俺の昼飯は無い。

となれば必然的に飯抜きだ。

そんなことを考えていると神乃さんは俺の異変に気がついたのかニヤニヤしながらこんなことを言つてきた。

「んー。ん？あれー？絆成くーん。お昼ご飯はどうしたのー？もしかしてー。忘れたのかなー？」

そんなことを言われて恥ずかしくなり、顔が一気に赤くなるのが分かる。

普段だつたら「うざい」で済ますのだが、今の俺にはそんな余裕は無かつたため、黙り込んで閉まつた。

「絆成君。こんな言葉を知っているかい？沈黙は肯定なりつてね」  
凶星であつた為、何も言い返すことも出来なかつた。

だが、このままじゃもつと弄られるだけだ。こうなつたらいつそ「ああ、そうだよー俺は昼飯を買い忘れました！」開き直つた。

この方が清々しいだろう。  
「清々しいまでの開き直りっぷりだね。私、そういうの嫌いじゃないよー」

あなたの好き嫌いは聞いてないんですが…

「そんな君に免じて私のお弁当を分けてしんぜよう」  
そう言つて自分の弁当を開く。

中には白米、卵焼き、ウインナー、唐揚げ、ほうれん草のおひたし  
等など色々が入っていた。

そして見たところ冷凍食品はなさそうで、全て手作り感があつてどれも美味そうだった。

「露木ちゃんの作つた料理は美味しいんだからー」

ん？露木ちゃんの作つた料理？って事はもしかして

「これ全部露木ちゃんが作つたのか？」

「そうだよー。凄いでしょ」

「ちよーお姉ちゃん！」

勝手に暴露した姉に向かって抗議する妹。

「いいじゃーん。減るもんじゃないし」

「で、でもー！」

「でもこれだけ作るってスゲーな。朝の少ない時間にここまで色々作るなんて」

と褒めると露木ちゃんは神乃さんの後ろに隠れて後ろを向いてしまった。

あれ？もしかして怒ってる？何か怒られるようなことしたかな？

「あー露木ちゃん、照れてる！普段男の人に褒められなれてないもんね」

そして振り向いて露木ちゃんの頭を撫でる神乃さん。

「あー。照れてたんですね。てっきり俺は気分を害してしまったかと」

「それは無いよー。ね、露木ちゃん」

「さ、最悪ですよ。強○魔に褒められるなんて一生の不覚です」

「と、仰ってますが？」

そして俺は神乃さんを何事も無かったかのような表情で見る。

言われすぎて慣れてしまったのである。

「んー。露木ちゃんもここまで毛嫌いするってことは無いはずなんだけど…何かした？」

「逆に何もしなさすぎるくらいですよ」

露木ちゃんが勝手にレッテルを貼ってきてるだけだからな。

「露木ちゃん。絆成君は悪い人じゃないんだよ？」

「それは知ってます。ただたのし…ゴホン、反応が面白かったのです」

「反応が面白いってなんだよ」

「という訳なのでこれからも続けてよろしいですか？」

「宜しくないです」

そんな会話をしていると「ふふっ」と聞こえた後に「あははは」と

笑う声が聞こえてきた。

俺と露木ちゃんは声の主の方を見ると目尻に涙を浮かべて笑っていた。

「ご、ごめんね。露木ちゃん。絆成君。でも他の人とこんなに楽しそうに話している露木ちゃんを見ると嬉しくなっちゃってしまっ」

「楽しそうでは無いです」

「楽しそうだよー。だってこんなにも笑顔なんだよ」

とスマホの写真フォルダを見せてくる神乃さん。

そこにはニコニコと笑いながら俺と言いつ争っている露木ちゃんの姿が写っていた。

「い、いつ撮ったんですかあっ！消してください！今すぐ消してください。さあすぐに！」

「嫌だよー」

その後、何とか神乃さんのフォルダからは消すことに成功した露木ちゃんは顔を赤く染めながらも近くのベンチに三人で一緒に座って食べた。

取りあえず神乃さんから貰ったあと何故か「えっと、その量じゃ食べ盛りの男子高校生には足りないだろうし…」と、頬を染めながら自信作だというほうれん草のおひたしと卵焼きをくれた。

なんだかんだ良い奴だ。

その後、午後の授業の合間の休憩時間。俺はスマホを見ていた。いつの間にか追加されていたLINE、名前は夕。十中八九神乃さんだろう。

恐らくLINE Name、ホワイトウェブ。まあ、白波さんの事だがこの人の仕事だろうと考えている。

まあ、その夕とのLINEを見ながらこう呟いた。

「はあ…露木ちゃんも苦労してるんだな…」

と言いながら送られてきた写真をちやっかりと保存した。

## 第51話 LIFE part 1

side 優也

さて、今日も今日とて学校だ。

そしていつもの様に俺の隣には結羽が居た。

だがいつもと違うのは結羽は片耳にイヤホンを挿して音楽を聞いていることだ。

「何聞いてんだ？」

「LIFEの『変わらない為に』だよ。この間買った曲なんだ」

そう言えば何曲か買ったな。

どんな曲なんだろう。ちよつと気になってきたな。よしっ！

「ちよつとこつち借りるぞ」

「あ！優也」

そして結羽のイヤホンの片方を耳に付ける。

やはりLIFEの特徴の様々な音を出しつつ、ヴォーカルの声も負けちゃいない。

よくもここまで激しい声でずっと歌い続けられるものだ。一般人の俺だったらすぐ声潰れるぞ。

そして隣を見てみると顔を耳まで赤くした結羽が居た。

「どうした？結羽。熱でもあるんじゃない？」

「ない」

「いやでも…」

「ない！」

「わ、分かった」

そして歩いていると

「わわわー！寝坊したー！」

寝坊してこの時間か…すごい人も居るもんだ。

まだ8時10分だぞ？

すると真横を物凄いスピードで走り去っていく人が

「リア充が居る!?!」

と叫びながら。

すると豆くらいに小さくなったところでピタツと止まった。  
果たしてあいつは何がしたいのだろうか？

「あああああっ!？」

今度はなんだよ。

しかし、少しばかり嫌な予感がするのは気の所為だと願いたい。  
すると今度はドダダダとこつちに走ってきた。

そしてそのまま通り過ぎる。

するとその顔を見た結羽はピタツと止まって固まってしまった。  
あれっ?この止まるのって流行ってるのか？

そして俺は結羽の前で手をチラつかせる。だが、反応はない。

こりや完全に思考が停止してますな。

「行き過ぎたー!」

今度はまたこつちに来るようです。

そして今度は俺達の目の前で止まった男。

おい、何故そこで止まる。

「久しぶりだな!優ゆうの字。元氣してたか?」

は?こいつ何を言ってるんだ?俺の事を優の字なんて呼ぶのは俺  
の知り合いに一人しか居ないぞ。

「あの一。どちら様で…」

「はあっ!?!忘れたのか?俺の事を笹沼ささぬま 神大しんだい」

「はあっ!?!お前神大なのか!?!」

そんな話をしていると横で結羽が我に帰った。

「あ、あの一。お二人はどういう関係で?」

「しんゆ「ただの知り合いだ」」

神大に重ねて言った。

「全く〜つれないな」

「肩を組むな肩を」

と抵抗するも神大の馬鹿力によって外れない。

何だこの力は

「ええっー!」

急に大声を出す結羽に驚く俺と神大。

「し、知り合いだったの?」

「ん?なんだ。君、俺の事を知ってるのか?」

とまだ状況を飲み込めてないようだったので説明をする事にした。

「こいつ、お前のバンドのLIFEのファンなんだ」

するとキラキラと目を輝かせる神大。

「優の字。それは本当か!」

そして神大はギターを持っているかのようなポーズを取ってから名乗り始めた。

「俺は男子高校生バンド、LIFEのギター兼ボーカル担当の笹沼

神大。よろしくな」

すると結羽は自分のバッグを漁り出した。

そして一枚の色紙を取り出した。

なんであるんだよ。

「あ、あの。サインください」

「ん?ああ、良いぞ」

と言ってサインをスラスラと書いていく神大。

「ほらよ」

これが神大のサインか…

これは筆記体でjindaiと書かれている。

「ありがとうございますー!」

と何度も頭を下げる結羽。

「いやいや、良いって。それよりも君達、いつまで見せつける気かな?」

ん?見せつける?どういう事だ?

すると結羽から湯気が出始めた。

「こっこ、これは違うんです!曲を聞いていただけで…。そもそも付き合ってますし」

結羽がそう言うのと神大が耳打ちしてきた。

「まだ七海を助けるんだ!って血眼になってるのか?」

「いや、今はそれほど執着してねーよ。確かにまだ助けたいという気持ちはあるけど、今はあいつの分まで今を楽しんで土産話を血眼になって作ってるって感じだな」

「相変わらずのシスコンつぶりで結構」

「だからシスコンじゃねーっての」

そこまで話すと神大が離れていった。

「とまあ優の字、感動の再会を果たした訳だが、今はあまり時間が無い。放課後どうだ?」

「あ、俺勉強をしなくちゃー」

と通り過ぎようとする襟をガシツと掴まれて、元の位置に戻される。

「どうだ? (威圧)」

とうとう威圧してきたよこの人怖い。

でもまあ行ってもいいかな? どうせ用事もないし。

「はあ…分かりましたよ。で、どこに行くんだ?」

「そうだな…んじゃ勇名高近くの喫茶店で待ち合わせはどうだ?」

「分かった」

「それと陽の字、来<sup>らい</sup>の字、太<sup>た</sup>の字には俺が言っとくから」

あいつらも来るのか。LIFE全員集合だな。

「分かった。悠真には俺が…」

「え!?!悠<sup>はる</sup>の字の連絡、出来るのか!?!」

「ああ、まあな」

「よし、じゃあそんなもんで…」

そこまで言ったところで結羽の方を見た。

「所で君も来るか?」

「え!?!良いんですか?」

「優の字と仲良さそうだからな」

するとキラキラと目を輝かせる結羽

「喜んで行かせていただきます」

「分かった。んじゃまた後でな」

そして走って行ってしまった。



はあ：どうしてこうなった。

まあ面倒臭いけど担になった仕事はちゃんとやらないとな。  
ちゃんと伝えておくか。

その後、イヤホンを外し忘れたまま、下駄箱も近かったので外れず  
一緒に歩いて行ったら一つのイヤホンを付けている俺と結羽を見  
た奴らに弄られたのはまた別のお話。

## 第52話 L I F E p a r t 2

side 優也

あれから数時間後学校も終わり、放課後になった。

「なんだよ優也。普段俺に素っ気ないくせに引きずり回して」

そう、俺は今悠真の制服の襟を引っ張って歩いている。

「と言うか結羽がこっちを気にせずにとワクワクオーラを放つてるのが気になるんだが？」

そう悠真の言う通り、いつもなら結羽はこちらを見て苦笑いをしてるんだが、今はいつに無く笑顔だ。

「ただ好きなんだよ。L I F E

ちなみに駅を一つ跨いだ先にライブハウスなるものがあるらしいが、俺は一度もL I F Eのライブに行ったことが無い。

それは悠真も同様だ。

なぜなら悠真はL I F Eが結成された1ヶ月後位に転校して行ってしまったからだ。

俺の理由は…まあ、L I V E当日に七海と買い物行く予定が入ってたからだ。

おいそこシスコン言うな。

「と言うかこっち来るのも久々だな…」

「ああ、そうだな。じゃあお前はもつと驚く光景が広がってるだろうよ」

そう言つて悠真を喫茶店に向けて投げる。

「うわっとー！」

と少しバランスを崩しそうになりながらも立ち止まった。

「ここか？」

「ああ、もうすぐ来るらしい」

「来る？誰が？」

そう言うのと遠くからだだだと言う効果音の聞こえそうな音が聞こえてきた。

そしてその方向を見ると一人の人物が走ってきた。

赤髪でヘッドバンドを付けている。

そしてその人物は俺達の前で立ち止まった。

「燃えて燃えて燃えまくれ！全てを照らし尽くすサン！燃杉もえすぎ 太陽たいよう」  
とびしいつとポーズをキメる太陽。

「相変わらず熱いな。お前のそのノリは」

「こんにちは絆成君。久しぶりに河川敷を一緒に夕日を背に走ろうではないか」

相変わらず熱いやつである。

ちなみに久しぶりとあるが、俺は一緒に走っていた記憶はない。いつもこいつが一人で100週くらいしてたくらいだ。

すると数分してからもう一人来た。

「はあ…はあ…」

疲れ果てたような様子の男が来た。

「大丈夫か？優来。水飲むか？」

「シャドースカイ君！もつと熱くなれよ！」

だから熱いつて

「そ、その呼び方はもうやめてくれ黒歴史だ…」

声がカスカスで死にかけじゃないか。

きつと太陽に付き合わされたんだな。

お前の事は1時間位忘れない。

「ふう…やつと息が整ってきた」

生きてたか

「改めて…コホン…ドラム担当の」

そう言つてバックからスティックを取り出して振り回す。

「黒天こくてん 優来ゆうらいだ」

「え？あの自己紹介はやめたんですか？」

「あの自己紹介？」

「あれですよあれ。黒より黒き」

「ヤアアメエロオオッ！」

本当に黒歴史つて怖いよな。

『優也、もしかしてこいつら』

『ああ、あの太陽と優来だ』

すると目を急に嬉しそうに目を輝かせる。

「よ、久しぶり。坂戸 悠真だ。って無視!」

悠真の話を尻目に俺のところに来た。

「久しぶり。優也。元気してたか?」

「……我が名はシャドースカイ。黒より黒き空に」

「だからヤメロー!」

ちなみに今言おうとしたのはこいつの昔の自己紹介だ。

そう。皆気づいてるかと思うが、こいつは昔は厨二病だったのだ。

「皆にはスカイって呼ばれてたよな?」

「だからやめろよ!」と言うか俺はそう呼ばれたことなど一度もない」

今のは俺の作り話だ。誰もこいつをスカイ等と呼んだことは無い。

いつも黒天と読んでいた。

「とりま久しぶり。太陽、優来」

「お、俺は?」

そろそろ可哀想だな。ちよつと構ってやるか。

「そうだ。ゆうs」

「お!皆早いな!」

「…」

惨めだ…

「優の字と、それに…えーと」

「柴野 結羽です」

何気に苗字は久々に聞いた気がする。

「漢字はどう書くんだ?」

「苗字は柴犬の柴に野原の野。名前は結ぶに羽です」

「結ぶか…じゃあ結ゆいの字だな」

おい、いきなり馴れ馴れしいな。

でも結羽も嬉しそうだし良いか。

「キーボードの淵田ふちだ 凌太りょうただ」

そう小さく涼太は呟いた。

こいつはクールな奴だ。そして笑ったところを俺は一度も見た事

が無い。

いつも無駄なことをしない主義で、そしてマフラーを首から口にかけて覆うような形で巻いている。

曰く『このマフラーを巻いていると安心するから』らしい。

暑くないのかな？

んで太陽。こいつはいつもどんなことにも全力を尽くす。

それはそれで良いんだが、他人を巻き込むのはやめて欲しい。

先程も言ったがこいつは赤髪で、額にはヘッドバンドを付けている。

そんでもって優来。こいつは昔は厨二病で、自己紹介の時の衝撃を俺は未だに忘れていない。

『我が名は黒天。黒より黒き漆黒の空。まさにこの俺に相応しいではないか』

この時、教室内は『あ、察し』的な雰囲気漂い、皆が苦笑いをしていた。

今ではかなりの好青年となり、腕に巻いていた包帯は無くなっていった。

そして神大。こいつは優男だ。つまりイケメソだ。

構内での告白される率トップ。だが、1回も受けたことが無いという伝説を作った奴だ。

性格は慌ただしい奴って言うか、なんとと言うか性格を知れば知るほど残念な奴だ。

「よし、優也。悠の字は何処へ？」

「ここに居るぞ」

と首だけで位置を合図する。

「おおーっ！悠の字。久しぶりだなー！」

「まあ…うん…」

やはりこうなった。

無視されすぎて落ち込むこいつなんてレアだぞ。

「悠真君っ！久しぶりっ。帰ってきていたんだなっ！再会を盛大に祝おうじゃないか」

「お、おう…」

ちなみに悠真は太陽の事を唯一苦手にしている。  
分かる。分かるぞその気持ち

「取りあえず中に入らないか。外で長話はあまり良くない」  
と凌太。

相変わらず抑揚よくようのない声だ。

「そうだな入ろう」

と俺達を仕切しきる神大。

ちなみにLIFEのリーダーはこいつではなく凌太だ。

凌太曰く『お前らを野放しにしておくとか何しでかすか分からないか  
ら俺がリーダーをする』らしい。

ちなみに何故バンドに賛成したかと言うと、これまた同じ理由らし  
い。

『ふふっ。賑やかだね』

と結羽が俺に耳打ちしてきた。

「賑やかすぎて困るくらいだ」

そんな話をしながら俺達は喫茶店に入ってしまった。

## 第53話 LIFE part 3

side 優也

俺達は喫茶店に入った。

そして中から出てきた店員に案内してもらって席に着く。

7人だけ座れる場所があつて良かった。

「んじや俺カレー」

「ねーよ」

「俺はラーメンね」

「ねーよ」

「んじや俺はカルボナーラな」

「ねーよ!」

「俺はブラックコーヒー」

「だからねえっ…あるな」

上から太陽、優来、神大、凌太の順だが、そのままの勢いで凌太のも否定しそうになった。

「んじや、俺はうどんな」

悠真が言うと一緒にジト目を向けた。

「優也と凌太なら分かるけど太陽、優来、神大。お前らにだけはそんな目をされたくない」

と、なんとも言えない表情をしていた。

「んじや改めて。俺はコーラフロート」

『え!?!』

結羽と悠真以外が皆驚いた。

「何を頼むイメージを持ってるんだよ」

「いやあー。悠の字の事だからいなごの佃煮つくだにって言うかと思つてた」

「頼まねーよ!俺は昆虫食べる趣味なんてねーよ!」

まあ、無いのだから頼めるはずも無いのである。

「んじや俺はブラックコーヒーとたまごサンドイッチで」

実は少し小腹が空いてきたのである。

「わ、私は…こ、コーヒー!ブラックで!」

と結羽は足をガクガク震わせながら言った。

「大人っぽく振る舞わなくても良いんだぞ？いつも俺ん家でも砂糖を  
もがが」

俺が言い切る前に口を押さえられた。

そこまで自分を犠牲にしてよく見せたいか!?

そんなことを話している間に悠真達は注文を終えたようだ。

結羽の顔色が悪い。今やっと後悔し始めたのだろう。

砂糖一杯でも苦いと言うのに、ブラックなんて

「お待たせしました。ココア二つとメロンソーダ。コーラフロートと  
コーヒー三つですね。ごゆっくり」

と店員が運んできた。

ちなみにココアが太陽と神大、メロンソーダが優来だ。

そして満を持して結羽は震える手を抑えながら一口含んで飲み込  
んだ。

「ケホツケホツ」

やはり結羽には厳しかったらしい。むせてしまった。

「お、おいひいでしゅ」

滑舌が回ってないと説得力が無いぞ。

「はあ…だから言ったのに…」

そう言つて俺は結羽からカップを奪った。

「ちよー優也!?!」

「結羽。飲めるのか?」

そう言つと結羽は小さく首を横に振った。

「んじや持ったないないから俺が貰うぞ」

そして俺はカップに口をつける。

すると一斉に視線を感じた。

「なんだ。お前ら」

「いやあー。白昼堂々ね…このカッププルったら嫌ねえ。凌太さん」

「気持ち分かるけど気持ち悪いからやめろ。今度やったらお前の  
シャーペンの芯がテスト中に全部なくなることになるぞ」

うわあー。地味に言うかかなり嫌な嫌がらせだ。



昔からこいつの脅し文句はかなり嫌な嫌がらせだった。

帰る時間に下履きが無くなるや、授業の時間になってもその教科の教科書が見つからない等。地味だったりかなり嫌な嫌がらせをしてこようとするので。

ちなみに俺の場合はマッキーのキャップが見つからなくなるって言う脅しをされた。

冷静な口調で言う分、余計に怖く感じてしまうのだ。

「つて言うかカップルなんてどこに居るんだ？」

俺だけが飲み込めてなかったようだ。

「そうだったな。優の字はそう言うの気にしないんだった」

そう言うのってなんだよ。

少し考えてみる。

するとある結論にたどり着く。

「そう言うのってなんだよ」

やっぱり分からなかった。

「間接キスだ。間接キス」

と凌太は気だるげそうに言った。

「間接キスくらい別にどうってこと無くないか？」

それが俺の考えだった。

「じゃあお前は誰彼構わずマウスとウーマウスでキスするのか？」

「それとこれとは話が違うだろ」

俺は普通のキスなら躊躇うが、間接キス位で慌てることは無いと言うのが俺の考え。

「んじゃあ、そのカップは結羽が口を付けたカップだ。それに口をつけるといふことは結羽とキスをしたと道理だ」

それを聞いて俺は自身の顔が赤くなるのを感じた。

「全然違うと思う」

弱くなってしまった。

「あれ？顔赤いけど…もしかして今更恥ずかしがってるのか？」

「ちげーよ。次この事だからかってきたら凌太が動くぞ」

「俺に振らないでくれ」

俺が1番仲がよかったのは凌太だったので助けをもとめてみる。

「まあ、これ以上この話をつついて絆成を困らせるようなら俺にも考えがあるがな」

まあ、なんだかんだ言っただけで俺を庇ってくれるのが凌太だ。

しかも表情と声色で感情を読み取れないから余計に怖い。

「ほら結羽。砂糖入りだ」

と俺のコーヒーを結羽に渡した。

俺は結羽の為に一口も飲まないで砂糖を2杯位入れて置いた。

「どうして?」

そう聞かれて俺は理由を考えてみるが何も思い浮かばなかった。

「なんでだろうな…気がついたら体が勝手に動いていた」

そう言っただけで俺はまた一口コーヒーを飲む。

何でだろうか…今までだったらあんなこと言われても対して気にしなかったのに、何故か意識してしまう。

「んじゃあ。まず何をやる?」

「取りあえずはここは待ち合わせに使っただけだからどこか遊べる所に行くつてのも手だよな」

とLIFE+悠真が話していた。

「結羽はこの後どうしたい?」

「うーん。皆と一緒にならどこでもいいかな?」

「そっか」

すると太陽が急に立ち上がった。

「ゲーセン行こうぜ!」

「げーせん?ゲーセン…マジで?」

ゲーセンは最後いつ行ったかも分からないくらい昔に行った。

しばらく行ってないから内装変わってるかな?変わってても昔のを忘れてて気が付かないと思うけどな。

「そんじゃ飲み食い終わったらゲーセン行くぞ!」

『おー!』

俺と凌太以外の声だった。

## 第54話 L I F E p a r t 4

side 優也

俺達はゲーセンに来た。

久々だな…

なんと言おうか色々ギラギラしていて目に悪い空間がそこには広がっていた。

「よし凌太。あれで勝負しようぜ」

「…分かった。じゃあ負けた方が今後…皆のサイフな」

何その今後の人生をも左右する罰ゲーム!?

俺は心中でそう突っ込む。

ふと見ると凌太を誘った神大も青ざめて冷や汗をかいていた。

「冗談だ」

冗談に思えない冗談はやめて頂きたい。

「良かった…じゃあ罰ゲームは」

「あれな」

と凌太が食い気味に言い放って指を指したその先にはありえないほど鋭利な足つぼマツサージがあった。

ちなみに針も1箇所にいっぱいあつたら刺さらないと言う法則があるから刺さらないのは分かっているが、それでも想像したら痛くて痛くて…やばい…聞いているだけに震えてきた。

「じよ、冗談ですよね？」

と神大は期待、それと恐怖を込めた声で恐る恐る聞いた。

「…いや、これは本当だ」

「いよっしゃー！負けらんねえっ！」

完全に空元気だ。

そして神大と凌太はあるアーケードゲームの席に座った。

「んじゃ俺達は平和な遊びでもしようか」

「だな」

「よし、遊ぶぞー！」

取り残されてしまった…

俺と結羽のみがここに残ってしまった。

向こうでは「ア、アアア。やべえっ！」と神大が騒いでいる。

向かいの台では「静かに出来ないのかお前は」と淡々と凌太が呟いていた。

「何するかねえ…」

生憎と俺は徐々にここに来るからどうしようかと言うのは瞬時に考えつかない。

そんな時、急に袖をクイクイと引つ張られた。

引つ張られた方向を見るとそのには俺の袖を掴んでいる結羽が居た。

「わ、私と一緒に遊びましょう」

「なんで敬語なんだよ。最近敬語使ってないだろ」

いつの間にか結羽は敬語が外れていた。

「と、とにかく一緒に廻らない？」

「んだな。一人で廻ってもいいが、二人で廻った方が楽しいもんな」

「そう！そういう事！」

と声を荒らげて肯定する結羽。

急にどうしたんだ？

「んじやまあ、何からします？」

「じゃあまずあれ」

と結羽が指をさした先にはプリクラ機があった。

「ん？あれ撮るのか？」

「うん！」

「で、でもなあ…俺自身同年代の女の子と撮ったことないからハードルが…」

そう言う時結羽は首を傾げながらこう聞いてきた。

「撮ったことあるの？」

「あるよ」

俺は淡々と答えた。

「へ、へえ…ち、ちなみに誰と？もしかして彼女さんと？」

「居ないし、今同年代の女の子と撮ったことないって言つたら」

「で、でも、綺麗なお姉さんとか幼い子供とかと付き合ったりして」  
「無いよ！そもそもお姉さんならまだしも幼い子供は軽く問題だよ！」

俺は食い気味に突っ込んだ。

いきなり何を言い出すんだこいつは

「じゃあ誰と？」

「七海だよ。妹の」

そう。俺は今まで1回だけ七海に連れ回されて撮ったことがある。

因みにその時撮ったやつは今は俺の引き出しの奥にある。

「なるほど」

そこまで言うのと自然と俺の手を握って引っ張っていく。

「じゃあ実質家族以外と撮ったことは無いんだよね？」

「ああ、無いな」

「じゃあ私が初めて貰っちゃうね」

「ゴホツケホツ」

生唾を飲み込むと唾が気管支の方に行ってしまった。

いきなりの発言によりむせてしまったのだ。

その発言危ないですよ!?

しかし当の本人は気がついてないようだった。

「じゃあ撮るからポーズ取って」

「ポーズって何をすればいい」

「例えば」

そう言って結羽は片手でハートの半分を作った。

「それじゃカップルじゃないか」

この時だけは凌太が乗り移ったんじゃないかと思うくらいの冷静な言葉を投げかけた。

「かかか、カップル!?!」

すると結羽の顔がどんどん赤くなっている。

「と、取りあえず適当にやって」

適当って言ってもなあ。

すると撮影開始ボタンを押す結羽。

まだポーズ決めてないのに。

そしてシャッターが鳴る少し前に「えいつ！」と腕に抱きつかれて変な顔になった。

その瞬間、パシャと写真が載って撮れた。

しくったな。変な顔で写ってしまった。

「じゃあ、落書きするよ」

しかし俺にはそんな知識ないので傍観する事にした。

写真をのぞき込んだが我ながらひどい写り方だった。

そして結羽は手慣れた手つきでプリクラ機を操作していく。時折顔を綻ばせながら。

「出来たよー」

そして出来たプリクラを印刷して二つ出来たうちの1つを俺に渡してきた。

「サンキュっ」

もう一度見てみるとやはりひどい顔だったがそんなことはどうでも良くなるほどの物があった。

「なあ、これ：なんかカップル見たいじゃないか？」

と写真を見せてある部分を指さす。

写真には楽しいって書いてあるだけだったが、もつと気になる部分があった。

それは、俺達の周りが大きなハートで囲まれていたことだった。

「い、良いじゃん。だってこういう時の定番でしょ？」

言われてみればそうなのかもしれないがなんか恥ずかしいな。

「そうやってるとさ」

「ん？」

と急に俺と結羽以外の声がした。

「初々しいカップルみたいだよな」

悠真だった。

見てみると神大以外がそこに居た。

「あれ？神大は？」

そう聞くと凌太は無言で親指で後ろを指した。

「アアアアッ！」

「愁傷さま。」

意外とこいつは残虐な所があるからな。あまり逆らわない方が良い。

「さてとこれからどうするんだ？」

「絆成君。一緒にあれをやろうじゃないか」

と太陽が指をさした先にはエアホッケーがあった。

「いいぞ。負けたらあれをやる」

そう言つて神大がいる方を指す。

「よっし！燃えてきたぞ絆成君！これまで99勝99敗100分け。今回で決着と行こうでは」

「いやいやそんなにやってないから」

何が楽しくて298戦もしなくちやいけないんだよ。

「まあ、取りあえずやるか」

結果は俺の勝ちだった。

暫くやつてなかったが、昔七海がエアホッケーにハマってた時期があつてそれによつて相手をさせられてた俺は鍛えられていたから体が覚えていたんだろう。

それにより太陽も神大の隣で叫ぶことになった。

よし、見なかったことにしよう。

その後も色々なゲームをした。

終わった頃には太陽と神大の目から光が消えていた。

しかし太陽の弱った姿は新鮮だったな。

「今日は楽しかったな」

「ああ、久しぶりの全員集合だったな」

と話す悠真とLIFEの面々

「優也はあの輪に加わらないの？」

「苦手なんだよああいうワイワイしたの」

俺には輝いて見えて触れてはならないものに見えてしまう。

それどころかLIFEの奴等は今や有名になってしまつて…

「結羽はどうだった？」

「楽しかったよ」

「そうか：なら良かった」

「んじや俺達こつちだから」

と言つて俺と結羽の二人にされた。

いや、俺と結羽以外そつちだったのかよ。

結羽はもう一本先だ。

「じゃあ優也。また明日」

「ああ、じゃあな」

どう言つて結羽と別れて家に向かう。

????

「おたいま」

「おかえり優也」

珍しく俺より先に父さんが居た。

「珍しいな。優也が夜帰りだなんて」

「別に良いだろ？」

そう素っ気ない態度をとる。

「優也、飯を作っておいたからな」

「分かった」

そう言つてサラララップに包まれた料理を食べる。

久々だな父さんの料理は：最近では結羽に作ってもらうことが多かったし

「ご馳走様」

そして特にこれと言つた会話もせず、素っ気ない態度で自室に戻つた。



二年生編一学期 消失編（序章）  
第55話 体育祭の時期らしいです

消失・・・それは無くなること。持っていたもの、当たり前だったものが無くなると人は悲しむ。

それは大事にしていたぬいぐるみであったり、物・・・もしくは・・・身近な大切な人であったり。

当たり前だった物など直ぐに崩れ去る。

そう。俺、絆成 優也も過去に当たり前だったものを失いかけたことがある。

妹の七海だ。

事故なんてのはいつ起きてもおかしくない。大切なものなどいつ崩れてもおかしくない。

友情や愛情などはちよつとした出来事だけで無と化す<sup>か</sup>のだ。

それは誰の身にも起きうる出来事。

そしてそれは誰もが乗り越えなくてはならない壁。

果たして俺、絆成 優也は乗り越えれたと言えるのだろうか？

side 優也

目が覚めるとそこには七海が居た。

「なんで七海がここに?」

「お兄ちゃん。何言ってるの?ずっと一緒に居たじゃん」

「七海…」

そうか…今までののは全て夢だったんだ。

そう思ってた俺は七海に近づく。

すると急に猛スピードでトラックがやってきた。

そしてドガツと音がした後、嫌な光景が広がった。

「七海…七海…七海いいっ!」

?????

「七海いいっ!」

と俺は起き上がった。

「ここは俺の部屋か…」

そして部屋を見渡すが七海は当然どこにもいない。

「夢オチか…」

久しぶりに見たこの夢。

中学の頃はよく見ていた夢だ。

「はは、ひっでえ顔」

洗面台の鏡に映った俺の顔を見て苦笑をこぼす。

そしてパチンと両手で頬を叩いて気を引き締める。

「よし、」

っと俺は意気込んで支度を始める。

父さんはいつも通り俺より早く仕事に出てしまっている。

こんなことはざらだ。

最近は労働基準法がなんだかんだと言って残業せずに帰ってくることも増えたらしい。父さんがさり気なくそんなことを言っていた。逆に残らないでくれと言われるのは凄いなと感心してしまう。

そして食パンを用意してその上にハンバーガーに挟まってるようなチーズを乗せて小さくカットしたベーコンを何個か乗せ、その上からケチャップをかける。

そしてその出来上がった物をオーブンにていい具合に焼く。

これがなかなか美味しいのだ。

そしてその出来上がったパンを食べながらコーヒーを啜る。これ  
がなかなか乙な物だ。

俺はこの朝の時間が好きだ。

一人きりのリビングにて一人きりのモーニングコーヒータイム。

そしてテレビを付けて朝のニュースを見る。

「はあ…いいい」

今日もこの家から出て登校すると結羽が合流して色々な人に絡ま  
れて…

その為の鋭気を養っているのだ。

「ふう…そろそろ行くか」

そしていつもの学ランを着て玄関のドアを開ける。

開けると眩い光が俺を襲う。

さっきまでカーテンも開けない電気も付けない薄暗い部屋にいた  
直後のこの明るさは目に悪い。

そしていつもの様に登下校路を歩いていると「優也ー!」と結羽が  
横道から来た。

「おはよう」

これがいつもの日常だ。

ちなみに待ち合わせている訳でもない。

「おはよう」

と俺も挨拶を返しておく。

??? ???  
そして色々な話をしながら学校に向かう。

学校

「じゃあそろそろ体育祭の時期だから今日のLHR種目決めをしたいと思います」

今教卓の前で話しているのは俺達の教師、今倉先生。丁寧語とタメ語がごっちゃになっていて定まっていけない。

結構生徒に対しても丁寧語を使う先生だ。

今年こそ走り幅跳びを

そう思っ立候補する。

桦は1つ

立候補者は俺と本田

そしてじゃんけんすることになったんだが、指をポキポキと鳴らしているかにも戦闘モードの本田が目の前に来た。

「この前、雪辱、晴らす」

ぶつ切りで言わないで！接続語をちゃんとやって？

そしてジャンケンをした。

結果は

俺↓パー

本田↓チヨキ

「きよ、去年と同じ…」

そう言っ肩をガクツと落として落胆する。

去年もパーチヨキで負けたのだ。

そしてやはり俺の運は最低クラスで結局去年と同じ障害物競争になっってしまった。

まあ、今年は神乃さんが生徒会長だから問題は無いだろう。

そんな感じで今日が過ぎていくと…そう思っった。思いたかった。

…だが現実是非情なり、だ。

「絆成！絆成は居るか!?!」

と焦った様子の先生が急に入っってきた。

「あ、はい。俺が絆成です」

「着うか…ちよつと来てくれないか?」

???????

俺は先生の後を着いて行って別室に来た。

そして俺を椅子に座るように指示し、先生は俺とテーブルを挟んだ向かいの椅子に座って頭を抱えながら掻き出した。

そして何やら困ったような表情をしていて暗かった。

表情からしている話ではないのは確かだろう。そして言うのを躊躇っているのが何よりの証拠だ。

そして待っているると先生は顔を上げて俺の目を見てきた。

そしてやはり言うのを躊躇っているようだ。

ここまで言うのを躊躇う先生は見たことが無かった為不安になっ  
てしまった。

「その様子からしているいい報告じゃなさそうですね」

そう言うど覚悟が決まったのか、先生は「そうだ」と言った。

「実は君の父さんが」

そこで嫌な予感が頭を過ぎった。

考えたくなかった。だが考えざるを得なかった。

「仕事中に事故に会ってしまったようだ。大きな機会に挟まれて」

その瞬間、俺の思考が停止した。

「あ、あ、」

俺は声にならない声を出すしか出来なかった。

「でも安心してくれまだ亡くなつては無いようだ」

と励ましのつもりだろうが俺の耳には一切届かない。

まただ…また…大事な人を失うのか。

そんなことを考えながら俺は机に倒れて意識を失った。

## 第56話 おやすみ

side 優也

目が覚めるとそこは保健室だった。どうやら俺はショックで気を失ってしまっていたらしい。恐らく運んでくれたのは俺に例のあの事を伝えてくれた先生だろう。

事故……そんなのはいつ起こってもおかしくないんだ。なのに……だつてのに俺は考えが甘かった。

もう……あんな事は起こらないと勝手に心の中で思っていた。いや、思っていたかったんだ。事故はいつ起こってもおかしくないって考えないようにしていたんだ。

愚かだった。本当に俺は愚かだった。

俺の身寄りには誰も居ない。事故にあつたが、亡くなっていないって言うていた先生の顔は曇っていた。それはつまり父さんが危険な状況だと言うことが推測できる判断材料だった。

そして動くこうとするが体はピクリとも動かない。まるで金縛りにあっているみたいだった。

動け……動け……動け……

何度も心の中でそう叫んだ。だけど俺の体はピクリとも動く気配がない。

金縛りつてのは科学的に言うとは精神が不安定な時に起こりやすい心理現象だ。

俺の精神が不安定になった原因つてのはやっぱあれだよな。

俺自身では何も出来ない悔しさを胸にここに横たわつて事の顛末てんまつを見守るしか出来ないのか？

するとガラガラと言う扉が開かれる音が聞こえてきた。

それと共に誰かが入ってきたのが分かった。

そして俺のベットを仕切るカーテンが不意に開かれる。

「絆成。大丈夫か？倒れたって聞いたが」

今倉先生だった。

「だ、だいしようぶです」

呂律ろぜつも上手く回らない。

「まあ、絆成。今日は帰って病院に行ってきたらどうだ？」  
そう優しい口調で俺にそう言った。

「柴野さん。ありがとう」

とカーテンで隠れて見えない位置に結羽が居るのだろうか？

結羽から俺のカバンを受け取ったようだが

「立てるか？」

と手を差し出してくる今倉先生。

その手を何とか掴んで起き上がる。

「はい。もう大丈夫です」

俺はそういうものの精神状態はとても不安定だった。

なんであんな素っ気ない態度しか取れなかったんだと後悔しても  
遅いが後悔した。

「今日は早退します。さようなら」

そう言つて俯きながら歩いてカーテンから出る。

途中、結羽とすれ違つたものの顔も見ずにその場を去つた。

?????  
父さんの入院している病院は近くの伊真舞市立病院。伊真舞高校

から徒歩で行ける距離にある病院だ。

そして俺は入口のカウンターで受付を済ませて病室に向かう。

父さんの病室は305号室。

因みにお見舞いに花を買ってきた。その時に店員さんにこんな時  
間に学生服の男が歩いているもんだから訝いぶかしげに見られてしまった。  
ほとんどの学校はまだ授業中だからね。

こんこんとノックをして病室に入る。

入るところには父さんは確かに居た。居たが、随分と痛ましい姿  
だった。

腕は固定され、頭や胴体、足には包帯をグルグルと巻かれていた。

そして目を瞑っている。

まるで死んでいるかのように…そんな縁起の悪いことを考えてし

まう。

「父さん。いつもありがとう。この間の父さんの手料理。不器用で味が濃くて…とても繊細だとは言えなかった。ザ、男の手料理って感じの味だった…だけど…だけど…」

言ってる間に涙が出てきた。

そして次にこんな言葉を紡いだ。

「それでも、俺の事を一生懸命に考えてくれてるって感じがして美味かった。俺の…いや、”僕”の好みを完全に捉えた完璧な味付けだった」

”僕”の好み。濃いめの味付け…それが”僕”の好みだった。

「今はじっくりと休んでくれ」

そして父さんを見ていると看護師さんが入ってきた。

「君が絆成 優也君？」

「あ、はい」

聞かれたので肯定した。

「若いのに大変ね。お父さんが事故にあった時は不安でしようがなかったでしょ？」

凶星であった。寧ろ不安を通り越して精神が不安定になりました。

「そろそろ帰りま」

そして父さんの顔を見ると表情が歪んで来ていた。

その様子を見て看護師さんは直ぐにナースコール作動させた。

すると直ぐに何人もの医者が入ってきた。

「容態が急変しました！」

と慌ただしく動いて直ぐにストレッチャーに父さんを乗せて押し始めた。

「これは緊急手術も致し方あるまい」

と一人の医者が言った瞬間場の空気が引き締まる。

一人の看護師さんは「絆成さんしっかりしてください。大丈夫ですから」と聞こえるはずもない励ましを続けていた。

「優也君はそこに座って待っていてください」

そして手術室に入って行って扉がしまった瞬間、手術中のランプが



点灯した。

そして俺は近くのベンチに座って頭を抱え込む。

父さんがもし居なくなったら俺はどうすれば良いんだ。

どうやら父さんは俺の中で大きな存在だったらしい。

数時間後

ついに手術中のランプが消えた。それにつれて医者が出てきた。

「どうでしたか？」

そう聞いた時医者の表情は曇っていた。

そして次に首を振った。

「大型の機械に潰された時胸の骨が砕けてしまったんでしょう。心臓に刺さってしまったていました。寧ろここまでの時間耐えたのが奇跡みたいなものです」

と暗い声で呟いた先生。

その瞬間、俺は崩れ落ちた。

「あ、ああ、あああああつ！」

みつともなく子供みたいに泣きじゃくった。

この時、一生分の涙を使い果たしたかもしれない。そう思うほどの涙が目から溢れ出してきた。

暫くして俺は泣きやみ、父さんの元へ向かった。

父さんは安らかな顔をしていた。

あの時はあんなに歪めてた顔も今では安らかになっていた。

そして父さんに歩み寄って手を握る。

「ありがとう父さん。こんな息子でもここまで育ててくれて。ありがとう父さん。男手ひとつで大変だったでしょ？」

そして微笑んだ。

精一杯の微笑みだった。この時の微笑みは下手だったかもしれない。い。

「疲れたよね。もう」

もう父さんの前では涙を見せないと誓ったのに涙が出てきた。

「おやすみ。父さん。そしてさようなら」  
この日、俺は父親を失った。

二年生編一学期 消失編  
第57話 パーカー

side 優也

父親の死から数日が経った。

俺は全てがもうどうでも良くなっていた。

これじゃ七海が事故にあって直後の頃と何も変わってないじゃないか。

何もかもがどうでも良くなって、勉強もロクにしなくなってる…

あの頃は父さんが居たからなんとか前向きになれた。

辛い時もいつも励ましてくれて、俺の…いや、僕の好きな料理を作って、不器用な味で…だけどそれがめっちゃくちゃ美味しく感じて…

今は誰も居ない。この家にただ一人俺が居るだけだ。

先日、葬儀そうぎにも行った。

そこで全て改めて理解してしまった。

俺の心はすっかり荒すざんじやつてるな。

そう思いながらズズとカップ麺を啜る。

葬儀から帰ってきてからみんなとは一度も話していない。LIN  
Eが送られてきても気が付かないふりをしている。

完全に最低なやつだな。

学校にはちゃんと行ってはいる。

そして明日は体育祭当日だ。

正直面倒だから休もうか悩んでいる。

だが毎日来るあいつらが鬱陶うつとうしい。これじゃ行かざる終えない  
じゃないか。

「ふーん。あの芸能人、結婚するんだ」

俺はテレビでニュースをかけていた。

部屋の中には高く積みまれたカップ麺の空。そしてゴミ袋が散乱し  
ていた。

俺に残ったのは父さんの労働災害による保険金と遺留品のみだ。

父さんの遺産によって俺の手元には金はある。  
何もかもに関心がわかなくなつて最近では真剣にアルバイトもして  
いない。

偶に如月が話しかけてくるが適当に返している。

『ここのお店はカレーが美味しい事で有名です』

テレビで紹介されている店があつた。

この店なら近くにもあるな。

「暫くぶりにカレーつてのも良いかもな」

そう言いながら食べ終わったカップ麺の空をまた積み上げる。

そして立ち上がつて台所に向かう。

台所に来る度に思い出す。

俺のじいちゃんやんは飲食店を経営していたから俺はじいちゃんに料理を教えて貰つた。

あの頃は良かったなと

そしてコーヒーを淹れて飲む。

そして晩飯時になつて俺は例の店に来ていた。

その店に入った瞬間だつた。

俺はすぐ様ドアを閉めた。

嫌なものを見た気がする。

そして恐る恐る中を覗くとやはり居た。

あ、目が合った。

そしてまたドアを閉める。

「なーにやってるの」

ぱつとドアが開いて見つかつてしまった。

「何もやってねーよ」

「悩みがあるみたいだね」

何この人唐突に

「この神乃お姉ちゃんが聞いてしんぜよう」

「今の俺は神乃さんを一撃で粉砕できるほどの闇を抱えていますよ」

「闇を抱えているのなら誰かにぶちまけるのが良いんだよ」

言葉が不穏なんですが…

「これは俺の問題だから良いですよ」

そうして店を後にする。

結局食わず終いだな。

とりあえず今日もカップ麺と適当に弁当でもと思ってコンビニに入ると

「んー?」

あ、そうだった。

「おーゆーや君いらっしやい。どうしたのかなー? わざわざ私のシフトに合わせて来るなんて…は!? まさか私が恋しくなった? それならそうと最初から言ってくれれば」

「何一人で問うて自分で解決してんだ。それと別にこの時間に俺が来たのは偶然だ」

そう言っただけ俺はパーカーのポケットに手を入れながら歩いていく。

「それにしても珍しい格好してるね。パーカーなんて」

そう。俺は普段パーカーなんて着ないのだ。だが今俺は着ている。

俺は過去一度だけ俺はこの格好で外を出歩いた事がある。

それは七海が事故にあった直後だ。

俺は意識してこの格好をしている訳では無い。無意識だ。

どうやら俺は心が落ち込んでいると無意識にこの格好をしてしまうようだ。

「まあとりあえずこれ」

と俺はカップ麺を4個レジに置く。

「はい1160円でーす」

そして俺は1200円を取り出して渡す。

「はい。1200円のお預かりです。40円のお返しです」

そして受け取った40円を財布にしまう。

そしてレシートはどうするかと聞かれたから俺は断る。

最近コンビニによく来てるからレシートがたまるから俺は貰わないようにしている。

そして帰ろうとしたその時

「今日は時間も遅くなっちゃったしコンビニで済ませようか？」  
「うん。わかった。あ！お父さん！あの鮭おにぎり食べたい！」  
聞き覚えのある声が聞こえてきた。

この声は確実にあいつらだな。

俺は反射的に棚に隠れた。

そして商品を選び終えたのか如月とあいつらの声が聞こえてくる。

「ありがとうございました」

なんか気の抜けた「ありがとうございました」だな…

「どうしたの？急に隠れたりして…あの人達と関係あるの？」

あの人たちは今、俺が一番会いたくない家族だよ。

「まあ、あの子の父がな俺の親父の兄さんなんだよ」

「へーって事は」

如月も分かったみたいだな。

「そう。つまりあの子は俺の…所謂従妹だ」  
いわゆるいとこ

「可愛い従妹さんじゃ無いですかー…でもなんで隠れることにそれが繋がるんですか？」

そう聞かれて回答に困った。でも俺は口を何とか開いてこう言った。

「なんか…さ、色々ところちにも話しづらい状況つてのがあるんだよ」

そう言つて俺はカツプ麺の詰まった袋を持って立ち上がる。

実は父方の家族とは仲はそこそこ良い方なんだ。

母さんと別れた後も何度か会つてるしな。

そして従妹は俺の事を本当の兄のように慕したつてくれている。きつと本当の兄が居ないからだろう。

でも、だからこそ俺は会いにくくなつてしまっているのだ。

暫く会つてないから積もる話もあったり久々に従妹とまったりと話したい気持ちはあるが今はダメなんだよ。

「んじゃ、気をつけて帰ろよ」

そう言つて手を振ると

「え？送ってくれるんじゃないの？」

そう来ると思つたよ。

正直、如月の家の方面とあいつらの家の方面って被ってるから正直  
行きたくないんだけど…

ぼったり会うかもしれないし。

「なんか今日のゆうや君の声に覇気が無いけど…何かあった？話ぐら  
いなら聞くよ」

「そうか…そんでもって話聞いてどうするつもりだ」

「悲しい話なら私の胸ぐらいなら貸すよ」

いや、彼女でもない女の子の胸に飛び込んで泣くなんてそんなの出  
来ねーよ。

「まあ良いや。あんまり他人にする話でもねーけどお前なら大丈夫  
だ。それに話したら気が紛れるかもしれないしな」

そして俺は久々に如月を送っていくことになりました。

## 第58話 従兄妹

side 優也

俺は携帯を見ながら如月が出てくるのを待っていた。  
多分今俺は他人から見たらパーカーでフードを被ってる変質者だろう。

だが俺は如月を待っているだけだから別に気にしない。

「お待たせー」

やっと如月が出てきた。

着替えに何分かけてんだよ。

「待ったー?」

「ああ、待った」

「そこは待ってないって言うところだよ?」

え? 何今の俺が悪いの?

と言うか如月とはそんな関係じゃないし

「何彼女みたいな事言ってるんだ? 俺はお前に告つたり告られたりした記憶はねーぞ」

呆れながら言う。

「え!?! 私とは遊びの関係だったの? ショック…:シクシク」

シクシクって言う人初めて見た。

と言うか遊びの関係ってなんだよ。俺はお前とそういう事をした記憶はないぞ。

「じゃあ歩きながらでいいから何があつたか教えてくれる?」

「ああ」

俺は話し始めた。

そして父さんが事故で亡くなった事も伝えた。

「そうかー。ゆーや君は辛かったんだね。よしよし」

と頭を撫でてくる。

なんかこいつに頭を撫でられんのは屈辱的なんだが!?

「それでゆーや君はどうしたいの?」

「どうって」



「このままじゃ…ダメだって分かってるんじゃないかな？」

ああ、分かっている。

このまま自分の殻に引きこもっていたらダメだって

でも、怖いんだ。また他の誰かが事故で死ぬのは

「なあ、俺は弱虫だ」

「知ってる」

「俺は世話してくれる人が居ないと自堕落な生活を送るロクでなしだ」

「知ってる」

「そんな俺でも未来を見て歩んでも良いのかな？」

「良いんじゃないかな？」

いつもの調子でニカッと笑う如月

こいつのお陰で元気が着いてきたかもな。

「ありがとな如gグボワツ」

急な後ろからの衝撃により俺の体は地面に沈んで顔面を強打する。

「痛い…」

そして漸く俺は抱きつかれていることに気がついた。

何？通り抱きつき魔？

「お兄ちゃんだ！」

うん。間違いない。俺が最も危惧きぐしている状況になったわけだ。

その時前方からパシャッとシャッター音が聞こえてきた。

「何取ってるんだ如月」

「ん？？幼い女の子にお兄ちゃんと呼ばせて興奮してる性犯罪者の姿を収めておこうかと思って」

「何言ってるんだよ。さっき会った子だろうが」

そんな簡単に性犯罪者に仕立てあげられてちやたまったもんじゃない。

「よく見てみれば…そうか従妹さんか」

よろしくねと握手を求める如月だったが拒否されたのか、ガーンと言う効果音が似合いそうな顔になっていた。

「お兄ちゃんはボクだけのお兄ちゃんです。誰にも渡しません。お兄

ちゃんと結婚するのもボクです」

可愛いやつなんだが、独占欲が強すぎんのが偶に傷だよな。

そのせいでよく七海と喧嘩してたっけ？

「と言うか萌未、そろそろ離れてくれ。重い」

「ボクの重みは全部お兄ちゃんへの思いなんです」

「どっちでもいいから早く離れろ」

そう言うのと渋々背中的人物は俺の上から離れてくれた。

「お兄ちゃんお久しぶりです！」

と俺の前で見事な敬礼を見せてくれる。

しかし当たりが真っ暗であるからしてよく見えないのが事実である。

「如月。紹介するよ。こいつが俺の従妹、萌未<sup>めぐみ</sup>だ。俗に言うボクっ娘って奴だ」

「ボクはお兄ちゃん以外に女として、性的対象者として見られないようにボクって言ってるんです」

「その言い方だとゆーや君には性的対象者として見られても良いように聞こえるんだけど？」

すると堂々と胸を貼ってこう言い放ちやがった。

「ボクの体は全てお兄ちゃんに捧げる覚悟です！つまりはそういう事です。さあお兄ちゃん。今すぐボクの部屋に行って人前では言えないことを！アウっ」

俺は萌未の頭をチョップして言葉を言い切る前に止めさせた。

こいつしばらく見ない間に変態度がアップしてる気がする。

それで俺が本当にケダモノになっただらどうするつもりなんだか：

こいつの事だから喜びそうだから言わないが

「お兄ちゃんは冷たいです！もつと妹には優しくしてもいいと思うんです！」

「誰が妹だ。お前は従妹だ」

そしてまたチョップするとまた「アウっ」と言った。

「それで萌未。こいつが俺のば」

「お兄ちゃんの彼女さんですか」

食い気味に言ってきたやがった。

ちよつと萌未さん？なんでそんなゴミを見るような表情でこちらを見てきてるんですかね？

「違うーこの人はば」

「そうなんだよ萌未ちゃん。私とゆうーや君は付き合ってるのだよ。よく気がついたね」

「はい。すぐ分かります。それにしてもお兄ちゃんは酷いです。ボクと言う女が居ながら」

ダメだこいつら…ツツコミが追いつかない。

このままじゃ父さんに逢いに行く事になってしまう。

「とりあえず、酒田さんはどうした？今日は一緒じゃないのか？」

「否定はしないんですね。ボクが走ってきただけなのでお父さんはもうすぐで来ると思いますよ」

そうか…とりあえずあと数分耐えればこの地獄から逃れられるのか。

「もうすぐで来るのか…そうかそうか」

「やけに嬉しそうですねお兄ちゃん。もしかしてボクと一緒に居たくないんですか？」

全くその通りと言いたかったが言ったらまた面倒くさいことになるのは目に見えているため答えに困っていた。

如月の奴…面白がってやがるな。

「お兄ちゃん…答えてくださいー！」

声を張り上げてきた。

その姿はまるで浮気を問い詰める奥さんみたいだった。

「そんなわけないじゃないか。俺は萌未の事が…従妹として好きだぞ？」

あのままだただ好きだと言ったら面倒くさくなるような気がして直前で踏みとどまって従妹としてを付け加えた。

「そうですか！それなら今から式場探しに行きましょう！晴れて私達は相思相愛になれたのですからー！」

「いや、相思相愛ではなく従兄妹愛なんだが？」

「…殴りましたねお兄ちゃん！今日こそボクは怒りましたよ！」あ、ボクに戻った」お兄ちゃんをお持ち帰りする事に決めました！」

と言うかなんでこんなに俺にこいつは固執してしてるんだ？

「止めなさい」

と俺の手を握ろうとした萌未の手が第三者によって離される。

「すまない。いつもうちの萌未が…」

その人物は酒田さんだった。

酒田さんのフルネームは絆成 酒田<sup>さかた</sup>。この萌未の父であり、父さんの兄である。

「いえいえ」

「今度うちに来てくれ。お詫びを兼ねて今度何かご馳走するよ」

「ははは、考えておきます」

俺の考えておきますは大抵NOの返事になる。

まあ行けたら行くみたいなき感じだ。

何故断るかと言うと萌未にまた絡まれるからである。

「それじゃあね。優也君」

「さようなら！お兄ちゃん」

そして嵐の様な家族は帰って行った。

「ありがとうねゆーや君。私もここで良いよ」

「ああ、わかった。じゃーな」

そして返事を聞かずに俺は帰った。

## 第59話 体育祭

side優也

ついに体育祭本番。

俺は憂鬱になりながら選手席に座っている。

既に開会式は終わっていて、もう何グループか走っている。

ちなみに俺はまたもや障害物競走だ。

くだらん…

ちなみにこの障害物での強制失格システムは恒例らしく今年もあるんだとか。

露木ちゃんは100mになったのか。

とりあえず寝よう…眠い…

俺の出番が来るまで寝ても問題は無いだろう。

その時

「ゆうや君」

なんか聞き覚えのある間延びした呼び方で呼ばれた。

「なんでお前が居るんだ如月？学校はどうした」

と目を閉じたまま問いかけた。

実はこの体育祭は平日に開催されているのだ。

「ふふーん。実はこっちは開校記念日で休みなのだよー」

なるほどそういう事か…

因みにこの体育祭は自由に見学できるため、如月は来たのだろう。

「しっかしゆうや君は緩み切ってるね〜」

緩んでるんじゃない。体力の補充だ。

「お前は俺に構ってていいのか？」

「うん。私はゆうや君を見に来ただけだからねー」

そうかそうか。それはご苦労だったな。

「んじゃ俺は寝る」

そして完全に寝る体勢に入る。

「ゆうちゃん膝枕してあげたら？」

「ふえっ!？」

とちようど帰ってきた結羽に如月が結羽に話をふる。  
ちよつと戸惑いの声色だったぞ。

『走り幅跳び、本田君失格』

あいつ踏切を失敗したのか。

「よ！優也…って優也の周りの女が増えた!?!」

あつしが来た。

人間きの悪いことを言うな。

「私は如月 咲桜。よろしく」

「俺は童明寺 あつしだ」

「じゃああつくんだね」

いきなりあだ名かよ。最近の女子高生マジパネエ。

そしてついに休憩時間になった。

ちなみに俺の飯はここに来る前に買った照り焼きバーガーのみだ。

照り焼きバーガーって美味いよな？異論は認めん。

「え？優也それだけ？」

結羽は驚いた様子で言ってきた。

確かに物足りない感じはするが足りないってわけじゃない。

「ああ、そうだが」

「そうなんだ…じゃあ弁当作りすぎたんだけど要る？」

そうか…まあ貰えるもんは貰つとけとじいちゃんの遺言が…あ、じいちゃん死んでねーわ。

実はこの間の葬儀の時に会ったばかりだ。

実の息子が死んだというのに涙ひとつ見せなかった強い人だ。

ばあちゃんは…なんと言うか…うん。見てもらえれば俺が言いたいことは全て伝わる。

「じゃあ貰おうかな」

「わかった！」

そう言うとうちの弁当の蓋に幾つかおかずを取り分ける。

「はい。結羽」

「ああ、ありがとな」

そう言つて結羽から受け取る。

「あのさく。あの二人の関係つて普通の友達つて感じじゃないよね？」

如月が茶化すような声色で言つてきた。

「まあ、友達つてよりはなんか…恋人だよな」

俺と結羽は恋人じゃないぞあつし

「友達以上恋人未満…かな？」

そしていつの間にか合流していた白井さんも会話に参加してくる。

「みんなしてなんでそんなに俺と結羽の關係に疑いを掛けてくんだけ？」

「普段の行いのせいだ」

俺が問うとこれまたいつの間にか合流していた悠真に即答される。

そんなに疑いを持たれるような行動をしたかな？

「とりま応援するよ」

「おい。何について応援するのか詳しく聞こうじゃないか」

俺と結羽はそんなんじゃないってのに

そして結羽から貰つたおかずを食べる。めちやくちやうめえ。

久々の手作り料理だ。これが美味すぎる。

家庭で作つた料理は最近の食べてなかつたから感動だ。

「なんで泣いてるの？」

如月は若干引いているようだ。

「まともな食事は久々で」

「思つたより重い答えだった！」

如月は驚きすぎて仰け反つてしまった。

「またカップ麺ばかり食べてたの？」

ちよつと強い口調で結羽が問いただしてきた。

「はい」

「全くもう…全くもう」

そして昼飯を食べ終えた。

『そろそろ障害物競走を始めます。選手の皆さんはお集まりください』

ちなみに去年ので分かったが生徒会の技術力は高い。その技術を他のものに使って欲しいと思うのは俺だけでは無いはずだ：そう思いたい。

「んじや行ってくるわ」

みんなに送り出されながら行った。

『それでは障害物競走第二学年始めます』

第一学年でゴールしたものは居なかった。

『よーいドンー!』

の合図で他の人達は一斉に走り出した。

『おおっと絆成君微動だにしない！一体どうしたというのか!』

そう。俺は動かない。

すると俺以外の奴らが一斉に落ちた。

『絆成君以外失格!』

それを見てから俺はゆっくりと歩き出した。

全ての障害物を避けて。

落とし穴はジャンプ、平均台は一切バランスを崩さない。壁が出てきたら直前で立ち止まり、ボールは安定感抜群。

『ゴール！なんと絆成君は全ての障害物をいとも容易く突破してしまいました』

もうパターンは分かっている。無駄だ。

「お、おい優也。お前スゲーな」

「最初動き出さなかった時はどうしたのか思ったけど。ああなることが分かってたの?」

そう。生徒会はそういうやつだと分かっていたからこそあんな奇行に走ったのだ。

最初の落とし穴は横一列に並んでたからな。

この後リレーをやったものの順位は真ん中という反応しにくい順位だった。

そんなこんなで俺達の体育祭は終わった。



## 第60話 尾行

side 優也

体育祭から数週間後、期末テストが行われた。いつも通りに点数を取っていつも通りの順位かと思つたら。

国語57点、数学85点、社会62点、理科60点、英語50点と言ふ散々な結果だった。

多分精神面が色々あつて俺は気持ちが落ち込んでいたのだろう。

「ちっ」

俺は舌打ちをしてテスト用紙をクシャツと握りしめた。

久々だ。

順位は真ん中くらい。屈辱的である。

「優也！」

結羽が駆け寄ってきた。

「今回は良かったよ」

とテストを見せてきた。

数学以外は俺は数点とはいえ上回っていた。

「そうか。良かったな」

俺はそう端的に言った。

こんなんじゃないだろ。俺は俺の理想は

医研に入って七海の治療法を探して：

そして俺はテストを破りゴミ箱に捨てた。

side 結羽

やっぱり元気がない。

優也は何も言ってくれないし先生も勿論何も教えてくれない。どうしたんだろう。

「何があつたか知りたい」

「そうだよね」

「うわあっ！」

真横から急に声がした。

そこには神乃さんと女の子が居た。

「露木ちゃんも気になるよね」

「し、知りません。あんな強○魔なんて」

優也。この子に何したの？優也はそんな人ではないと信じたいんだけど!?

「露木ちゃん。なんだかんだ言っただけで心配してたもんね」

神乃さんがそう言うのと露木ちゃんと呼ばれている女の子の肩がビクウつと跳ねた。

「お姉ちゃん!」

「絆成君とは目を見て話せるもんね」

「ち、違うんですよ!あれは……その……そうです!人として見てないから話せるんですよ!」

いや本当に優也何したの!?

「それはさておき」

「置かないでください!」

「とりあえず尾行しよう!」

はあ……白波さん第二号現るだよお。

「全くもう……お姉ちゃんは全くもう……」

と文句を言いながらも着いてくる露木ちゃんは可愛いなと思う今日この頃なのです。

とりあえず優也に着いてきてしばらく経った。

何故か優也は直線で帰らずに遠回りして歩いている。

すると横道から飛び出してきた女の子に抱きつかれて押し倒された。

押し倒された!?

「あの子とどういう関係!?!」

「きつとあーんな関係よ」

私たち二人で小声で話していると隣で「あ、あんな……」と言いなから顔を真っ赤に染めている露木ちゃんが居た。

すると遠くでよく聞こえないが言い争っているようで、優也が女の

子を引き離そうとしている。

「なんなんだこの馬鹿力は!？」

「お兄ちゃんへの愛ゆえにです!？」

「なんだその謎の設定!?!聞いた事ねえぞ!?!」

なんか遠すぎてよく聞こえないけど、優也が女の子に対してツッコミを入れているのは何となくわかる。

そして諦めたのか女の子に抱きつかれながら歩きにくそうに優也は歩き出した。

「どういう関係なんだろう」

「これは事件の臭いがします。やっぱりああいう人だったんですね。人目見て私は気がついてました。これはやる人だと」

なんでそう思ったの？

優也は別に遊んでるようには見えないけど。態度は素っ気ないし、ノってくれるのはつつこむ時だけだし……

「これは探る必要があるわね」

そして暫く歩くと急にピタリと足を止めてしまった。

何をやってるんだろう?と思ってると思つてると急に女の子をお姫様抱っこで抱えて走り出した。

「は、走り出した!?!」

「もしもし?警察ですか?近くに性犯罪者が……」

「そんなことやってる場合じゃないよ」

と神乃さんも露木ちゃんの首根っこを掴んで走り出した。

「待ってー!」

私も走り出す。

そして至る所をジグザグに走り抜けて行って、いつの間にか優也に撒かれていた。

「撒かれちゃったな〜」

「きつと今頃お楽しみなんですよ」

なんでこの子、こんなに優也に対して毒舌なの!?

「多分照れ隠しね」

「私の心の声に反応した!?!」

「勝手に決めつけないで下さい!」

すると後ろから急に肩を叩かれた。

そして私が後ろを見ると誰かの人差し指が頬に当たった。

なんかこう言うの見たことがある。

そして顔を見ると

「お前ら、何やってんだ?」

優也だった。

いつの間に後に!?

「と言うかずっと着いてきてただろ……はあ……」

とため息をつく優也。

未だに腕に女の子が抱きついてる。

「なんですか。お兄ちゃんは遊び人だったのですか?ボクとの関係はその程度のもだったんですか」

「こいつの言う事は気にしないでやってくれ。こいつはただの変態なんだ」

今優也お兄ちゃんって呼ばれてなかった?無視できないよその部分は

お兄ちゃんって何?

「年下にお兄ちゃんって呼ばせて興奮するなんてとんだ変態さんですね。それは私も予想外でした。そして手を出してるなんて、予想内でしたがそんな人であって欲しくなかったです」

「いや、俺そこまでクズじゃないからね!」

そ、そうだよね?び、ビックリしたく良かったよ。そんな人じゃなくくて。

「と言うか俺のバイト仲間と同じ反応すんな」

如月さんも同じ反応をしたんだ。

「こいつは萌未。俺の従妹だ。こいつが勝手にお兄ちゃんと呼んできてその癖俺への好意をストレートに伝えてくる変態ボクっ娘だ」

「だからボクはお兄ちゃん以外に女性として、性的対象者として見られないようにですねえ」

「おい!」

「それって絆成君にならそういう風に見られてもいいってこと?」  
「そうです! さあお兄ちゃん! 早速ボクの家に戻って熱い夜をアウツ  
!」

あ、萌未ちゃんにチョップした。

「なーに馬鹿な事を言ってるんだ」

優也も大変だなあ。

「じゃあちようどお兄ちゃんの家の前なので上がって行っていいですか?」

「良いがお前と二人きりだと色々な意味で身の危険を感じるからお前  
らも来るか?」

「ねえっ! それってどういう事!」

優也の腕を掴んで揺らす萌未ちゃん

「お前、二人きりだと襲ってくるだろ」

「ぎくっ……そ、そんな事しないよ」

「現にあったから信用出来ねえ……何年か前に泊まった時お前、俺の  
部屋に侵入してきて下着姿で俺に覆い」

「わー! わー! わー! それ以上言ったら私が変態だと勘違いされてし  
まいます!」

もう手遅れというか勘違いじゃなくて確実にそうなんだよね。

隠す気無いでしょ。

「とりあえず俺を守って欲しい」

「私達が襲うとは考えないの?」

『おそ?!』

私と露木ちゃんの驚いた声が被った。

そして顔が赤くなつていくのを感じる。露木ちゃんもほんのりと  
顔が赤くなっている。

「少なくとも俺を嫌ってる露木ちゃんはそんな事しないだろ」

「あ、当たり前です」

慌てて声を出したせいが一瞬声が裏返ったような気がした。

「それなら頼むわ」

「まあ、変態強○魔の言うことを聞くのは癪に触りますが、この変態に

皆さんが襲われないかが心配なので私もついて行きます」  
そして私達は久しぶりに優也の家に入り込むことになった。

第61話 隠し通さなきやいけないものがそこにある

side 優也

久々に人を家に上げるな……

そして扉を開けた瞬間、俺だけ入って鍵を閉めた。

「開けてー！」

と言う声が外から聞こえるが、こんなの見られたら結羽に説教されてしまう。

あれだけカップ麺ばかり食べるなど言われていたのにテーブルの上には片付け忘れた大量に積み重なったカップ麺の空がある。

参ったな……と頬を掻きむしる。

こんなにどうやって隠すかどうか……

とりあえずこれだけは何とかしないと

—※—※—※—想像—※—※—※—

「ゆうーやー？」

「や、止めて!? ニコニコしながら近づいてこないで?」

物凄い笑顔なのだ。だがその笑顔がとてつもなく怖い。

「正座!」

「はい!」

俺は音速を超えたスピードで正座する。

「これ……何?」

テーブルの上に積み重なったカップ麺の空を指さす結羽。

おっそろしく低いトーンだ。

「はい。私めが食したカップ麺達でございます」

俺は物凄く丁寧な口調で説明する。

「これ、全部?」

「はい」

「優也……私、約束守れない人……嫌いなんだよね」

そう言つて玄関を出ていく結羽。

「さすがに私も約束を守らないのはどうかと思うな……」  
そして神乃さんまで

「変態でクズのせ、ん、ば、い？さようなら」

露木ちゃんも神乃さんの後を追って出て行ってしまった。

「お兄ちゃん。それはちょっとボクでも許容できないかな？」

そしてあの萌未ですら俺から離れて行ってしまった。

最終的に4人とは絶交……もう二度と話すことも無くなった。

—※—※—※—想像 終—※—※—

つてな事になるに違いない！

そんな事になったらもう二度と立ち直れなくなる自信がある。

「お兄ちゃん！ボクはエッチな本があっても気にしないから」

「無いから！」

大声で慌てて否定する。

そんな疑惑をかけられちゃたまったもんじゃない。

その直後

「しよがないなあ」

と言う声が聞こえてガチャと言う嫌な音が聞こえた。

「お兄ちゃん！お邪魔します！」

入ってきたア！

どうやったかは知らんが鍵が開いてしまった。

「い、良いのかなあ？」

そして俺は早い方が良いと思い、玄関までもものすごい速度で走って

いってジャンピングDOG EZAをした。

「すいませんでした！」

「え!?どうしたの」

皆に当然の如く驚かれる。

「本当にすみませんでした」

「頭を上げて」や「なんで謝るの？」とか言われたが謝罪するのを止

めない。

「ふーん。絆成君は私達に見られてはいけないものを隠し忘れてたんだね？」



本当にその通りです。

「か、隠さなきゃいけないもの……」

なんで露木ちゃんは頬を染めてるんですか？そういう物じゃないですよ？

「ほ、本当なの？優也」

「い、いえ……決してそのような事は……」

そう言うが全然良くないです。

「なら良いよね？」

良くないです！

「そして俺をスルーして皆はリビングへ行ってしまった」

終わった……そう思った。

しかし

「優也。いつまでも何してるの？」

放たれたのは説教の言葉ではなく疑問だった。

恐る恐る俺もリビングへ向かう。

すると何と言うことでしょう。テーブルの上にあっただはずのカッ

プ麺の空が綺麗さっぱり無くなっていないですか。

どういう事なんだ？と驚いていると携帯がなった。メールだ。

『件名 愛しのお兄ちゃんへ』

萌未か。

『この借りは明日のデートで良いですよ。p s,その後、私をお持ち帰りしてもいいんですよ♡』

俺は文面を読んでそつと携帯をしまった。

面倒なやつに借りを作っちゃった。

多分カップ麺の空を俺が土下座して時間を稼いでる間に萌未は侵入して片付けたんだろう。

「まあ俺ん家に来たのは良いけど……萌未は何しに来たんだよ」

「明日休みなので泊まらせてください！」

「お帰り願います」

さすがにそんな時間まで皆にはボディガードは頼めないし、悠真なら泊めてもいいんだけど恐らくだが「クールな男は空気を読んで丁

重にお断りすることにするぜ」とかなんとか言っ来てくれない気がする。

かと言ってボディガードが居ないと確実に襲われる。

でも年頃の女の子を何人も泊めた暁には社会的に死ぬような気がする。

「ダメだ」

「お兄ちゃん。良いでしょ？カップ麺……」

囁いてきた。

こいつ、ここまでして泊まりたいか!?

しようがない……目には目を脅しには脅しを

「今日泊まるか明日デートするか選べ」

そう言う

「どっちも惜しい！」

どっちかって言ってるだろ。

「とりあえずコーヒーを入れてくる。萌未は緑茶で良かったよな」

「あ、はい」

その返事を聞いてキッチンに向かう。

side 結羽

「萌未ちゃん、コーヒー飲めないの？」

私がそう聞くと萌未ちゃんは首を縦に降った。

「はい……昔からあの味がどうしても苦手で……」

そうだったんだ。

「露木ちゃんもお茶にしてもらわなくても良かったの？」

とニヤニヤしながら神乃さんは露木ちゃんに聞いた。

「大丈夫です！私は大人ですから」

と胸を張る露木ちゃん。

そして自分の胸を見る。

ま、負けた……年下に負けた……

そして私が落ち込んでいると神乃さんが何かを思い出したかのよう  
に「あっ！」と言っからこんな事を言ってきた。

「露木ちゃんと結羽ちゃん。自己紹介したっけ？」

その言葉に同時に首を横に振る。

「じゃあ自己紹介したら？」

「そうですね。私は柴野 結羽。よろしくね」

と微笑みかける。

「あ、あの……私は……その……」

「ごめんね。この子人見知りで……知らない人と話すのは苦手なんだよね。ほら露木ちゃん。深呼吸」

そうだったんだ。でも優也とはなんか普通に話せてたね。

「ひっひっふーひっひっふー」

なんでラマーズ法？

「わ、私は……神乃 露木……です。あの……よろしくお願いします……」

徐々に声が小さくなっていつてる。

最後の方はほとんど聞こえなかった。

でも可愛いから許す！

「露木ちゃん。よろしくね」

「ひっー」

ガーン……手を差し出したら逃げられた。ショック

「何やってんだ結羽」

床に手をつけて落ち込んでいたら不思議なものを見るような目で優也に見られた。

「まあ出来たぞ。砂糖は好みでどうぞ」

そんな感じで久しぶりに優也の家に入ったのでした。

あれ？なんか柵の上に不自然に置いてあるダンボールが落ちそうなんだけど……

すると予想通り落ちてきて中身がばらまかれた。

それを見て萌未ちゃんは目を逸らした。

優也はそれを見てコーヒーを吹き出してしまった。

「優也。これ……どうい」

私が言い終わる前に優也は土下座した。

その中身は大量のカップ麺の空だった。

## 第62話 大ピンチ

side 優也

俺は現在結羽に土下座をしていた。

「これ……あまりこういうのばかり食べてちゃダメだつて言ったでしょう?」

「すみません。すみません。すみませーん!」

何度も謝る。床に必死に頭を擦り付ける。

必死だった。

「え、あ、その……」

予想外だったのが俺の必死の謝罪に対して結羽が驚いているということ。

「いつもツツコミ担当で人に強い態度を取って決して人に頭を下げないあの絆成君がああのお家の宝刀DOG E Z Aをなさっている!」

本当ならここで人聞きの悪いことを言うな!とツツコミたい所なんだが、俺の謝罪は本気だ。ここでつつこんだら負けだと必死に堪える。

「あ、あの絆成君がつつこんでこない!」

神乃さん。少し静かにしてもらっていいですかね?もうそろそろ我慢の限界だ。

「つ、露木ちゃん。絆成君が病気みたいだよ!」

「そうですね。明日空から槍でも降ってくるんですかね?」

「さすがに失礼すぎだろ……」

そんな言葉がぼそつと零れてしまった。

「お?ツツコミましたね。本業をやつと思ひ出しましたかな?絆成殿」

その言葉を聞いて起き上がる。

「あーもう開き直って言っちゃうけどよ!なんだよ人聞きの悪いことばかり言いやがって!なんだよお家の宝刀DOG E Z Aつて!俺そんな変なものお家の宝刀にした覚えは無いんだけど!?それとなんだよ俺がつつこまないのはやばいみたいなの雰囲気出しやがって!俺

だって必要な時は頭下げるし、場合によってはツツコミを我慢すんだよ！それとツツコミを職業にしてる訳じゃないからな！お前らが欲しがってきてるんじゃないかよ！特に神乃さん。何度も何度もあんたはボケなきや死ぬのか!?あんたはマグロか!?

言い切ってツツコミ疲れしてしまう。

でもこれで謝る雰囲気じゃなくなっちゃった。

「優也。私は怒ってます」

でも結羽に睨まれると萎縮してしまう。

蛇に睨まれた蛙みたいだな。

「なぜ怒ってるでしょうか」

「……えーと……偏った食生活をしているから?」

「正解」

「で、でもでも！朝はパンとか食ってる……し！」

物凄い笑顔でこっちを見てきた。

「昼は?夜は?」

だがその笑顔が逆に俺の恐怖心を駆り立てる。

「すみません」

「やっぱり……」

そう言つてむーと頬を膨らませた。

少し可愛いなどという完全に場違いなことを考えていた。

「それよりボクが泊まるか泊まらないか問題はどうしたんですか!?

なんかあっさりバレたわけだし借りが崩れた。

てなわけでデートの話ではぐらかす事はもう出来ないよな。

でもまあそれは置いておいて

「これからお前のあだ名はKYだ」

俺の従妹のあだ名はKYに決定しました！パチパチ

「嫌だ！すごく嫌だ！」

飲みかけていた緑茶を吹き出して掴みかかってきた。

「もういい。怒る雰囲気じゃなくなったし」

そう言つて出ていく結羽。

も、もしかしてこれって……「私……約束守れない人って……嫌い

なんだよね」って出て行ったんじゃ？

わざとじゃ無かったんだ！

俺がガツクリと崩れ落ちると

「あ、私は帰るけど露木ちゃんは泊まっていく？」

「さすがに泊まったら身の危険を感じるので遠慮します」

そうして二人も結羽同様出て行った。

これもまた絶交ってやつなんじゃないかと最悪のシナリオを考え  
てしまう。

「さあお兄ちゃん！やつと二人きりになれましたね」

「ああ、そうだなKY」

「その呼び方やめて!？」

とまたもや掴みかかってくる。

しかし直ぐにそれを突き放さないのが失敗だった。

俺に超接近した萌未は俺の事を押し倒してきた。

「さあ、始めましょう？人には言えないような事を」

「や、やめろおっ！」

その瞬間玄関が開いた。

そしてそつちを見ると大きいスーツケースを持った結羽がそこ  
に居た。

え？絶交したんじゃ無かったの？

「し、仕方ないですから私がボディガードとして泊まってあげても  
……って何してるの!？」

た、助かったア……

それにより渋々萌未は俺の上から降りた。

と言うか今泊まるとか言わなかった？

すると萌未は俺の左腕に抱きついてきた。

「結羽さん。ボクのお兄ちゃんを奪う気ですか!？」

「いやちげーよ」

そして結羽までもが俺の右腕に抱きついてきた。

「じゃあ私の」

「いやお前のもねーよ」

お前はせめてまともであってくれ。  
抱きついてくるのやめろ。

左右に抱きつかれて何も出来ないんだが……邪魔だ。

「いい、いい加減離れてくれませんか？」

しかし二人は一切動こうとしない。

「よし。萌未はあれ片すの手伝ってくれ。結羽は……そうだな。最近カップ麺ばかりだったから久々に結羽の手作りの料理食いたい」  
適当に離れてくれそんな事をお願いする。

「任せて（ください）！」

二人はそう言って結羽は台所へ、萌未はカップ麺の空が散らばった所へかけて行った。

とりあえずこれで離してくれたから俺も萌未の所に行ってカップ麺の空を片付けようかな。

そう思っ立ち上がる。

はあ……先が思いやられる。

「んー。何作ろうかな……保存の効く食材しか無いね……この分だと買ってくる必要があるし……優也！」

急に俺の名前を呼んできた。

「なんだ？」

「あまり食材が無いみたいだから買い出し行ってくるね」

そうか。ココ最近、買うものと言えばパンとカップ麺ばかりだったから食材が無いのか。

それに料理してないから食材もダメになっってきて徐々に捨ててか  
らな。

あるのは保存の効くインスタント麺と缶詰位なもんだもんな。

「ああ、そうか。んじゃ俺も着いていくよ。外も薄暗いしな。なんかあつたら大変だろ」

そう言っ立ち上がる。

「と言うわけで萌未。留守番頼む」

そう言っ萌未は大層驚いたような顔をした。

「ボクは!?ボクはどうでもいいの?」



「お前は誰かが侵入してきたとしても返り討ちに出来るだろう？」

「失礼な!?ボクだって女の子ですよ！」

実際問題、萌未の方が俺より強い。確かこいつ、空手を習っていたはずだ。

「それにお前は俺以外の男になびかないってのは徹底してるから心配ねーよ」

そう手をひらひらと振って出ていこうとする。

「留守番は甘んじて受け入れます。その代わり帰ってきたらボクを抱いてください」

「一年中発情期共の所に縄で縛った状態で放り込まれる覚悟があるなら聞いてやらんことも無い」

「すみませんでした」

萌未は俺以外の男に性的対象として見られることを心底嫌っている。そこを着けば簡単に萌未を制する事が出来る。

「んじや行ってくるな」

「行つてきます」

そして俺と結羽は朱色に染まる町へと繰り出した。

買い物も終わり既に町は真っ暗になっていて街頭と家から出てる光が町を照らしていた。

「色々買ったが俺一人だと食いきれねーぞ?多分」

そう言うのと結羽は頭にハテナを浮かべてこちらを見てきた。

「え?一人?お父さんは?」

やべっ!今の一言で結羽に勘づかれてしまった。

どう言い訳したものか……

「ああ、父さんは出張で今は居ないんだ」

「目を逸らした!今絶対に目を逸らした。嘘だよね!?嘘を着いたよね!?!」

直ぐにバレてしまいました。俺って分かりやすいかな?

「ああ、嘘だ」

「なんでそんな嘘を着いたの?」

「それは……」

まあ他人に言うことでもないが、結羽を一概に赤の他人とは言えないしな。

「先日。父さんが死んだんだ」

「えっ」

「そんでき……つい最近まで俺は落ち込んでたんだよな。あそこまでするとは思えなかった……」

そう言うのと結羽が悲しそうな顔をした。

「んな顔するな。んじゃ、萌未待たせてるし帰るか。所で何作るんだ？」

暗い雰囲気を変えるために話題を変える。

「あ、うん。今日はひき肉と卵が安かったから目玉焼きハンバーグでも作ろうと思ってるよ。付け合せにちよこつと野菜炒めを作るつもり」

へー。確かにさつきひき肉と卵に値引きシールが貼ってあったな。

「それは美味そうだな。よし！こんな話をしてたら腹減ってきた。急ぐぞー！」

と走り出す俺。

「あ、待ってって速い！ねえ！なんかもんの凄く速くない？そのスピードおかしいよ！ねえっ！」

と抗議の声を上げながら俺の後を必死に結羽は走ってきた。

「はあ……はあ……」

家に帰ったら結羽はもう既に肩で息をしていた。

「よし。萌未！帰ったぞ」

「なん……で、優也はあんなスピードで走ってたのに……息が上がってないの……はあ……」

とツツコミを入れてくるが俺の体に説明つかないことが起きているため無視する。

「おーい萌未ー」

とリビングの扉を開くと

「お帰りあなた。ご飯にする？お風呂にする？それとも……わ・た」  
俺は言い切る前に扉を閉める。

「見てはいけないものを見てしまった。もしかしたら疲れているのか？」

そして再度確認の為、扉をまた開く。

「お帰りあなた。ご飯にする？お風呂にする？それとも……わ」

「お前、何してんだ？」

言わせねーよ最後のは

でも夢でも幻でも無かったようだ。

「それより服着ろ服を」

そう。萌未は今エプロンをしているのだが、その左右からは真っ白な肌が覗いている。

「ふ、ふーん。甘いよ。プレーンヨーグルトよりもあまーい！」

「そもそもあれは甘くないだろ……」

俺は冷静にツツコミを入れる。

「って事はあれか？水着でも着てんのか？」

「ピンポーン！名ずけて……」

そして横を向いて水着を見せつけるように立つ。

「デーン！水着エプロン！」

そのままじゃねーか。と言うか効果音自分で言うのかよ。

「と言うか水着の上からエプロン着るのがおかしい」

「え!?! って事はお兄ちゃんは裸の方が良いと……待っていてください。今脱ぎますので」

「おい。そうじゃないそうじゃないから脱ぐな。何でもいから服着ろ服を」

服着ろって言ったの二回目のような気がする。

「え!?!まさか服を着たまま!?!なんてだいたってお姫様抱っこ!?!その方向はまさかお兄ちゃん部屋のですか!?!やっとなめてくれるんですか!?!」

俺はベットに萌未を放り投げて部屋のドアを外から鍵をかける。

俺の部屋の鍵は内外両方鍵で開け閉めするタイプだから開けれな

いのだ。

「開けて！お兄ちゃん開けて！」

その声を見殺ししてその場を離れようとするのがチャと音がした。嫌な予感がする。

「開けてって言うてるじゃないですか!？」

と叫びながら飛びかかってきた。

「危ない！落ちる落ちる！落ちるから！」

俺の家は二階建てで、その二階に俺の部屋がある。そしてその階段を登ってすぐの所に部屋がある。

だからそんな所で飛びつかれたら当然そうなるよね。

俺は萌未と共に階段を転がり落ちる。

「いてっ……」

そう階段の下で眩いて仰向けの状態から起き上がろうとする。するとその上に萌未が乗っかってる事が分かった。そして目を回しているようだ。

それなら好都合。萌未を下ろして退散すれば良いだけだ。

そして何とかそれを実行して先程していたカップ麺の空の片付けを再開する。

あまり気が付かなかったが結構量があったようだ。

「優也……もうすぐ出来るよ」

「ああ、ありがとな」

「二人がイチヤついている間に作ってましたので運ぶのを手伝ってください。イチヤついている間に作ったのでね」

なんか会話の一部分が強調されてるように感じる。

「イチヤついても無い。ウザイだけだ」

「でも素直に好意を伝えるって勇気があるよね」

それは分かるが他の人にはああなっでは欲しくないな。

「いつからなの？ああなっなの」

そう言えばいつからだったのだろうか？

そして思い出してみる。

「あ、そんな話をしてたらハンバーグ冷めちゃう。まずは食べよう？」

そうしてまずは萌未を起こしてハンバーグを食べることにした。

「うん。美味しい」

「ほんとですねお兄ちゃん。悔しいですが料理部門では結羽さんに勝ちを譲ります」

とガツガツ目玉焼きハンバーグを食べる俺達。

「それなら良かった」

とスローペースで微笑みながらハンバーグを口に運ぶ結羽。

「そう言えばさっきの話の続きだけどいつから萌未ちゃんは優也に好意を持つようになったの？」

さつき気になったことを聞いてみることにした。

「そうだね。ボク達は前世から結ばれて」

「適当なこと言うな」

萌未に任せると変なことを言い始めそうだから俺が説明する。

「そうだな……最初から変態だったわけじゃないけど、急にスキンシップが多くなった時期があったな」

最初は軽いスキンシップ程度だったんだ。泊まったら普通の兄妹みたく一緒に風呂入ろうとか言ってきて、そこに七海が乱入してきて……ってな感じだったんだが……

いつの間にかパンツが減っている時があったんだ。そもそもって萌未の部屋で遊ぶことになって部屋に行くと棚に何か挟まって締め切り切ってなかったんだ。

そこで好奇心で見えてみて思考が固まったね。

そこにはぎゅうぎゅうに詰まった俺のパンツが詰まっていた。それを見た瞬間俺は危機感を覚えてしまったね。

それから暫くして俺が泊まりに行くとき毎夜寝込みを遅いに来たのだ。

「まあ、こんな感じだな」

気がつけば皿には何も無くなっていった。

喋りながら食べていたからだ。あ、口の中に含みながら喋っては無いよ？ マナーだからね。

「そんな事があつたんだ……それは確かに怖いかも」  
結羽は若干と言うかドン引きのようだ。

すると萌未は顔が赤くなっていた。

「あれ。見たんですか？」

「こいつが居たのを忘れてた。」

なんか地雷踏んだような気が……

「あ、ああ」

「夜は楽しみにしててくださいね」

そう言つてニヤツと不気味な笑みを浮かべる萌未

それを見て恐怖した俺は「俺は自室に居るから隣の七海の部屋使つてくれ。くれぐれも萌未。俺の部屋の鍵開けて来るなよ」と伝えて自室に逃げ込んだ。

あの後直ぐに眠つてしまった。疲れたのだろう。

すると体に急に重みが加わった。

目を開けてみるとそこには

「あ、お兄ちゃん。起きちゃった？」

下着姿の萌未が居た。

「何してる」

「夜這い」

最悪の回答が帰ってきましたよ！

するとバタン！と扉が開いた。

「やっぱり居た！優也！今助けるね」

結羽だった。

よっしゃー！これで助か

「混ぜつても良いよ？」

へ？

「ふ、ふええっ！」

変な声を出しながらペタンと座り込んだ。

「どうするんですか？結羽さん」

「分かった」

分からないで！お願いします！一生のお願いですから！  
すると結羽も近づいてきた。

俺、一生のお願いを使っちゃったんだけど!?

それを見た俺は萌未を上から下ろして脱兎のごとく逃げ出した。

そして夜の町を駆け抜ける。

「助けてくれ」

「なんだ。こんな夜中に……久々に話す第一声がそれかよ」

冷静につっこむ悠真

「で、お前は殺人犯にでも追われてるのか？」

「似たようなもんだ」

「え!?マジかよ！大丈夫か!？」

「危うく萌未と結羽に襲われるところだった」

そう言うゆつくり扉を閉めながら悠真は「帰れリア充」と言ってきた。

そして扉の隙間に手を入れ込む。

「一生のお願いですから！一晩だけでいいんです！一晩だけで良いから泊めて貰えませんか!？」

そして頭を下げ続けた結果、何とか許可が貰えた。

これで俺も安眠できるってもんだ。

今日は二人のことはもう忘れよう。明日またパンツが減ってるかもな……

## 第63話 精神的外傷（トラウマ）

side 優也

俺はあの時のトラウマを思い出ししていた。

「ねえ。お兄ちゃん！起きて下さいー！」

その声の主に叩き起されて俺は眠い目を擦りながら体を起こす。

その声の主を見てみるとそこには七海が居た。

「ん？なんだ。まだ9時じゃないか。もう少しお兄ちゃんを寝かせてくれ……すう……」

そしてまた目を閉じて夢の世界へ

「こうなったら……」

その言葉が聞こえた瞬間、嫌な予感がした。

「おにーちゃん！」

「ぐぼわっー！」

急に七海が飛びかかってきた。

それにより変な声を出して白目をむく。

「な、七海……少しは兄ちゃんを労わってくれ……」

「お兄ちゃんか早く起きないのがいけないんでーすよ。それに9時は

”まだ”では無くて”もう”だと思うのは私だけですか？」

的確なツツコミを入れてくる七海。

「所で七海。夏休みって物を知ってるか？夏休みってのはな」

「知ってるよ」

「そうか。お兄ちゃんはな今、夏休み期間中だな」

「それも知ってる」

二回も即答された。

ならば言うことは一つしかない。

「お兄ちゃんの安眠を邪魔しないでくれ。安眠妨害反対……安眠妨害

反対……」

そしてまた目を閉じると七海は出て行った。

ふう……これで安心して眠れる。

するとものの数分でまた戻ってきた。



「お兄ちゃん。口開けて〜」

まあそれくらいならと思つて寝ぼけた状態で口を開けると何かが口に入ってきた。

「ん？んー。ん!？」

何やら口の中に柔らかくてネチヨネチヨして水気があつて味が薄いものが……

「んって……あー!」

そして俺は部屋を飛び出してトイレに駆け込んだ。

そこで全てリバースした。

「うう……気持ち悪い……」

何を入れられたのかは見えてないが大体わかる。

「目が覚めた?」

「覚めるを通り越してあのくそ爺じいよりも先に曾祖父ひいじいさんの所に逝く所だった……」

とぐつたりしながら言うのと七海が若干笑いを堪えてるかのよう  
に震え始めた。

「ったく……湯豆腐はやめろ湯豆腐は……思い出したらまた気持ち悪く……うっ」

いかんいかん……思い出したらまた胃酸が逆流しそうだから違う  
こと考えよう。

「お兄ちゃん。昔から豆腐苦手だよね」

「七海。お前は間違えている」

とちよつと中二っぽいポーズを取りながらこう言い放った。

「豆腐じゃなくて味が薄いもの全般だ!」

キメ顔でそう言った。

「そこ威張れるところでもないですよー」

と言いながら色々詰まったスーツケースを俺に手渡してきた。

「着替えと……それと歯磨き粉。バスタオルもこの中に入ってますか  
らね」

と説明してきた。

「ちよつと待て!なんだそのお泊まりセットみたいな中身は」

「え？お兄ちゃん忘れたの？」

とキョトンと首を傾げる七海。率直に可愛い。

「今日は萌未さんの家でお泊まり会って約束だったでしょ？」

確かにそんな約束をした覚えはあるが、今日なはずが……そう考えながら携帯の日付を見ると一気に青ざめた。

「今日でした……」

すっかり日付を忘れていた。

「ほらお兄ちゃん。早く支度してください」

と着替えを顔に投げつけられた。

とまあここまでで分かる通り俺はダメ男で妹は完璧な少女なのだ。更には俺へのツツコミをも卒無くこなす。眩しい！

更に言うところの頃の俺は絶賛中一にして若干中二を拗らせている。そのため七海は毎日頭を抱えて胃薬を常備している。

そして絆成家（従妹）に到着した。

今日は父さんが仕事で帰ってこないみたいだから酒田さんに遊びに来ないか？と誘われたのだ。そして折角だから泊まっていけとも言われた。ちなみに母さんは今日もまた遊び歩いている。2、3日帰ってこないだろう。そんなダメ親だ。だから俺はあの人のことが嫌い。

だからご好意に甘える事にして今に至るわけだ。

ちなみに我が従妹、萌未と我が妹、七海は仲が悪いわけじゃないけど時折争ったりする訳わかんねえ関係だ。

そしてチャイムを鳴らして数秒程待つとインターホンから男性の声が聞こえてきた。

多分酒田さんだろう。

「酒田さん。来ました」

そう言うのと数秒でドアが開いた。

「いらっしやい優也君。七海ちゃん。今日は来てくれてありがとう。萌未も喜ぶよ」

そう言って爽やかスマイルをする酒田さん。

酒田さんは落ち着いた声色で何よりイケメンだ。確かに父さんの兄だから少しはお年を召している感はあるけどなんて言うのかな？ カッコイイ。俺も将来あんな人になりたい。

「いえいえ。こちらこそ呼んでいただき誠にありがとうございます」  
そう挨拶すると

「お兄ちゃん。気持ち悪いよ?」

「なんでえっ!」

急に罵られてしまった。何故だ!?

「お兄ちゃん。いつも『ふっ。我を召喚せし物よ。答えよ! 我の力をほ』」

「やあめええてええ!」

七海が左手を左目に翳しながらそんな中二つぽい台詞を言ってきた。

「ここまでで気がついたと思うが七海が今発した言葉全て”俺の”言葉である。」

「僕はそんな事言いません!」

「でもお兄ちゃん。前、坂戸さんのお宅に遊びに行った時」

「わーわー! 聞こえませんか!」

そして両耳を塞ぐ。

「何はともあれ、ここで立ち話もなんだ。上がるという」

そして酒田さんに案内されて上がり込む。

「「お邪魔します」」

「はい。お飲み物どうするかい?」

「あ、私オレンジジュース! お兄ちゃんは?」

「ふっ。そうだな。永久とこしえの闇に包まれし種で作った液体を漆黒しつこくの状態  
で頂くとしよう」

俺がそう言うのと酒田さんは頭の上にハテナを浮かべた。

「あ、お兄ちゃんはコーヒーみたいです。いつもの」

「あ、了解。萌未! 優也君達来てるよ!」

酒田さんがそう呼びかけると携帯にメールが受信された。

開いてみると中にはこの様な文章が書かれていた。

『来て』

その二文字の言葉だが今ではもうなんにも思わなくなっていました。

「んじやまあ酒田さん！僕、萌未ちゃんの所に行つて来ますので僕の方はやつぱりキャンセルで」

俺がそう言うのと少し遠くの方から「はい」と聞こえた。

萌未の部屋に来た俺は扉をノックする。

すると扉が少し開いて出てきた手に引つ張られて引きずり込まれる。

そして中に入ったら何かに急に抱きつかれる。

「お兄ちゃん。こんにちは」

とポーカーフェイスでこちらを見つめてくる萌未が抱きついてきたようだ。

この頃は人前では「お兄ちゃん。しっかりしてください」「お兄ちゃん。ちよつと気持ち悪いので10m位離れていただけると光荣です」的なことを言ってくるが、二人だけの時はこんなんだ。

そして優しく頭を撫でてやると擦つたそうに目を細めて「や、やめてください……」と言う萌未が可愛すぎて辞められない。

この時はそうなんだよ。まだ普通の兄弟よりスキンシップが多いかな？位で済んでいたんだ。

「あ、お兄ちゃん。ちよつとお飲み物取ってくるね。お兄ちゃんはいつものだよね？」

「ああ、頼む我が従順なるえーと……まあ取りあえず頼んだぞ」

とポーズを決めながら言うとうん！わかった！と普段声色が変わらない萌未の声色が浮いた。

そして何をして待とうかなと考えていると俺は不思議な物を見てしまう。

「あれは？パンパンに詰まってるな」

パンパンに詰まった棚があった。

そして見に行ってしまったのだ。  
それが失敗だった。

「は!？」

絶句してしまった。

その中にはパンパンに詰まった男物のパンツが入っていた。

でも十中八九

「僕のだよな……」

本気で恐怖を覚えてしまった。

そして下の方を見ると写真が敷き詰められていた。その写真は

「僕の?しかも魔王モードの」

カッコよくポーズを決めている写真が……しかも撮られた覚えのないものまで……

すると近づいてくる足音が聞こえてきた。咄嗟に柵を閉めて元の位置に戻る。

その後萌未が今みたいな変態になるのだが、七海が事故に会ってから少し後の事だ。

「悠真。ってなことがあったんだよ。昔に」

「爆ぜろ。リア充」

「なんで!?!俺の話を聞いてどうしてそう思うの!?!」

「結羽ちゃんに星野さん。萌未ちゃんも、お前にご執心だもんな」

「いや、前の2人が含まれた理由が分からん」

そんな話をしながら眠りについたのだった。

## 第64話 恐怖の軽音部

side 優也

遂に今日、終業式が行われて遂に夏休みに入ろうとしていた。  
そして俺は今廊下を歩いている。

「今日も疲れたな……」

そう呟きながら歩く。

帰ったら早く寝たい。

最近あまり寝れてないから……

寝たらみんなが俺の前から消えてなくなるような夢を見るようになってしまった。

だから寝るのが怖い。

「ははっ。トラウマ第二号だな」

そして歩く。

「すみませーん……」

なんか物凄く小さい声が聞こえるな。遠くで誰かが話してるのか？

「今日は誰にも捕まらないうちに帰るぞ〜」

と意気込んで周りを見て誰も居ない場所を通っていく。

「すみませーん……」

またもや聞こえてきた。

疲れてるんだな……この夏休み。久々にばあちゃんの所に行つて休もうかな……ダメだ！あのくそ爺が居たんじゃ休めるもんも休めねえ。

「しようがない……あれをやるしか……」

そして歩いていると突然

「すみませーん！」

「うわあっ！」

目の前に急に現れた。

驚いて尻もち着きそうになったが何とか堪える。

そして容姿を見ると男子の制服を来ているのに女の子用のヘアピ

ンとヘアゴムを短い髪に付けている人だ。

それにしても気を抜いたら見失いそうな位存在感が薄いな。

「え、えつと君は誰だ？」

「あ、僕は柊ひいらぎ葵あおいです。1年生です」

女子みたいな声を出すやつだな。顔も中性的な顔立ちだし、女装してもバレない系男子だ。

それにしても1年生か……

「俺は絆成 優也だ。で君は一体何の用だ？」

そう言うのと恥ずかしそうに笑ってからこう言った。

「ちよつと……音楽室の場所を忘れてしまいました……案内して貰えたらと……」

こいつ、入学してから何ヶ月も経ってるのにまだ覚えていなかったのか……

取りあえず面倒くさそうな案件だな。

「それにしてもどうして今？何か用でもあるのか？」

そう言うのと「はい！」と元気な返事をしてからこう言った。

「僕、軽音部なんですよ。パートはドラムです」

そう言うってドラムのスティックをカバンから出してくる葵。

こいつが軽音部な事もビックリだが、ドラムをやってる事もビックリだ。

人は見かけによらないってことだな。

「そうか……お前、部員なら音楽室の道のりを覚えておけよ」

「すみません。僕は如何せん方向音痴なもんで」

方向音痴にも程がある。そう思うぞ？俺は

なんにせよ余計に面倒くさそうな雰囲気。

俺は寝たいんだ！

「悪いが他を当たってくれないか？」

そう言うのと物凄い勢いで地面に頭を付けて懇願こんがんしてきた。

「ヘアピンとヘアゴムだけで気づいてくれたのはあなただけなんです！」

ん？どういう意味だ？

「お前に普通は気がつくことが出来ないってことか？」  
そう聞くと小さく頷いた。

どうしてだ？そう思っていると俺の心の中の間で答えてくれた。

「実は生まれつき存在感が無くてですね……僕が生まれた時も皆さん、僕が生まれた事に気が付かなかったそうです」

なんて気の毒なやつなんだ！

それでさっき見失いそうになったのか……

「それですね、女装したら存在感が上がるらしいです」

何その変な体質!?

「何やらポイント制みたいで、女装を完璧にしていけば行くほど気がついて貰えるみたいです」

あー。話の流れが見えてきた。

つまりあれだ……

「もっと女装したら気が着いて貰えるけどあまりこれ以上はしたくないと」

「あまりじゃなくて絶対にです!」

厄介なことになったな……俺以外気づけない奴か……

「それにしてもなんで気が付けたんでしょうか?」

ああ、それが。実は俺も原理はあまり分かってないんだが

「ある時を境に俺は運動神経や力、更には気配察知能力が上がったんだ。理由は知らん」

理由は多分あれだろうな……

『お前は何を望む』

あれは夢だと思ってたが実際に色々起きてしまってるからな

……

「そうなんですか!?!これは運命としか言い様がありません!どうか!お願いします!」

しょうがない。ちよつと行って帰ってくれば良いか。

「わかった。こつちだ」

そう言って歩き出す。

しかしまあ、俺の察知能力で声しか聞こえないやつが居るとは思わ



なかった。

まあそんな訳で流されて俺は面倒臭い役を受けてしまった。

正直、ここまで気が乗らないのは初めてだ。

何故なら

「ここだ」

「ありがとうございますー！」

着いて直ぐに俺はドアの位置を指さす。

そして葵はドアノブを回して引っ張るも開かない。傍から見るとアホっぽさが半端ない。

因みにあそこは今現在鍵は開いている。

それにしても影が薄いとドアノブガチャガチャしても気が付かないんだな。

何故開いていると気がついたかと言うと中からギターやベースの音が聞こえてくるからである。

「つ、遂にはドアからも認知されなくなったか……」

と手を地面に付けて落ち込む俺の中では「馬鹿か？こいつ」と言う思考で埋められていた。

そして葵の奴が落ち込んでる間にドアに近づいて開けた。

「あ、あなたは神ですか!？」

と両手を両手で包むようにして握ってキラキラとした目で見てくる。

「いやお前。この扉」

そして一泊置いてから言い放ってやった。

「スライド式だから」

そう。この扉はドアノブが着いているスライド式の扉なのだ。

すると徐々に葵の顔が赤くなっていく

「お前、この数ヶ月間この学校通ってんのに知らなかったのか？」

それが更なる追い討ちになってしまい、顔を真っ赤に染めたまま「うわああっ！」と叫びながら部室に入ってしまった。

そしてこの場を去ろうと歩くと一瞬にして目の前に男が現れた。

お前、完全に人の動きを超越してんぞ。人間辞めたのか？最も、俺がそれを言えた立場では無いが……

「軽音部。入りませんか？」

先程の超人的なスピードで走る男とは想像もつかないほどのギャップの話し方で勧誘してきた。

「絆成さん。どうっすか？ねえ！どうっすか!？」

「何度も言ってますが入る気は」

「それなら体験入部してみても如何ですか？今なら特別に我が学年のマドンナ。咲峰さんのストラップが着いてくるぞ？」

勧誘の仕方が完全に悪徳商法じゃねーか。と言うか肖像権はどうした肖像権は!?!ダメだ……こいつら部員集めに必死すぎんだろ。

「何度言われても……」

「良いですから！ね？」

そして手を掴まれる。

それを離そうとするもこいつ握力強すぎだろ。既に腕がぶっ壊れそうなんだが？

こいつなら誰にも負けない気がしてならない。

「さ、行きましよう？」

しかし連れていかれたらおしまいだ。

悪徳セールスマンの法則。入れたら負けの連れていかれるバージョンだ。

そう。何故俺がここまで軽音部に行くことに乗り気じゃなかったのかと言うとこいつだ。元副部長で現部長のこの男の名前は五十嵐いがらし灯夜とうやと言う。俺が一年生の時、ちよつとこの前を通っただけでこの男が（物理的に）吹っ飛んで来たのでトラウマにもなっている。

急にドアをぶち破って飛んでくるのは反則だ。……あんなことしていたら逆に来なくなる気がする。

その時にぶち壊したおかげで立て替えた時に間違えてドアノブの着いたスライド扉となった。どう間違えてそうなったかは知らんが

……

「先輩！本当に無理です！無理ですから！」

「いやいやそんな事ない。君なら出来る」

しょうがない。あれをやるしか

そして俺は何とか柔道の投げ技っぽい体制を作り上げて投げる。

そして五十嵐先輩は打ちどころが悪かったらしく気を失ってしまつて白目をむいた。

これなら逃げれると思つたら何と気を失つた状態でも握力が健在であつた。

「なんでだよ！必死すぎだろ！」

もうやだ軽音部。

因みにこの人はどんなに攻撃しても離れることは無かつたのでこの人のギターに蹴りをお見舞いしようとしたところ急に起き上がつて「蹴らないでください」と土下座して懇願してきたのでその隙に逃げることにした。

因みにベースの人とキーボードの人には哀れみの目を向けられませんでした。

もう二度とここには近づくもんか！と心に深く誓つたのであつた。

その後家帰って寝ると夢にあの人の吹っ飛んできた時の顔が出てきて総睡眠時間が30分にも満たなかつたのは悪い思い出。

二年生編夏休み 消失編  
第65話 お話（お説教）

side 優也

ついに始まった夏休み。特にやることも無いのでだらだらしていると携帯に着信が入った。

「はいはい。どちら様で？」

『わしじゃ。わしわし』

そして一瞬思考が止まったものの冷静に通話終了ボタンを押した。それにしてもわしわし詐欺なんて珍しいな。なんでじいさんに寄せたんだろう……声もくそ爺そのものだ……し……

そこまで考えたところで顔が青ざめていくのが分かる。

そして冷や汗がドバアッと吹き出してきた。

もしかして本当に？

するとまた電話がかかってきた。

恐る恐る見ると同じ番号だった。

「も、もしもし」

『悟朗』

その名前を冷え切った声で聞くと震えが止まりません。

「あ、あ……ほ、本当にくそ爺だったアアッ！」

『だあれがくそ爺じゃって？』

心の声が出てしまっていて聞こえていた。

「いえ、なんでもありません」

『そうか。取りあえず次会う時を楽しみにするといい』

恐らく近々俺はこの世を去ることになるのだろう。父さん。かなり早いがそっち行くよ。

『で、要件は分かかっておろうな？』

もちろん分かっている。じいさんが電話してくる時はあれしかないのだから。

つまり俺は

「店の手伝いですか？」

『そうじゃ』

ドナドナされるのである。

「いつ行けば……」

『逆に聞くがいつ来るんじや？』

「今でしょ！って古いわあッ！……はっ！」

そこで気がついてしまった。俺の突っ込む性格を利用されたことに

『ふむ。なら今すぐ来るんじや』

そう言つて電話を切られてしまった。

「こ、(体力的に) 殺される……」

あのかそ爺はスパルタなのである。

よつて俺は死ぬ！

「取りあえず土産にはあちゃんの好きな羊羹買ってくか。じいちゃんへの土産？そんなもん知るか……」

そう言いながら俺は最低限の荷物を持ってコンビニに向かった。

因みに今日は如月のシフトは入ってない。因みに俺も入ってないからのんびりしていたのだ。

最近北村さんとばかりシフトが合うからバイトが楽でいいな……

「そしてなんだこれは」

悠真がゴミ箱から生えていた。それを結羽が軽蔑の眼差しで見つめていた。

きつと凌太のマフラーを取ろうとしたのだろう。

俺も凌太のマフラーを取ろうとして凌太必殺、ゴミはゴミ箱へアツパーを食らったことがある。

このアツパーを食らったら必ずその後、ゴミ箱に頭から突っ込むことになる。

その事からこんなヘンテコな名前が着いてしまった。因みに本人の前でこの名前を言ったじん何とかが居てその時は強めにゴミ箱に叩き入れられたらしい。

「で、結羽。お前はこの状況を見てどう思う」

「ふぁ○きゅー」

そこまでのなのか?! いや、フアンの結羽からしたら凌太のマフラーを取るのは大罪なのかもしれない。

「それより優也何しに来たの?」

「羊羹を買いに来た。祖父母家に行くのに持っていく土産だ」

そう言うともものすごい速さで悠真が飛び起きてきた。

「マジで!? 俺、久しぶりにお前のじいさんが焼いた焼き鳥食べてえっ!」

いや、肩つかみかかってくんな。それとお前臭いぞ。ゴミの臭いが移ってんぞ!

「まあ良いけど、泊まりだぞ?」

「問題ない」

まあ、それならいいか。

取り敢えず今度凌太の機嫌を取っておくか。この取っておきのピル○ルで!

因みに凌太は乳製品ならなんでも好きだが、特にピル○ルが好きなようだ。

ピ○クル美味しいよね。

取り敢えずピ○クル渡しとけばその日一日は何してもあいつは怒らないはずだ。

マフラー取ろうとしても普通のアツパーで済む筈だ。

因みに一週間飲まないと逆に不機嫌になって近寄るもの全てにゴミはゴミ箱へアツパーをするようになってしまう。

俺も1回その理不尽アツパーを食らったことがある。

「取り敢えず羊羹買ってくぞ」

そしてコンビニに入ろうとする。

「あ、優也」

すると結羽が呼び止めてきた。

「なんだ?」

「あ、あの……優也。私もついて行っていい?」

そんな事を言ってきた。

俺としては全く問題ないが……。まあ、客人ウエルカム夫婦だから大丈夫だべ。

「ああ、良いぞ」

そう言ってコンビニで羊羹を買って、電車に乗って祖父母家の最寄り駅にて降りて歩いて数分。

遂に到着しました。絆成（祖父母）家です。

隣には悠真と結羽がいます。悠真は戦場にでも行くような表情です。結羽はそわそわしているみたいです。

「じゃあ行くぞ」

そして扉を開けて中に入る。

そこには既に二人の人物が居た。

「優也。久しぶりだな」

「あ、ああ……」

なんて圧だ。押しつぶされそうだ。

「おつす。久しぶりっす」

と片手を上げて挨拶する悠真。

「あら悠真君。お久しぶり。いらっしやい」

と悠真とうちの祖父母はこんな軽口を言える関係なのだ。

「お邪魔します」

と後ろで言ってから入ってくる結羽。

「あら？初めての子ね」

「はい！私は柴野 結羽です。よろしくお願いします」

とお辞儀をする結羽。めちやくちや礼儀正しい。これが普通である。

「あら。可愛い子ね？もしかしてゆうちゃんのガールフレンド？」

そのゆうちゃんって呼び方やめろ。ややこしくなる。

それとこっちはこっちで大変だ。

「ががが、ガールフレンド!？」

そして顔を真っ赤に染めてしまった。

「えーと……優也つてもう一人妹さん居たっけ？」

その瞬間。俺は凍りつきそうになった。

「あらー」

何を呑気なことを……

今ばあちゃん。俺より年下に見られたぞ。

「あの。結羽さん？」

「なに？」

このままだと誰も訂正しなさそうなので俺が説明することにした。

「あの人は見た目こそ確かにロリだ。だがな。だがな。あれでも64なんだ」

そう言うとき結羽は口を押さえて驚いた。

絆成 真由美<sup>まゆみ</sup>。見た目年齢15才。だが、実年齢はと言うと64才。

因みに性格は見た目年齢に依存している。

と言うか真由美ばあちゃんに恋をしたじいちゃんってろりこ

「だーれーがーロ○コンだ!？」

その瞬間、頭をでかい手に掴まれて引つ張られこめかみを中指の骨でグリグリされる。

「痛い痛いー!」

「よし。優也。まずはあっちの部屋で今朝の件と今の件についてお話<sup>説教</sup>しようじゃないか」

そして隣の部屋に引きづられていく俺。

その光景を生暖かい目で見守る三人。

いきなり不安になってきました。

※自業自得です



## 第66話 柴野結羽の憂鬱

side 結羽

優也が連れていかれて数分が経過した。

私達は現在、和室に案内されて優也のおばあちゃん？にもてなされていた。

テーブルの上にはせんべいが入ったカゴがど真ん中に堂々と置かれている。

私しかほとんど手を付けてないけど……

お煎餅って美味しいよね。

「ありがとうね。この遠いなか。来てくれて」

と何度目かわからないその言葉をおばあちゃん？は言ってきた。

「いえいえ、俺はじいさんの焼き鳥が食いたかっただけなので」

そう言えば優也のおじいさんって居酒屋を経営しているらしい。その手伝いなんだね。

「優也大丈夫かな？」

「大丈夫だ。いつも通り」

あれでいつも通りなの!?

でも悠真が大丈夫って言うなら大丈夫なんだろう。

襖の奥から「うわああつ!」って言う叫び声が聞こえるけど大丈夫なんだろう。

……大丈夫……なんだよね？

「そう言えば、柴野さんって政博君まさひろの娘さん？」

急にそう聞いてきた。

政博君？よく分からないけど取りあえず

「柴野 政博は私の父です」

「おおー。確かに面影あるわね」

とマジマジとこっちを見てくる優也のおばあちゃん。

お父さんの事を知ってるのかな？

「お父さんの事を知ってるんですか？」

「知ってるも何も昔はこの辺りに住んでいて瞬君とは仲良くしても

らってたからね」

へー。この辺りに住んでいたんだ。と言うか瞬君？

「瞬君って？」

「瞬君はゆうちゃんのお父さん絆成 瞬介<sup>しゅんすけ</sup>。ほらこの人」

と言つて私たちの前に分厚いアルバムを出してきてページを開いて見せてくる。

うわあー。カッコイイ。落ち着いた雰囲気か乙女心を擦るっついてい  
うか。

今の優也のお父さんの雰囲気じゃないけど確かに面影がある。目  
とかが特にそっくり。

「カッコイイですね」

「でしょー？そしてイチオシはこの写真」

そう言つて指を指したのはサッカーのユニフォームを着てシュー  
トを打つ瞬間の写真だった。

「昔はエースストライカーだったのよ」

おばあちゃんは昔に戻つたみたいにはしゃいでいる。いや、精神年  
齢は見た目相応なのかもしれない。

すると和室の入口の扉が開いた。

「ばあさんや。優也連れて店行つてくるから」

そう言つて優也を引きずつて連れていくおじいさん

優也。頑張つて……

「やあーめえーてえー！」

「早く歩け」

確かに移動にかなり時間かかったし、そろそろ居酒屋も開店する時  
間だね。

もしかして優也って無理やりおじいさんに料理の特訓されたの？

だから料理上手いんだね。

面倒くさがりなのに料理の練習をしていた事が驚きだったからね

「後で食いに行こうぜ」

とお茶を啜りながらそう呟く悠真。

このお茶、美味しい。そう思いながら優也、大丈夫かな？と考える

のであった。

「到着！」

悠真は指を指して大声で言う。やめて恥ずかしい。

「じゃあ入ろうか」

そう言っておばあちゃんが率先して入って行った。それに続いて悠真が入って行く。

あまり居酒屋というものに入った事が無かったから物珍しさもあつてキョロキョロしてしまふ。

今の私、若干挙動不審気味かも。

「いらっしやいませー」

私達を出迎えたのは制服姿の優也だった。

「三名様でよろしいですかどうぞー」

まるで私達を知らない様な態度で接客してきて、三人でいいとも何も言っていないのに間髪入れずに案内してきた。

「ここですご注文はそのタブレットでお願いしますそれではごゆっくり」

と全ての文章を繋げて息継ぎしないで言い切った優也は個室の扉を閉めて接客に戻って行った。

その直後店内に「いててて！すみません！痛いです！」という叫び声が聞こえてきた。

多分愛想悪くしたのをバレたのであろう。

そして卵焼きと焼き鳥、悠真はホットケ開き、おばあちゃんは冷麺、私は海鮮サラダを頼んだ。

そしてしばらくすると料理を届けに来たのか店員が来た。

よく見てみると優也だった。

そして頭にたんこぶが3つ横に並んでいた。

「卵焼き、冷麺、海鮮サラダです。残りの品はもう少しお待ちください。ごゆっくり。後、これサービスな」

とパフェを出してきた。

「結羽、こういうの好きだったよな？気にしなくていいから。あと、じ

いさんには内緒な」

そう言つてまた優也は戻つて行つた。

サービスつて……多分おじいさんに内緒で作つたんだろう。だつて何故かバレたみたいで奥の方からまた叫び声が聞こえてきてるもん。

でも優也の好意に甘えて頂こうかな。

「なんか俺だけ無いんだけど」

「日頃の行いだよ」

「なんか結羽さんが辛辣!?!」

と仰け反つて驚く悠真さん。

その後、数分してまた優也が料理を持ってきた。

たんこぶの上にたんこぶがあるんだけど？

「こちら、ホツケ開きと焼き鳥になります。ごゆっくり」

なんか行つたり来たりする度にたんこぶが増えてるな

どれだけおじいさんを怒らせるんだろう？

「あのくそ爺。料理の腕だけは良いから何も文句言えねえんだよ。何か弱み握れねえかな？」

そうしてまた裏の方に戻つて行つた。

予言するね。この後優也の叫び声が響き渡る。

「やめて！痛い痛い！」

ほらね？やっぱり聞こえてきた。

「美味しかった」

「だな。優也のじいさんは料理の鉄人だからな」

確かになんでも美味しかった。

でも1番美味しいと感じたのはあのパフェだね。すごく美味しくて思いい出に残る一品だった。

「はあ……お前ら、こっちにお仕掛けてきやがって」

先から優也がぶつくさ文句を言っている。

「んじゃ。俺は寝るから。明日は早く帰るからな」

そう言つて寢室に向かつて行つてしまった。

じゃあ私も寝ようかな？  
そんなこんなで今日一日が過ぎていくのだった。

## 第67話 帰還

side 優也

次の日。俺は朝四時から料理の訓練に駆り出されていた。  
眠いでござる。

このスパルタ爺め。どうしてくれよう。

「変なことを考えている時間があったら手を動かしたらどうだ」

そしてなんでこうも直ぐに俺って心を読まれるんだろうか……

俺が今、指導を受けているのは焼き鳥だ。

じいさん直伝の焼き鳥。さっきから焼きすぎやら甘いやら薄いやら濃いやらうるさいわ！

何ちよつと変えただけなのにそんなに変わるかっての！

因みに横で悠真がヨダレ垂らしながら気持ちよさそうに寝てて、優也のアホー。と呟いていたからムカ<sup>うっ</sup>ついて顔を踏<sup>か</sup>んずけてグリグリしてしまつたら更に深い眠りについてしまつたみたいだった。

白目むいていた様な気がするけどそれは俺の気の所為だ。

「こんなもんだらう。だが、まだまだわしの味には程遠い」

「うるさいな。俺はここ継がないんだから」

言つてしまつた。

絶対怒声がこの後飛んでくる。そう思つたのだが、

「分かつておる。お前が面倒くさがりて料理をしたくないという気持ち」

そんな今まで言つたことの無いような事を言つてきた。

「お前の人生だ。わしは縛るつもりは無い」

「じいちゃん……」

人生で初めてじいさんにそんな事を言われたから涙が目<sup>め</sup>に溜<sup>た</sup>まつてきた。

「まあ、それでもなんだから言つて努力家じゃよな。でもお前の努力じゃまだまだ大切な人は守れんぞ」

「余計なお世話だ！」

最後の一文で一気に涙が引いたわ。完全に涙が枯れたわ。砂漠に

なっただわ。

「電車の時間までビシバシいくぞ」

「お手柔らかにお願いします」

side 結羽

ピ。ピ。ピ。

その音が鬱陶しいと思いつつも手も伸ばしてアラームを止める。  
そしてまだ眠い体に鞭を打って起き上がる。

時刻は5時半。いつもこの位の時間に起きてる。

そしてお花を積みに行こうとすると優也と悠真の寝室の扉が開いているのを見つけた。

興味本位で覗いてみると恐ろしい光景が広がっていた。

「し、死んでる」

白目になって壁に突き刺さってる悠真が居た。

誰にやられたんだろう。

まさか、この部屋に今いない優也!?

※正解

そんなわけないか。※現実逃避

見なかったことにしよう。

そうしてキッチンの前を通ると今度は優也とおじいさんが居た。

何やら料理の練習をしているみたい。

あれだけの腕でまだまだだって言うなんておじいさんは凄いな。

そんな光景を流しながらお花摘みに行った。

戻ってくると思卓にもものすごい量の焼き鳥が並んでいた。

それよりも

「悠真。まだ生きてたか……しぶといヤツめ」

「大丈夫?」

優也。その言い方完全に犯人だよな?

「この頭の包帯を見て大丈夫だと思えるのか?」

と包帯を指さす。

確かに痛々しい。しかも自分で巻いたのか下手くそだ。

「それよりこれを俺たちに処理しろと?」

「そういう事だ。つべこべ言わず食え」

そう言つて一本を一瞬で食べる優也。

一口でかい!? 一本まるまるいっぺんに食べたよ!

「しよれよりもさ。お前、あれだけ店継ぐのは嫌がってたのに手伝いはするんだな」

そういう話しながらも既に悠真の皿には10本程の串が置いてあった。

なんて言うペース!?

私も食べないと無くなつちやう。そう思つて急いで一本取つて一口食べる。

「美味しい」

昨日食べた居酒屋の焼き鳥も美味しかったけどこの焼き鳥の方が美味しく感じる。

「ありがとうございます」

と言つてまた一本口に含む優也。

「そうか。これは優也の失敗作か……俺らから見たらどっちの方が美味いとか分からんけどな。同じタレを使つてんだし」

優也のなんだ……。でも私はこれが失敗作とは思えないな。だつてこんなに美味しいんだから。

「結羽。何ニヤニヤしてるんだ?」

と言われてやっと気がついた。

口元に触れてみて自分の口角が上がっているのが分かった。

そして慌てて元に戻す。

「な、なんでもないよ」

慌てて繕う。

そんな感じで朝は過ぎていった。

side 優也

「「「やようならー」」」

俺達はばあちゃんと同じいさんにそう挨拶してから駅の方に走り始



めた。

「俺達はなんでこんなになんて走ってるんだっけ？」

そう言い出した悠真の頭を強めに殴る。

「お前が支度早くすれば走る必要もなかったんだがな」

そう。悠真が支度をゆつくりとしていたせいでこんなになる羽目になったのだ。

このマイペースめが……。アホはどっちなんだか……。

「取りあえず後五分だ。かなりギリギリだぞ」

そう言つて無我夢中に走る。

「速い速い！何でそんなに速いんだ!？」

「つべこべ言わず走れ！」

でも流石に結羽にこの持久走させるのは酷だよな。

そして俺は少しスピードを落として結羽の隣に行く。

「ちよつとだけ我慢しろよー」

「え？な、なに!？」

そして膝の裏に腕をまわしてお姫様抱つこの形で持ち上げる。

うん軽い。ちゃんと食べてんのか心配になるレベルだ。

「ゆ、優也!？」

「悠真は走つて来いよ！」

そう言つて俺は結羽を連れて駅の方へ走る。

「鬼畜！これからお前のことをキチナリって呼んでやる！」

後ろでそんな事を叫んでいるが知るか。自業自得だ。

その後、俺のスピードで余裕でたどり着いた俺と結羽、そしてギリギリに悠真が息を切らして肩で息をしながら来た。

そして何とか電車に乗って帰れましたとき。めでたしめでたし。

数日前

「あいつの事を徹底的に調べあげろ」

「ついでにあいつの周辺にいる奴等も調べあげますか」

「そうだな。あいつの事は許せねえ」

「ああ、俺達をこけにした罪。やっと償わせる準備が整った。あとは

あいつにとって最も残酷な方法で償わせる。それだけだ」  
そして男は一枚の写真にナイフを突き刺した。  
「絆成……優也」

## 第68話 誘拐

「遂に。遂に機は熟した」

「さあ、俺達の復習劇の始まりだ」

遂に男達が動き出す。

side 結羽

うん。こんな所かな？

「露木ちゃんは買えた？」

「はい。しかし、色々あるので迷いますね」

「そうだね。これとかも可愛いから迷っちゃおう」

私は今、服を買いに来ている。

そしてたまたま露木ちゃんとあつたから一緒に廻ってる。

「あーこういう服とか露木ちゃんに合うんじゃない？」

そう言つて一着の服を手渡す。

「で、でも……私にはちよつと派手すぎる気が……」

そう言つてモジモジとしている露木ちゃん。

恥ずかしがり屋さんな露木ちゃん可愛い！なんか守つてあげたくなる女の子つて感じの女の子だよ。

どう考えても神乃さんの妹だと思えないんだよ。

「あ、あの……結羽さんにはこれが似合うと思います」

そう言つて露木ちゃんの渡してきたのはフリフリの可愛い服だった。

「わあー。可愛い！ちよつと試着してこようかな？」

そうして試着室に入った。

そして数分して着終わつて試着室から出てくると誰も居なかった。

ちよつと不思議に思ったけど取りあえず気に入ったから会計済ませて着ていくことにした。

そしてちよつと店内で露木ちゃんを探すことにした。

「露木ちゃん！どこに居るの!？」

すると急に口元にハンカチを当てられた。

すると急に眠くなつてきて……

「ちよつと客が少なくて助かったぜ。お陰で……」

そこで私の意識は途切れた。

side つみぎ

「久しぶりね」

「そ、そうですね」

今、私が散歩していると咲峰さんに会いました。久しぶりですね。

「咲峰さんは何してたんですか？」

「そうですね……適当に散歩かしら」

「あ！私もです」

まさか咲峰さんも散歩だったなんて。偶然だね！

「それじゃ。私も散歩してたんで少し話しませんか？」

私は勇気を振り絞って提案した。

「そうね。いいわ」

そうして咲峰さんと話しながら歩くことにした。

咲峰さんは学校のマドンナって言われるくらい美人だから良いよね。私も……なんか想像したら悲しくなってきた。

「それじゃ、単刀直入に聞いわ」

そう言われたので私は身構える。

するとこんな事を聞いてきた。

「童明寺君とはどうなの？」

と私が最も恥ずかしがる話題を

「ふええっ」

「やっぱりあなたはからかったら可愛いわね」

からかわないですよ！咲峰さん。

そしてしばらく話した。

「だいぶ話したわね」

「そうですね。ここまで他人と話したのは久しぶりです」

そして咲峰さんの方に振り返って

「今日はありがとうございました」

そう言ったが、その位置には咲峰さんは居なかった。

「あれ？ふぐっ！」

急に口元をハンカチで押さえられた。

すると眠くなってくる。

「これでこっちは終わりっすね。これで奴が助けに来るんすかね？」

「友達思いのあの絆成 優也だ。必ず来るさ。情報を手に入れてな」

そんな会話を聞いてしまった。

絆成君……気を……つけて……

そこで私の意識は途切れた。

side 優也

二組が大変な目にあっている頃、優也は優雅なコーヒータイムを味わっていた。

「しかし、今日のコーヒーは不味いな。なんでだ？嫌な予感がするな……」

すると急にインターホンが鳴った。

見てみるとそこには悠真が居た。

そして悠真の第一声が

「大変だ！手を貸してくれ！」

という切羽詰まったものであった。

こいつがここまで切羽詰まってるところを見たことが無かったの  
ですぐ様向かった。

「詳しく聞かせてくれ」

俺もそれ相応の対応をした。

「実は俺はさつきまで散歩してたんだが、つみきちやんと咲峰さんが散歩してるのを見かけたから声をかけようとしたんだ。そしたら急に路地裏から手が伸びてきて二人が連れ去られてしまった」

そんな事を聞かされて、こいつの冗談だと思いたかった。だけどこれが本当なら俺の嫌な予感と繋がるんだ。

「もしかしたら他にもさらわれてる人が居るかも」

なんで俺の周りだけ……動機はなんだ？金か？いや、状況から考えてそれは多分ない。じゃあ拉致して何する気なんだ？

もしかしたら俺に関係が……

「もしかして……」

俺がそう呟くと悠真は険しい表情のまま「どうした」と聞いてきた。  
「中一の頃、あったろ？俺がサッカーボールを蹴って不良を撃退したの」

「ああ、あれか。サッカー帰りの」

「そう。その時のやつらが俺に恨みを持ってなら辻褄が合うんじゃないか？」

そう言うとき悠真は確かに辻褄が合うな……と呟いた。

「でもあいつらはここらで有名な不良。今治いまばり 京助きょうすけが仕切るグループだぞ」

「まあ、その今治には既に喧嘩を売っちゃってんだけどな」  
「そう言うのと悠真はえ!?とでも言いたげな表情をした。」

「だってよ。あの時ボールを当てた奴が今治だぜ?」

俺は流石にあの時、命の危険を感じた。だが、今治が気を失ってくれたおかげで何とか撃退できた感じなんだ。

「マジかよ……まあ、拉致られたとしたら十中八九あの倉庫だろうな」  
「ああ、そうだな」

町外れに使われていない倉庫がある。そこに奴らのアジトがあるんだ。

つまり敵陣に突っ込む必要があるんだ。

「取りあえず俺とお前だけじゃきついから仲間集めてくるからな」  
「そう言っ外に出る。」

取りあえずあそこの公園で黄昏てるやつからかな?

「よ!童明寺」

「なんだ。優也」

何か悲壮感漂う雰囲気だった。

「どうしたんだ?」

「見たんだ……つみきが拐われるの」

お前もかよ!

「また大切な人を……」

「なら助けようぜ!」

とガッツポーズを繰り出して元気つける。

「無理だ。あいつらは十中八九今治グループだ。勝てるわけがない」

「そう弱気の童明寺に俺は腹が立った。」

「お前、白井さんが好きなんだろ?」

憶測だが。

「……好きだよ」

「なら簡単に諦めんじゃねーよ!」

「お前には関係ないだろ!そりゃ俺はつみきが好きだ。好きになっち

まったんだよ！可愛くて健気で：彼女にしたら最高の女の子だ。さ  
らったのがあのグループだって分かっててもまだ諦めきれねえよ……」  
「ならー！」

だけど童明寺は暗い表情のまま続けた。

「ダメなんだよ。俺はあいつの事が忘れられない。好きって気持ちだ  
けじゃあいつを恋人にする資格なんて無いんだ。また、俺は力不足だ  
から何も助けられないんだ」

少し前の俺を見ている気分だった。

気持ちは痛いほどよく分かる。

こいつは怖いんだ。目の前で大切な人が居なくなるのが……

こいつに以前、何があったのかは知らねーよ。

だがな

「おい童明寺」

そうやってフラフラと近づいて1発殴った。

それで諦めんのは間違ってる事くらい俺にだって分かる。

「おい！何すr」

「それで頭冷やせ。この腰抜け野郎おっ!!!」



## 第69話 喧嘩、そして親友へ

side 優也

「この腰抜け野郎おおっ!!!」

俺は童明寺に対してそう言い放った。

すると童明寺はこちらを睨んできた。

「おい。俺だつてな……考えたさ。考えて考えて考えたけどあいつらに勝てる方法がねえんだよ」

俺はため息をついた。

「それを行動に移さない所が腰抜け野郎だつて言ってるんだ」

「喧嘩売ってるの?」

そう言いながら童明寺は座っていたベンチから立ち上がって胸ぐらを掴んできた。

普通なら多少なりとも心が乱れる状況だ。しかし、俺の心は嫌に落ち着いていた。

「大切な人なら、自分の命に変えても守って見せろって言ってるんだよ!この腰抜け野郎!」

その瞬間、俺の頬に鈍い痛みが走った。

それが殴られた痛みだと気がつくのにはあまり時間がかからなかった。

それが分かったら俺は童明寺の腕を掴んで投げる。

そして体勢が崩れたのを見て押し倒して掴みかかった。

「おい!お前は……お前つてやつは!ほんとしようもない」

そう言つて殴ろうとすると童明寺に寝返りで上に来られてしまった。

そして降ってくる拳を掌で受け止めた。

「ぐ」

「俺が腰抜け野郎だと?ならお前もそうじゃねえか。自分のことを棚に上げて俺に説教してんじゃねえ!」

「俺は戦う!勝てないと分かっている俺は戦う!お前とは違うんだよ!」

そして横向きになって蹴り飛ばして距離をとる。

いつの間にか雨が降ってきていた。そう言えば昼から雨が降るって言ってたな。

「はあ……はあ……そうか……勇気と無謀を履き違えんじやねえぞ。ボケ……無謀はな……犠牲者を増やすだけなんだよ!!」

そして俺の懐に入ってタツクルしてきた。

「ぐはっ」

「諦める時は潔く諦めたらどうなんだよ!」

そして押さえ込んできている童明寺の腕を掴んで持ち上げる。

「潔いのは必ずしもいい結果を産むとは限らねえんだよ! 足掻いて……足掻いて……足掻きまくって初めて得られるものってのもある

んだ!」

そして横の方に倒してその時に殴る。

「なんだよ。それは」

分からない。自分でも何を言っているのか……。

確かに今まで足掻いて手に入れてきたものがあつたはず。

その時に結羽の顔が浮かんだ。

俺が感じているそれと童明寺が感じているそれが同じものだとしたら……

「大切なものを……救える。努力は人を裏切らないってよく言うだろ?」

そして俺は童明寺に手を差し伸べる。

そして

「一緒に足掻こうぜ。この身が朽ち果てるまで……。足掻いて足掻いて足掻きまくったその先にある未来をつかみ取ろうぜ。童明寺 あつしっ!!」

そう言うのと童明寺は俺の手を取った。

「童明寺。一緒に……つかみ……取ろう……ぜ……」

とその場に倒れてしまう。

見れば童明寺も倒れた。

「ははっ。しまんねえな」

と小さく笑いを零す童明寺。

「どうだ？ 頭冷えたか？」

「ある意味な。雨天最悪だ」

と笑い合う。

「でもお前の言いたいことがよく伝わった」

「そうか：それなら良かった」

「優也。俺、最初で最期の本気の足掻きを見せてやる」

「ああ、それでいい。一世一代の大勝負だな。一緒に救い出すぞあつし」

「お前、今まで苗字呼びだったのに。急にどうした？」

「殴りあったら親友になるらしい。親友は親しい呼び方するらしい」

「言葉が箇条書きだな。って言うか極端な考えだな」

するとうーんと唸るあつし

「じゃあ俺はゆうかな？」

「それだと結羽と区別つかないからお前は優也で良いよ」

そして喧嘩した後で痛い体に鞭を打って立ち上がる。

「ぶふっ……あはははは！」

また二人で笑った。

「びしょびしょじゃねえか」

「お前もな」

もう。心配は要らないだろう。

こいつには頼もしい奴が着いているからな。

「んじゃ、俺は次の奴勧誘してくるから」

「おう！ 頑張れよ！」

そして俺はあつしに見送られて次は学校に向かった。

「居るかな？」

俺はそう思いながらある部屋の前に来た。

勿論尋ねてきたのは例の部屋。

「すみませーん！」

とドアの前で叫ぶと急にドアを突き破って大男が飛び出してきて

俺にタツクルを食らわしてくる。そう、五十嵐先輩である。

「入部しないか!？」

「次の学校祭。出ても良いですのでお願いします。助けてください」  
そう言うのと葵も心配そうな目をしてこっちに来た。

そして二人に簡単に俺は説明した。

「そうか……大変だったな……」

「そうだったんですか……」

「そうです。なので出来たら助けて欲しいんですが……」

そう言うのと五十嵐先輩は俺の両手を握ってきた。痛い!

「もちろんだ!なあ、柊君」

「いえ。僕は力が無いので無理ですが。代わりにこれを差し上げます」

そう言うつて葵が渡してきたのはバナナの皮。

なんでバナナの皮?

「使い方はあなたにお任せします。ですが役に立つと思いますので使ってください」

でもどこからどう見てもバナナの皮……だよな?

まあ良いか。

「サンキューな葵」

そう言うつて学校を後にする。

この位か。戦えそうなのは。

メンバーは俺、悠真、あつし、五十嵐先輩。この四名だ。

多分向こうはもつと多いだろう。

「それじゃ作戦を伝える」

まずは俺一人と五十嵐先輩だけで突っ込む。そして……

「こんな感じだ。それじゃ行くぞー!」

『おー!』

遂にチーム絆成と今治グループの戦いが始まる。

## 第70話 策士優也の救出大作戦

side 結羽

目が覚めたら知らない倉庫に居た。

隣に露木ちゃん、つみきちちゃん、咲峰さんがロープで縛られていた。そういう私もロープで縛られている。

「お目覚めかい？お嬢ちゃん」

「出来るだけ暴れないで貰えると助かるかなあ？」

と折りたたみナイフを取り出してキラリと見せつけてきた。

なんで私達がこんなのに巻き込まれないと行けないんだろう。

助けて……誰か……。そう言いたかったものの、口もガムテープで塞がられて喋れない。

ずっとこんな所にいたら狂いそう……

その時、バン！と誰かが扉を蹴り破ってくる。

あの扉重厚そうなんだけど？

すると扉の外の光で徐々にその二人が見えてくる。

優也と軽音部の人!?その2人だった。

この2人が来てくれたおかげでだいぶ気が楽になった。

でもこつちには沢山の人が……

「ちっ。面倒だな」

優也がそう呟く。

「そのヤツら。返してもらおうぞ」

そして歩み寄ってくる。

その時、上を見て目を見開いて驚いた。

そこには……

来ないで優也！毘だよ！と叫びたかったが言えない。

すると一人の男がにやつと笑った。

「それはお前が生きてたらな！」

そしてリモコンらしきものを取り出してスイッチを押す。

その瞬間、優也の頭上から瓦礫が降ってきた。

「つくづく卑怯なやつだな」

そう言うのと瓦礫をオーバーヘッドキックで男に向かって蹴る。すると慌てて避ける男

「俺だつてな…だてに半端な気持ちで助けに来てる訳じゃないんだよ」

正直驚いた。あの瓦礫を蹴り飛ばすなんて

「お、おい。適当に二人くらい連れて逃げろ」

一人の男が二人に命令してつみきちやんと咲峰さんを連れて行ってしまった。

そしてここに残されたのは私と露木ちゃんだけになった。

「お前が助けるって計画は完全に崩れたな」

そして高笑いする男。

すると優也が「ふふっ」と不敵に笑ってこう言った。

「ここまで計画通りに事が進むとそりや笑いが零れてきちまうよな」

と普通なら優也達が追い詰められている場面なのに笑っているという事なんだろう。

「もう時期片付くさ」

そう言った。何も知らない私達は頭にハテナを浮かべるしかなかった。

side 悠真

「来たな」

すれ違った車を見て俺はそう呟いた。

そして走ってついて行く。

普通なら追いつけない。が、

「すまん優也。ちょっとだけ約束破るぞ」

そう言って走ると、なんと少しづつ追いつき始めた。

優也も人間離れしているが、実は俺も人間離れしているのだ。

そしてやがて真横を併走する。

「な、なあ、男が走って併走してるんだが？」

「そんなわけないだろ。俺達は時速120キロで走ってるんだぞ？」

そして俺は車に飛び乗ってフロントガラスから中を覗いた。

主犯の二人は勿論のこと、後ろにいる2人も驚いていた。

「いやー。こんなスピードで走るとあまり長くは続かないけど追いかけるくらいなら余裕」

そして息を吸い込んで

「後ろの二人を返してくれるかな？」

すると車は急ブレーキを踏んだせいで悠真は慣性の法則で吹っ飛んでしまう。

まあ、下ろすまでが俺の仕事だしな

sideあつし

車から降りてきて優也の予想通り、こっちに逃げてきた。

あとは俺の仕事だ。

「ここまで来ればあの化け物小僧も」

しかし彼らの願いは儂く散る。

「やあ。ぐ苦勞さん。そこの二人を返して貰えるかな？」

と男達の死角から出ていく。

「奴等も予想外の連続で驚きっぱなしだろうな。」

流石優也だ。こんな作戦を思いつくなんて。

『まずは俺と五十嵐先輩だけで突っ込む。そして多分俺と五十嵐先輩で威圧したら人質を連れて逃げるだろう。そうなったらあつしと悠真の出番だ。悠真が全力疾走で奴らに恐怖を与えて車から下ろす。下ろしたあとは童明寺お得意の格闘で奴等から救出しろ』

完璧すぎて鳥肌が立つレベルだ。しかもスタンバイポジションの指定まで……すげー策士だよ。あんたは

「この野郎ーどけー！」

とナイフを持って突っ込んできた。

そして俺はそのナイフを持った腕を掴んで衝撃を与えてナイフを落とさせた後、鳩尾に膝蹴りを食らわすと男は膝から崩れ落ちた。

「ん、んいつ」

「お前も来るか？」

そう言うのとメリケンサックらしき物を手につけた。

ンなもんどこで手に入れたんだ？

そして俺に殴りかかってきた。

「面倒だな」

そして殴りかかってきた右手を抑えて、右脇腹に回し蹴りを入れる。

そしてもう一人も退治完了した。

「もう一度やるんなら相手になるぜって聞こえてねえと思うが」

二人とも既に気を失っていた。

「大丈夫か？」

「え、ええ……」

「ありがとう……童明寺君」

つみきに礼を言われて少々照れくさくなる。

後は頑張れよ。優也

side 優也

「んじやその二人を返してもらおうか」

そう言って1歩踏み出すと

「ふふっ。こいつがどうなってもいいのか」

と男はナイフを取り出した。

ちっ。あれじゃ下手に手を出せねえな。

「ご苦労」

と奥から今治 京助が出てきた。

「久しぶりだな」

そして挨拶がわりに殴ってきた。

そしてやり返そうとすると

「やり返すとあそこの二人、殺すよ？」

と蹴り飛ばされた。

「がはっ」

多分近づいたら刺される。俺が抵抗しても刺される。なら反応で  
きな速度だ！

「五十嵐先輩！思いつきりタツクルやってください！」



「こつち来たたらその瞬間、デスだ」

「そして絆成。お前には二つの運命しかない。デスオアダイだ」  
死or死じゃねえかふぎけんな。

そして五十嵐先輩を見てみるとタツクル全然早くなかったです。

「く、来るな！刺すぞ！」

こうなつたら一か八か……葬。これの使い道はこうだったんだな。  
「いっけええっ！」

とバナナの皮をタツクルしている五十嵐先輩の足元目掛けて投げた。

そしたら五十嵐先輩はバナナの皮を踏んだ瞬間、音速を超える速さで飛んで行った。

そしてナイフを突きつけてる男が反応するまもなくタツクルされ、壁には叩きつけられたせいで気を失った。

そつちは任せた。

「さあて。形勢逆転だな」

手加減して貰えると思うなよ。

そして殴りかかってきた腕を掴んで投げて踏みつける。

「ぐわあっ！」

「これよりもつとアイツらが受けた心の傷の方が深いぞ！もう二度と俺達と関わるな」

そこまで言うとう治は気を失った。

リーダーを失ったことによって他の奴らは散り散りに逃げていった。

「結羽。露木ちゃん。大丈夫だったか？」

そして奴の仲間から奪ったナイフで二人のロープを切って解放する。

「ありがとう優也！」

と結羽は俺に抱きついてきた。

「わ、私も……ありがとうございます」

と露木ちゃんが俺の腕に抱きついてきた。

「モテモテだな……」

そう言つて五十嵐先輩は一人で倉庫を出て行ってしまった。

「はあ……疲れた……」

とその場に座り込む。

いつてえっ！

あの時はカッコつけてオーバーヘッドキックなんてしたけど瓦礫を蹴ったせいで滅茶苦茶いてえ。

さつきまではアドレナリンやらなんやらで大丈夫だったんだけどな。

すると携帯が鳴った。

「あつしか……」

そして通話ボタンを押す。

「へーい」

『さつき五十嵐先輩が終わつたつてこっちに来たぞ』

「ああ、分かった。今から行くわ」

そう言つて通話を終了する。

「よ！皆。来たぞつて悠真。ボロボロだな」

「そういうお前こそ」

お互いに笑い合う。

「優也。やつたぞ」

「あつし。ご苦労さん」

そしてぱちいんとハイタッチした。

「白井さん！」

「なんですか？」

とこっちを見た。

「あつしが言いたいことがあるみたいだ」

そして俺は静かに親指を立てた。

しかしあつしには親指を下に向けて立てられた。

「何場を温めましたみたいなのを……」

告白するには絶好のチャンスだと思うし、何より俺らがからかえる

！

「はあ……その……つみき」

「ひゃい！」

改まって呼ばれたからびっくりしたのだろう。声が裏返った。

「俺はつみきの事が好きだ。健気でお菓子作りもできて女子力が高い。昔から俺の傍に居てくれてありがとう。これからも俺の傍に居てくれないか」

一世一代の告白。

「えと……その……私も……好き……」

そう言った。ハツキリと

「それって」

「みんなの前だから恥ずかしいけど……その……童明寺君の……あつし君の彼女にしてください」

「ああ、もちろんだ」

あつしがそう言った瞬間、つみきがあつしに抱きついた。

この日、一組のカップルが誕生した。

そして俺が人を好きになるという気持ちを理解した日でもあった。

## 第71話 尋問

side 優也

俺達は今治グループのメンバー等を警察に突き出した。

聞けば色々な悪事を平気で行うグループだったんだとか……。俺も変な奴らに目をつけられちゃったな……。

んでもって綺麗にしまったと思っただがな……

「聞いている？優也」

「ん？ああ。聞いている」

因みに少しぼーっとしていたので聞いていなかった。つまり嘘である。

「絶対聞いていない……」

はい。バレてましたね。そりゃバレるよな。

「もう一回言うからちゃんと聞いてて」

そう言っつてまた同じことを言い出した。

「私達皆、優也の事大切なんだからね？もう入院する怪我をしないでよ？」

「それは無理な相談だな。人は怪我する時は怪我するもんだ」

そういうと無言の圧力をかけてきた。だから俺はうなづくしか無かった。

「ならよし。りんご持ってきたんだけど食べる？」

「なら貰おうかな」

「分かった！少し待ってて」

そう言っつてタタタと台の所まで小走りで行ってりんごを剥き始めた。

さて、何故俺がこんな事になっているのかと言うと……まあ、俺が間抜けなのが悪いんだが……

瓦礫が落ちてきた時にオーバーヘッドキックをしたのがまずかった。

帰る時に俺が痛い足を引きずりながら歩いていると皆が心配して俺は「大丈夫だ」と言っただが、病院に強制連行された。

そこで調べると案の定、足の骨にヒビが入っていて即刻入院する羽目になった。本当にかっこ悪いと自分でも分かっているからみなまで言うな。

そんなもって俺は間抜けな事にここに寝そべっている訳だが、退屈はしていない。

悠真やあつし、白井さんに露木ちゃんや咲峰さん。五十嵐先輩とガッツリ女装した柊君。正直この柊君を見た時笑いを堪えるのに必死だったのは内緒。

そして今来てくれている結羽。

あれから数日経ったけどあれから毎日欠かさず来て俺の話し相手になってくれている。

以前好きな人が居るって言ってたから、告白したら絶対に成功するくらい性格と容姿は良いんだけどなあ……。なんでこうも俺に構うんだか分からん。

とりあえず結羽がそれで良いってんならその好意に甘えておくとしよう。

「剥けたよ」

とりんごを皿に入れて俺のベッドの真横にある椅子に座って爪楊枝で一つ刺して差し出してきた。

「はい。あーん」

「いや、骨折してるのは足で手は普通に動くんですが？」

「あーん」

圧力掛けてきたよこの人。

普通に自分で食べれるってのに……

仕方ないので口を開ける。

「あ、あーん」

そして口を開けるとその中にりんごの一切れを入れられる。

うん。みずみずしくて上手い。

「うん。上手い。ありがとうな」

そう言うとき結羽はめちやくちや笑顔になった。

「これくらいならいつでもするよ」

いや、今回だけでいいんだが……。恥ずかしい……。すると視線を急に感じた。ドアの向こうからめちやくちや視線を感じる。

「誰だ？」

俺が扉の向こうに問いかけるとチラツと中を覗いてきた。

「お兄ちゃんが女の人とイチャイチャしてる。僕とは遊びの関係だったんですか……」

萌未だった。

と云うかイチャイチャってなんだよ。……よく考えたらあれか？あれのこと言ってるのか？

「あれはこいつが心配してくれて」

「そ、そうだよ！わ、私と優也がなんて……」

そんなに顔を赤くして怒ることもないと思うんだが、確かにこれはきつちり言っておかないと後々めんどくさいことになるからな。

「つまりお兄ちゃんは僕だけのお兄ちゃんって事ですね？」

「どうしてこうも極端なのだろうか？」

と云うかどうしていつまで経ってもこつち来ないんだろうか……。

「そう言えばお兄ちゃん！お聞きしたいことがあります」

と俺の方に近づいてきて結羽の隣に椅子を持ってきて座る。

「なんだ？」

「先輩がお兄ちゃんに壁ドンされたり押し倒されたって聞きましたが……」

ここで完全に目のハイライトが消えた。

本能が危険だと言っている。

目のハイライトがなくて少し笑いながら首を傾げている。あれ？

俺今日が命日なのか？

「本当ですか？」

「いやいやいや！なんで俺が知らない人にそんな事しなくちや行けないんだよー！」

「では、誰にも何もしていないと？」

「ああ！誰……にも……も……」

「どうしたんですか？」

今、俺の頭の中を最悪のシナリオが過ぎつたんだが。

いやいや……そんなことは無いはずだ……そんな偶然あつてたまるか！

でも一応。ね？

「その先輩の名前って如月 咲桜とか言わないか？」

俺はある返答を期待してそう聞いたのだが……。

「そうです。咲桜先輩です」

はい。OUT！来世の絆成さんに期待しましょう！

「ところでお兄ちゃん？」

物凄く笑顔だ。ただその笑顔が今はハイライトオフも相まって怖すぎてシヤレになんねえ。

「どうして咲桜先輩だと思ったんですか??」

今すぐにも逃げ出したい。でも骨折のせいで……。

こいつは今年で高校生だ。

こいつの事だから俺の事を追っかけてこつち来るかと思つたら春高行つたのか。

「ねえお兄ちゃん。僕、嘘は嫌いです」

「はい」

俺はベッドの上で正座した。

別に膝を骨折したわけじゃないから動くのだ。

「もう一度チャンスをあげます。ここで嘘をついて後に発覚した場合

……」

そして萌未は瓦の束をカバンから取り出した。

いやいや。え？持ち歩いてるの？重くないの？それ

そしてその瓦をチョップで真つ二つに割る。

「お兄ちゃんの頭もこうなりますよ?」

「すみません!」

俺は土下座した。

「つまりは咲桜先輩を壁ドンして、押し倒して」

俺が悪いんだけど一つ言い訳させてくれ!悔しかったんだ!

「あまつさえ剩、咲桜先輩を襲ったと」

「なんか最後の脚色されてない？そんなことしてないんだけど？」

「これはハッキリ否定しておかないと！」

「最後のはしていない！」

「言えますか？私の目を見て咲桜先輩を○してない！」

「言えるよ！こればかりは言ってるよ！」

「俺は自信たっぷりにそう言った。だって事実、そんなことはしていないからな。」

「……ならその事は良いです。初壁ドンと初押し倒しは取られました  
が初めてが取られてないのならそれで。ではあなたは出て行ってく  
ださい僕とお兄ちゃんはしなくてはならない事が……」

「もう今日は帰ってくれえっ！」

そしてその後、俺は無事退院を果たすのだが退院出来たのは新学期  
が始まる一週間前だった。



## 第72話 選択

side 優也

やっと俺は退院出来て自宅に居た。

久しぶりの我が家なのだが、相変わらずこの家には俺以外誰も居ない。

いや、違うな。仏壇には父さんが居る。

そしていつも通り俺はコーヒーを飲みながらニュースを見る。

『佐藤有山容疑者は「つかつかとしてやってしまった」等と意味不明な供述をしており、容疑を否認しています』

「いや認めてるよね！意味不明でもないし、否認してないよね！」  
思わず俺はテレビに対してツツコミを入れる。

『以上。ボケ専門ニュースチャンネルでした』

あ。ボケ専門だったのね。……いやいやいや！そんなの無いから！

今日はツツコまなくて済むかと思ってたら案の定ツツコಂಡしまった。

「いきなり疲れたな……今日はもう何も起こらなければ良いけど」

その時、インターホンが鳴った。

いつもの通りあいつらだろうと思ってインターホンを見てみると俺は驚いて目を見開いた。

そしてそつとインターホンの前から音を立てずに後ずさる。

な、なんであの人があそこに居るんだよ。

ガチャと鍵を開ける音が聞こえた。

嫌な冷や汗が額を伝って顎まで垂れてきて落ちる。

「相変わらずの玄関。あの人の事を思い出して吐き気がするわ」  
俺の家の玄関を貶しながら女性は中に入ってきた。

「久しぶり優也」

俺はこの人を知っている。そしてこの人も俺を知っている。

何故ならこの人は……俺の

「か、母さん……」

俺の母さんだからだ。

そう。この人は俺の母さん。絆成 辛華。現在は再婚したと言う話も聞いていた。確か……木崎だっけか？

「何の用だ」

俺が睨みながら言うのと母さんは部屋を見渡し始めた。

「相変わらずの部屋。数年経ったのに相変わらずの内装ね」

そして仏壇の父さんの写真を見て母さんはフツと笑った。

「やっとな。あの人が居なくなつて清々したわ」

ともうこの世に居ない男に対して毒づく母さん。

やめてくれ

「はあ……あの人が居たことにより私がどれだけ苦労したか」

やめてくれ

「さあ、嫌なあの人も居なくなつたわけだし、優也も保護者が居ないと大変でしょ？母さんね。再婚したの。だから今からそっちに」

「やめろー」

と俺は反射的に叫んだ。

「母さん……いや、辛華さんが親父の事をどう思おうとそれは辛華さんの勝手だ。けどな」

そして俺は一泊おいてこう言った。

「あの人は俺が辛いときでも側に居て励ましてくれ、見捨てずに世話をしてくれた人だ。だから俺にとっては大切なただ一人の親父だ。そんな人を目の前で毒づかれて気分良いわけないだろ」

と良い放った。

正直、俺は怒りでどうにかなりそうだった。

素っ気ない態度を取つてはいたけども、たった一人のずっと一緒にいた家族だ。大切じゃないわけが無いだろう。

そしてそんな大切な人を馬鹿にされて気分がいい人なんて居ないだろう。

俺はそんな大切な人と過ごした町だからだから俺はこの家……この町を出て辛華さんの元へ行くなんてごめんだ。  
だから

「そのお誘いは断らせてもらう。第一、今更来てなんだ！一度は見捨てたのはお前じゃないか」

俺は力強く。俺は意志を込めて言った。

「親に向かって何その口の聞き方！」

いままで俺たちに対して母親らしい事を何もしてくれなかったくせに……だから余計にイラついた。

「今更母親面かよ。おせーんだよ。あんたはもう俺の母親でも何でもない」

パシーンと破裂音がなつて俺の頬に痛みが走る。

都合が悪くなつたらすぐ叩く。俺はこの人が嫌いだ。

元々、俺達兄妹もこの人の事が好きじゃないんだ。

「この家ももう売つたから直ぐに出ていかないといけない。さつきは聞いたけど優也。アンタには選択権なんて無い」

そんな最悪な事を言ってきた。

この家は父さんが買ったはずなんだが……。なんで母さんが——だが、そんなことを考えている暇はない。

このままだと本当に連れていかれちまう。

その時、外から車の音が聞こえた。

そしてちようど俺の家の前で止まって扉が開く音が——。

「さあ、選りなさい。私に着いてくるか、喜んで私に着いてくるか……」

「それか……」

辛華さんが玄関扉前に立って言っているさらに奥、つまり外から声が聞こえてきた。

そしてその声が見た方を見るとそこにはスーツの上にコートを羽織つてハットを被っている男が居た。

「それが……俺と一緒に来るか……」

そう言った。

一緒に？なんで知らない奴と共に行かなきゃいけないんだよ。

「貴方は誰ですか」

辛華さんが冷たい口調でそう言った。

するとハットに手を添えて口を開いた。

「俺は政博<sup>まさひろ</sup>。そこにある写真立ての中に居る奴の親友だった人間だ」

と指でクイツとハットを上げると顔が見える。

すると誰かに似ているなと思う様な顔付きだった。

「ですがそれでは一緒について行くという理由にはなりませんよね？」

そう言うのと「そうだな」と笑う政博さん

「だがこれはあいつ自身の意思でもあるんだ。「俺が死んだら俺の子供をお前が面倒を見てくれるか？」って。俺は断つただけだな……。結果的に押し切られちゃった」

語る政博さん。

父さんがこの人に俺の事を……。

「大きくなったな優也君。前にあつた時は赤ん坊の時だから覚えていないだろうけどな……」

と微笑む政博さん。

「だからと言ってあなたに託す義理はありません」

おどけているような表情の政博さんの表情が真剣な表情へと変化した。

「じゃあ優也君に聞いてみようか」

そう言うって俺の方に視線を向ける政博さん。

目でこう言っていた「どっちにする？」と。しかしそんな答えは既に決まっている。

「俺は政博さんの所に行きますよ」

そう言うのと辛華さんは睨んできた。

「好きにしなさいー」

怒りながら出ていってどこかに行く辛華さん。

でもそのお陰でいままで張り詰めていた空気が元に戻る。

「それじゃあ優也君。改めて自己紹介をさせてもらおうよ。俺の名前は柴野 政博だ」

## 第73話 柴野

side 優也

「しば……の」

俺はこの苗字を知っている。知っていると言うよりも深い関係だ。何せ俺の友達にも”しばの”が居るからである。

「どうかしたか?」

もし俺の予想が正しかったなら、俺は結構やばい決断を下してしまったのではないか? そう思っただけで俺は冷や汗を流す。

とりあえず聞いてみるか。そう思っただけで違っていることを期待しながら、苗字が同じなだけの赤の他人である事を期待しながら俺は聞いてみた。

「あの……。政博さんには娘さんって居ますか?」

「ああ、居るぞ? なんで知ってるんだ? 優也君には見せた事無かったのに」

嫌な予感しかしない!!

こんなたままたこの街に柴野さんなんて言う苗字の人が揃うとは考えられない。

あつちの柴野さんのお宅のご主人は単身赴任中だったような気がする。けど……もしかすると……。

「俺の娘は結羽って言うんだ」

アウトオツ!

柴野結羽なんて言う同姓同名のやつがそう簡単に居る訳が無い!

「じゃあ行こうか。優也君」

「うーん……。結羽にはなんて言ったらいいんだろうか? 急に押し掛けて怒られたらどうしようか……」

俺はブツブツ呟きながら政博さんの車に乗り込んだ。

なんで俺の家に来たのかと聞いたらまたまた今日、自宅に戻る日になったから今帰ってる途中だったのだが、途中でドアを開けっ放しで言い争っていた俺達が見えて入ってきたという。

???????

久しぶりの結羽の家だ。

入院中、毎日会っていたからちよつと合わなかっただけで久しぶりのような気がする。

そして政博さんは鍵で扉を開けて入っていく。

「結羽、かあさん帰ったぞー!」

そう大声で呼びかけると結羽と美樹さんが奥から出てきた。

「おかえりなさいあいなた〜」

相当仲のいい夫婦のようだ。微笑ましい。

「え!?!」

結羽と目が合った。それに気がついて俺は目を逸らした。

「や、やあ」

「な、なんで優也が!?!」

すると美樹さんも俺に気がついたようだ。

「あらア。優也君。お久しぶりね」

すると政博さんが驚いてこつちを見る。その反応、分かりますよ。自分がいない間にいつの間にか知り合いになっていたらそら驚く。

「優也君。君は俺の娘のなんなんだ」

何って聞かれても……。

「友達ですね」

でも気まずいぞこれ。友達、しかも女の子と一緒に住むってのは……。

「そうか。もう知り合っていたんだな。それなら安心だ」

何が安心なんですか!?!俺は安心できませんよ!

心の中でつつこんだけど現実が変わらない。

「優也君がうちで住むことになったぞ」

政博さんがそう言うのとポカンとする結羽。

「あらア。よろしくね」

いやいや!あなたはもうちよつと驚いて!?!

結羽は目を点にして瞬きを繰り返してるのを見てやばい選択だったんだと分かる。

でも俺がこの町で暮らすにはこれしか方法が無かったんだ。

すまん。結羽。

すると結羽は数秒間フリーズした後、漸く現実世界に戻ってこれて、顔を真っ赤に染め上げる。

「ゆ、優也がうちに」

なんかボソボソと呟いているような……。やっぱりそんなに嫌なんだな……。

「よしーそれじゃ、今日は優也君の歓迎パーティーでも開こう！母さん、頼んだぞー！」

そう言うとき美樹さんは袖を巻くつて「任せて」と言った。頼もしい限りである。

「お、お母さん！私も手伝うよー！」

すると結羽もとととと小走りで美樹さんの方へと着いて行つた。

「それじゃあ、優也君。上がつてくれたまえ」

と変な口調で上がるように言われたため、俺は少し申し訳ない気持ちになりながらも政博さんの後を追つて俺も家の中に上がり込む。

そして適当に座るように言われたからテーブルについて座ることにした。

しばらく待っていると、台所から美味しそうな臭いがしてきた。

しかし、久しぶりにこの家に来た経緯がこれつて如何なものだろうか？

そう思いながら携帯でニュースを見る。

「ん？何を見ているんだい？」

と政博が携帯を覗き込んできた。

「ニュースです。今朝は見損ねたので」

なんだよあのボケまくるニュース。あんなの見た事ねーわ。テレビに対して突っ込んだのは初めてだぞ。

「へえ〜。優也君。見ない間に大人になったね」

と政博さんは感心したような声色でそう呟いた。

当たり前だ。俺だっていつまで経つても子供なわけないだろ。

「しかし、懐かしいな。昔はよくおじちゃん！つて甘えてくれたのに

なあ〜」

え？マジで？覚えてないんだけど!?!その話を詳しく聞きたい！

「七海ちゃんが産まれた頃には単身赴任をするようになって、会えなくなっちゃったからなあ……。君のお父さんとは連絡を取っていたんだけどな」

俺の父さんの名前を聞いて、俺はある事が気になってしまった。

まあ、一度は子供なら思った事がある疑問だと俺は思う。

「父さんはどんな子供だったんですか？」

そう言うと政博さんは目を見開いて驚き、悠真を彷彿とさせる様なニヤニヤした笑みを浮かべる。

「なんだい。優也君。気になるのか？」

だが、そのニヤニヤの中に結羽みたいな子供の様な笑顔が含まれている気がする。

だから俺はこう言った。

「教えてください」

そして政博さんは目を静かに閉じて俺の前に座り、胡座をかいて腕を組んだ。

聴てゆつくりと目を開いて政博さんは口を開いた。

「俺達が出会ったのは中学生の頃の話だ」



## 第74話 柴野政博と優也の父

side 政博

これは俺が中学に入って間もない頃の話だ。

俺のクラスには変な奴がいた。

「どもどもく。瞬介しゆんすけが登校しましたよー！」

と手を振りながら教室に入ってくる男が一人。しかし、皆はいつもの事だと思つて誰も気にしない。

「いいいいいいい！ドンドンパフパフ！」

やっぱりこいつの頭はおかしい。

俺は今年、こつちに越してきたばかりだが、こいつとは金輪際、一切関わらないようにしようと思つた。

授業中もおかしい。

「先生。今日も可愛いですね。この後、どうですか？」

先生を口説き落とそうとしたり、もう訳わかんねえんだ。

そんなある日、突然の出来事だった。

「今日は席替えをします！」

その言葉が聞こえて、クラス全員がどす黒いオーラを出した。絆成

瞬介本人とその隣の人を除いて。

全員、瞬介とか言うやつ隣の隣になるのが嫌なんだ。だから俺自身も隣になるのが嫌なのだ。

そして、席替えくじ引きの結果がどうなったかと言うと……。

「隣、よろしくな」

瞬介とか言う奴の隣になってしまった。

その時、初めて俺は運ゲーを恨んだかもしれない。

「でやでや〜」

この男は休み時間中、休みなくずっと喋り続けている。こいつは疲れというものを知らないのだろうか？

しかも、俺に対して俺の興味の無い話を永遠と続けている。何こいつ。つ。

正直言うとう物凄くウザイ。よく前の隣の席だった奴は耐えること

が出来たよなと神様かのようにその人を拝む。

こんな男だったんだ。やることなすこと、全て常人の考えじゃ想像つかないことばかりだ。勿論悪い意味だ。

「その時な、俺はこう言っちゃったんだ。お前は飴玉か!? ってな」

どんな事を言われたらそんなツツコミすることになるんだよ！

さっきまでの話を聞いていなかったからどんな経緯でそんなツツコミをする事になったか聞いていなかった。

はあ……疲れる。こいつといると疲れる。しかし、そんな俺の気も知らずにこいつは話し続ける。

それと、何となく聞いていたらこの人には兄がいる事がわかった。兄もこんな性格をしているのだろうか？

side 優也

「こんな男だったんだよ。君には申し訳ないけどね」

俺は驚いていた。

俺にとつて父さんは物静かなイメージしか無かった為だ。

無駄口は言わず、偶に発言する位だ。

「いやー。あの時は流石の俺も君の母親じゃないけど、早く居なくなってくれないかな？ って思っちゃった位だ」

まあ、今の話を聞いていたらそう思うのも無理はないと思えてしまう。

「だけどね。それは間違いだったんだよ」

「間違い？」

俺は聞き返した。

政博さんは静かに頷いた。

「今からそれを話すよ。彼は本当はどのような男だったのか。どうしてここから俺と絆成 瞬介と言う男が仲良くなったのかという経緯をね」

side 政博

俺はその日も瞬介によって聞きたくもない話を永遠と聞かされて

いた。

だが、俺はそれも全てスルーして次の時間の準備を進める。

そして放課後、その疲れ切った体を無理に動かして帰路を歩く。

俺は一人で歩くこの時間が好きだ。誰にも邪魔されずに淡々と黙々と一人で歩き、夕日を眺める。

「疲れたなあ……。今日は帰ったら直ぐに寝るか」

と決め込んでいると、路地裏の方から声が聞こえてきた。

誰の声かを見ると女の子だった。

女の子が男に取り押さえられて泣いていた。あれを見て友達なんだなと思うようなハッピーな頭はしてはいない。だから瞬時にどう言う状況なのか把握する事が出来た。出来た上であえてスルーする。

俺なんかでしやばった所で被害者が増えるだけだろう。

そしてその路地裏の前を通り過ぎようとした瞬間、俺の顔スレスレをボールが飛んできて路地裏の方に入って行った。

そのボールを目で追うと、先程女の子を取り押さえていた男の顔面のど真ん中に命中。

余程威力が高かったのか、歯が数本折れて鼻から血が出ていた。

「いってえええっ！」

大声を上げながら蹲って顔を抑える男。

そしてボールが飛んできた方を見て俺は目を見開いて驚いた。

そこに居たのは――

「あ、ごつめーん。間違ってボールがそっちに飛んで行っちゃったわ」  
ケラケラと笑う男。瞬介だ。

「てめえっ！何しやがるー！」

俺は男の怒りで支配された目を見てしまった。直感的に恐怖を感じてしまった。

まるで蛇に睨まれた蛙のような気分だった。

しかし、あいつは

「ん？どうしたんだ？そんなに怒っちゃって」

こいつは怖いもの知らずの大馬鹿者なんだろうか？完全に挑発し

ている。

あれはもう病院送りじゃ済まない。

「大人をナメるんじゃない」

そう言うと男は懐から折りたたみナイフを取り出した。

さすがにヤバイ。そう思った俺は瞬介のもとに駆け出した。

「お？マーサヒロくん。君も居たのか。またまた語り合いたい所だが、今はそれどころじゃ無いんでな」

その時、初めて俺は真面目な顔の瞬介を見た。

ナイフを持っている大人を前にして瞬介は一切怯えずに真っ直ぐ見据えていた。

だが、奴も周りに人が居ないから強気に出ていた。

「こんのがキがアアッ！」

と男が走ってきた瞬間、瞬介はボールを蹴り飛ばした。何個持ってたんだよ。

今度は男の鳩尾に当たり、その場で腹を押さえて蹲ってしまった。

その場所つてのが……。

キキイイツ！

道路だった。

その為、やって来た車にはね飛ばされてしまった。

「やべっ」

流星の瞬介も青ざめていた。

「とりあえず救急車でも呼んどいてやるかな」

これを見て恐怖によって動けなくなかった俺とは違って実際に助けることに成功した瞬介はあんまり悪い奴じゃないような気がしてきた。ちよつと頭が弱いけど。

次の日、またまた俺に永遠と話しかけてくる瞬介。だが、それに対して相槌を打つようになつた俺を周りの人が見て変なものを見る目で見られてしまった。

side 優也

「こんな経緯で仲良くなつた」

その言葉を聞いた瞬間、俺は思考がフリーズした。

サッカーボールを蹴るって癖。俺だけだと思ってたけど父さんもやっていたというのか!?

「だからさ。君のお父さんから優也がサッカーボールで人を助けたってのを聞いて思わず笑いそうになっちまったよ」

いや、なんで父さんが知ってんだよ……。まさか、七海が父さんに言ったのか？

確かにあの時は厨二病を拗らせていて、七海に色々と言っていたりしたけど。

「いやあ。君もあんな事件さえなかったら瞬介の様な性格になっただののかもね」

とそこまで会話した所で、

「ご飯出来ましたよー」

と美樹さんが料理を持ってきたようだ。

「手伝いますよ」

と立ち上がろうとすると

「良いよ。今日は歓迎会とお父さんが帰ってきたパーティー兼ねてるから、今日は二人が主役なんだからね？」

と料理を持ってきた結羽に止められた。

だから俺は仕方なく待つことにした。なんか落ち着かねえー。

## 第75話 歓迎

side 優也

ついに食卓に料理達が並んだ。

様々な料理があつて豪勢だ。思わず俺は気圧されてしまう。

「凄いですね」

俺が無意識に呟くと美樹さんが

「優也君が居るから結羽も張り切っちゃったのかもね」

ふふふと笑いながらそう言うと言つて結羽は

「も、もう！お母さん！」

と顔を真っ赤にして美樹さんに抗議し始めた。

容姿が幼いからちよつと可愛らしいって思ってしまったと言うのは胸の内に秘めておく事にする。

「そう言えば、今日は冬馬君は居ないのか？」

と政博さんがご飯を自分の皿によそいながら聞いた。

確かに。いつも食べに来た時は冬馬も居るのに今日は居なかった。どう言う事だ？

「あー。冬馬君ならお姉さんに連れられて外食しに行つたみたいよ」

俺と政博さんの疑問について美樹さんが答えてくれた。

なるほどね。だから居なかったのか。

「さあ、食べましょう？」

美樹さんのその声で俺達は個人個人で小さく「頂きます」と言つて食べ始める。

やはり美味しい。

この料理達は美樹さんと結羽の二人で作つた物だろう。前々から思つてたが、結羽と美樹さんの料理の味って似ているんだ。繊細な味だ。まあ、多分美樹さんが結羽に教えたんだらうから似るのは当たり前か。

俺も前、爺の料理を食べた事のある人（父さん）に料理を食べさせてみたら、癪なことに爺の料理に似ていると言われた。本当に癪だな。

「そう言えば、さつき二人で何か話してた様だけど何話してたの？」  
結羽がそう聞いてきた。

「いや、ちよつと優也君のお父さんの話をしていただけだ」

「そうだったんですか。私もちよつと気になりますね」

いや、意外と俺の父さんは他人には言い難いような奇行をしているからあまり言いたくないんだけど？

完全にギャグ漫画とかに出てきそうな設定の人なんだけど？

「そう言えば、昔から瞬介さんの話を良くしてましたよね」

いや、やめて!?!この話を広めんのやめて!?!

「親子揃ってボールで人を助けるって言うのは遺伝を感じるよな」

俺はその言葉を聞いた瞬間、何も口に含んでいないのに吹き出した。

そして向かいを見てみると結羽も何も口に含んでいないのに吹き出していた。いや、なんでお前まで吹き出すんだよ。

「その話で思い出したんだけど、結羽も昔ムグムグ」

美樹さんが何かを言おうとした所で結羽が美樹さんの口を押さえ言葉で遮った。何を言おうとしたんだろうか？

話の文脈からしてボールの件だろうが、最後に言った言葉が気になるな。

「結羽も昔」と言う言葉。”も”と言う同じと言う意味が含まれている言葉がある。と言う事はまさか。

「もしかして結羽もボール蹴って人を助けたことあんのか？」

そう言う和美樹さんはあちゃーと言う感じに「そうだったか……」と呟いた。

「何でそういう考えになるんですか!?!」

「ええっ! 違うのか?」

「そんなこと出来ませんよ!」

間違えてしまったようだ。一体何が正解なんだよ。

そんなこんなで料理を美味しく頂いた後、政博さんに家を案内されていた。

「ここが優也君の部屋だ。使ってなかったから自由に使っていていいぞ」  
そう言われて俺は扉を開けてみる。

すると中にはベッドと机が置いてあった。

おいなんで既にあるんだよ。

「実は最初から君を誘うつもりで君の家に行つたんだ。君の父さんに頼まれたからな」

そうだったな。父さんが死ぬ前に頼んでたんだな。

「だから俺も俺が死んだら娘を頼むって言つてやった。あの時は冗談のつもりだったんだけど、本当に死んじゃうなんてな」

政博さんはケラケラと笑う。

だが、政博さんも辛いはずだ。だって親友を失つたんだから。

自分の感情を押し殺して、子供に弱い所を見せたくないんだ。

「そんじゃ、今日はゆっくりお休み。疲れたる？」

俺の体の気遣いも見せてくれる。良い父さんじゃないか。

「はい。今日はそうさせてもらいます。何だか色々あつて疲れちゃいました」

俺はいつまでも落ち込んでいるのは辞めにした。政博さんも辛いけど我慢しているんだから、俺だって我慢しなきゃいけないと思つたからだ。

だから俺は笑つた。政博さんに辛気臭い顔を見せまいと笑つた。

「これからよろしくな優也君」

握手を求めてくる政博さん。俺はその手を両手で包み込む様にして握り、

「こちらこそよろしくお願ひします」と言つた。

これから何が起ころのかも分からない。だが、俺は父さんと七海の分まで精一杯生きることにした。

次の日、俺は早めに起きた。なぜ早めに起きたかと言うと、今日はバイトがあるからだ。

「今日はいつもより頑張らないとな」



如月にも迷惑かけちゃったからな。

北村さんによると、俺が落ち込んでバイトに集中出来てない間、何も聞かずに俺のフォローをずっとやってくれていたらしい。

あいつには借りを返すつもりでいかないとな。

そう思っただけ俺は皆よりも少しだけ早く起きてバイト先のコンビニに向かう。

そして制服に着替えてレジに向かうと、予想外の光景が広がっていた。

「あ、おはよう……ご……ご……います」

向こうも驚いている様だった。

「なぜここに？いや、制服を来ているからバイトだってのは分かる。バイト、ここにしていたのか露木ちゃん」

そう。神乃 露木がレジに立っていたのだ。

「はい。先輩もここでバイトしていたんですね」

先輩……。良い響きだ。今まで変態とか強○魔とかしか呼ばれてなかったからな。

「よし。何かわからない事があつたら遠慮無く俺に聞くといい」

「まさかあつちの事も……とか言いませんよね？」

「言いませんよ！露木ちゃん。俺は強○魔じゃないからね!？」

「じ、女子の前で強○とか言うのはどうなんですかね？」

あなたが言い始めたことじゃないですか。

そして携帯をマナーモードにしてポケットにしまおうとすると、LINEが来ているのがわかった。

まあ、後で確認するか……。そう思っただけポケットに仕舞ってバイトモードになった。

side 結羽

「うゆ〜」

私は目を擦りながら体を起こした。

まだ少し眠いような気がするけど、二度寝すると頭痛とかする体質だから我慢して起きる事にする。

いつも学校がある日に起きる時間よりも少し早い位だった。休みの日はもつとゆつくり寝ていたんだけどね。

そして携帯を確認するとメールが届いている事に気がついた。

そのLINEを開いて内容を確認してみると、こんな文面が書いてあった。

『お久しぶり。結羽ちゃん。元気にしてる？』

私はね、超絶元気！

それで、本題に移るんだけど、明後日、明後日って予定空いてる？

ちようど私も休みが取れたから久しぶりに皆で遊びたいなって思ったんだけど、どうかな？

もし空いてるなら連絡ちようだい。

あ、そうだ。新しく友達になった人とか居たら一緒に連れてきて紹介して欲しいな。なんてね。

じゃあ返事待ってるからね〜』

長い!!

だけど遊びのお誘いかあ……。

そして名前の欄を見てみるとそこにはホワイトウェブって書いてあった。

と言う事は、白波さんからのお誘いかあ。

久しぶりだな。優也、行けるかな？

そう言えば、優也は「有給消化の為に明日から三日間休みを取った」って言ってたような気がする。なら大丈夫だね。

皆で遊ぶのは久しぶりだなあ。楽しみ♪

## 第76話 遊びのお誘い

side 優也

バイトも終わり、今は着替えをしていた。

露木ちゃんもし行けるならあんな風に毒舌だが、俺の言うことは素直に聞いてくれて助かった。

そして今は今朝送られたLINEを見ていたのだが、

「白波さん……。俺は勉強する用事があるんだ」

そう送ると、直ぐに返事が帰ってきた。

『なら用事は無いって事だね』

何故そうなる！俺は用事があるって言ってるだろ。

だがしょうがない。白波さんは進学せずに就職したんだ。だから社会人となった白波さんに会えるタイミングってのは限られている。

ここは仕方ないから行くか。

しかし、新しい友達か……。

そして扉を見る。

扉の向こうには露木ちゃんが立っている。

何故かと言うと、露木ちゃんと俺は同じシフトタイムになっていたから同じタイミングで帰ることになった。

だから送って行くことにした。

俺が送って行くと言った時に

「身の危険を感じます」

って言われたけど、最終的には送って行くことになった。

そして今は俺達と入れ替わりに如月と北村さんがレジに入っている。

それで話は戻るが、新しい友達。誰々居たかな？

気軽に誘えそうな人が良いんだが、まず間違いなく結羽と悠真は誘っているだろう。そして結羽が来るなら冬馬も来るだろう。

sondでもって、俺は星野さんの連絡先は知らないし、柊君や五十嵐先輩も知らない。

そして、如月と北村さんは如月が「今週は殆どバイトだあ」って既

に有給を使い果たしてしまったようで嘆いていたから如月は無理だ。更に言うと北村さんも確かシフト入ってたはずだ。

となると、俺が誘える人と言えば……。

そして着替えを済ませて外に出る。

「やつと来ましたか。じゃあ帰りましょう」

そう言っただけで俺と露木ちゃんは隣に並んで歩き始める。

「そう言えば、明後日と明後日って空いてるか？」

「なんですか？デートのお誘いですか？」

何勘違いしてるんだよ。

「違う違う。友達にさ、遊びに誘われたんだけど、そいつが俺らの新しい友達とも遊んでみたいと言っていたからな」

「友達……ですか？」

そう言うときだけ露木ちゃんは考え始めた。

「まあ、私とシフトが空いてるので良いですよ」

俺は心の中でガッツポーズをした。

そしてついでに神乃さんも誘っておいてもらおう。一石二鳥だ。

「ついでに神乃さんを誘っておいて貰えるかな？」

「まあ、それくらいなら良いですけど……。お姉ちゃんを誘っておけば良いんですね？分かりました」

よし、俺のターン終了だ。

そう思ったなら目の前を嫌な奴らを通った。

俺には気がついていないだろう。そう思って素通りしようとする  
と、

「おっにいっちゃん！」

「ぐわっ」

俺が油断した隙に飛びついてきやがった。

そして俺は身構えていなかった為、衝撃に耐えきれずに前の方に倒れてしまう。

すると、露木ちゃんは俺の前に来てスカートを押さえながらしゃがんで微笑を浮かべながらこう言った。

「だあーいじよーぶですかあ？」

馬鹿にしている言い方だった。

「そ、それより萌未。俺から離れてくれ」

「嫌です！離れたら僕から逃げる気でしょ！この彼女さんと逃げる気でしょ！」

は？彼女？

なんのことだろうか？俺は今、露木ちゃんと帰ってただけだ。

「この人が彼氏……」

すると、露木ちゃんは顔を真っ赤にしてぼーとし始めた。

そして暫くぼーつとすると、急にハツとして意識がこつちに帰ってきたようだ。

そして顔が赤いまま

「なんでこんな人と付き合わなくちやいけないんですか」

と冷たい目で言い放ってきた。先輩、悲しい！

「そうなんですか？付き合っていないんですか？」

「ああ、今はバイト帰りで送っていただけだ」

そう言うと萌未はニコツとした。

「なら、僕のお兄ちゃんって事ですね！」

「いや、お前は従妹だぞ？」

昔から気になっていたんだが、何故こいつは俺の事をお兄ちゃんって呼ぶんだらうか？

「とりあえず離れてくれ」

「嫌ですう！」

と一切離れる気がない自称妹。

しょうが無いので俺は懐から俺はある物を取り出した。

「そ、それは!？」

「ああ、ガムだ。お前の好きなイチゴ味だぞー。欲しいだろ？」

「へっへっへっ」

萌未は犬のように息を荒くしている。既に人間としてのプライドは捨て去ってしまったようだ。

「これやるから離れてくれ」

「は〜い！」

すると素直に俺から離れる萌未。

「ほらよ」

と渡すと両手でガムを受け取って食べ始める萌未。

「んじゃ、萌未。俺らは帰るなく」

そう言っつていつの間にか目の前から消えてた露木ちゃんを探すと、

「何やってんだ？」

壁に隠れてこちらを伺っていた。

そういや極度の人見知りだったな。俺と初めて会った時もこう

だったっけ？

「帰るぞー」

そう言っつて露木ちゃんの元に向かう。

「は、はい。……怖い」

どうにかならないかな？この人見知り。

「この調子で遊びに行くの大丈夫なのか？」

「は、はい。頑張ります」

あれ？いつもなら「あなたの様な人に心配される謂れはありません

ん」って言っつてくるのに妙に塩らしいじゃないか。

「お兄ちゃん。遊びに行くんですか？」

と後ろから声がした。

「おい！まだ居たのか!?!」

「私も連れて行ってください!」

そう言ったか……。

「わかった。分かったから、酒田さん待たせてんだろ？だから帰れ」

そう言っつて「はい」と言っつて今度こそ帰って行った。

「それじゃ帰るか。待ち合わせ場所は後でLINEするから」

「はい」

そして俺達は帰った。

## 第77話 白波真依

side 優也

ついに遊びに行く日。

あの日、帰ってくると、結羽にも同じLINEが届いていた様だ。だから結羽は冬馬を連れていくらしい。これは予想通り。

問題は悠真が誰を連れていくかだが、

「何？お前ら知り合いだったの？」

「まあな。宿泊研修以降、意気投合しちゃってな」

俺が今会話しているのは悠真。その隣にあつし。そして白井さんが居る。

そして俺の隣には俺に抱きついて満面の笑顔を浮かべる妹（自称）さまとジト目を向ける後輩とジト目を向ける友達。目でリンチされている。しかもその後輩は俺にベツタリとくっついて隠れている。おいお前、俺の事が嫌いなんじゃなかったのかよ。

「いやー。そんなに仲良くなるなんてねえ〜」

しかもこの後輩様は、いつもは自分の姉に隠れるのに何故か俺のところにいるのだ。何故だ！

まさか！

『あんたは私の下僕なんだから、ちゃんと私の壁になりなさいよ』

と表現しているのか!?可愛い顔をしてなんて恐ろしい事を！

「それじゃ、みんな集まった事だし、軽く自己紹介をしようか。まずは私からね。私は白波 真衣。伊真舞高校のOBよ。よろしくね」

この中には白波さんを知らない人もいるからな。

あつしや白井さんは知っているだろうが、萌未と露木ちゃん、冬馬は知らないからな。

「んで、今日はどこに行くんだ？」

俺がそう聞くと一枚のプリントを渡してきた。

「なになに？『私の別荘へござしようたーい！』。別荘って。あそこ、こんな人数入れるような広さじゃないと思うんだが」

そう言うと白波さんは誇らしげにふんと鼻を鳴らした。

「そこら辺に抜け目は無いわ。もっと大きい別荘があるもの」

あれでも結構大きい方だと思っただけ？普通の一般家庭くらいはあったぞ。あれより大きいってどんな建物が待ち構えているんだ？

そしてぎつと自己紹介をした後、デカイ高級車がやってきた。

まあ、別荘がある時点で知ってたけど、やっぱり金持ちなんだな。だけど白波さんは自分で入りたい会社を見つけて入ったらしい。立派だ。

車に乗ると、そこは天国だった。

椅子はフカフカで座り心地が良く、一つ一つの椅子にテーブルと飲み物置きがあり、更に一人一人が広々と過ごせる様な空間が広がっていた。

高級ジェット機のVIPルームに居る様な気分だ。

「と言うか、去年はどうして電車で」

そう言うのと白波さんは

「まあ、本当は私は電車旅の方が好きなんだけどね。これから行く所は電車もバスも通ってないから仕方が無く、ね」

そういう事か。確かに4人での電車旅は楽しかった。が、あの旅行は俺に対してデカイ地雷を置いていった。

トラウマだ。

線香花火。怖い。

「俺の運……あれ？運ってなんだっけ？そもそも運って」

無意識に俺はそう呟く。

「あ、あの、先輩が哲学的な事を呟いているんですが」

俺にベツタリとくつついていた露木ちゃんには聞こえていたようだ。

「気にしないであげて？露木ちゃんだっけ？優也君はトラウマを抱えているのよ……」

すると、「は、はあ……」と困惑した声を出す露木ちゃん。

「まあ、ゆっくりしてて。飲み物ならあるからね」

と言いながらリクエストを聞いて飲み物を渡していく白波さん。



そしてやつと意識を取り戻す。

今の今までの記憶が全く無い。気がつけば車の外の景色も見慣れない景色へと変わっていた。

そして萌未が俺の頭を撫でていた。……少し息を荒らげながら。

「萌未。ありがとな。その心遣いは有難いが、少し怖いぞ?」

目がギラギラと輝いていてなんと言うか、撫でて来ている手付きが怪しいんだ。

俺は本能的に分かった。分かってしまった。……この場に俺と萌未以外には誰も居なかつたら襲われていた。

「んで、白波さん」

俺はちよつと離れた座席に居る白波さんに話しかけた。

「何?」

「こんな遠くまで来て、日帰りで帰れるのか?」

「え?皆でお泊まり会の予定だったけど」

さも当たり前かのようなトーンで言ってきた。

まさかこの元ドS会長はその為に明日の予定まで聞いてきやがったのか。なんて計画的犯行!?

「お兄ちゃんのお泊まり」

ポつと頬を染めてモジモジし出す萌未だが、皆で泊まるんだからお前が想像してる事なんて起きないぞ。

「絆成先輩とお泊まりですか……。身の危険を感じます」

「なんでだよ」

答えはわかりきっていたが聞いてみた。

すると、案の定。

「強○魔と一つ屋根の下で一晩明かしたらいつの間にか子供が出来てしまっているかも知れません」

「いや、俺そんなクズじゃねーよ!」

と言うかしません!

だが、俺はしらないと言っているも周りの女子の視線が鋭くなって行く。

「優也君。君、露木ちゃんに何したの?」



「まあ、僕はお兄ちゃんのを尊重しますよ。でもどうしても僕が  
いいって言うなら僕は喜んで恋人になりましょう」

そういう事か……助かった。

「でもその場合、浮気したら……。ふふ、ふふふふ」

あ、やっぱり狂気だわ。

「みんなー！着いたよー！」

白波さんが車内で皆に聞こえるように大声で呼びかける。

そして俺達は皆で車を降りると、俺は思わず息を呑んでしまった。  
なぜなら、

「お屋敷？」

結羽が小さく呟いた。

そう。去年行った別荘とは違い、お屋敷みたいな広さだった。

廊下も長く、恐らく部屋はこの人数でも余るくらいにはあるだろ  
う。

そして、バルコニーがある。

あのバルコニーの位置的に、反対側にある海が見えそうだな。

「それじゃ、旅行編スタート！」

ノリノリで屋敷の中に入っていく白波さん。浮かれてるなく。そ  
う思いながら俺達も屋敷に入って行った。

## 第78話 想いを繋ぐ景色パート1

side 優也

「外観も凄いが中も凄いな。シャンデリアなんて初めて見た」

俺達は白波さんに続いて別荘の中に入ると、そこには物凄い大きな玄関が待ち構えていた。

俺の中で玄関というのはこじんまりとした印象があった。

だが、この玄関はホテルのロビーの様な広さだ。いや、それ以上かもしれない。天井もものすごく高い。エントランスと言うべきか？まあ、エントランスは玄関の英語だからどちらでも玄関という意味なんだが、エントランスの方が広い気がする。

天井からはシャンデリアがぶら下がっていて、入って正面に大きい階段が堂々と構えていた。俺の中でのお屋敷のイメージ図そのものだ。

隣に居る萌未も「ふあ〜」と感嘆の声を漏らしている。

「今回は一人一部屋当たるようになってるよ」

そう言って白波さんは一人一人に設計図を渡してきた。

「好きな部屋選んでね。あ、一緒になりたいなら同じ部屋を選んでもいいよ。変な声が聞こえてきても開けないからね」

そういう気遣いは要らない。と言うか、そんなことを言うと、

「さあ！お兄ちゃん！どこにしますか？私はどこでもいいですよ？」

「俺はお前と一緒にする予定なんてないんだけど」

「いーいーじゃなーいーでーすーかー！」

良くない。ぜんっぜん良くないよ。

こいつと寝た場合襲われる未来しか見えん。それだけは避けなければ。

「俺は1人が良いなーっ！よしっ！1人で寝よう！絶対に来るなよ！特に萌未！お前は1人で来るなよ！」

釘を指して適当な部屋に向かって行く。

「で、なんでお前らは俺の部屋に来てるんだ？」

「いやー。絆成さんは寂しがり屋かな？って思ってたな」

寂しがり屋じゃないし、釘を刺したんだから来るなよ。

「で、なんで2人もきた？」

「童明寺君の付き添い……です」

まず、あつしを止めてくれよ白井さん！俺は釘を刺したはずだぞ？  
来るなって

俺が今会話しているのはあつしと白井さん。

2人とも、俺が釘を刺したにもかかわらず、俺が部屋に入った直後に押し掛けてきた。

こいつらって俺の言葉だけが聞こえなくなるような物があるのか？

「なあ、ちよつとこの屋敷を探検してみようぜ！俺、屋敷に来たのは初めてだからワクワクしてんだよ」

「わかる」

その気持ちはわかる。

外から見ただけでも俺のワクワク感は最高潮に達していた。

見てみたい。色々な所を。

キッチンや食卓、更にバルコニーからの眺めとか。めっちゃ気になる。

そんな状況だから俺には断るという選択肢は、

「よし行こう」

既に無かった。

俺達はまず、設計図を見ながら中庭にやってきた。

俺の母校の小学校には中庭ってあったが、それ以外で見たのは初めてだから興味が湧いたのだ。

そして来てみるとあら不思議。一般家庭の面積二個分位の面積があつて、中心には噴水がある。

見事な光景に圧倒されて、俺は啞然としてしまった。

「これは凄い」

流石のあつしも驚いていらつしやる。

「凄い……ね」

俺はテレビや雑誌等で豪邸の中庭つてのを見た事があるが、こんなにデカイ中庭つてのは初めて見た。しかも実物をだ。

「凄いでしょー」

俺達が驚いて立ち尽くしていると、背後から白波さんが声をかけてきた。

「そうですね。こんな豪邸初めて見ました」

「でしょー。この建物はね。本来はここが実家でいつも住んでるのが別荘になる予定で立てたからこんなに大きいんだよ」

「そうだったんですか?」

「そうだよ。だけどね。見ての通り、ここには海と山しかない。だから伊真舞の別荘に住むことにしたんだー」

つて事は住んでるのよりも大きいって事か?

と言うか、ここまで何件も別荘を建てれる白波さんの家庭つてどんな富豪だ。

「今日は目一杯楽しもー!」

白波さんが一番楽しんでいるような気がする。

「だけど、一般人の俺らがこんな豪邸に居るつて未だに信じられないな」

「あつし。その気持ちは分からないでもないが、お前はお前で一般の家庭じゃないからな? お前の自宅、寺だからな?」

偶にその事を忘れてるんじゃないか? って思う時がある。

まあ一応、生活スペースとして自宅つてのが別にあるらしいが、ほとんど寺で寝泊まりしてるから同じようなもんだろう。

「はは、分かってるつて」

と強めに肩を叩いてくるあつし。本当に分かっただんなあ?

次に俺達はバルコニーに来た。理由は

「今の時間だったらバルコニーに行くの良いものが見られるよ」  
との事だ。

だが、おおよその検討は着いている。

車に揺られて数時間。だいぶ時間がかかったからそれなりの時間だ。空が朱色に染まっていた。

だから今は夏だからそれなりの時間の訳で、腹が減っている。

まあ、さつき結羽が料理出来る人を集めていたから今から作るんだろう。

一応この屋敷には使用人が居るらしいが、今は口出ししないように白波さんがうるさく言っておいてるらしいから今は自分たちで料理は作らなきゃいけない。

俺も飯が作れるし手伝おうと思ったが、あつしのやつに引つ張られて今に至るわけだ。

だけど、俺が知っているだけで結羽と白井さん、そして露木ちゃん。三人も居る。

確かここ数年で萌末も料理を始めたんだっけ？確か……。

『お兄ちゃんに食べて欲しいんです！絶対胃袋を掴んでみせます！』

って包丁を向けながら言ってきたから青ざめたのを覚えている。

あれは絶対胃袋を掴む（物理）だった。宣戦布告だった。こ、殺されるっ！

まあ、そんな感じで四人は居るから問題ないだろう。逆に男の俺が入って行ったら邪魔になるような気がする。

「うわー」

先にバルコニーに着いていたあつしの感嘆の声が聞こえてくる。

俺もバルコニーに着くと、その光景に目を疑った。

「うわー」

声が勝手に漏れた。そう感じた。

小説で勝手に声が漏れると言う表現があるが、あれはフィクションだろうと思ってた。が、本当にあったんだな。

海がキラキラと輝いていて、空が反射して沈みかかった太陽が海の中にもあるような感じだ。

「んー。良いねえ。ここら辺は工場とかも無いし、空気が澄んでるのもあるんだろうね。空気が澄んでないとここまでの絶景はお目にかれないさ」

と伸びをしながらあつしは呟いた。

ここら辺が何も無いド田舎だから見れる光景だ

その時、LINEに通知が来た。

『ご飯出来たよー』

俺は結羽のその元気そうな文面にクスツと笑ってから童明寺と共に食堂に向かった。



## 第79話 想いを繋ぐ景色パート2

side 優也

俺達は食堂に来たんだが、

「バイキング形式で〜す」

マイクを通した結羽のでっかい声が聞こえてきた。あいつら、俺達が約10人しか居ないこと分かってんのか？食べきれないぞ？

食堂に着くと、俺たちを出迎えたのは大量の飯だった。

スクランブルエッグにローストビーフ、チンジャオロースに野菜炒め等 e t c e t c だ。

確かにみんなで食事会って言うのと張り切る気持ちは分からないでもない。俺も料理作れるからな。

だけど、これはさすがに多すぎる。

確かに美味そうで見てるだけだと幾らでも入りそうな気がしてくる。

だが、そこは所詮人間だ。食べ切れるわけがない。

しっかし恐らく4人でこの量を作ったのだろう。女子力恐るべし。

しかもこのレパトリーの多さは恐らく結羽考案の料理達なんだろう。結羽のレパトリー恐るべし。

結構結羽に料理を作って貰ってるけど、被ったことが無い。しかも全てが俺好みの味付けだ。

俺にだって嫌いな食べ物くらい有る。

あつさりとしているなら良いけど薄い味は好きじゃない。濃い方が好きだ。

昔からそうだが、豆腐なんかは苦手だ。よく七海に起こされる時に素直に起きなかったら熱々の湯豆腐を口に突っ込まれたものだ。何も入ってない胃の中の何かがふつふつと登ってくるのが分かる。

今はそんな事は無いが、極力食べたくないのは確かだ。

それが、一回も薄味の物が出て来た事が無いんだ。好みを教えてないのに。

まあそんな事は良いとして、ラインナップを見てみるとなんと全て

俺の好きな濃い味のものだと言う事が分かった。

これだけ濃い味の方があつたら胸焼けしそうだが、不思議か事に一品くらい薄味の物があつても良いはずなのに全て俺の好みの物だ。

まあ、萌末も調理場から出てきたから萌末の意見もあるんだろう。

しかし、全て俺の好みってのはどういう事だ？

まあ、食事は人生の楽しみの一つって言うくらいだから美味しいのは俺にとつては嬉しい。

「あれは胸焼けしそうだけど、食わないともたないからな。よし！食うぞー！」

と横に居たあつしが走り出してプレートを持って食べたい物を取っていく。

ちなみに俺は白飯をそのまま食べるのも嫌だ。

そしてそこはさすが俺好みの食事だけある。ちゃんとチャーハンと言う形で白飯を回避している。

どうしてこうなったかは分からんが、俺にとつてこれは好都合。

「よし！食うか！」

そして俺は美味しい料理をたらふく食って大満足なのでした。

飯を食った後、俺らは風呂に入ってその後、外に出てきた。

何故かつて？ははは。トラウマだ。

皆並んで線香花火大会をやっている。

俺だけは入口の階段に座つてその光景を眺めていた。

「優也く。こつち来て一緒にやらないか？」

とあつしが線香花火を持った状態でこつちに走つて来るが、

「来るなく！俺にその悪魔を近づけるなあッ！」

演技だとしたら迫真である。

「これは重症ね。去年のが響いてるみたいね」

そう。俺は去年、線香花火をやると一秒にも足りない時間で終了した。そのトラウマがある。

俺の運は非常に悪い。

ジャンケンでは星野さんに一回勝った時だけしか勝ったことが無

い。

線香花火は一秒ももたず、運ゲーをやると必ず負ける。運ゲーで勝てないこの人生って本当に楽しいのだろうか？

因みに、最初はくじ引きで当たった人しか入れない医療研究会って部活に入ろうと思ってたが、見事に外した。

「じゃあ僕がお兄ちゃんを慰めてあげます」

そう言っただけで皆の輪から外れて俺のもとへやって来た。

「俺はどんな事を言われ、されても絶対に混ざらんからな！」

そう言っただけで瞬間、頭に手を置かれ、撫でられる。

「お兄ちゃん。運が無くても僕には最高のお兄ちゃんです」

最高の笑顔だ。だが、魂胆は見えない。

「人を慰めるならまずその花畑オーラを隠すことから始めようか」

俺を撫でている間、幸せオーラ全開だった。萌未の事だ。何か良からぬ事を企んでいるに違いない。

「なら、露木ちゃん。あなたが行ってきたら？」

とずっと影だった神乃さんが露木ちゃんに提案した。

「ええっ！」

顔を真っ赤にして驚く露木ちゃん。可愛い。

「それはいい……いや、ダメです。でも……」

即答はせず自分の中で何故か葛藤する露木ちゃん。

すると何故か俺の方に歩み寄って来た。

そして俺の頭に手を乗せて俺の目の前で俺の座高に合わせて屈む。

そして――

「せ、先輩。お、落ち込まないでください。私達が居ますから」

「ぐはあっ！」

俺は断末魔の声をあげてその場に倒れ込む。それは神乃さんも同じようだった。

俺が急に倒れた為、露木ちゃんは驚いておどおどし始めた。

「わ、私。なにかいけないことをしたんでしょうか？」

「っ、露木ちゃん。あなた、破壊力がありすぎ。可愛すぎる」

それに関しては同感だ。可愛すぎて一瞬死にかけた。

それにしても露木ちゃん。馴染めてるなあ。まあ、皆悪いやつじゃないしな。

そんなことを考えていると視界の端で頬を膨らませて何故か不機嫌な結羽が見えた。

しかし、俺が幾ら考えても分からない事は目に見えてるから俺は考えるのをやめた。

そんなこんなで時は過ぎていき、消灯。

俺ら全員個室だ。その為、夜に出歩いてても他の人を起こす心配は無い。

そして俺は今何をしているかと言うと、バルコニーにて夜の海を眺めていた。

最高だ。この一言に尽きる。

眠れないからとバルコニーに来たが、それは正解だったようだ。

空には満点の星空。海を見ると、星空を写し出していて視界いっぱいの星空を演出している。

まるで天然のプラネタリウムだ。

すると近づいてくる足音が聞こえた。

間違いなくここに向かってきている。

すると、急にピタリと足音が止んだ。その代わり、

「ゆ、優也!?!」

結羽の声が聞こえてきた。

「どうしたんだ。眠れないのか?」

おちやらけて言う「うん……」としおらしい返事が帰ってきた。

「こっち来いよ。綺麗だぞ」

俺がそう促すと結羽もこっちに来た。

「わー。綺麗」

結羽も同じ感想のようだ。逆にこれを見て綺麗だと思わないやつなんて居るんだろうか?」

それから暫く二人で夜の海を眺めていた。

すると急に結羽が話しかけてきた。

「今日の飯。美味しかった?」

「ああ、最高だった。全て俺の好きな味だ」

「ふふっ。良かったあ」

安堵の表情を浮かべる結羽。

「あれ、私が考えたメニューなんだよ」

うん。だと思った。

あれ程のレパトリーはそうそうあるもんじゃない。

「萌未ちゃんがね。優也の好みを教えてくれたんだよ」

やっぱりあいつか。まあ、良いけどな。

「萌未ちゃん。凄い優也の事が好きだよ。さつきも『全てお兄ちゃん好みの料理にしてくれませんか?』って言ってたし。ふふっ。妬けちゃうなあ〜」

やっぱり元凶はあいつか。

と言うか、妬ける?どうして?

「露木ちゃんも賛成しちゃって」

露木ちゃんが!?

露木ちゃんは俺の事を喜ばせるのを一番嫌がりそうだけどな。

「ふふ。後輩からも好かれているんだねえ〜。さすが女たらしの優也と言う異名は伊達じゃないね」

「別に好かれてなって!おい!その異名は誰が作ったか詳しく!」

「ねえ、優也」

無視ですか!無視なんですか!?

「私ね。優也が好き」  
結羽はそう優しく呟いた。

## 第80話 想いを繋ぐ景色パート3

side 優也

「私ね。優也が好き」

結羽はそう優しく呟いた。

さすがにこの至近距離だ。偶に耳が遠いと言われる俺でも分かった。

「まあ、俺も好きだぞ」

友達としてな。

「やっぱり分かってないよね」

何を分かってないって言うんだらうか？そう考えた瞬間の出来事だった。

一瞬だった。一瞬だが、頬に柔らかい感触がした。

それを理解するのにはたいして時間はかからなかった。

一瞬、頭の中が真っ白になってなにも考えられなくなった。

「ふふっ。分かった？」

分からない。そう胸を張って言いたかった。いや、胸を張るような事じゃ無いと思うけど。

だけど、今の行動で分かってしまった。

結羽の俺に向ける好きと言う気持ちは友達としてのLikeでは無くて、異性としてのLoveだと言う事を。

「じゃーね」

そう言っつてその場を去ろうとする結羽。

だが、ここで帰してしまっつてはいけない気がした。

しかし、なんと言うべきだ。今結羽にかける言葉が見つからない。ただ俺は

「待て結羽！」

言葉も見つからないのにその場しのぎに引き止めてしまった。

「なに？」

一度振り返つた結羽は再び俺の方を見た。

言葉が出てこない。だが、無理矢理にでも喉の奥から声を絞り出

す。

「あの……だな。結羽」

俺が言葉に詰まっていると結羽は後ろを振り返った。

今度こそ行ってしまう。そう思ったが、結羽は一步も動き出そうとしない。

すると突然声をかけてきた。

「優也。昔話をしようか」

そんな唐突も無いことを言っていた。

「むかーしむかし。ある所に、サッカー好きの少年が6人居ました」  
サッカーね。俺も昔はサッカーが好きだったから共感出来そうだ。  
だけどそんな昔話ってあったっけ？

「その少年達はその日もサッカーをして帰る所でした」

なんか引つかかるな、サッカーと言う単語が出てきたからか？

「そんな少年達は不良に絡まれてる地味で目立たない可愛くない女の子を見つけた」

妙に既視感のある話だ。この話って……。初めて聞く話だけど俺は知っているようなきがした。

「皆が満場一致でスルーしようと思いました。ただ一人を除いて」  
嫌な予感がする。

「そして少年は女の子に絡んでいる不良に対してサッカーボールを蹴りました。そしてサッカーボールをもろにくらった不良はその場に倒れて、少年は女の子を救う事に成功しました。めでたしめでたし」

「あああああああああああああああああああああああああつ  
！」

分かった。その全貌が全て分かってしまい、俺は叫ぶ。

「なんでお前が俺の黒歴史を知っている！」

俺はその事まで教えた覚えはないぞ！どう言う事だ！

「ふふっ。なんでだろうね。自分で考えてみてよ。それが、優也への課題。優也、課題得意でしょ？」

学校の課題とは違う気がするが……。



「じゃーね」

そう言つて今度こそ結羽は自室に帰つて行つた。  
すると不意に視線を感じた。

背後。バルコニーの入口からだ。

「誰だ」

その場所を見ながら聞くと出てきた。

その人物とは——露木ちゃんだった。

「あの……えと、覗き見するつもりじゃなかったんです」

初めて会つた時のようでは無いが、おどおどしている。

「ちなみにいつから?」

「えと、先輩が『眠れないのか?』って言った辺りからです」

最初からじゃん。

「そうか。見られてたか……」

あのシーンを見られていたのはかなり恥ずかしい。

「結羽先輩に告白されたんですね」

やっぱりそうだよなあ……。

「ちなみに返事はどうするんですか?」

「まださっぱりだ」

「そうですか……」

すると少しずつ露木ちゃんはこつちに向かつて歩き出した。

「なら私にもチャンスがあるって事です」

どういう事と聞く前に露木ちゃんは答えを言った。

「私は先輩の事が好きです」

そんな衝撃的な事を。

さつき、あれだけ盛大な告白をされたんだ。意味は分かった。

だが、この子は俺の事が嫌いだったはずだ。なのにどうして?

「私が素っ気ない態度を取つてもちゃんと私と向き合つてくれるところ。皆が楽しそうにしてる時の優しい顔。そして、ピンチになったら助けてくれる所はヒーローみたいです。私にとってはあなたはヒーローなんです」

そしていつの間にかゼロ距離まで迫ってきていた露木ちゃんは背

伸びをして俺の耳元で、

「そんなあなたが好きです」

と囁いた。

正直ドキツとした。

この短時間で二度も告白をされた。その衝撃が俺の脳の回転を遅くする。

「な、なんでなんだ？」

俺の絞り出した言葉がこれだ。とりあえず気になったんだ。

「最初は嫌いでした」

おい。

「ですが、助けられてからはカッコイイって思うようになってしまっ  
て」

えへへと笑う露木ちゃん。

いつものギャップと相まって、他の子がやるより破壊力が高いと思  
う。

だけど、

「お前さあ……」

「ん？」

「チヨロくね？」

一回助けられただけで好きになるってチヨロくね？簡単に騙され  
そうな性格だな。

「女の子は皆私みたいに助けられたらトキメクものなんです！」

そんなもんなのか？

「じっくり考えてください」

それだけ言い残して露木ちゃんは帰って行った。

どうしようかな。この状況。

次の日

あの後、結局一睡も出来なかった。

満足気に寝ているあの二人のせいだな。

最終日。朝に昨日の残りを食べ、今は車で帰ってる途中だ。

海もあつたから入りたいと言っている人が多かったが、今から海水浴をしていると確実にもう一泊する事になるから断念することにした。

すると一人で座ってる隣に冬馬が座ってきた。

「よお冬馬。この旅行では影が薄かったもんな。なにか残しに来たのか?」

「影が薄い?何言ってるんだ?深夜以外、ずっと優也さんの近くに居たじゃないか」

え?本当に!?気が付かなかった。

「それじゃ俺はここで寝るから優也さん肩を貸してください」

そして俺の返事を待たずして寝始めた。こいつ!

まあ良いか。俺も眠いし寝ることにした。

その数時間後、俺らは帰宅して俺と結羽は同じ家に帰ったんだが、顔を合わせることが出来なかった。

二年生編 二学期

第81話 ハーレムとは、経験しないとわからない苦  
労がある

side 優也

『私ね。優也の事が好き』

『あなたの事が好きです』

あの日からまともに結羽と顔を合わせることが出来なくなった。

まさか結羽に告白されるなんて思ってもなかったからだ。

だが結羽は何事も無かったかのように――

「優也く朝だよー」

「ん？ああ」

あの日からなかなか寝れなくなって寝不足だ。その為、寝坊気味になっ  
てきている。

そんな時はいつも結羽が起こしてくれるんだが、目を合わせる事が  
出来ない。

「朝食も出来てるよー」

あれは夢だったんじゃないかと思う程の自然な接し方だ。

だが夜、バルコニーにて結羽と露木ちゃんに告白されたのは事実な  
訳で……。

と言うか、以外だったのは露木ちゃんだ。露木ちゃんは俺の事を  
嫌ってるって思ってたのに実際はその逆だった。

――告白された。

それだけで身悶える事が出来る。

「先に行ってるね〜」

と言うか、お玉と包丁を持ったまま部屋に入って来ないで欲しい。  
怖いから。天然サイコなのか？

まあ、布団にいつまでも入ってる訳にもいかないから仕方が無くり  
ピングに向かう。

そのまま俺達は飯を食った後、二人で家を出た。理由は今日から学校が始まるってのがある……のだが。

「ゆるーやっ♪」

ギョツと俺の腕に抱きついて来る少女が一人。そして、

「せ、先輩」

控えめに袖をつまんで上目遣いで見つめてくる後輩が一人。

それをニコニコしながら見守る会長が一人。

そう言えば、俺達がいつも登校している道をこの二人は知っているんだったな。

しかし、やばい。何だこの状況。

美少女二人に挟まれて、しかもその二人とも俺に好意を向けてきている。

露木ちゃんも俺に思いを告げたからか、前の様な冷たい態度じゃ無くなってる。と言うか、俺としては調子が狂ってしまうので正直言う和前の様に罵って貰った方がありがたい。こんなに誰かに罵って欲しいと思つた事は無いぞ……。このままじゃDMに目覚めてしまいたいぞ……。

「はあああ……………」

俺は無意識の内にため息をついてしまう。

「絆成君、女の子二人に囲まれているって言うのにため息を着くなんて失礼なんじゃないの?」

「いやあ、二人だからこそ困っているって言うか……」

この日本では二人と同時に付き合うなんて出来ないからいつペんに告白されて困っているのだ。

まあ、俺は女心も分からなければ男なのに男心も分からないからよく分かんないが、普通ならば美少女二人に囲まれると男は嬉しいと思うんだと思う。だが、俺は完全に気が滅入りそうになってきている。

どうしてこうなった……。

「優也はあくどっちが良いんですかあく?」

と結羽が耳元でとろけるような声で囁いてくる。すると露木ちゃんも張り合うように、

「私ですよね?」

と囁いてきた。

「モテモテね」

「他人事ひとごとみたい……。片方はあなたの妹でしょうが……」

「いやいや、そんな事はね、良いのよ。私は露木ちゃんがこんなに幸せそうにしてるから良いのよ。だけど露木ちゃんを泣かせるような事があつたら生徒会として全力で潰すわよ……」

最後の方は完全にドスの効いた声だった。神乃さん……怖い。

「と言うかそれは職権乱用何じゃないですか……?」

俺が呆れた声で言うのと神乃さんは「ふふふくく」と笑って誤魔化した。

俺はこれのせいで寝れなくなりそうだ……。

昼休み。

俺は結羽達に捕まる前に教室から出た。

人生の数少ない楽しみである食事の時間だけはあいつらに邪魔されなくなかったのだ。絶対ややこしい事になるし……。

「あら、優也じゃない」

俺が俯きながら歩いていると前から声が聞こえてきた。

この声はしばらくぶりの、

「あ、星野さん」

星野さんだった。

本当にしばらくぶりだ。多分二年生になってから一度も会ってないんじゃないかな?

「それにしても、珍しいわね」

「ん?なにが?」

「あなたいつも女の子を連れてお昼ご飯を食べていると言うのに、今日は一人名の?」

「人聞きの悪い事言うなよ。俺だって一人になりたいこともある」  
いつもでは無い。

と言うか、いつもあいつらが誘ってくるから一緒に食べてるだけ

で、自分から誘ったことはそんなに無い。

「それはそうとあなた、二股してるの？」

「ブフウツ！」

俺は星野さんの言葉を聞いて飲んでいたお茶を吹き出した。

「俺はそんなクズ野郎じゃない！」

「なら今朝、あなたの腕に抱きついてた二人の女の子は何かしら？」

その言葉を聞いて俺は冷や汗が出始めた。

あれを見られてたのか。

正直に二人が好意を持っているからって言うのはダメだろう。ならないと言えばいいのか？

「まあ、あの子の表情からしてあなたに告白したけどあなたは保留にした感じかしらね？」

か、完全に言い当てられた。

ここまで完全に言い当てられるとは思ってなかった。

「ハーレムね。良かったじゃない？」

「そりゃ昔は本を呼んだりしてハーレムに憧れていたこともあったよ。だけど実際に経験してみても、これは精神的にクる物だと分かった」

ハーレムなんて全然良くない。だって修羅場だからな。

日本でハーレム婚は出来ないからハーレムは修羅場ってことになる。はあ……本当にどうしてこうなった……。

「じゃああなたをもっと困らせましょうか？」

そう言うと星野さんは珍しく作ってきた弁当の中からおかずを一箸でつまんで俺の口の中に入れてきた。

「ふふふ。どうかしら？」

「ん？美味いけど」

正直、急に食べさせられてびっくりした。

「これ、私がつってきたのよ」

「へえ〜美味いじゃん」

「ふふつ。私と付き合ったら毎日作ってあげるわよ？」

へ？今こいつなんつった？

思考が停止してしまった。

「ど、どういう」

俺がそう聞くとニヤリと笑いながら、

「私、あなたの事が好きなのよ。出来ればあなたと添い遂げたいと思っているわ」

と言った。

「あ、あ」

俺は声が出なくなってしまった。

ある人は言った。『人生にモテ期は三度ある』と

「う、うわあああああああ」

俺は脱兎のごとく逃げ出した。



第82話 人生最大のモテ期がやってきたようです  
(望んでない)

side 優也

俺はやつと地獄の学校が終わってバイトの時間となった。

今日は珍しく俺、如月、北村さんの三人が同シフトとなった。

俺と如月がレジ、北村さんが裏で商品を置いたりしている。

しかし、いつもながら暇なのである。

いつもは退屈していてこの時間はあまり好きじゃないんだが、今は落ち着く。

ここ最近、色々ありすぎてこの空間が天国だ。

「ゆうや君。なんかおかしいよ?」

最もおかしいと言われたくない奴におかしいと言われた。

だが、最近ほんと人の愛という物がオーバーになってきているからこうやって罵って貰えることによって俺は落ち着きを取り戻す。

「ひゃあつー!」

隣で普段からは考えられない可愛い悲鳴を発する如月。

「し、しほさーん!ゆうや君が壊れたあー!」

その言葉を聞いて北村さんは裏から出てきて一番に驚いた顔になった。

何そんなに驚くことがあるんだろうか?

「絆成さん。あなた、ニヤニヤしてどうしたの?キャラ崩壊してるわよ!」

え?今俺、ニヤニヤしてるの?

「しほさーん。なんかゆうや君におかしいと言ったっけ急にニヤニヤしだしたんですう」

「き、絆成さん!」

すると俺の肩を掴んで前後に揺らしてくる北村さん。酔う!酔うから!

「お、お気を確かに!」

あなたが落ち着いてください！俺は普通ですから！

「それにしてもどうしたの？ ゆーや君」

如月が不思議そうに聞いてくる。

しかし、俺は今は頭の中がお花畑になっているので

「いやあく罵られたい気分だったんだよ」

と正直に言ってしまった。

これには流石の北村さんも「え？」と言って俺から少し距離を置いた。

「ゆーや君がMに……」

ガクガクと肩を態とらしく震わせる如月。

「そんなになるまで何があったのよ。勉強のし過ぎでネジが外れちゃったの？」

いつもなら棘を感じる様なこんな北村さんのセリフだが、今の俺には心地いい言葉に聞こえて更に表情が崩れる。

「重症ね」

北村さんはしみじみと呟いた。

「もしかして女の子に愛され過ぎて少し罵りが欲しくなっちゃったとか？」

如月がからかうように言ってきた。が、俺はそれを否定しなかった。

「え？ ゆーや君が否定しない!? まさか本当なの!？」

やってしまったと思ったが、時既に遅し。

「だ、誰に愛されてるの!? 教えてよ〜！」

今度は如月が俺の肩を掴んで揺らしてきた。だから酔うって。

「くっ……これは……」

すると如月が悔しそうな表情を浮かべる。

「ゆーや君！ 誰と付き合ってるの？」

その言葉で我に返った。

「いや、誰とも付き合っては無いが？」

俺がそう言っていると如月はホツとしたと言うような表情を浮かべた。なんか嫌な予感がするのは俺だけではないはず。

「流れに乗るしかない!!」

急にどうしたんだろうと思っていると、

「ゆーや君」

と俺の肩を掴み直してきた。一体なんだってんだよ。

「私、如月 咲桜は絆成 優也君の事が好きです」

柄にも無いような口調で真面目なトーンで言ってくるもんだから俺は驚いてしまった。

そして如月の片手は俺の後頭部へ。

そして目を閉じてゆっくりと近づいてくる如月。

「はあっ!?!」

俺は思わず驚いて大きな声を出す。

後頭部を押さえられてるから逃げれない。

「き、如月!……職場だぞ!」

「関係ない」

関係あってくれよ!と言うか、職場じゃなくてもやばいから!北村さんが見てるから。

そして助けを求めようと北村さんの方を見るともう持ち場に戻ろうとしていた。

「き、北村さん!」

あの人が居なくなったら完全にゲームオーバーだ。

「なんですか」

嫌々だが、戻ってきてくれたようだ。

俺は如月の肩を押し返しながら助けを求める。

「北村さん!お願いですから助けてください」

「えー?あたしにメリットありますか?」

そう聞かれたので俺は思考を巡らせる。そして一つの可能性にたどり着く。

「今度北村さんが読みたがってたあれ貸しますから!」

「しよ、しようがないですね」

チヨロい。

「咲桜。絆成さん嫌がつてるでしょ?」

そう言つて北村さんは強引に如月を俺から引き剥がす。  
俺の力と合わさつて意外にも簡単に離れた。

「むー。じゃあしほさんが私の相手してください」  
「へ？」

そう言うとその場で如月は北村さんを押し倒してイチヤイチャし始めた。百合百合しい。

この時間はお客さんはそんなに来ないから良いものを……。  
それにしても……如月が俺に告白してきた？

俺はとりあえず北村さんから如月を引き剥がして、  
「なんで俺が好きになつたんだ？」

そう聞いた。

「んー？一目惚れかな？」

「は？」

なんだそれ。

「初めて会つたあの時から私はゆーや君に惚れていたのだあつ！」  
えっ？

「つて事は」

「そうだよー。ゆーや君が更衣室に入って来た時にタイプだーって  
思つてさー。襲つてもらつてもいいつてのは本心だよお？」

マジかよー！

改めて本心を知つてしまつて俺は頭を抱え込んでしまった。

「どうしたの？ゆーや君」

「いやさ、うん……。神は俺をどれだけ困らせれば気が済むんだつて  
さ」

「いや、本当にどうしたの優也君!？」

「こゝまで困る事になるとは思わなかつた。

この一週間以内に四人に告白されると思わなかつた……。  
「ちなみに北村さんは俺に告白したりしないですよね？」

諦め半分で聞いてみると、

「あなたは読書友達つて思つてて異性としては見てないわね」  
良かった。友達つて言つてくれる人がいて本当に良かった！

そして俺は更なる混沌<sup>カオス</sup>へと巻き込まれたのだった。

## 第83話 同時に告白されるだけで罪らしい

side 優也

ズズズ

俺は目の前に置かれたコップの中のコーラをストローですする。丁度その一すすりで中身が空になったようだ。

「珍しいな。お前がコーラを飲むなんて」

「うっせ。そういう気分じゃなかったんだよ」

そう言うってからコーラをもう一杯注文する。

「んで？珍しいじゃないか。お前から俺を呼び出すなんてよ」

「俺がお前を呼び出しちゃあかんのか」

「いや。全然」

首を横に振る目の前にいる男。

会話の流れで分かると思うが、こいつは俺が呼び出した。

んで、その呼び出した場所は近くの喫茶店だ。その一郭で俺とそいつは飲み物をちびちびと飲みながら話しをしていた。

「あつし、単刀直入に聞く。白井さんとはどうだ？」

俺が聞くと俺の顔に口に含んだメロンソーダを全てリバーズしてきた。

それを俺は無言でハンカチを取り出して顔を拭く。

「おい、本当に単刀直入だな」

俺が呼んだのは童明寺 あつしだ。

ちよつと相談したいことがあったから呼び出した。

いつもはあまり動揺しないあつしだが、今日は動揺して苦笑を浮かべている。

「良いから教えてくれ」

「どうも何も何もねーよ。元々幼馴染って関係がムズいんだ。そこからどうやって関係を変えていくかが問題だ」

適当に答えるあつし。

だが、本当に聞きたいことはこれじゃないんだ。

「じゃあ次だ」

「あ？」

俺は深呼吸して、一拍置いてからこう言った。

「お前は同時に4人から告白されたら……どうする」

俺はいつになく真面目な表情で聞いた。真剣な悩みだからだ。

俺は数日間間に4人に告白された事で俺は悩みに悩んでいた。夜も眠れなくなつて寝不足気味でもある。

同じ家に俺に告白してきた人が居ると考えると眠れなくなつてしまう。

まあ、結羽だけならいい。だが、4人に告白されたなら話は別だ。

全員を振るといふ選択肢も確かに存在する。だが、誰かの告白を受けてしまうと他3人はその一人を受けたから振る。と言うのもなんだか切ないよな。

だからと言つて全員受けるという選択肢は絶対にありえない。そんなことをしたら最低のクズ野郎になってしまう。

だから俺は親友の意見を聞きたくて呼び出した。

「そうだな〜4人に告白され……」

そこで我が親友の動きが止まった。メロンソーダを右手に持ったまま固まつてしまった。

そして数秒の硬直後、自分を落ち着かせるためにメロンソーダを飲んだあつしは俺に飛びかかってきた。

「4人つてどういう事だよめえっ！」

胸ぐらを掴んでくるあつし。

「ええっ！お前女の子に興味ないから別にいいじゃないか」

「それとそれは別だ。クズか!?!クズ野郎なのか!?!」

「受けてないんだけど!?!」

さすがにそれだけでクズ認定は理不尽すぎる。まさかこいつは告白されるだけで罪とか言い出すんじゃないだろうなあ？

「一度に多数の異性から告白される時点で罪だ!」

言つたアっ！一語一句間違えずに言つたアっ！

「いやいやそれだけで罪はちよつと!」

「優也しねえっ!」

「理不尽だアアアっ！」

「……………落ち着いたか？」

「……………ああ」

あれから数分後、俺はなんとかあつしを治める事に成功した。

そしてあつしは今、俺奢りのパンケーキを食っている。なんで奢ら  
されないかと……理不尽だ。

「んで？お前は4人の異性に同時に告白されたと……」

ん？ちよつと待て！

「どうしてそうなる!？」

俺はされたなんて言っていないぞ!!

「だってよ、お前。さつき『受けてない』って言ったよな？これって認  
めてるよな?。」

拳を作って俺の視界に入るようにしながら睨みつけてくる。

怖い。

「まあ、実際にされたんだけどさ」

「よし優也。ちよつと頭貸せ、殴る」

「そんな動機で貸す訳あるかっ!？」

これが最近の俺達の関係だ。

昔よりも少しだけ砕けた関係になっていて、今ではこんな軽口も叩  
けるようになった。

ついでにあつしが俺を殴るようになった。親友を殴る人は凌太だ  
けで充分だ。

「まあ、そうだな。俺もちよつと前まで付き合い合わないって決めてたか  
らな。ちよつと悩ましい問題ではある」

そこで俺は気になってしまった。

「なあ、お前が断り続けていた理由ってなんだ？」

そう聞くと悲しそうな表情に変わった。

そこでどういう話かは想像がついてしまった。

「いや、言いたくないなら言わなくても——」

「いや、お前なら特別に言ってる。本当に特別だからな？」



そこまで特別にして言わなくても……。

そう思ったがあつしは語りだした。

「俺、昔は好きな人がいたんだよ」

その言葉に俺は思考が停止してしまった。

そして復活するまで数秒かかった。

「え!?!お前好きな人居たの!?!は?え?え?はあつ?!」

俺は動揺しすぎて普通の言葉すら話せなくなったと思う。

「反応遅いし動揺しすぎだろ。俺が一番最初からこうだと思ってたのか?」

その言葉に首だけ降って肯定の意志を示す。

「俺がこうなったのは小四の頃だ。そして俺はその小四のころのことを全くと言っていいほど覚えてない。ある一つの事件を除いてな」

事件?

「他のこと忘れんならこれも忘れて欲しかったわ」

手のひらの指を絡め、そこに頭を置いて後ろにもたれ掛かるあつし。

そしてあつしは過去の話始めた。

## 第84話 小学生の恋

side あつし

これは俺が小学生の頃の話。

まだつみきと出会って間もない頃の話だ。

「ねえ君。いつも一人だけど友達いるの？」

俺が本を読みふけていると前方から声をかけられた。

聞き覚えの無いこの声はつみきのやつとは違う誰かのようだ。

今ほどでは無かったが昔もかなり無愛想だったからちよつと不機嫌な感じで睨むように前方を見る。

そこにはまだ小学生で幼さはあるが、整った顔立ち。将来は確実に美人になるであろうと予想されるような美少女がいた。

それに俺はこいつのことを知っている。

「進野真 すすのま 彼方 かなた」

俺がそう呟くと目の前の少女はパーッと笑顔になった。

俺はこの時「しまった……」と思った。

「覚えてくれてたんだあつ！嬉しいなえへへ」

何がえへへだ。

「そう言う君は確か……どうりようじ あつし君だっけ？」

舌足らずで上手く俺の名前が呼べてない所がなんかおかしくてプフッと笑ってしまった。

「あゝ笑った〜っ！もう……」

その瞬間、真横からドサツと物が落ちる音がした。

そつちを見るとつみきが居た。居たんだが、何故かこの世の終わりのみたいな顔をしている。

「どうしたんだつみき」

「わ、私でも童明寺君に笑ってもらうのに時間がかかったのに、初めて会った人と笑ってる……!?!」

俺を見ながら硬直してつみきは「これは事件だよ……」と呟いている。失礼な、俺だつて笑うさ。笑うことが少ないだけでさ。

「んで、つみき。お前どこ行ってたんだよ」

「ん？ああ、ちよつと職員室に行つてたんだ」

また勉強を教えて貰いにか。本当につみきは勉強熱心だ。そういう所は見習いたい所ではある。

「んで、お前はいつまでそこに突つ立ってんだ？」

俺が睨みながら言うも、彼方は全く動じずにニコニコと笑みを浮かべている。

「もう暫く」

その返答に俺は深くため息をついた。

side 優也

「へー。あつしにはもう一人幼馴染が居たのか」

「幼馴染っつーか。一方的な感じだな」

俺はあつしにその話を聞いてびっくりしていた。あつしに幼馴染が白井さん以外にも居たなんて。

そこで俺は疑問を持った。

「んじゃその子は今、どうしてるの？」

その質問をした途端、あつしの表情が曇った。

それを見て俺は自分が地雷を踏み抜いてしまったことに気がついた。

「いや、ごめん」

「いや、良いんだ。どうせ言うつもりだったからな」

そしてあつしは手元にある飲み物を一口飲んで喉を潤す。

そしてあつしは意を決したかのような表情でこう告げた。

「進野真 彼方ならもう居ねーよ。この世にはな」

その言葉を聞いて急に俺は腑に落ちた。今までの行動。態度。その全てを説明するのにこれ程分かりやすい説明ってあるだろうか？

恐らく、あつしにとつての進野真さんは俺にとつての七海だったんだろう。もう、失いたくないから新たに仲良い人を作ることをしなかった。

「ん？だけどお前さ初めて話した時、お前の方から話しかけてきたよな？」

そこだけが疑問だった。友を作りたくないなら話しかけなければいいのに。

「俺はあの時は取りあえず突出して目立つわけでもなく、かと言って存在感がゼロにならないようにお前の中に俺と言う人物を作っただけだったんだ」

つまりは良いように利用されたってわけか。

だが、結果的にこいつの行動や態度、性格などがこいつを有名人にさせてしまったんだがな。

こいつがこんな態度を取ってるにも関わらず、女生徒らは「クールな感じ、かつこいいいよね〜」だ。

呑気か!?

とまあ、こんな感じで余計に注目を集めていた事はあつしはまだ知らないから余計な事は言わないでおこう。

なんで無愛想・冷たい・チョコのお返しをしない。こんなやつを好きになるのか未だに理解できないところではある。

「まあ、取りあえず続きを話すぞ。えつと……どこまで話した?」

「進野真さんって言う方が話しかけてきたつとこまで」

そう言うにあつしは「そうだそうだ」と手を叩きながら言っつて語ることを再開した。

「まあ、彼方と出会ってし四・五ヶ月後の話だ。相変わらず彼方は一方的に話しかけてきていたが、俺はその頃には彼女への苦手意識も薄れ、逆に別の感情が湧き始めていたんだ」

side あつし

「でねでねあつし君………聞いてる?」

「ああ、聞いてるよ」

実際にはブーツとしていて聞いていなかったんだが、素直にそれと言うと後々面倒くさくなりそうだったため、嘘をつく。

「もう……。なら、なんて言っつてたか言っつてみて」

「……………童明寺 あつし様。どうかこの私めを罵っつて叩いてくださ  
いはあ……………はあ……………か?」

「はあ……はあ……か？じやないよ！それじゃ私、変態じやない!?」  
変態じやないのか。

こんな友達や人気に固執するやつは変態しかいないと思っ  
たが、変態じやないのか。

※個人の意見です。

それにしても、こいつはよく飽きないよな。こんなに無愛想で暗い  
奴と友達になりたいってそれこそ変態の極みだ。物好きにも程があ  
る。

物好きと言えばこいつ以外にもいたな。

俺の真横の席を占領し、ギラギラとこつちを獲物を見る目で見てき  
てるやつだ。

あいつ、こんなキャラだっけ？

「もう、やっぱり聞いてなかったんじやない……。もう一回言うから  
聞いててね」

そして進野真の奴は深呼吸してからまた同じ事を言い出した。

「今週末、一緒に遊びに行こうよ！」

その瞬間、つみきの奴が何も飲んでいないと言うのに吹き出して俺  
の横顔にぶっかけてきた。

きったねーな。

そして俺は顔を拭きながら「どこに遊びに行くんだよ」と問いかけ  
た。

俺達はまだ10歳だ。そんな子供がどこに遊びに行くってんだよ。

「公園に」

「子供か」

「子供だよー」

俺はツツコんだ気になっていたが、逆にツツコミ返されてしまっ  
た。

結局俺は押し切られてしまい、遊びに行く事に。

そして何故か必死になってつみきが「私も行く！」って主張してき  
たからつみきも合わせて三人で遊ぶことになった。

そして三人で遊んだその夜。テレビを付けると驚くべきニュース

が。

そのニュースとは、

『今日、夕方頃。伊真舞市で10歳の女の子が襲われ、命が奪われる事件が発生しました。容疑者は九治きゅうじ 崇たかし容疑者。被害者は――』

進野真彼方ちゃん

その名前を聞いた瞬間、俺はテーブルを強く叩いて立ち上がった。目を見開き、その場から一時間ほど動けなくなった。

おい、その名前は……。おい、嘘だろ？何かの間違いなんだろう？

なあ……。そう言ってくれよ。質たちの悪い嘘なんだろう？

「う

ああああああああああああああああああああああああああああああ、  
が、

ああああああああああああああああああああああああああああああ

その日は泣きじやくった。これまでにない程に泣きじやくった。

なんでだ。なんで……。なんで最後の最後まで……。くっ！

『ああ、聞いている』

聞いてねーじゃねーか。

『子供か』

素っ気なく。冷たい。なんで最後の最後までこんな会話しか出来なかつたんだ。

後日うちに警察がやって来て、俺に一通の手紙を渡してきた。

送り主は進野真 彼方。

その名前を見た瞬間、俺の目じりが熱くなった。

俺は慌てて便箋を破り開け、中の手紙を取り出して広げる。

中にはこんな内容が書かれていた。

――あつし君へ

――たんとうちよくにゆうにいいいます。好きです。

――いきなりこんな事を言われても困っちゃいますよねw

――でも、私の気持ちにいつわりはありません。

――私はあなたの事が好きです。

どんどん涙が溢れてくる。もう涙で視界が遮られて満足に手紙を読める精神状態じゃなかった。

そして俺は全てを読み終わった時、俺はガツクリと膝から崩れ落ちた。

最後の一文、『放課後、屋上に来てください』

俺は二日連続で崩れ落ち、泣きじやくった。

この時の手紙はまだ取ってあるが、俺の涙でふやけて字が滲んでしまつてあまり読めなくなつてしまった。

文章はハッキリ全てを覚えている訳では無い。

だが、これだけは言える。俺は進野真 彼方。彼女の事が恐らく、無意識のうちに好きになつてしまつていたと。

side 優也

「という感じだ。お前も気持ちわかるだろ？七海ちゃんも酷い目にあつてるんだし」

「まあ、そうだが……つて！お前なぜその事を！」

俺はその事は言つてねーぞ!?

「ああ、たまたま聞こえちゃつてな」

ちつ、聞かれてたのか。

まあ、聞かれたのならしようがない。

「んじや守つてやれよ。今度こそ」

「当たり前だ」

そして俺とあつしは拳を合わせる。

「お前もな？」

あつしはそう置きセリフを言つて喫茶店から出ていった。

「つてあの野郎！会計しないでいきやがったな！」

あいつ、今度覚えてろよ。

俺は童明寺 あつしを恨みながら会計をして俺も帰ることにした。

## 第85話 課題が増殖中

side 優也

休日。俺は部屋にこもって勉強をしていた。

理由は今、結羽に会ってしまおうと意識してしまおうからである。

「はあ……」

ため息をつく。

正直、あつしの話を聞いたのは良かったが、あいつに相談しても何も起こらなかったんだから相談したのは失敗だったんじゃないかと思っ  
てきている。

その時、扉が何者かによってノックされた。

「はい。どうぞー」

そう言うと、扉の向こう側にいる人物は遠慮なくって感じで俺の部屋に入ってきた。

その人物とは、

「ゆゆゆ、結羽っ!?!」

恐らく、今の俺は声が裏返っていただろう。

今、一番俺を悩ませている人物が俺の部屋に入ってきた。

会いたくなかった。

だが同じ家に居る以上、接触は避けられない。それが今だったってことだろう。

まあ仕方がない。

あまり動揺を悟られないように自然に接する。それだけだ。

「ゴホン。それで?何の用だ?」

「あ、それなんですけど実は部屋を掃除したら卒業アルバムを見つけたので一緒に見たいなと。まあ、同じ学校じゃなかったんですが、何となく一緒に見たいなと」

あー。確かに卒アルとか他の人と見ると楽しいもんな。なぜ別の学校の俺と一緒に見たいのか分からんが、そういう事なら俺も提供するのが常識ってやつだろう。

そして俺はこっちに来る時に持ってきた荷物の中から小学生と中



学生の卒アルを取り出す。

「しかし、ここで見るには少々窮屈じゃないか？そこらに物が転がってて」

色々荷物を取り出した結果この惨状に。

「そうですね。……じゃあ、私の部屋で見ましよう！」

今の俺にとつてはかなりやばい事を提案された。

今扉から机までの距離で話してるだけでかなり意識してやばいの  
に結羽の部屋に行ったら……。

結局押し切られて来てしまった。

現在俺は座って結羽の事を待っていた。

結羽は俺を不用心に自分の部屋に置いて飲み物を注ぎに行った。

そして俺は座って待つてるんだが、俺の視界に一冊の本が映っている。

しかもベッドの下に思春期男子がお宝本を隠す時みたいそこに  
ある。

見てはいけない。だが気になってきまう。

男子の部屋でお宝本を搜索する人ってこういう気持ちなんだろう  
な。

そして俺は――

数分後

「お待たせしましたっ!？」

結羽は帰ってきた直後、声が裏返るほど驚いた。

まあ、その驚いた原因は俺自身も把握している。恐らく机の上にあ  
る本の事だろう。

題名は『男子が好きな属性くヤンデレ編』

それによって全てのパズルピースが噛み合ったような気がした。  
急にヤンデレになったことがあったが、こういう事だったのか。

それにしてもヤンデレ……ねえ。

「結羽。お前は間違えている」

「な、何が!？」

「俺はヤンデレはそんなに好きじゃないぞ?。」

まあ、昔は病的なまでに愛されるのも良いかなあ?と思ったが、あの時から萌未さんが……その……、ヤンデレになってしまってます……。

パンツを見つけた時から俺はヤンデレは恐怖の対象でしかなかった。

因みに萌未は独占とかはあまりしないけど、最終的に俺と添い遂げようって考え方なんだ。

だから俺が誰かと付き合ってもその相手に被害が及ぶことは無いが、愛人にしてくださいっ!とか言ってるので怖い。そんな事したら俺の世間体が……っ!

「ち、違うんですっ!。」

俺が説くような口調で言うと言つ先に何かを否定した。

「え?違うって何が?。」

「これ、貰ったものなんです」

貰った?誰から?こんな特殊なもんを結羽にあげる人なんて……一人しか思いついちゃったよ!

あの元生徒会長。今度あったらどうしてくれよう。

「はあ……そうか。事情は分かった。だが、ヤンデレは従妹いもうとだけで充分だ」

「う、うん。なんかごめんね?。」

「いやお前が謝ることじゃないから気にするな」

まあ、勝手に漁った俺が悪いんだしな。

でもこれで結羽がヤンデレすることも無くなったか。

それにしてもなにあのクオリティ。女優目指した方が良いんじゃないの?

「んまあ、気を取り直して本題に移ろう」

そう提案すると結羽は「うんっ!。」と言って、何故かテーブルを挟んで向こうに座ればいいのに真横に、しかも完全に密着する位置に座ってきた。

腕同士が完全にくっついてる。

「じゃあ見よう?」

そう言っただけの前と自分の前に飲み物を置き、自分の卒業アルバムを開いた。

「あれ? 中学校から?」

「小学校の頃の奴、どこに行ったか忘れてしまった」

えへへと笑いながら「そんなことはどうでもいいんですよ」と言いながら結羽は自分のクラスの集合写真が載っているページを開く。

「これが私です」

結羽は自分を指さして教えてくれる。

髪が短くてメガネを掛けていて、なんと言うか地味って言うか……。まあ、本人に言ったら失礼だから言わないけどな。

でも、なんと言うか……見たことあるような……ないような?

何せ地味だからな。

「俺とお前は昔会ったことあるか?」

無意識に聞いてしまった。

気持ち悪いと思われてしまっただろうか? まあ、そうだよな。急に前あったことあったか? って聞いたら——ってめっちゃキラキラした目で見てきてる!?

「どうでしょう? それは記憶を辿ってください。それも宿題です」宿題が増えてしまった。

なぜ俺の黒歴史を知っているのか。そして結羽と俺は昔会ったことのある可能性。

そこで俺はひとつの可能性が浮かんだ。だが、これは相当低い確率だ。

天文学的な数字の並びになるだろう。

「そういやこの頃、結羽は髪も短くてメガネをかけてるんだな。今はコンタクトなのか?」

「あ、そうだね。今はコンタクト。まあ、そこまで悪いつて訳じゃないけどね。視界がぼやけると吐き気がするから」

なぜコンタクトにしたのかは分らんが、コンタクトをしている理

由は分かった。

「ロングにしたのもコンタクトに変えたのも、ある一人の男の子に言われたからなんだよね」

急に結羽は語り始めた。

懐かしんで、そして嬉しさと寂しさが入り混じったような。そんな表情だ。

「その子にね。「君は多分、メガネは無い方が可愛いと思うよ。うん！それと僕はロングの方が好きだな」って勝手に好みを私にぶちまけてきてその時は困惑しちゃった」

「へえ〜っ。今はその子は何処にいるんだ？」

「んー。本人が覚えてないかもしれないけど、意外と近くに居る。探してみよ。これも宿題」

結羽に質問する度に宿題が増えるな。

まあ結局気になるし、探してみるか。

## 第86話 発覚

side 優也

休日二日目。

俺は凌太と共に喫茶店に来ていた。最近よく喫茶店に来るようになったよな。

そして俺は凌太とテーブルを挟んで座り、コーヒーフロートをすする。

何しに来たのかと言うと、まあ凌太に相談しに来たわけなんだが――

「腹減ってたのか？」

凌太は俺の目の前でトマトソースパスタ（大盛り）、オムライス（大盛り）。極めつけにはバタートーストをこれでもかとカツくらつていた。

あの胃袋は異次元にでも繋がってんじゃないのか？ そう思えてくるような食いつぶりだ。

今思えば、今の「腹減ってたのか？」って問いも適切では無いような気がする。

仮に腹減ってたとしてもこの量を食うのはおかしいからな。

「さっき飯食ってきた」

その言葉に俺は言葉を失った。

飯を食ってきたと言うのに更にそこから物凄い量食っているだど!?

余計に質が悪い。

俺が食ってるわけじゃないけど、目の前で見ただけで腹一杯になり、気持ち悪くなる。俺は大食いな方では無いからな。

逆に結羽の方が食べるくらいだ。

まあ、それは前から知っていたけどな。

たまにコンビニにお忍びで行っては夜食を買っている。本人はバレてないと思ってるらしいが、俺は隣の部屋だから結羽が出て行ったのは直ぐに分かる。

「あの馬鹿どもを制御すると腹が減るからな。エネルギー補充も重要だ」

「そーいや昔から大食いなわけじゃなかったな。」

「そうか……。バンドを始めてからあいつらが今までより暴れるようになったと……。こいつも大変だな。」

「俺は哀れみの目を向けた。」

「応援してる。手伝わないけどな。」

「はぐはぐ。むぐむぐ。んぐつ。っはあ……。んで、話ってなんだよ」

「うわあー。すげー。もう食い終わつた。ここに来て十分と経つてないぞ。」

「とまあとりあえず話だったよな。」

「お前さあ、LIFEの情報屋とか言われてたよな」

「……。欲しくも無い称号だ。普通に生活してたら手に入る情報だ」

「普通に生活してて裏組織の情報なんて手に入らないと思うけどな。」

「こいつ、やばい組織なんかの情報を掴んで警察に垂れ込むのを趣味にしている。んなやばい事を趣味にしているやつなんて世界の何処を探しても無いだろう。」

「まあ、その情報屋のお前に頼みがある」

「なんだよ。俺は情報屋の称号を貰ってイライラしてるんだけど……。もしくだらない事だったら……。っ！」

「怖い事を言ってくれる凌太さんだが、俺は怖気づかずに要件を語る。」

「お前は何故結羽が俺の黒歴史を知っているか調べて欲しい」

「結羽つつつたらこの前会った女の子か？ んで、お前の黒歴史つてったらあれだよな。サッカーボールの」

「ああそうだ」

「そう言うと凌太はジト目を浮かべていた。」

「帰る」

「急に帰ると言い出す凌太に俺は焦った。」

「どう引き止めたものかと考えてる内に歩き出す凌太。」

「止まってくれ！ そ、そうだ！ ！こ奢るから！」

しかし凌太の足は止まんない。こうなったら！

「ピ〇クル奢るから！」

そう言うたびたつと足が止まった。

「……二本な」

そう言うのと元の場所に座る凌太。計画通り。

「俺、記憶力が良いんだ」

座ると急にそんなことを言ってきた。

「……だな」

「似顔絵とか得意」

「そうだったな」

そのやり取りをした後、凌太は徐におもむろスケッチブックを取り出して、

二つ絵を描き始めた。

そしてその描き終わった絵を俺に見せる。

「上手いっ！」

結羽の絵が死ぬほど似ている。

それに……こつちの絵は……。

「あの時の女の子か？」

ん？ でも……最近どこかで見たような絵だな。

「んじゃ」

そう言うのと立ち上がる凌太。

「ちよつと！ 教えてください！ これになんの意味が!？」

「考えるこのクソリア充」

俺にそう言い放つて店を去って行った。

結局俺が払う事になったけど……これだけじゃわかんねーよ。

どうしろってんだよ。

その時、急にひとつの写真が頭の中に浮かんだ。

『そういやこの頃、結羽は髪も短くてメガネをかけてるんだな。今はコンタクトなのか？』

『あ、そうだね。今はコンタクト。まあ、そこまで悪いつて訳じゃないけどね。視界がぼやけると吐き気がするから』

確かこんな会話をしたような。

そして俺は凌太の置いていった似顔絵と記憶の中の会話を照らし合わせる。

髪が短くて……メガネをかけてる。

「一緒だ……っ!!」

全く同じ容姿だった。

凌太の絵は肩の辺りまで書かれているが、その為、髪の長さが全て書かれているショートヘアの髪。メガネをかけていて、結羽には悪いが暗そうに見える表情。

間違いない。これは——結羽っ!

そうか……そういう事だったのか……。全てが繋がった。

俺の黒歴史を知っている理由も、昔の結羽にどこかであった気がした理由も、そして結羽にいきなり好みの容姿をぶちまけた人物も……。

俺達はあそこで出会ってたんだ。

あの路地裏で。

俺の黒歴史を知っている理由は実際に体験した当事者だったから。昔の結羽にあった気がした理由もそうだ。

そして結羽に『君は多分、メガネは無い方が可愛いと思うよ。うん! それと僕はロングの方が好きだな』とか言ったのは——

「この俺だったのか……っ!?!」

漸く気がついた。

恐らく結羽はずっと知っていたんだろう。

高校生になってから初めて出会い、今の今まで、結羽にとってはその男の子だと言う認識だったのか?

だとしたら一目見て気が付かなかったのは申し訳ないよな。

考えてみれば、顔も変わっていない。それなのに俺は……気がつかなかった。

でも俺は今、気がついた。

ならば俺は伝えるべきだろう。

「っしや! 気合い入れていくか」

俺の友達……。いや、一目惚れした女の子の元へ



## 第87話 俺の強がり

side 優也

俺は走って家に帰ってきた。

家に帰っててくると結羽がテレビを見ながらアイスクャンディを齧っていた。

「む？ 早かったね」

「ああ、色々あつてな」

そう言つて俺は結羽の向かいに座る。

「良いなく。LIFEのメンバーとアポ無しで会えるんでしょ？ 私

も幼馴染だったらなく」

羨ましそうに言う結羽。

「別に……お前も昔会つたことあるだろ」

俺は冷静な口調で結羽が見ていた恋愛ドラマの方に視線を向けながら言つた。

面と向かつて言うのと照れくさくて無理だ。

すると数秒間だけ静寂に包まれた。

結羽をチラツと見ると物凄く驚いた表情で石と化してしまつていた。もちろん比喻だが。

すると結羽は手に持っていたアイスクャンディを落としてしまつた。

「結羽。落とした」

そう伝えると漸く自分がアイスクャンディを落とした事に気がついて「はわわわ」と言いながら片付け始めた。

重症だ。

まさか俺が当てるとは思わなかつたんだろうな。まあ、今までの行動を考えたら当然なんだが。

「ゆ、ゆゆゆ、優也!?! 熱でもあるの!?! 今日寝てて! 看病は私がつー!」

「ちげーよ。なんでそう思った」

「だって、珍しく優也が鋭い事を言ってきたから……。もしかして全

部思い出した？」

俺は静かに頷いた。

そして俺は凌太の絵を取り出した。

「まあ、凌太にこの絵を見せられるまでは気が付かなかったんだけどな」

「……上手い」

結羽もこの絵の上手さに目を点にして驚いている。

この絵の上手さはもはやこの紙に本人が居ると言っても過言ではない。

色が無いが、生きているかのような感覚がある。

「まあ、そんな訳だ」

「ま、まあ、優也にしては良くやったと褒めてやろう」

結羽は気づいてもらえて嬉しいのか、いつもは使わない口調でノリノリになっている。

「それにしても……えへっえへへへへ」

両頬に手を当ててえへえへと笑う結羽。今までに見せたどの笑顔よりも嬉しそうな顔だ。

多分結羽はずっと俺が思い出すのを待っていたんだろう。

「それにしても……すまん！」

俺は膝に手をついて頭を下げた。

すると結羽は驚いて笑うのを辞めて、驚いた表情でこちらを見てきた。

「な、なんで謝るの？」

「まあ、そりや……ずっと俺が気がつくのを待ってくれてたんだろ？」

不思議そうな声色で聞いてくる結羽に理由を説明する。

「まあ、そうだけど謝る事は」

「いや、最低だ。絶対に許されない事をした」

俺は何度も何度も謝る。辞めると言われても俺は謝る事を辞めない。

なぜなら俺の気が済まないからだ。

ここで結羽の言うことを聞いて辞めても俺の気が収まらないだろ

う。

「な、なんでそんなに謝るの？」

今度は俺が謝ってる理由を聞いてきた。

「まあ、それは俺が最低だからだ」

「忘れていた事がですか？ それなら一回会っただけだし、あの頃は自分でも地味な子だったって分かってますから」

そういう事じゃないんだ。

俺だってそれだけだったらそこまで気に病まないさ。許してもらったらもういいとでも考えたさ。

だけど、ダメなんだ。俺は最低だ。

だから俺は謝り続けなければならぬ。

「う、うう……。絆成 優也っ！」

急に結羽は俺のことをフルネームで呼んできた。

その声に合わせて下げていた頭を上げる。

「私はもう怒ってません」

「はい」

「もういいんだよ？ 謝らなくたって」

「だが」

だが、まだ俺は謝り足りなかった。

俺にも俺なりの考えというものがある。

例えば、結羽がもう怒ってないとしても、俺は最低なことをしたんだ。

このまま罵られ、結羽に嫌われてもおかしくない事を……。

だって……俺は――

「一目惚れした女の子の容姿を忘れてしまっていたんだからなあ」

俺は小さく。だけど、結羽に聞こえるような声で言った。

すると結羽は顔を真っ赤に染めてまたもや固まってしまった。

数秒固まるとプルプルと震えだし、何とか声を絞り出す。

「そ、それって……っ！」

結羽は俺とは違って鈍いわげじゃない。俺だったら気が付かなかっただろうが、結羽はすぐに気がついたのだろう。

「そうだ。結羽。俺はお前に一目惚れしたんだ」

俺はその事実を伝えた。

だから俺は最低な男なんだ。

一目惚れした女の子なのに忘れるなんて……。

「最低だよな。勝手に一目惚れしておいて忘れるなんて」

ぼんやりと一目惚れしたことは覚えていた。だが、俺は誰に一目惚れしたのかを忘れてしまっていたんだ。

最低だよな。

だから俺はずっと自分を責め続けていた。

だが、結羽は自分を責めている俺と視線を合わせて、それから俺の頭を撫で始めた。

「全然最低じゃないよ？　むしろ思い出してくれてありがとう。そして、あの時助けてくれてありがとうね？　ずっとこれが言いたかった。やっと言えたよ」

すると結羽は涙を流し始めた。

だが、結羽の表情を見ると直ぐにそれは怒りや悲しみによるものは無いと分かった。

嬉しそうだ。

「ねえ、優也。私から気持ちは伝えたよ？　返事が欲しいな」

返事と言うのは恐らくあれの事だろう。

だが、結羽の潤んだ目や期待した表情が俺の悪戯心に火をつけた。

「返事ってなんの？　ちゃんとやってくれないと分からないな」

多分今の俺はニヤニヤしていることだろう。

「そもそも、返事が必要な質問は一回もされていないしな」

「うう……。優也の意地悪……」

確かに意地悪だったな。

だが、結羽の表情が俺にそうさせたんだ。なんだよあの小動物を彷彿とさせる可愛い顔は。

「じ、じゃあ言うね？」

結羽は意を決したのか、泳がせていた目を俺に合わせて言った。

「私は、優也。絆成　優也の事が大好きです。私と付き合ってください」

そう言われて俺も気が引き締まる。

次の一言はもう既に考えている。

だが、言うのは緊張する。心臓がバクバク鳴り、その音が煩く、鬱陶しいと感じる。

そして俺が言った言葉は――

「俺も……好きだ。俺からも言う。俺と付き合ってくれ」

そう言った瞬間、元々涙を流していた結羽の涙腺は更に緩くなったように更に大粒の涙を流し始めた。

「おいおい。どうしてそんなに泣くんだよ」

「だって、だってえ……っ！ 夢だったから……！ 私、優也とこうなるのは夢だったからっ！」

とても嬉しいことを言ってくれて俺は思わず結羽の事を抱きしめた。

俺は彼女なんて要らないと言った。必要無いと言った。俺の幸せは七海の幸せだと言った。

だが、あれらは全て俺の強がりだったのかもしれない。

――俺は誰よりも人からの愛を欲していたんだ。

今分かったよ。何が一番必要で、何が一番大切なのか。

それは――  
「結羽。お前だったんだな。俺の心を埋めてくれるかもしれない人は」

そして俺は結羽の事をぎゅっと抱きしめた。

抱きしめると、少し力を入れたら折れてしまいそうなほど華奢な体と感じた。

「結羽……」

「は、はい」

「もう二度と離したりしないからな」

「うんっ！」

そして俺達は何時間も抱きしめ合った。

## 第88話 始まりのあの日

side 優也

えー絆成 優也です。

えー、つい先程結羽と付き合う事になりました。なったのですが……。

どういう状況なのでしょう。

ついさつきまで抱きしめ合ってたんだが、急に恥ずかしくなり、互いに離れたのだが、互いに向き合って正座をしながらお茶を飲むというシユールな絵面になっております。

まあ、頬を真っ赤にさせながら両手でコップを持ってお茶を飲む姿は可愛いから良いんだけどな。

このまま俺的には結羽を眺め続けてても良いんだが、話題がないと気まずい。

だから俺は俺は必死に思考を回転させて話題をさがす。

そういや俺は結羽に過去を伝えただけどあの事件以降の結羽の話って聞いたこと無かったよな。

「そーいや結羽はあの後どうしたんだ？」

「あ、あの後って？」

「あの俺達が初めてあったあの時の事」

そう言うのと結羽は頬を更に真っ赤にさせ始めた。

「え、えと……今ではロングヘアだけどあの頃はショートだったでしょ？ そして今はコンタクトレンズに変えてるし」

「ん？ そーうだな」

するとモジモジと人差し指同士を擦り合わせ始めた。

彼氏のひいき目だからだろうか？ いつも可愛いが今は特別に可愛いような気がする。

「ゆ、優也がその方が良いって言ったからだよ？」

「ん？ あくたしかに言ったな」

—※—※—※—回想—※—※—※—

side 結羽

「や、やめてください」

「嬢ちゃん。一人で遊ぶよりももつと楽しいこと教えてやるからよ」

「一緒に来いよ」

グイツと私の腕を掴んで引つ張ろうとする私より一回りも二回りも大きい複数の男性に囲まれて私は怖くて泣いてしまいました。

その時の出来事だった。

リーダーと思われる男性に急に飛んできたボールが当たってその男性は気を失ってしまいました。

残りの男性はリーダーがやられた事で、急に私から手を離して覚えろよとと言う悪役らしい台詞を吐いて逃げていきました。

ボールが飛んできた方を見るとそこには複数の男の子が居ましたが、一人以外は通り過ぎようとしてたように見えました。

そのボールを蹴ったと思われる男の子が近寄ってきました。

「大丈夫か？」

そう言つて男の子は私の前で少し屈んで私の顔色を伺ってきました。

今思えば彼の方が少し背が高いので当然です。

ですが、その頃は少し子供扱いされたみたいでムツとしました。

「なんで怒ってるんだ」

私は無口だったので喋りませんでした。

「そうか……でも女の子は怒ってるより笑つた方が可愛いと思うぞ」

そしたら私の頭をポンポンと軽く撫でてきました。なんか女の子に慣れた感じですよ。

「あと、君は髪が長い方が絶対可愛い！」

親指を立ててきました。何がグッドなのか分かりません。急に訳の分からないことを言い出して……。

でもさっきまで恐怖を感じていたからでしょうか？ 鼓動がなり止みません。

それに彼の事を考えると心が暖かい気持ちになって思わず頬が緩

みそうになります。

服装はイマイチですが、かなり整った顔。これで服装もキチツとキメたらイケメンフェイスに加えて最高のコーディネート。あれ？ちよつと良いかも。

※結羽のひいき目も入ってます。

「んじやーな。氣いつけて帰ろよ」

そう言っつて私の前から去っつていく男の子。

なんか友人に文句を言われているようですが、ここからでは良く聞き取れませんでした。

数日後、私がリビングでぼーつとしながら考え事をしているとお母さんととーまが何やら話し合っつてるようでした。

「ねえ、結羽?」

話し合いが終わっつたかと思うとこっちに話しを振っつてきました。

「何?」

「最近ずつと考え込んでるなと思っつたら急にニヤけて変よ結羽?」

ギクツ

わざとらしく反応してバレてしまします。

「結羽どうしたの?」

「いや、あのね?　なんか最近変なんだよね。ある一人の男の子の事を考えてると胸がポカポカしてきて暖かい気持ちになっつて、自然とニヤけちゃうの……。これっつて何かの病気かな?」

そう聞くとお母さんは少しだけ考え込んだ後、一言言い放つた。

「病気ね」

私はそれを聞いた瞬間怖くなつてきた。

「でもね。それはお医者さんでも治せないの」

それを聞いて更に恐ろしくなつた。

もしかして私、死んじやうのかな?

「だけどそれは悪い病気じやないの。安心して?」

それを聞いて私は安心しました。

——でも、どんな病気なんだろう?



その時はまだ恋というものがどういいうものか知らない私は恋に気が付きませんでした。

—※—※—※—回想 終—※—※—※—  
side 優也

「こんな感じかな？」

結羽は顔を赤く染めながら語ってくれたが、聞いてるこっちまで恥ずかしくなってくるようなエピソードだった。

そんなに前から俺の事を思ってくれたんだと思うと嬉しさと恥ずかしさが両方襲ってきた。

「そうか。 んじゃあこの学校に入ってきたのは俺を追ってなのか？」  
そう聞くと結羽は首を横に振った。

「それは完全に偶然。 元々は違う学校に入ろうと思ってたのへえ。 それじゃなんでこの学校に入ることにしたんだ？」

「それはね……えっと……冬馬に馬鹿にされて……」

何その可愛い理由は。 そんな事だけで落ちるかもしれない伊真高を受験したのか。

「そう言えば試験の時、優也に会ってそこでも助けられたんだよね」「え？ 全然記憶に無いんだが……」

「優也つてもしかしなくても記憶力ってあんまりないよね」  
バレたんだけど。

付き合ってからすぐに彼女に記憶力がない事がバレただけだ。  
「それじゃあ教えてあげるね。 優也がどれだけカッコいい行動をしで

かしたか」

—※—※—※—回想—※—※—※—  
side 結羽

試験当日

ここを落ちたら……考えたくもない。 たぶんとーまにバカにされる……。 そんなことを考えて私はナイーブになってしまっていた。

そんなわけで必ず受からなくてはならない。

御守りに祈っておこう。 そう思っけてポケットを探るけど見つからない。

「御守り……御守り……あれ？ 御守りがない！」

ポケットに居れておいた筈なのに！

どこかに落とした？ 探してたら時間が無くなるし……。  
最悪だった。

寄りにもよって試験当日にお守りを落とすなんて……。

その時の出来事でした。

「あの……これ、あなたのですか？」

後ろから声をかけられ後ろを振り向いたら、私の御守りを差し出して、聞いてきている男性が居た。

雰囲気は変わってました。だけど間違いない。この人は昔助けてくれたあの男の子。

凄い背が伸びてて、頭一個分くらいの差が出来てしまっていた。

つと、見蕩れてしまっていた。

御守りを拾ってくれたんだからお礼を言わないと。

「あ、ありがとうございます」

「今度は落とすなよ？」

受験が終了して、私は玄関から出た。

「うう……自信ない……あんなに啖呵切ったんだから合格しなかったら冬馬にバカにされる」

その時、

「あれ？ 中学生？」

前から声をかけられ、そちらをみると、この高校の生徒と思わしき男達が居た。

なんで今日は受験日なのに在校生がここに居るの？

って、確かに中学生だけど絶対私の年齢より幼いと思ってる。

「ちよつと一緒にゲーセン行かない？」

「ちよつと忙しいので」

「ちよつとだからさあ」

肩を掴まれそうになったその時、後ろからサッカーボールが飛んできて男の顔面に——直撃した。



私はあの人に手を握られてドキツとした。

そして、私はそのまま手を引かれて一緒に走って逃げた。

暫く走り、そこで止まった。

「ここまで来れば大丈夫だ。じゃあな！ お互い、受かれば良いな」

「うん！」

そして、彼は走って行ってしまふ。

すごくドキドキした。

そして私の胸は暫くドキドキしっぱなしだった。

それは走ったことによるものなのかはたまた……それはどつちなのか分からなかった。

—※—※—※—回想 終—※—※—

side 優也

マジかよ！

「え？ 俺は黒歴史を重ねる馬鹿だったのか!? と言うかなんでそれを忘れてた？」

俺が頭を抱えて悶えてると結羽は俺の耳元に近寄って来てこう囁いた。

「でも、私はそんな優也が好きになったんだけどね」

その言葉にドキツとさせられた。

耳が溶けてしまいそうなほど甘い声。その声によって俺は悶えることを忘れてた驚いて顔を上げる。

すると、もう数センチ近づけば唇が当たる場所に結羽が居たため、驚いて後ずさりする。

「ふふっ。優也も可愛い反応するんだね。いつも萌未ちゃんに迫られても素っ気ない態度を取るからそう言うのに興味が無いんじゃないかと思ってた」

何を言ってるんだ。俺だって人並みの性欲位ある。

だけど萌未の場合、昔からずっと妹の様に接してきたから今更そういう目で見れないってだけで。

「でもその反応を見れて安心したよ。次はもつとドキドキさせてあげるね」

結羽はそう言った後、自分の部屋に戻って行った。

## 第89話 相談

side 優也

「結羽。欲しい物とかあるか？」

「ん？ どうしたの？」

「簡単なアンケートです」

実はもうそろそろ結羽の誕生日だ。去年も結羽の家でパーティーをした。今年もやることになるだろう。

その際にプレゼントするものなんだが……。

「欲しい物か……特にないかな？ 欲しい物はもう手に入れたし」

えへへと笑いながらそんな可愛いことを言ってくれる。いや、可愛いんだけど困る……非常に困る。あれだよあれ、人に「何食べたい？」って聞いたら「何でもいい」って言われた時くらい俺は困っているぞ。

「ねえ、なんで急にそんな事を聞いて来たの？」

しまった。勘づかれたかつ！ 俺は昔からこういう隠し事をするのが苦手だ。すぐバレてしまう。

ここは何としても誤魔化そう。

「まあ、七海の誕生日がもうすぐだからお見舞いに持っていこうと思っただけ」

嘘だ。本当は1月8日だからまだまだ誕生日では無いんだが、結羽に言ったことは無いからバレる事は無いだろう。

「そうなの？ うーん……女の子が喜ぶものと言えばぬいぐるみかな？ うん。それがいいと思うよ」

「そうか。ありがとうな」

「ぬいぐるみはどの女の子でも好きだと思うよ」

どの女の子でもか……。確かに結羽の部屋には結構ぬいぐるみがあった記憶がある。結羽も好きなんだろう。

だが、俺はイマイチそこら辺のセンスがないんだよな……。

「で、私ですか？」

「ああ。もう露木ちゃんしか頼める人は居ないんだ！ 頼む！」

俺は今、結羽の言葉を頼りにしながら露木ちゃんにぬいぐるみ選びを手伝ってもらおうと相談していた。

「そうですかそうですか。告白されたのにそれを振り、違う人と付き合ったのにも関わらず振った相手を頼るなんて……馬鹿ですか？」

「ば、馬鹿?! っておい！ 俺は露木ちゃんに俺らが付き合ってるって言ったことは無いんだけど!」

俺が今露木ちゃんに言ったことは結羽がもうすぐ誕生日の事、プレゼントはぬいぐるみにしようと考えてる事。そしてそれを手伝って欲しいという旨。これしか言っていない。

もちろん過去にも露木ちゃんには結羽と付き合った事など言ったことは無いのだ。

「寧ろ隠す気あるんですか？ 馬鹿ですか？ そこまで結羽先輩への思いを語っておきながら付き合っていないとほざき出したら強○魔に襲われたと大声で言うところでしたよ」

「やめて!?! 俺はそんなことやってないからデマを流して俺の好感度下げようとするのやめて!?!」

あと、結羽の耳に入ったら確実に殺される。付き合ってから数日しか経ってないのにそんな噂が広がったら確実にゴミのような目を向けられる。いや、いつであろうともゴミのような目を向けられることには変わらないけど。

「で、先輩は私の失恋の傷口を抉る気ですか？ 悪趣味ですねお姉ちゃんに言っただけですか？」

「色々やバそうな気がするのでやめてください」

神乃さんに俺がそんなことをする鬼畜だと思われてしまったら確実に色々やババい。生徒会長の運命とやらで面白がって俺の愉快な仲間たちに言いふらしてしまったら俺は確実にあいつらからやばい目で見られる。結羽に至っては何するか分からない。

「まあ、私だから大丈夫ですけど彼女さんがいるのに他の女の子とは二人きりで会わない方が良いですよ？ ましてや昔、好意を抱かれていた相手なら押し倒されてもおかしくありません。力技で奪う人も

「少なくともありませんから」

「そうなのか。普通に俺にとっては可愛い後輩って考えだからあんまり気にしてなかったが、露木ちゃんにも告白されたもんな。それに女の子だもんな。」

「わかった。今度から気をつけるわ」

「それで宜しいです」

「うんうんと頷く露木ちゃん。」

「それでは行きましょうか」

「行くってどこに？」

「ん？ プレゼント選びですが」

「え？ 手伝ってくれるのか？」

「純粹に驚いた。あれだけ言ってたから付き合ってくれないかと思っていたんだが。」

「私は一度も断った記憶はありません」

「確かに断られてはいないけどさ。あれだけ言ってたからな。勘違いなら良かった。」

「んじゃ、御教授お願いします」

「そう言っただけ俺らのプレゼント選びが始まった。」

### side 結羽

「もうすぐ誕生日かあ……」

「私は去年の事を思い出す。」

「去年は優也、ハンカチをくれたっけ」

「そのハンカチは机の引き出しに大事に保管している。汚したくないからだ。」

「そして今年もその時期だ。」

「今年は色々あったし優也は私の誕生日の事を忘れてるかもしれないなあ。」

「そう考えながら私は貯金を取り出す。」

「私はアルバイトとかしてはいないからあんまりお金は無いけどコツコツ貯金していたんだよね。そしてこれは自分へのお祝い。ずっと」



と前から欲しいと思っていた服をやつと今日、買いに行くことが出来る。

「ふふっ」

考えただけでも笑みが零れる。

その服を着て優也の前に出たらなんて言うかな？ そんなことを考えてわくわくする。今から服屋に行くのが楽しみすぎる。

そして私はお金を財布に入れて家を出た。

今の時間は何故か優也も居なかったため、お父さんはお仕事、お母さんもお仕事で誰も居ないからちやんと施錠する。

そして数分間歩くと服屋が見えてきた。

こちら辺は確か優也の行きつけの喫茶店があつたな……。最近は休みの日の昼間はよく昼間は喫茶店に行つて「落ちた学力を取り戻してくる」とか言つてたな。

今日も知るかもしれない。と少し喫茶店の中を窓ガラス越しに見るとやはり優也が居た。だけじゃ無い。何故か露木ちゃんまで居る。しかも楽しそうに話して。

私はシヨックだつた。

そして私の頭の中に一つの単語が浮かんだ。それは浮気という単語だつた。

私は悲しくてその場を思わず走り去ってしまった。

## 第90話 ぬいぐるみ

結羽に見られたことを全く知らない優也は露木と共にシヨツピン  
グモールに来ていた。

side 優也

「やっぱりここが一番品揃え良いですね」  
「だな」

俺もよく活用する所だ。主に飯を食いに来てるんだけどな。

しかし、色んなコーナーに別れていて分かりやすい。

その中からぬいぐるみが置いてあるコーナーを目指す。そこから  
現役JKの露木さんを頼ろうじゃないかと。

俺が選んだら大変なことになりそうだな。

それで、着いたんだが本当に色んながあるので俺のセンスに任せ  
なくて良かったと俺は安堵する。

露木ちゃんも最初はあまり乗り気じゃなかったみたいだが今はそ  
んなんでもないようだ。

(な、なんか先輩の彼氏さんと一緒に買い物って……なんだかイケな  
いことをしているような気分)

露木ちゃんはなんか一瞬こつちを見てきたけど何を思っつてこつち  
を見てきたんだろう。

取りあえず俺がでしゃばったらややこしくなりそうだから俺は隣  
で大人しく見学しているとしますかね。

そういやこういうぬいぐるみ七海の部屋にもあったな、懐かしい。  
七海に呼ばれて行くといつもベッドいっぱい置かれたぬいぐるみ  
が出迎えてくれてたっけ。

そういえば実は露木ちゃんに頼む前に如月の奴にも頼んだんだが、  
「私をフッておいて頼み事って凶々しくくないですか？」と言われて断  
られた。実にその通りでございます。

実は結羽と付き合うことになってからみんなに断りに行ったのだ。

学校では星野さんと露木ちゃんを交互に呼び出し、如月にはバイト  
の時に誰もいないのを確認して断った。

あの時は正直言つて心が痛かったけど、露木ちゃんだけは「そんな気がしてました。なのでこれからは友達でどうでしょうか？」と言われ、だいぶ気持ちが悪くなった。

だから露木ちゃんには結構頼みやすかった。如月に1回頼んだのは同じシフトだったからだ。まあ、断られたけど。

「可愛い……。プレゼントとは別に買おうかな」

俺はちよつと離れた位置でぬいぐるみを物色しているから露木ちゃんがハッキリと何言ってるかは分からないがぬいぐるみを物色しながらブツブツと呟いているのは分かる。

と言うか露木ちゃんは何を見てるんだ？ そう思つてそつちに視線を向けると犬のぬいぐるみの前でぶつぶつと呟いていた。かなり真剣に考えてくれてるようで嬉しい。俺は良い後輩を持ったな。

「さて、俺も見てみるか」

そうして見てみると七海と一緒に買い物に行っていた頃を思い出した。

七海も可愛いものとかぬいぐるみが好きだったからよくこういう所に買いに来ていた。

ちよつとこんな感じに俺が少し離れたところでぬいぐるみを見ながら七海を待つつて感じた。

「先輩」

そして俺がぬいぐるみを物色していると急に背後から露木ちゃんに声をかけられた

「どうした？」

「えーつと、こんなのはどうですか？」

そして露木ちゃんは一体のぬいぐるみを渡してきた。そのぬいぐるみは両手いっぱい抱きしめられる程の大きさのハリネズミだった。

確かに可愛い。そう思つて結羽がこのぬいぐるみを抱きしめている姿を想像する。

『ありがとう優也』とそう言いながら笑顔でハリネズミを抱きしめる結羽。可愛すぎる。彼氏の鼻屑目なしに元から可愛い結羽がそんな

仕草したら可愛すぎる。

「良いな」

色んな意味で良い。

「なら決まりですね」

「所でもう片方の手に持つてるのは？」

ハリネズミのぬいぐるみを持ってきた時から露木ちゃんはもう片方の手には犬のぬいぐるみを持っていたのでずっと気になっていたのだ。しかも大事そうに。

「……へ？」

すると今気がついたのか露木ちゃんは驚く。無意識か。

「あ、いや！ 違うんです！ 全くもって可愛いからキープしてた訳ではありません！ 私はぬいぐるみには興味ありませんからっ！」

露木ちゃんは色々と口走ったような気がする。別に「それ買うのか？」とか聞いてないしぬいぐるみが好きかなんて質問をした覚えがない。

「と云うかぬいぐるみは女の子なら誰でも好きなんじゃないのか？」

「ど、どこで聞いたか分かりませんがその情報は完全に間違いですね！ だってこの私は好きじゃありませんからっ！」

物凄い勢いで俺に長ゼリフをぶつけてきた。完全に動揺しているのが丸わかりだ。やっぱり露木ちゃんもぬいぐるみが好きなんだな。

と云うか色々わかってしまった訳だが、俺は悪くないよな。露木ちゃんが勝手に自爆したただけだよな。

「まあ、分かった。分かった。露木ちゃんはそのぬいぐるみが気に入ったんだな」

「だから、違うんですってばー！」

露木ちゃんは抗議の声を上げてくるが、俺は無視して露木ちゃんからぬいぐるみを受け取って会計を済ませる。

一緒に犬のぬいぐるみも買って渡してあげると「ま、まあくれるなら貰っておきます。ですが絶対に私が好きじゃありませんから！」と云っていて素直になれないで可愛いなと俺は思った。

そして俺は露木ちゃんと別れて家に帰ると、

「どういう状況だ」

部屋の隅で丸まって泣いている結羽が居た。

## 第91話 怒る結羽

side 優也

俺が帰ると結羽が部屋の隅で蹲って泣いていた。これ、どう言う状況？

とりあえずヤバそうな雰囲気は伝わってくる。

「どうしたんだ結羽？」

どうしたのか分からない俺は結羽に尋ねてみることにした。

しかし返事が帰ってこない。ずっと泣いている。

「本当にどうし——」

「放つといてよ！」

久しぶりに聞いた結羽の強めの口調に驚き、固まってしまう。少しだけ怒気を含んでいたような気がする。どうしてそんなに怒ってるんだ。そう聞く前に結羽は次の言葉を発した。

「私なんて放つといて露木ちゃんの所に行けばいいじゃない！」

露木ちゃん？　なんでそこで露木ちゃんが出て来るんだ？

「ねえ、優也。確かに私は勉強も出来ないし、優也を困らせてばかりで出来ることといえば料理くらいだし、あんまり役に立ててないけど、私は優也の事が好きだったんだよ！」

なんか俺への愛を語っているのは分かるんだが、なんか話が不穏な方向へ行きそうな気がするの俺だけでは無いはずだ。

「ねえ優也。私のどこがそんなに嫌だった？　言ってくれたら直すから言つてよ！」

そして泣きながら俺の抱きついて俺に投げるように話す。

「わ、私、優也に捨てられたくないよ」

ん、捨てる？

「ちよつと待て！　結羽、なにか勘違いしてないか？」

俺が慌ててそう言うのと結羽は「ふえ？」と涙を流しながら顔をこっちに向けてきた。

「何を勘違いしてるか知らないけど、捨てるってなんの事だ？　俺は一度も結羽を捨てようと思ったこと無いんだが……」

「え？」

俺がそう言うのと結羽は驚きの声を出した。

「だって優也は露木ちゃんの方が好きなんですよ？」

「なんでそうなるんだよ。露木ちゃんは可愛い後輩だけで」

「ほら可愛いって！ やっぱりそうなんじゃない！」

「可愛いの意味違う！」

露木ちゃんはただ後輩として好きなだけであって恋愛感情は無い！

「俺は結羽がこの世で一番好きだと断言する」

俺が堂々と言い放つと結羽は驚いた表情をした後、頬を染めて目を泳がせる。

「じ、じゃああれは何？」

「……あれって？」

「今日の昼間、露木ちゃんと喫茶店でデートしてたでしょ。……羨ましい」

あれ、見られていたのか……困ったな。

でも後半部分は聞き取れなかったが、これだけはハッキリと否定しておかなければならない！

「あれはデートじゃないから！」

あれはデートじゃない。決してやましい気持ちがあつた訳でもないし、俺は真剣だったんだ。まあ、結羽と付き合うようになってから初めての誕生日だし、失敗したくなかったからな。

「じゃあなんであんなに楽しそうにしてたの？」

「え？ 楽しそうに見えたのか？」

「うん」

そうか……真剣なつもりだったが、他人から見るとそんな感じに見えるていたのか。

「で、優也。デートじゃないなら何しに行つてたのさ」

参ったな……。これは誕生日当日に言いたかったんだけどな。結羽に辛い思いはさせたくないし、背に腹はかえられない。

そう思つて俺は手に持っていた紙袋を結羽に差し出す。

「え、何？」

「まあ、受け取ってくれ」

そう言って結羽の手に掴ませると結羽は紙袋の中身を覗き始めた。

「買収なんて効かないよ」

「買収じゃないから！ 良いから中身を見てみろって」

俺がそう言っていると結羽は中から露木ちゃんと選んだぬいぐるみを取り出した。

「ハリネズミのぬいぐるみ？」

「今回の一番の目的の品だ」

結羽は何故かぬいぐるみを見つめて固まってしまった。どうしたんだろうか？

「可愛い……って違います！ やっぱり買収じゃない！ こんな可愛い……じゃなくてこんなぬいぐるみを貰っても全然嬉しい……嬉しいくないです！」

なんか所々本音が漏れているのは突っ込まない方が良いでしょう。

「結羽、そろそろ誕生日だろ？」

「そうですね」

「だから、それ」

「それって？」

あー。最後まで言わなきゃ伝わんないかな……。

「誕生日プレゼントだ。本当は当日に渡したかったんだがな」

そう言っていると結羽はびっくりしたようにこっちを見てきた。

「それを買に行ってたんだ」

「で、でもじゃあなんで露木ちゃんも一緒に居たの？」

「あー。プレゼントのセンスが心配で露木ちゃんを頼った。それだけだ」

「そうだったんだ」

ギョツとぬいぐるみを抱きしめる結羽。体の小ささも相まって子供がぬいぐるみを抱きしめているように見えるのは内緒だ。

「ごめんね？ なんか勘違いしちゃって」

「ああ。んじや誤解も解けたことだし、俺は部屋に戻ろうかな」



そう言つてその場を去ろうとすると結羽に腕を掴まれた。

「そのまま他の女の所に行つたりしないよね？ まさか、あそこまで私を好きだと言つて他の女の所に行つたりしたら」

「行かないから！ 俺の部屋は二階だから行けないし！ あとそれ怖いからやめて！」

完全に目からハイライトが無くなっていた。そして俺の腕を掴む力がいつもより強い。

そして他の女つて言つてる所も怖すぎる。

「まあ、冗談だけどね」

はあ……良かった。結羽が思つてる様なことをするつもりは無いけどいつも通りに戻ってくれて良かった——

「まあ、本当に浮気したら私、どうなるか分からないけどね」

あ、やっぱり戻つてなかったわ。

## 第92話 誕生日準備

side優也

今日は遂に結羽の誕生日だ。その為、誕生日会の準備をしているのだが、

「結羽、お前は手伝わなくて良いんだぞ？」

そう言っても結羽は首を横に振り、「私が手伝いたいだけ」と言う。頑固な奴だ。

そしてそんな様子を見て政博さんは俺に「昔からこうだから好きにやらせてやりな」と言う。扱い慣れてるな。流石父といったところか。

準備している間に家電が鳴った。それを結羽が取りに行くかどうか。やら悠真も来るそうだ。ついでに萌未も。それを聞いて俺はガクツと膝について倒れ込んでしまった。

「暫くアイツらと会ってなくて平和だと思っていたのによ……」

そう。最近アイツらとはクラスが違ってエンカウントをしていない。

学校で会って話す奴は結羽、あつし、そして白井さんくらいなものだ。まあ、入学時の自己紹介をまともに聞いていなかった奴に友達なんて増えるはずがないんだよ。

「結羽、そう言えば最近あつしと白井さんともよく話してるよな。仲良くなったのか？」

「まあ、少し雑談をするくらいだけどね。つみきちちゃんとはよく話すよ……」

ふむ、仲良いのか。なら呼んだ方が良いのか？ とりあえず相手の用事とか聞いてからだな。あいつらなら大歓迎だ。

あと、プレゼント選びを手伝わしてもらったし露木ちゃんも呼んだ方がいいだろうな。その場合セットで神乃さんも着いてくるだろうが気にしないでおこう。

そして冷蔵庫に足りない食材やその他諸々が無いか確認しようとしたところ、

「飲み物が無い」

そう、パーティイするならジュースやお茶があった方がいいだろう。だが無かった。

「ちよつと近くのコンビニに買いに行ってくるわ」

俺はそう言つて家を飛び出した。

コンビニに來ると奴がいた。

「いらつさいやせー……つてなんだゆうや君か」

「なんだつてなんだ。人を残念扱いしやがつて」

そうだった。今日は如月、シフト入つてたんだつたな。面倒なことになつたな。

とりあえず適当に受け答えして早く買つて帰ろう。

如月の奴、俺に告白してからいつそう俺への絡みが凄くなり、バイト中関係無しにボケて來るので俺は常に疲労困憊だ。

「とりあえずこれ」

そう言つて俺は適当に選んだ飲み物をカウンターに置く。

「はいはい。えーつと……計10万円です」

俺は静かに如月にチョップした。

「痛いよお……何もチョップすることは無いでしょ?」

「ツツコミだ」

そう、俺はただツツコミをしたただけだ。ツツコミをするのが面倒くさくてチョップをした訳じゃない。

「んもう。私の扱いが酷いよ。えーと592円です」

「はい」

そして俺は600円で支払う。

「お釣りは要りませんよね?」

「要るわ!」

たったの8円だが、されど8円だ。それと、お釣りだぞ? 要るだろ普通に。

とまあ、鉢合わせてしまつたら暫くこんな感じでボケ続けられるのだ。

だが流石に如月もTPOはわきまえてくれると信じている。他の客が居たら多分やらなかったんだよな？　今は客がいないけど。

「帰りました」

俺はそう言ってコンビニで買った飲み物が大量に入った袋を手にぶら下げながら帰宅する。

すると結羽が一目散に寄ってきて「おかえり」と言って笑顔を見せてからまた持ち場に着く。これは結羽と付き合いだしてから日常と化した光景だ。

結羽は何をしていようと俺が帰るとゲームやら好きなドラマのリアルタイム視聴なんかも放り出して俺の所に走ってきて「おかえり」と言ってから笑顔を見せる。これが非常に癒されるのだ。

つまり何が言いたいのかと言うと、俺の彼女可愛すぎだろ。

「優也君、なんか今のやり取り気になったんだけど結羽とはどういう「ああつとー！　準備しないといけませんね。早くしないとみんな来てしまいます」

そう言って慌ててその場を離れ、電話をかける。

『はい。先輩何ですか？』

「あー。その事だけどき、この前誕生日プレゼントを選んでくれたお札に誕生日会に招待しようと思って——」

プツツ。電話を切られた。どうしてだ？　その後何度かけても電話が繋がることは無かった。

『あーと、優也どうした』

「よ、久しぶりだな」

『ああ、んでどうした？』

「そうだな。んじゃ単刀直入に言う、結羽の誕生日会に来ないか？」

『誕生日会か……まあ別に良いが、つきも連れて行っても良いか？』  
「ん、大丈夫だ」

『オーケーだ。んじゃいつなんだ？』

「今日」

『ちよ、お前よオ、そう言うことは早く言えって！』

「んじや頼んだわ」

『つたくよお』

そして俺は電話を切る。これで俺の仕事は終わったわけだ。

俺はつい先日プレゼントを渡してしまっているからプレゼントは無いが、悠真とかはあるだろうな。あつしと白井さんを除いて。

そして俺も俺で準備を進めようとする事があるとある事に気がついた。

「あれ？俺、結羽の家に住んでる事を言っていないから俺を迎えに行こうとするんじやないのか？」

もしそうだとしたらまずい。悠真達に俺が結羽の家に住んでいることをバレてしまう。

バレると色々面倒くさい事になるのでそれだけは避けたい。どうにか先に出発していた体で何とか乗り切れば。

そう思っ俺は再び家から出た。

## 第93話 結羽の誕生日

side 優也

俺は悠真等にバレないように昔住んでいた家から結羽の家への道を歩いていた。

バレたら確実に面倒なことになるのは目に見えている。

そして俺は結羽の家に向かって歩いていたのだが、後ろから声をかけられた。

「よ、優也」

「あ、ああ、悠真」

そこに居たのは悠真だった、あとあつしや白井さんも。久しぶりの面々だ。

最近はこの面々だったらあつしとしか喋ってなかったから久しぶりに話す。

「そうか、みんな揃って今から結羽の家に行くところだったんだな？」

俺はあんまりボロを出さぬように先を急ぐ。

「なら早く行くとするか」

そうやって歩き出した瞬間、悠真に腕を掴まれた。

「おい待て。俺達はお前に聞きたい事があるんだ」

冷や汗が頬をタラリと伝った。

「なんだ？」

俺は一つ嫌な予感が頭をよぎったけども動揺を見せないために俺はいつもの口調で返す。

「さつき、俺たち三人はお前の家に行った」

「そうか」

その瞬間、俺の嫌な予感は確信へと変わった。

その嫌な予感とは――

「なんでお前の家、売家の看板が置いてあったんだ？」

そう、俺の昔住んでいた家は今や売家だ。そんな看板が置いてあるのを見たら誰だって不思議に思うだろう。

そしてその看板があるのに引越したのではなく今も尚ここに居

るという矛盾。

俺は焦る。

結羽の家に住んでいるということがバレたら絶対にめんどいことになってしまうのは明確だ。それだけは阻止しなくてはならない。

「どういう事だ優也。なぜお前はこっちから向かって行つた」

隠蔽工作です。なんて言えるわけないだろ。

そもそもそんな事を言つたら最終的に俺が結羽の家に住んでいるというのがバレてしまう。

「えーつとだな、ちようど散歩してたんだよ」

「本当か？ 本当は誰かの家に住んでて、それを俺達にバレないようにする隠蔽工作だったんじゃないのか？」

クソツ！ なんでこいつ、こういう時だけ鋭いんだよ！

しかし俺はここで素直にはいそうですと言えるわけがない。

「そんな物語の世界じゃあるまいし、そんな事が現実起こると思うか？ 起こつたとしてもかなり低確率の世界だ。運の悪い俺がそのくじを引くと思うか？」

「だが、普通にありえない話ではない。最近のお前の周りでは色々現実離れた事象が起こっている」

確かに悠真の言う通り、俺の周りでは現実離れたことが起こっている。

これらの流れで誰かの家に住むことになっていたとしてもおかしくないと言う訳か。

「まあ、お前がどうしても言いたくねえつてんならこれ以上聞きはしないけどな」

そう言つて悠真は結羽の家に歩いていく。

「まあ、馬鹿な俺じゃ何の話か分からないんだが、柴野家はどうか？」

「居心地は悪く——はっ!？」

「んじゃ、行くか」

童明寺 あつし。あいつは警戒しておかないとダメだな。

家に着くとインターホンを押す。

「そしたらすぐにドアが開いた」

「みんないらっしやい。おかえりゆ——」

最後まで言い切る前に俺は結羽の口を押さえて家の中に飛び込んだ。

「むぐむぐ」

「結羽、俺がこの家で暮らしていることは内緒で頼む」

するともものすごい勢いでブンブンと頷く結羽。

「……おかえり?」

悠真を見てみると不思議そうにしているだけだった。それに対してあつしは「あちやー」と言っている。

まだ悠真には気づかれていないだけでもマシとしよう。

「お兄ちゃーん」

突然真横からタツクルを食らう。が、それを耐える。

「むー。なんで押し倒されてくれないんですか」

「逆に聞くが、なんで押し倒されてやると思った」

横からタツクルをかましてきたのはみんなご存知萌未さんだ。

どうやら俺が出て行っている間に来たらしい。

「最近のお兄ちゃんは冷たいです。昔みたいに私といいことしましよ  
うよオーっ!」

「昔も今も、お前とそんなことをしたことは無い」

そして俺は暴れる萌未を無理やり引き剥がす。

「まったく……こいつは本当に変わらんな。」

「とりあえず会の支度をするか」

あつしがそう切り出した。

「って言ってもほとんど終わってるんだからする事は特に無いんだけどな。」

「ただどあと少しやるのが残ってるのも確かだ。俺も手伝おうと歩こうとしたその時、腕を誰かに引っ張られる感覚が。」

「って結羽?」

結羽だった。

結羽が俺の腕をがっしりと抱いて「ムー」と言う声を出して何やら



怒っている雰囲気。

「ど、どうしたんだ？」

「……優也は私のだもん。誰にも渡さないもん」

あ、結羽さんジェラシーでしたか。

多分萌未が俺に抱きついてたのに反応したのだろう。

だから俺は結羽の頭にそっと空いてる方の手を置き、優しく撫でる。

「大丈夫だ。俺はどこにも行かないから」

「……うん」

そして俺が結羽を撫でている間に全ての準備が終わったようだ。

『誕生日おめでとう！』

全員で声を合わせて言った。

「ありがとう！」

さっきまでのジェラシーモードとは違い、ニコニコ嬉しそうだ。

「これ、俺からな」

「……また恥ずかしいものじゃないよね？」

恥ずかしいもの……。猫耳が似合ってたし、何つけても似合いそうだよな。

そんな事を考えてると結羽にポカポカと叩かれた。

「ば、バカじゃないの。なに想像してるのよ！ 私は恥ずかしかったのに」

「わ、悪かったから」

なんで結羽にはよく心を読まれるんだ？ そんなに俺ってわかりやすいかな？

そして結羽が悠真に貰ったプレゼントの箱を開けてみると、

「あ、これって」

「ああ、まあ、結羽は料理好きだって言ってたしな。料理の便利道具セットだ」

俺も隣に座っているので覗き見てみると便利な調理道具が沢山入っていた。

たとえば、ゆで卵を簡単に切れるやつだったり、大根おろし機、刺

身などの下に敷かれているつまを簡単に作れる機械などが入っていた。

なんかやけにでかい箱だと思ってたらこんなにいっぱい入ったのか。

「どうした悠真。頭でも打ったか？」

「おうおう優也。喧嘩売ってんなら買うぜ？」

でも本当にどうした悠真。

いつもの悠真だったら、猫耳とか言いそうなところをマジの便利グッズを渡してきただろう。

「あと優也。お前にこれを託す」

そう言っただけで悠真が渡してきたのは猫耳だった。

「……なんだこれは？」

「いやあー俺が渡すとまたまた怒られる気しからないから優也さんに誕生日プレゼントとして渡してもらおうかと」

「残念ながら俺はもう渡してるんだ」

「え？」

「だからこれは返却させてもらおうぜ」

そして俺は猫耳を掴んだ手で悠真の腹を殴る。

「ぐはあ」

「……よし続けよう」

「優也、賢明な判断だ」

「私もそう思います」

「えーっと私は状況が読み込めてないんだけど、多分これで良かったんじゃないかな？」

「み、みんな判断がおかしい……ような気がするよ？」

いや、これで良かったんだ。悠真はのびているがそれで良かったのだ。これで結羽の安全は保証された。

気を取り直してプレゼント贈呈会

「わりい。俺達は今日聞いたんで大したもんを用意出来なかったんだが、これ美味かったから食ってみるといい」

「私たち二人からのプレゼント」

そう言っただけで渡してきたのはお菓子。それも五個ある。

「二人一個当たるとは？」

「そう言えばあつしとはよく話すから会話の流れで冬馬のことと政博さんのことも話してたっけ。」

「ん？ ちょっと待てよ？」

「私、冬馬、お母さん、お父さん……あれ？ 一個多いよ？」

「そうか、じゃあ適当にこの家に住み着いてる第三者にでも与えたいわね。」

「そう言いながら俺のを見てくるあつし。」

「あー。今違和感の理由がわかったわ。こいつ、初めから何もかも分かった状態で接していやがった。」

「ったく……いつからだ？」

「随分前からだな。お前が結羽と共にこの家に入っていくのを見かけた。んで怪しいなと思って次の朝見張ってたらお前と結羽が共にこの家から出てきたんだ。」

「はあ……。じゃあこいつには隠す意味は無かったのか。」

「まあ、お察しの通りだと思うぞ？」

「そして俺はもう渡してしまっているんで俺らからのプレゼントはおしまいだ。」

「私達からはこれ」

「と美樹さんが取り出したのは」

「旅行券!？」

「そう、しかもペアチケット。これで好きな人と遊びに行ってもいいわよ」

「なんか今回は一部変なところがあつたけど特に何も無くて良かった。」

## 第94話 優也を旅行に誘いたい!

side 結羽

土曜日

突然ですが、

「もつと優也とイチヤイチャしたい」

私は自室のベッドに寝転がりながらそんな事を考えていた。

だつて優也、付き合い始めたというのに反応が淡泊だし、優也の方からは一切何もしてこないし、休みの日といえれば一日中バイトしているか喫茶店。全くイチヤイチャする時間が無い。

しかも優也の周りにはいつも可愛い女の子がいっぱいいる。不安になつちやうよね。

だから私は勝負を仕掛けようと思います。

そして私はお父さんとお母さんに貰った旅行券を握りしめる。

この旅行で一氣に優也との距離を詰めてイチヤイチャ、あわよくばキキキ、キス……そしてさらに先へ。

そこまで考えると顔に熱が帯びてくるのを感じた。

「でも、ちよつと心配だなあ。優也つてあまりにも欲が無さすぎると思う」

多分色々な手を尽くしても私が氣を使つてると思われるのが関の山だ。

だったら強引に……。でも私にはそんな勇氣はないし、出来るなら優也から来て欲しいなくなつて。

でも優也はかなりの鈍感男。多分してきてはくれないだろうなあ……。

でも行動に移さなきゃ何も始まらない! 私はそう思つて優也の部屋に向かう。

部屋の扉をノックするとすぐに優也が出てきた。

「ゆ、優也。今何してたの?」

「ん? まあ、普通に漫画読んでたが」

「まんがあああつ!？」

私は驚きすぎて後ろに下がってしまった。

「なんだよ。おかしいか？」

「あ、あの勉強馬鹿でいつも私が見ても理解不能な小説を読んでいたあの優也が!？」

「んだよ、俺だって漫画くらい……って今さりげなく俺の小説読んだのを暴露したよな？　俺貸した覚えはないんだけど……勝手に読んだのか」

「え、えと」

や、ヤバイ。墓穴を掘った。

そう。前に一度私は優也に話題を合わせたくて優也が居ない時間帯に部屋に忍び込み、小説を拝借した事があった。

結果は——『全くわからない』。小難しいにも程がある様な内容だった。

難読漢字のオンパレード、小難しい政治の話、色んなキャラにそれぞれの感情や性格が細かに書かれているところはすごく良かったけどそれよりも難しすぎて私にはよく分からなかった。

そもそも、普段漫画しか読まない私に小説なんて無理だったんだ。

「まあ、怒っている訳じゃないが、貸してほしい時は言ってくれると助かる」

「はい気をつけます」

ってこんな話をしに来たわけじゃないのに！

「漫画読んでるんだったら時間あるよね？」

「いや、時間があるかないかで聞かれたらあるにやあるけど今は漫画が非常に気になるシーンなんだ。盛り上がってきた所なんだ」

「へえ〜どんな？」

興味本位で聞いてみた。さすがに漫画で理解不能なシーンは無いだろう。

「確か、動物と人間が心を通じ合わせて一緒に平和な世界を作ろうと言う話なんだが、」

おー。結構ほのぼのとした話なのかな？　優也が読むのは意外だ

けどこれなら私でも分かりそう。

「突如として現れた巨大ロボットにどんどんと街を破壊されていつて」

「あー。なんか可哀想な話」

「だけどそれは正義の行為で、人間と動物が手を取り合うと世界が滅びるって伝承があつて」

「うんうん……ん？」

「それを共にどうやって乗り越えるかと言う所だつたんだ」

「どういう世界観!？」

「なんで最初ほのぼのとした話なのに段々と殺伐とした話になつて行つてるの？」

「やっぱりなんか優也の物語の好みがよく理解できない。」

「人間と動物が手を取り合うと世界が滅びるって、どうしたらそんなことになるの!？」

「でもしようがないか……ごめんね優也。邪魔しちゃつたみたいでそれじゃあ」

「そう言つて振り返り、自室に戻ろうとすると背後から腕を掴まれた。」

「背後にいる人物なんて一人しか居ない。」

「優也?」

「あー。なんだその。何か用事があつたから来たんじゃないのか?」

「……」

「やっぱり優也には敵わないや。」

「突然だけど今日これ、一緒に行きたいなつて思つて。日付が今日までだから」

「そう言つて私は恐る恐る手の中に握りしめていた旅行券を見せる。」

「これはこの前結羽に美樹さんと政博さんがプレゼントした」

「うん。で、ダメ……かな?」

「いや、ダメじゃないんだが……俺で良いのか?」

「うん! 優也が良い! 寧ろ優也じゃなきゃ嫌!」

「そう言つて優也は私の気迫に押されたのか驚いた顔をしている。」

「そうか。そこまで言われて行かなかったら彼氏失格だわな」

優也の言った彼氏と言う言葉に反応して少し恥ずかしくなる。

多分今の私は顔を真っ赤に染めていることだろう。

「よし、結羽。少し待ってる、今行くから」

突然のお誘いだとはわかってている。だけどそれを承諾してくれたのは優也が優しいということの証明だ。

やっぱり優也を好きになって良かったよ。

私はサッカーボールで助けられた後、また会えたらいいなと言う淡い願望を胸に日々を送っていた。

探した。もしかしたらまた会えるかもって。

学校も知らなかった。あの時、あの人が制服を着ていたら調べる手はあった。

けどもその時は私服だった。だから探せなかった。

私はそのまま落ち込んだ気持ちで入学式に望んだ。入学式の内容も頭に入ってこなかった。

もう二度と会えないかもと、そんな事を考えていたナイーブになりながら登校していた。

けどその時、また会えた。あの運命の十字路で――

## 第95話 メモリー くエピソードオブ結羽く

side 結羽

受験中、私はずっと気にかかっていた。  
つい先程、お守りを落としてしまっただけ探していると”あの人”にまた会えた。

その人の服装はよく見てなかったから分からないけど、多分年齢的に近いし、今日受験だっておかしくない。

けどこの部屋であの人のを見つける事は出来なかった。  
鬱だ。

冬馬に馬鹿にされてここに受験をしたのは良いけどもやっぱり不安だな。

この学校で今後上手くやって行けるか。

だって私の学力は酷いし、ここに受かったのだって奇跡だし、だからと言ってあの人が居るとは限らない。いや、可能性は限りなく低いだろう。

でもこればかりは仕方がない。運命なんだから。

多分受験の時のあれは神様の気まぐれ的なそんな感じのやつなんだろう。

「姉ちゃん！ 腹が減った！」

いつもの様にとーまが家にやって来て私に料理を頼んでくる。いつも通りの光景。

「はいはい。待っててね」

料理中も考えていた。四六時中あの人の事が頭から離れなかった。受験日に会ってしまったことによって余計に頭から離れなくなってしまう。

ここだけの話、お恥ずかしながら注意が散漫になっただけ指を少しだけ切っただけです。

そして次の日、寝坊してしまいました。

たるんでるなあ、そう感じながら慌てて登校する。

でも”あの人”が悪いんです。私の心の中にもいつまでも留まって



……。

そして”あの人”の事を思い出すと笑みが零れる。危ない危ない。他の人に見られたら大変なことになるところだった。

そしてそのまま慌てて走っていると丁度十字路で横から走ってきた人と思いつきりぶつかってしまった。

私とその人は一緒に尻もちをつく。

何この少女漫画的展開。

そう思いながらそのぶつかった人の顔を見る。

「いつ……大丈夫か？」

「は、はい！ 大丈夫です！」

と言うかたつた今大丈夫になりました。

ちよつと痛かったけどその痛みが完全に吹き飛ぶくらいの衝撃。

なんとぶつかったその人は、私の追い求めていた”あの人”だった。

なんとと言う偶然。思わず運命を感じずには居られなかった。

(ゆつくりお話したい)

「この前はありがとうございます」とか「私の事覚えてますか？」とか色々話したいことはある。

だけど、私が出たのはかなり遅い時間。そんなにゆつくりして居る時間もないだろう。

残念だなあ。そう思いながら私達は一緒に走り出した。

私は足は速い方だと思っけどスタミナが無いから途中でスタミナ切れを起こして途中でダウンした。

そんな私に気が付かずに”あの人”は走って行ってしまった。

そんなこんなで結局名前すら聞くことすら出来ずじまい。そんな状況にため息が出る。

折角のチャンスを逃した。私は後悔の念に苛まれた。

あの時時間なくても強引でもいいから名前くらいは聞いておくべきだったかな？

そんなことを考えながら私が一人で公園にて黄昏てると、そこに一

人の人物がやってきた。

(誰だろう?)

そう思つてそちらに視線を向けると、私は人生で一番驚いた。

まさか今朝に続いてまた”あの人”に会えるとは思わなかった。

何かこつちを凝視してる。何かあるのかな?

でもこれはチャンスだ。ここを逃したらもう次はない!

私は”あの人”に駆け寄る。

でも駆け寄つたは言いものの何を話そう。……まずは雑談からにしようかな?

「あ、今朝の人! こんなところで何してたんですか?」

純粹な疑問を投げかけてみる事にした。

「それはこつちの台詞だ」

おつしやる通りで……。普通に突つ込まれてしまった。

「所で自己紹介をしてなかったな……。俺は絆成 優也。伊真舞高校の1年生だ」

するとなんと好都合な事にあの人から名乗ってくれました!

絆成……優也かあ。いい名前だなあ。

……つて! ええつ!

伊真舞高校。私と一緒に。更には、

「わ、私と同じ学年!」

私も今年入学したばかりの1年生。同い年だった事に私は驚いた。

「私は柴野 結羽! 伊真舞高校の1年生です!」

今度はこつちから名乗った。

優也さんと同じ学年、学校だと知って私のテンションは今まで一番! さつきまでの暗い気持ちは一瞬にして吹き飛んだ。

でも私が名乗ると優也さんは急に頭を抱え始めました。どうしてでしょう?!

「大丈夫ですか?」

「あ、ああ! 大丈夫だ。少しボーツとしていただけだ」

それなら良いけど。

「で、話を戻しますが何でこんなところに?」

「たまたま通りかかってな。柴野さんは？」

「ふふふ、結羽で良いですよ。私は……少し色々あって……」

私は下の名前を読んで欲しさに随分と大胆なことをしてしまった。そして聞かれたことについて口籠ってしまった。

だって本人を前にして「あなたに会えないかもしれないかもしれなくて黄昏てました」なんて言えないじゃない恥ずかしい！

「そうか……言いたくないなら言わなくても良いぞ」

なんか気を使わせてしまって罪悪感が……。

でも本当の理由は言えないし……それじゃあここで雰囲気を変えような事を！

「購買の好きなパンが買えなくて……」

必殺、シリアスブレイカー。

「おい！俺の心配はいつたいたいなんだったんだ！」

怒られてしまいました。

けどその怒られている時間も幸せで……えへへ。

「それはそうと、そろそろ家に帰らなくてもいいのか？ 親御さんが心配するぞ」

「分かった！じゃーね」

私は最後に碎けた口調でそう言った。

連絡先はゲット出来なかったけど名前を知れただけでも収穫だよ  
ね。

「明日も朝にあの十字路で会えるといいな」

私はそんなことを一人呟きながら帰った。

## 第96話 可愛いは正義

side 優也

俺は旅行に行く準備を淡々と進めていた。

と言つても簡単なテキストと携帯、財布位の軽いものだ。

そもそもとしてそんなにジャラジャラと持って行かなきゃならぬものは持つてないしな。

俺は自室を見渡す。

しかしどこを見渡しても生活感はあまりねえなと思うような内装だ。

あるのは柴野家の皆さんが用意してくれた勉強机と中央にある四角いテーブル、ベッド位なもので、後は本棚に使いそうだなと思つた場所に本を詰め込んでる。ただそれだけの味気のない部屋だ。

「もつと色々あつた方がいいのか?」

以前にもつと欲を出せと言われたことがある。それつてこういう事なんだろうな。

これが欲を出さなかつた結果である。

金もバイトをしているが、本代と学費位にしか使わないので給料がどンドン溜まっていくばかりだ。

「これは問題かもしれない」

いつその事、今回の旅行でパーツと使っちゃうか?

旅行に行ったら色々とおぼしいものがあるかもしれないからそれもありだな。

よし、

「準備出来たぞー」

言いながらドアを開けると――

「痛っ!」

可愛らしい悲鳴が聞こえてきた。

今この家には俺と結羽しかいない。つまりこの悲鳴の出処は、

「結羽、何やってるんだ?」

ドアの影で額を押えながら蹲る結羽だった。

そして涙目になっている。

「どうしたんだ？」

「ドアに頭をぶつけました」

「なんで!？」

結羽さんよ、どうしてそうなった！ 普通ドアから離れておくでしよ。

しかもこのドア外開きなんだし退けないと当たるだろ。

「……痛い」

上目遣いで頭を擦りながら呟いてくる。

グツ！ 反則すぎるだろそれは！

「これでいいか？」

俺は頭を撫でてやる。

するとその瞬間、元気がいつもより数倍増しの結羽さんが現れた。

「えへへっ、じゃあ行こうか！」

元気を取り戻した結羽さんは俺の手をグイグイと引っ張って家を出る。

ちゃんと戸締りは完璧だったはずなので後は玄関の鍵を閉めて電車に乗るため駅に向かう。

「休日なのに意外と空いてたね」

「俺は人に酔うから満員電車は勘弁だし良かったわ」

そう言えば何気に二人で出かけるのは初めてのよう気がする。

いつも俺達の他には白波さんが居たり悠真も居たな。

「えへへ。二人きり、だね」

照れくさそうに言う結羽。

顔をほんのりと赤く染めて嬉しそうにはにかむ。その仕草を見て俺まで顔が熱くなってきた。

可愛すぎる。その仕草一つ一つが小動物みたいで可愛い。

結羽は彼氏の鼻目なしでも可愛いから余計にそう思ってしまうのかもしれない。

「優也はこっちの方は来たことある？」

「ん？ ああ、父さんに連れられて一回は、でも随分前の事だからあんましよく覚えてないな」

「そうなんだ」

口ぶりから察するに多分結羽は来たことがないのだろう。ワクワクという感情が手に取るように分かる。

俺も楽しみだ。

なんたって今回は俺と結羽、二人きりなんだからな。

二人で向かい合って目的地につくまで景色を眺める。

しかし結構遠くなのだ。つくまでまだまだ時間がかかる。

「そうだ、もうお昼時だし、お弁当食べちゃお？」

「弁当？」

「うん！ じゃーん」

そして結羽が出てきたのは駅で売っていた駅弁と言うやつだろう。

「私、駅弁って食べてみたかったんだよね」

そして二つある駅弁の片方を俺に手渡してくる。

「ちよつと待ってる、何円だっ——」

「ここは奢られておいてよ。いつものお札なんだから」

「お札？」

「結構私に良くしてくれるじゃない？ そのお札」

いや、別に彼氏として当然のことをしているまのだが、確かに買ってくれた相手の気持ちを考えずに金を払おうとするのは良くなかったかもしれない。

「まあ、そう言うことならありがたく頂くな」

「はい！ 頂いちゃって下さい！」

そして結羽と共に「いただきます」と言ってから割り箸を割り、まぐずゴマ塩ご飯を一口。

うん。美味しいな。やはりご飯が一番合うふりかけは俺はごま塩だと思う。あくまで個人の意見だ。

そして唐揚げも一口。

美味しい、さすがだ。冷めても美味いってのは買った弁当の良いところ

ろだよな。

だが俺の一番好きな唐揚げは結羽の唐揚げだ。

結羽の唐揚げはサクツと中ジューシー、普通に金を取れるレベルだった。

更に弁当にしてもその美味さが衰えることは決してない最強の唐揚げ。

俺も偶に唐揚げを作るが、そこまで完璧な唐揚げなんて一生無理だろう。

「美味しいね」

「ああ、美味しい」

結羽は美味しそうに食べる。

頬に米が着いているのがやはり子供っぽいなあと思う。

「結羽」

「ん〜?」

「頬、米ついてるぞ」

「ええっ!」

そして結羽は自分の顔を触って確かめるが、避けて触ってるんじゃないかってくらい見つけれていない。

「ほらっ!」

そして俺は人差し指で結羽の頬から米粒を取り、そのまま食べる。すると結羽の顔は真っ赤に染まり、湯気が出始めた。沸騰している。

「も、もう! 優也ったらあ〜」

頬を真っ赤に染めて膨らましながら怒ってる姿が可笑しくて可愛らしくて全然怖くない。

「ごめんってな? これやるから」

そして卵焼きを一つつかんで差し出す。

「う、うん。あーん」

「あーん」

口の中に卵焼きを入れてやる。

嬉しそうに食べる結羽。やっぱり可愛いなあと思うのだった。

## 第97話 古風の町

side 優也

「着いたあー！」

結羽は目的地に着き、電車から降りると伸びをしながら言った。俺も長い間座っていたので体の凝りが酷く、少し俺も体を伸ばす。移動疲れをしてしまった。ここまで長い間電車に乗るのは久しぶりかもしれない。

ここは昔ながらの景色が残る町、えいや江居谷。

江戸時代の時代劇の中に入ったかのような町並み。

雰囲気も良く、時代劇好きならば必ず一回は来てみた方が良いでしょう……まあ、評価に書いてあった。

俺もこの町の事は名前は聞いていたが、実際着いて見てここまで時代を感じるとは思わなかった。

しかもこれはそれ用にセットされた舞台とかではなく、本物の住宅街なのだ。

この町の服は着物が主流で、まさに江戸時代だ。

だが、一つ残念な点を上げるとするならば、なんでこんな近未来な駅を作ったんだ……という事くらいだろう。

「優也優也！」

呼ばれたのでそっちを見てみると結羽は既に着物を着ていた。

着替えるの早すぎ問題はとりあえず置いておいて、俺は結羽の着物姿を見る。

結羽は小さいから少しブカブカ気味なのだが、袖が手を半分以上隠している。萌え袖だ。

そして何より、似合う!! 可愛すぎる。

赤色で花柄の着物を来ているのだが、それが結羽にベストマッチし、普段から可愛いと言うのに更にそれを引き立てている。

そんな事を考えていると俺が黙ったことを不審に感じたのか首を傾げた。そんな動作も可愛すぎる。

とりあえず言えることは俺の彼女、可愛すぎだろ。



「と言うかその着物、どこから調達してきた」

「あそこにレンタルがあつたから借りてきちやつた。ほら、せつかく  
こういう雰囲気何だから雰囲気を楽しまないとね」

ニコニコしてとても楽しそうな結羽。

その顔を見た事で俺も思わず笑みが零れてしまう。

「ねえねえ優也も着てみない?」

「うーん。それもやぶさかではないが、俺は着てて似合うか? 俺は  
そんなタイプじゃないと思うんだが?」

「そうだね。だけどだからこそ気になる! 行くよ優也!」

「おい、ちよつと待て!」

そんな俺の抗議も結羽は無視し、どんどん着物レンタル店に俺を押し  
していく。

本気でやめろと言うと目をうるうるさせて悲しそうな表情になる  
為強く断ることが出来ず、俺は着させられてしまった。

「はあ……俺がこんなの着て似合うか?」

「似合う! 可愛い!」

「彼女にはカツコイイと言われたんだけどな……はあ……」

俺は着物を着させられ、もう何度目かわからないほどのため息をつ  
いた。

わかつてる。俺には着物なり浴衣なりそういう服が一切似合わな  
いってのはわかっている。

昔七海に「お兄ちゃん普段の服装の方が良いね」と言われたほど  
だ。

直接似合っていないと言われなかったが、七海がこういうことを言  
う時は似合っていないという時だ。

「むう……私という者が居ながら優也、他の女のことを考えてる」

「考えてないって」

確かに女の子の事は考えていたが、妹だからセーフだよな?

「そんなに妹が好き?」

なぜバレた。

だけど俺はこれくらいでは取り乱さない。

「ん？ まあ家族だしな」

「お兄ちゃんって呼んだ方がいい？」

「え？」

結羽が急に突拍子も無い事を言ってきたので俺は驚き変な声を出す。

お兄ちゃん……だと？ そんなので喜ぶのは漫画とか小説とかのキャラくらいなものだろう。

それに彼女にお兄ちゃんと呼ばせるのはなんか気が引ける。

「お兄ちゃん、どうしましたか？」

「グハッ」

俺が脳をフル回転させていると急に結羽が顔をグイッと寄せてきてお兄ちゃんと呼んできた。

未だに結羽のお兄ちゃんという言葉が木霊している。

彼女にお兄ちゃんと呼ばせる背徳感と結羽のお兄ちゃんと呼んだ時の可愛さで震えが止まりません。

「変なお兄ちゃん」

「ゆ、結羽……っ！ そのお兄ちゃんってのやめてくれ」

「フッフ。優也の弱点はっけーん」

「あっ!? お前！」

すると一目散に結羽は笑いながら逃げて行った。

しかし少し走ったところで着物を気慣れてないせいか躓いてころんできました。

ドジだ。俺の彼女はドジっ子属性でも持っているのか？

「はあ……それより疲れたな。早く宿のチェックインを済ませよう」

「はい。そうですね。このチケットによると古風の宿という旅館だそうですね」

古風か。って言うことはその宿の中も昔ながらの見た目になっているんだろうな。

俺は地味に時代劇とか好きだから表には出さないものの、少しテンションが上がっていた。

楽しみだ。

「ここが古風の宿ですね」

「へえ、確かに古風だな」

俺達は地図を頼りに古風の宿まで来た。

入口の上には大きく宿の風古と書いている。

これは昔ながらの表記で読む時は古風の宿と逆から読む。

だからここで間違いないだろう。

入口に大きい窓があるため、中の様子が伺えるが、かなり雰囲気良  
さげだ。ますます楽しみになる。

「ワクワクが止まらないね！」

結羽は俺とは違ってオープンで楽しんでいる。

俺もこれくらいオープンでさらけ出せたら楽なんだろうな。

だけどそれは俺の性格が邪魔をってしまったている。

「んじゃ早速チェックインして荷物置いてからでも観光しに行くか」

「あれ？ 優也、さっきからぶっきらぼうだけど」

「実は楽しんでたり？」

「まあな」

「み、認めた!？」

そんな会話をしながら俺らは受付まで向かった。

## 第98話 婚約指輪

side 優也

「凄かったね〜」

「まああれはかなり凄かったな」

俺達は宿のチェックインを済ませて再び観光に戻った。

宿の中はとても感動すら覚える内装だった。

昔風で囲炉裏があり、部屋には昔ながらの掛け軸とかもめちやくちや掛けてあった。

しかし一つ問題がある。

このペアチケット、二枚で一部屋と言う換算なので俺と結羽は同じ部屋になったという事だ。

まあ付き合ってるんだし別にいいのかもしれないが、初めて結羽と同じ部屋で寝ると言う事から既に緊張してきている。

しかし結羽はと言うとそんな俺の気持ちなんて知るかとばかりに興奮気味で町を見ている。

俺達も着物を着ている為、俺たちまで時代劇の世界に入り込んだみたいだ。

この町だけ時代が過去だもんな。

「ほのおはんじゅうおいひい」

「口に物入れながら喋んな」

結羽は既にエンジョイしており、屋台とか見つけたら速攻で買いに行つて買い食いを繰り返していた。

よくそんなに食えるなど感心していると結羽曰く「デザートは別腹」らしい。

明らかにデザート以外も含まれていたような。

「ん〜。最高の町だね」

「ああ」

饅頭を食い終わった結羽は次は焼き鳥を取り出してベンチに腰掛け食べ始める。

いったいどれだけ食うつもりだよ。

この町の名物は飯だけじゃないんだがさつきから飯ばかりしか廻っていないような気がする。

色々なゲームもあるってのにそれら全部無視して食べ物屋廻ってんだから驚きだ。

しかも俺は一切手を貸していない。全て結羽が平らげているのだ。

「そんなに食って腹壊すなよ」

そう言ってから俺は近くの店に行く。

「おっちゃん。これ一回」

俺が来たのは射的だ。

祭りの定番だが、たまにはこういうのもありだろう。

そして俺は射的の代金を払ってコルク銃を受け取る。

何を撃とうか？

とりあえず適当に入ってきたはいいものの、特にどれ狙うとかは決めていないのだ。

ラインナップを見てみる。

どれもこれも俺が持つていても仕方が無いようなものばかりだ。

「んじゃあ結羽にでもやるかな？」

片目を閉じて慎重に照準を定めて行く。

こういうのは焦らないのが一番だ。

心を穏やかにして落ち着いて慎重に合わせる。

「ここだー！」

俺はコルク銃を撃った。

するとコルクは飛び出し、真っ直ぐに飛んでいく。

その真っ直ぐ飛んで行ったコルクはある景品にクリーンヒット。

綺麗に落ちた。

「いよっしや」

「これ、景品の『指輪』です」

そう言っって店員さんは俺に指輪を箱に入れて手渡してきた。

この指輪はとても綺麗で女の子なら喜んでくれるかもしれない。

結羽には何度かプレゼントしている為どういいうものなら喜ぶか分かっているが、キラキラしたものを渡すと喜ぶ。

俺の彼女はカラスかなにかかな？

「兄ちゃん凄いな。これを一発で落とすなんて」

「はは、どうも」

俺はそれだけ言って結羽の元へ戻る。

結羽は俺が射的をやっている間に焼き鳥を食べ終え、アイスを食べ  
ていた。

この時期にアイスって少し寒くないのかな？ とそう思うが本人  
が楽しそうなのでいいことにする。

「結羽、プレゼントだ」

俺はそう言って指輪を入れ物ごと手渡す。

すると結羽は不思議そうにしながらも箱を受け取る。

「これは？」

「まあ開けてみる」

結羽は俺に許可を貰ってから恐る恐る箱を開けた。

そしてその中身である指輪を見た瞬間、目がキラキラと輝き出  
した。

射的で手に入れたとしても指輪は指輪だ。

指輪を手にして嬉しそうに微笑む。

「ありがとう優也。もしかして婚約指輪？」

ニヤニヤと俺をからかう気満々の様な結羽。

そこら辺はちゃんと考えていなかったな。

というか少しはニヤつきは抑えたらどうなんだ？ 直ぐにからか

いだってバレてしまうぞ？

だがそこが結羽の可愛いところである。

隠し事は苦手だが、可愛いからOKだ。

だが、ここで恥ずかしがってやるのも癪に障るな。

ならやってやろうか。堂々と言ってやろう。

「ああ、婚約指輪だ。結羽は俺のもんだからな。その印だ。絶対に無  
くすなよ」

その瞬間、結羽の顔が火が出そうな位に真っ赤になって俯いてし  
まった。

カウンター成功だ。

俺だからまだポーカーフェイスが出来てるだけで、結羽が婚約指輪とか行ってきたから多分俺も少しは顔が赤くなっているだろう。

「も、もう……優也はいつも恥ずかしい事を言っ……」

「安心しろ。結婚指輪はもつと立派なのをムグムグ」

俺はあとすこしで言い終わるところで口を塞がれてしまった。

多分更に顔から湯気が出ているところを見ると結婚指輪に反応して恥ずかしくなってしまうのだろうか。

「結婚だなんてまだ早いよお」

真っ赤にしてはすかしそうにしながらもえへえへと嬉しそうに笑いを零していた。

でもまあ、喜んで貰えるならとった甲斐があった。

さて、そろそろ結羽も食べ終わるし俺たちは移動を始めるか。

そう思っ俺は飲み物を一口飲み、立ち上がった。

結羽も食べきってからゴミは自分で持ってきた袋に詰めて移動の準備を did した。

そして準備も終わり今から移動する、その時だった。

「やっほー久しぶりだね二人とも」

背後から声をかけられ、肩を叩かれた。

## 第99話 愛し合う二人くすれ違う思考く

side 優也

背後からの声に驚き、弾かれるように振り返った。

そして振り返った俺達は振り返った先を見て驚きを隠せなかった。  
なぜならそこにはご無沙汰の人物が居たからだ。

「し、白波さん!？」

「やつほー元気?」

そこに居たのは着物を来て扇子を持っている白波 真依本人だったのだ。

白波さんはあれだけお金持ちで生徒会長をやったと言う実績もあり、随分と勝ち組生活を送っていたはずだが、今では一般企業の一般社員をやっているから忙しいと思っていたのでまさかこんな所で会うことになるとは思いもしなかった。

しかし似合う。

白波さんはなんと言うか和が似合う人で、扇子が妙に溶け込んでいる。

和服もとてもとても白波さんの為に作られたかのように一体感を醸し出している。

「し、白波さん……おっきい」

隣に居る結羽が自分の胸を触りながら落ち込んでいるのが横目で見える。

そっぴいやその体型を気にしてたっけか。

「しかしまずい展開だよね。白波さんが出てくることによってあのモンスターバディと私の体が比較されてしまう。そうになると私の小さい体では満足いかず、白波さんの体を求めてしまう可能性がある。まさか白波さんも優也の事を? つまり私から優也を奪いに来たって言うことだよな? 私から奪うために自身のモンスターバディを使って『し、白波さん。あ、当たってます……』『ふふっ、当ててるのよ? どう、直接触ってみたくない?』的な展開も有り得るわけで……あれ? 私大ピンチ! あれ? あれ? どう考えても勝ち



目が見つからない。そりや優也も男の子だもんね誘惑されたらコロッと——」

「おい、おーい。結羽さん？」

結羽が急にぼーっとした瞳でぶつぶつと何かを呟き始めたもので心配になって目の前で手をヒラヒラと動かすものの、全く反応がない。

俺、結羽に嫌われるようなことしたかな？

もしそうだとしたら俺、この場で泣き崩れる自信がある。

結羽に嫌われたら俺はもうどうしたらいいんだよ。

そんなことを考えると涙が出そうになった。俺、信じているからな。

「じー」

いつの間にか結羽は俺のことをじつと見ていた。

「なんだ？」

「いえ、私信じてますから」

何をおおおつ!?

急に信じているとだけ告げられ俺は驚く。

何をだよ何を信じてるんだよ。あれか？ 『わかってますよね。私の言うことを聞いてくれなきゃ別れ話も浮かんで来ますよ』とかそういう感じか？ 喜んでパシらせて頂きます！ じゃなくてだな。

これは本当にピンチかもしれない。ここでの俺の一言次第で今後の俺達の付き合いが変わってしまうかもしれない。

「いつまでもついて行きますお嬢様」

これで俺が結羽から離れることは絶対に無いっていう事は伝えることが出来ただろう。

(な、なんだってええっ!? お嬢様って言った？ つまりお嬢様気質である白波さんの事が好きだから従者の口調になっちゃったってこと!? これは本格的に私大ピンチだよ！ 優也が…：…優也が白波さんの所に行っちゃう！ それだけは阻止しなくちゃならない。白波さんとは違って私の方が優也を幸せに出来るとアピールしなくちゃ)

「白波さん」

「な、何？ 顔が怖いよ結羽ちゃん。リラックスリラックス」

「私、負けませんから」

何!?! なんで今怖い顔をしながら結羽は白波さんに宣戦布告をした!?!

しかも若干ガルルと唸ってて可愛い——じゃなくてこれはどういう事だ？

まさか、『優也は私の奴隷なんです……わかってますよね？ 私の所有物に手を出したら』とかそんな感じか!?! って俺は彼氏から奴隷になってるんだが!?!

つまり『この世には優也より良い男なんて山ほど居るんだからあんたは奴隷で十分』という事なのかアアア!?!

もしそうだとしたら恋人だと思っていたのは俺だけだったのか!?!

あの時あんなに喜んでくれたじゃないか!

もう本格的に涙が出そう。

こうなったら奴隷から恋人の座まで戻る為にもアピールしなくてはならない。

この旅行で確実に好感度を爆上げして恋人に戻ってみせる。

「結羽、俺頑張るからな」

「何をおおおつ!?!」

(ま、まさか『結羽、俺さ白波さんの事が好きだから頑張るよ』っ言う意味なの!?! 私と言う恋人が居ながら優也は白波さんに乗り換える気!?! これは本当にやばいよ。優也の好感度をこの旅行で上げなければ白波さんとゴールインしてしまうかもしれない! それだけは確実に阻止しなくてはならない! せっかく優也と付き合えてデートの真っ最中だと言うのにこんなピンチが襲ってくるなんて思いもしなかった。白波さん、私と違って胸も大きくてスタイル良いからかなりの強敵。だけど頑張らないと優也を引き止めないと優也が白波さんに取られ——はっ!?! まさか白波さんがこの町に来た目的ってそれだったり!?! 『結羽、優也は私が頂いていくわ』。怪盗Sくあなたの恋人を頂きますっってやかましい!?)

とりあえず俺が結羽の恋人でありたいと言う意思是伝わっただろ

う。

さつきから顔を赤くして慌てふためいている。そんな姿も可愛い。こんな姿をずっと見ていくためにも頑張らなくてはな。

「うーん……この二人の頭の中の内容が食い違ってる気が」

ボソリと呟いた白波さんだったが俺達二人の耳には入って来なかった。

## 第100話 馴れ初め語り

side 優也

とりあえず何とか俺は結羽の事を本気で愛しているってことを証明しなければならぬ。

このまま結羽に一生奴隷扱いされて、さらに捨てられた日にはもう立ち直れなくなってしまうだろう。

その為にもここで頑張らなくては。

「そ、それよりも！」

俺と結羽が心理戦を繰り広げていると、白波さんはこの空気を感じ取ったみたいで、空気を変える為に話題転換をする。

「お二人はデート？」

「はい！」

白波さんの質問に結羽は秒で答える。

その光景を見て俺はホッとする。デートだと言ってくれるってことは、まだ捨てられないかもしれない。

と言うか今ナチュラルに答えたが白波さんに限らないけど、露木ちゃんとあつし以外、俺達の交際を知らないんじゃないかな？

そんな事を思いながら白波さんを見ると、

「……………」

絶句していた。持っていた扇子を地面に落として白目を剥いていた。

「ってあれ気絶してね？」

あまりの衝撃的事実に白波さんは気を失ってしまった。

「はあ、結羽。あんまり年上の人を驚かせるなよ。ショック死したらどうするんだ」

言い終わった直後、俺にハリセンが落ちてきた。

若干痛い。

「あたしや年寄りかい！」

久しぶりに白波さんが突っ込んだな。

でも今の白波さんは本当にショック死しかねないくらいに驚いて

いたぞ。

「それにしても驚いたよ。まさか二人が知らないうちに付き合っていたなんて」

「はい。まさか私も本当に優也と付き合えるなんて夢にも思いませんでした。今でも夢のようで……えへへ……え、へへ」

最初はえへへと嬉しそうに笑うも、だんだんと元気が無くなっていく結羽。

数秒前まで嬉しそだったのに急に落ち込むなんて心配になるくらいに速度だ。

今、結羽の心の中で何があったんだろうか？

「白波さんと仲良さげです。やっぱり優也は胸の大きい人が良いんですか。そうですか。やっぱりそっちに気持ち傾いちゃうんですね。そうなんです。でも私、信じていますから。優也が私のような体型に目覚めることを」

なんか結羽からとても圧を感じる。

何やら負のオーラを纏っている。そしてなんか見える。結羽の後ろに黒いモヤモヤが浮かび上がってるのが見えるよ！

結羽さん怖い。俺、なんかした？ 睨まれるようなこと何かした？

「うう、眩しいわ。これがカッパルの輝きなのね!!」

いや、一切の光ありませんからね!! 俺に見えるのは一寸先も見えない闇一色ですから。

しかし以前にも結羽が負のオーラを出すことはあったけど、ここまでの威圧感は初めてかもしれない。

お、押しつぶされそうだ。

俺が結羽の圧に押し潰されそうになっている横で白波さんはケラケラと……。能天気でありたい人生だった。

俺達はとりあえず適当に町をぶらぶらして観光することになった。

まあ、デートになって欲しかったものの、隣に白波さんが居るのでこれはデートとは呼べないだろう。

そして今横並びに歩いてるんだが、左に結羽、右に白波さんと言う

ポジションな為、結羽からのもう少し離れろやとでも言いたげな視線がとても刺さる。

やめろ、その試験は俺に効く。

「それにしてもあの二人がねえ。どっちから告白したの?」

「はい。結羽からですかね。以前、白波さんの別荘に大人数で泊まりに行つたじゃないですか。その終わりがけに」

すると本日二回目の絶句モードに入る白波さん。

そりや驚きだろうな。まさかあの時だなんて思つてもみなかっただろうな。

「どんな言葉で彼をオトしたのかしら?」

「えーつと……普通に優也が好きつて……でも酷いんですよ!? 優也つてばまたlikeで捉えたんですよ!」

「ごめんね!? 鈍くてごめんね!」

でもでもさ? 急に好きつて言われても直ぐに脳の処理が追いつくわけではないでしょう。

ならlikeで捉えても仕方が——

「ギルティ!」

俺に白波裁判長から有罪が言い渡された。

それを聞いて結羽も「私もそう思うよ」と言いたげに何回も首を縦に振る。

「でもさ、それならどうやって気づかせたの?」

「え、えーつと……そのお」

モジモジとして言い淀む結羽。

その姿を見て白波さんは「あらまあ」とニヤニヤして楽しんでいる様子

今でも結羽が告白してくれた時のことは鮮明に覚えている。

バルコニーで告白されて、俺を気づかせるために、

「確かキスしてきたよな。頬に軽く」

俺が言うつと結羽の顔は耳まで真っ赤になり、顔を手で覆つて隠してしまつた。

「へえ、結羽ちゃんだいたーん。その後……したの?」

「何をですか……。何もしてませんよ。第一、その時すぐには答え出せませんでしたから」

俺がそう答えるとバチイイツ。さつきよりも強めにハリセンで頭を叩かれてしまった。

「あなたって人は……」

本気で呆れている様子。

だけどころかということって軽々しく決めていいものでは無いと思う。しっかりと考えを纏めてからだなあ。

「でもその後、露木ちゃんに告白されて嬉しそうだったよね」

「嬉しそうになんてしてないわ！　ってなんでお前がその事を知ってる！」

「ギクツ」

確かあの時、結羽と入れ替わりに露木ちゃんが来たはずだから知らないはずだ。

なのに知っていたという事は……。

「お前、見てた……って逃げんな！」

俺は逃げるように走り去った結羽を追いかけた。

その光景は傍から見たら、

「リア充爆発しろ」

普段温厚な白波さんのブラックな部分が出た珍しい瞬間だった。

## 第101話 思いを繋ぐ景色く結羽く

優也は逃げる結羽を捕まえて結羽が優也に告白した後何をしていたのかを聞いた。

side 結羽

告白しちやっただ告白しちやっただ告白しちやっただっ!!

わ、私ちゃんと喋れてたよね!? テンパったりしてないよね!?

考えれば考えるほど不安になっていくが、胸は不安とは違い妙な満足感で満たれていた。

今まで告白出来なかったが、やっと告白出来たからだろう。まだ返事も貰ってないのにこんなにもドキドキしているのに満足させていた。

「優也にOKを貰った訳でも無いのにこんな気持ち、おかしいよね?」  
手鏡を取り出す。

そこに映し出されていたのは顔を上気させてニコニコしている私の顔だった。

「告白しただけなのに……もしかしたら振られるかもしれないのに」  
心が充実してしまっている。

優也の驚いた表情、可愛かったなく。いきなりキスしちやっただけ引かれてないかな?

でもキス、ほっぺただけでキスしちやっただよね? えへへ。

「後は優也が私の事をどう思っているかだけ……」

多分普段の優也を見て、悪い風には思われてはいないと思うんだけど……。

ちよつと心配。優也の周りには星野さん、如月さん、露木ちゃん等と可愛い女の子がいっぱい。

星野さんは清楚系で優也の好みに合いそうだし、如月さんはバイト仲間ってだけだけど妙に仲良いし、露木ちゃんは後輩なのにしっかりしてるって言うか、私より大人っぽいし、可愛いし……。

あれ? これって結構競争率高いよね?

「心配だなあ」



少し考えてみて不安になってしまった。やっぱりあの場で答えを聞いておくべきだったと今更になって後悔してくる。

その時、視界の端で露木ちゃんが優也の居るバルコニーに入っているのが見えた。

それが見えると私は物凄い焦燥感に駆られた。もしかしたら露木ちゃんが優也に告白するかもしれない。

露木ちゃんは可愛いし、優也の最近のお気に入りの子。告白されたら断らないかもしれない。

そう思った時には既に隠れて露木ちゃんと優也が話しているのを見ている。

「結羽先輩に告白されたんですね」

見られていた!!

もしかして私がした行動全部見られていたんじゃない!? とても恥ずかしくて思わず顔を手で隠してしまう。

「ちなみに返事はどうするんですか?」

ドキツとした。こんな会話を聞いてしまっている事に罪悪感を覚えてるものの、聞きたくてドキドキが止まらない。

ゴクリと生唾を飲む。

優也の答えをこうやって盗み聞いて、自分だけが満足しようとして、卑怯者だよ。

やっぱり振られるのが怖いよ……。特に面と向かって言われるのは……。

だけど優也の回答は、

「まださっぱりだ」

どっち着かずの回答だった。

でも正直安心してしまっている私が居る。

ここで「断ろうかなって」とか言われたら泣き崩れる自信があった。だけど回答は実に優也らしいもので、何も回答が無い方が安心出来た。

でもそれくらい会話なら良いかなと思って自室に帰ろうとしたその時だった。

「なら私にもチャンスがあるって事ですね」

その言葉は鮮明に私の耳まで届いてきた。

そして私の自室に向いていた足が止まる。今、とてつもなく嫌な予感がした。

その為、私は元のポジションへと戻った。そこで聞こえてきたのは、

「私が素っ気ない態度を取ってもちゃんと私と向き合ってくれるところ。皆が楽しそうにしてる時の優しい顔。そして、ピンチになったら助けてくれる所はヒーローみたいです。私にとってはあなたはヒーローなんです。そんなあなたが好きです」

告白だった。

嫌な予感がした事が現実の物となった。

優也はどうにも露木ちゃんが可愛い後輩で可愛くて仕方が無いみたいだけど告白されたらそれが恋愛感情へと変化しないとも限らない。

私の目には自然と涙が溜まって来ていた。

「私は先輩の事が好きです」

繰り返した。露木ちゃんの熱心な告白。

優也は結構押しに弱い所がある。だからあれ程熱心にされたら幾ら唐変木とうへんぼくな優也でもコロツといっちゃうかも……。

「な、なんでなんだ？」

優也は理由を聞いた。だけど私にはその理由が大体想像出来てしまっていた。

だって私もそれでもっと好きになっちゃったんだから。

「最初は嫌いでした。ですが、助けられてからはカツコイイって思うようになっちゃってしまっただけ」

えへへと笑う露木ちゃん。

やっぱり同じだった。露木ちゃんも女の子だった。あんなにカツコイイ所を見せられて惚れるなって言う方が無理がある。

そこで優也は口を開いた。

「お前さあ……」

「ん？」

「チヨロくね？」

あ、優也のいつもの悪い癖だ。

ただチヨロいんじやなくて女の子を誑たぶらかす優也が悪いんだもん。私達は別に間違っていないもん！

「女の子は皆私みたいに助けられたらトキメクものなんです！」

そうだそうだ！ と心の中で同調する。

と言うかトキメかない女の子なんて認めないよ！ うん！

「じっくり考えてください」

そう言つて露木ちゃんも私と同じく返事を貰わないで去つて行つた。

一日に二人も告白してくるなんて優也はモテモテだなあ。

つてなんか露木ちゃんに告白された時だけなんか嬉しそうに頬を緩めていた気が……。

これは油断出来ない。全力アピールしないと。

「とまあ、こんな感じ？」

「……死にたい。俺、もう死んでいいかな？」

「死ぬ時は一緒だよ？」

「こんな時にそんな怖いこと言わんでいい！」

## 第102話 距離感

side 優也

「んー。おいひっ」

俺達はあの夜の事を聞いた後、更に歩いて観光を進めていた。

と言っても殆どは食べてばかりなのだが、結羽はずっと食べている為、そんなに食って腹壊さないか心配で堪らない。

現在進行形で結羽が食べているのはかき氷。

今の季節は秋。昼間とはいえ、少し風がスースーする季節なのでそんな物を食ってて寒くないのかなと少し心配になる。

「しかし、結羽ちゃんはよく食べるねえ。どうしたの?」

「何がですか?」

「だって結羽ちゃんやけ食いじゃないの?」

ビクツ。一瞬だけピタッと食べるのが止まり、その後一気にバクバクとかき氷を食べてしまった。

かき氷をかき込んだ事がある人は分かるだろうけど、かき氷をそんなに一気に食べたら当然頭が痛くなる。実際にかき込んだ後、頭を抑えてる人が目の前に居る。

仕方ねえなど、俺は手に持ったキンキンに冷えた缶ジュースを結羽の額に軽く当てた。

すると、結羽は直ぐに頭の痛みが治った様でこっちを見てきた。一瞬で治った事が不思議だったんだろう。まあ、これは豆知識なんだが、

「かき氷等の冷たい物を食べて頭痛がしてくるのは脳が冷たさを痛みと誤認しているからなんだよ。そこで額に冷たい物を当てることでその誤認を正しく認識させる事が出来る。だから治るんだ」

これは本当に一気に楽になるから頭が冷たさで痛くなつた時はやってみる事をオススメする。

それから俺は手に持った缶ジュースを結羽に手渡した。

少し喉乾いからジュースでも買ってこようかなと一時離れ、最寄りの自販機から帰ってきたら結羽は既にかき氷を食べていた。

シロップが赤色なのを見るとあれはストロベリーと言った所だろう。近くにかき氷屋があつたのが見えた。多分あそこで買ったんだな。

「優也君ってそう言う豆知識多いよね」

「あ、私も思つてました」

以前、テレビで見ただけなんだが役に立つて良かった。

ちなみに俺の知識は昔見たテレビから来てる事が多い。最近はニュースばかり見てるからそう言うのは入つて来ないが、バライティー番組なんかでよくそう言うのをやつてるから、そう言う知識を得たいならバライティーを見ることをオススメする。

本とか読んでもそう言うのは得られる。だから雑学本とか普段はあんまり好まない人でも読んでみると意外と面白かったりするかもしれない。

「でもありがとう。お陰で痛みが一瞬で無くなったよ!」

「ん? ああ」

「まあ、優也君の豆知識はそこまでで、結羽ちゃん。何か悩みがあるの? 優也君が求めてくれないとか?」

その瞬間、辺りが凍りついたような気がした。心做しか寒さまで感じる。

「ありや、凶星?」

「ち、ちちち、違うんです! 優也はいつも私に良くしてくれますし、この前は優也がテレビを見てる時にさり気なく優也の膝に座ったら、何も言わずに優しく撫でてくれました!」

「それだけ?」

「あうう」

どうやら結羽は弁明をしようとしているらしいが、すればするほどドツボにはまつて行く。

と言うか求めるってなんだ? 俺自身そう言うのに疎いから俺なりに結羽を愛でてみたんだが、ダメだったかな?

「えつとですね? 優也にそういう事をして貰えるのは嬉しいです。嬉しいんですがもう物足りないって言うか……」

「もしかして……キス？」

「……っっっ！」

顔を真っ赤にして俯く結羽。白波さんはそれを皇帝と受け取ったのか俺の方に向き直ってビシッと指を指してきた。

「キスくらいちやんとしてあげないとダメでしょ！」

「え、でも俺一人の意見だけだ……無理矢理するのは違うと思うし」「なあに女々しいこと言ってるのよ。女の子って無理矢理される事に興奮したりするのよ」

え？ そうなの!?

でも初めての恋人だし、傷つけたくないと思って撫でるくらいしかしてこなかったんだが……もうちよつと攻めた方がいいのか？

でもなあ……。

そんな感じで悩んでいると白波さんはしびれを切らした見たいで、耳もとでこんなことを言ってきた。

「今日の夜、押し倒して強引に奪っちゃいませう？」

ドキツとした。

結羽を押し倒してキス？ それを考えると顔が上気していくのが分かった。顔が熱い。

そんな俺の姿を見てか、白波さんはニヤニヤし始めた。なので顔を見られるのが恥ずかしくなった俺は缶ジュースを開けて飲むふりをして顔を隠す。

「優也君が恥ずかしがるのって珍しいよねえ〜」

俺とした事が少し取り乱してしまった。だけど俺達は俺達のペー  
スでいいんだよ。

結羽がまだ心の準備が出来てないって言うなら何もしないし、したいなら俺もしたいけどさ。

あと、付き合い始める前からあーんとか普通にやっていたから距離感を掴むのが難しいってのもあるな。

俺と結羽は昔一度あっただけで昔からの幼馴染って訳じゃないけど幼馴染同士で付き合った人達の気持ちが少し分かったような気がする。

って言うか付き合うって言ったってどうイチャイチャするのが正解なのかが分からない。

だからとりあえず事ある事に撫でてみたんだが、ダメだったか。

「私は優也に撫でられると幸せな気分になれるので今ので満足……して、ます」

どんどん声が小さくなっていく結羽。

「優也君!!」

「どうしたらいいんだ!?!」

第103話 羞恥よりも独占欲が勝ってしまうようです

side 優也

結局あの後、何事も無く夕方になったので俺達は解散。俺と結羽は旅館に戻る。

旅館に戻ると結羽は部屋の中央に置かれているテーブルの上の煎餅を食べながらテレビを見始めた。

何やら結羽は気にしていない様子だが俺はさっきの事をまだ引き摺っていた。

俺は恋愛初心者。だから距離感を掴むのも難しいし、だいたい結羽のしたい事を察せるようになったがそれでもまだ分からないことは多々ある。

「はあ……どうしたもんかねえ」

困ったらとりあえず頭を撫でるんだが、それだけじゃ最近は何も足りなさそう。

かと言ってキスするのはな……。結羽がまだしたくないって思ってた時の事を考えると少し臆病になってしまう。

その時だった。

プルプルプルル。携帯の着信音が鳴り響いた。番号を見ると直ぐに誰か分かったので少しため息をついてから着信ボタンを押す。

「あー。ただいまこの電話番号は――」

『お兄ちゃんっ!!!』

キーン。耳がぶっ壊れるのではないかと思うほどの大きな声が携帯から聞こえてきた。少し耳鳴りがして耳が痛いのだるいなあと思いつながりながら電話の方へ意識を向ける。

まあ、お兄ちゃんって呼んできたところから察せると思うが相手は萌未だ。何やら焦った様子で話しかけて来ている。

「どうしたんだよ……」

『お、お兄ちゃんの家が……家が……っ！ 売家になってます！』



情報伝達が遅いなあ。今の世の中って情報化社会じゃなかったっけ？ 萌未が乗り遅れてんぞ。

ってか今頃なのか？ 俺の家が売家になったのは結構前だ。

『まさかお兄ちゃん……転校を？』

萌未の涙ぐんだ声。受話器越しでも分かる萌未の悲しそうな声。恐らく本当に泣いているのだろう。

あいつ、受験勉強で縛られている間もかなりの頻度で俺に会いたいと泣いていたらしい。だが、俺にあつてしまうと歯止めが効かなくなってしまうのでそれは酒田さんが止めてくれたらしい。ナイス酒田さん。

だが、このままにしておく訳にもいかないだろう。どういう経緯で今頃知ったのかは知らないがあいつの事だ。自分も転校するとか言い出しかねない。

「あー。まあ、別の家に移り住んだってだけで市内からは出てねえよ」

『ホント!? 本当に居るの!?!』

「ああ、居る。居るからそんなに声を荒らげて確認せんでいい」

耳が痛いから。その声、凄い耳に響くからちよつと落ち着いてくれると助かるな!?!

すると電話越しに安堵したようなため息が聞こえて来たので落ち着いたんだなと俺も鼓膜が破裂せずに済むと思つて安心する。

「んで？ それだけか？」

『はい！ 心配になつてしまつて……ダメですか？』

「いや、別にダメつてことは無いが」

『ならいいですよ！』

何がいいのか知らんが萌未が安心してくれたようでよかった。

いつも結構雑に扱っているが俺にとつては大切な従妹だ。出来るだけ不安は無くしてあげたいし、相談事や困つたことがあつたらどんなと聞いてあげたいと思つている。

だからそういう不安を抱いての電話は実は大歓迎だったりする。

『お兄ちゃんは何だかんだ言つて優しいですよ。その優しさに免じて私が彼女居ないお兄ちゃんの彼女になつてあげてもいいですよ？』

「……………」

そういえば萌未には俺と結羽が付き合った事を言っていなかったわけ。って事は萌未の中では今でも俺は年齢Ⅱ彼女居ない歴ってことになっている訳か。だからそんな俺の為に彼女になるって言ったのか。なんて優しいんだ。だが、俺には既に彼女が居るからな。

隠すか隠さないか……どうしたもんかねえ。そう思いながら上を向くとそこには顔があった。紛れもない俺の彼女の顔だ。

若干頬を膨らませて不機嫌な様子だ。しかもまさか上から覗き込んでくるとは思わなかった。

「……優也。代わって」

「え?」

「代わって」

どんと低いトーンになつて行く結羽に俺は恐怖し、光の速さで手に持っていた携帯を渡した。偶に怖いんだよな……。多分あの様子だと相手が誰だか分かっているようだが、結羽は萌未と話して何する気なんだ?

携帯を受け取ると結羽は耳に当てながら俺に話し声が聞こえない所まで歩いて行った。もしかして俺に聞かれない話でもあんのかな? なら仕方が無い。適当に本でも出して話終わるまで待つてようかな。

side 結羽

「どうも。今代わらせて頂いた優也の彼女の柴野 結羽です」

『あ、結羽さんですか……って彼女!』

私は優也から携帯を受け取るとまず牽制の一言を放った。萌未ちゃんが優也の事を兄や従兄として見てるんじゃないかと一人の男として見ている事は一目見れば分かる。ここは彼女アピールをしておかないといつ私の優也が盗まれるか分かったものじゃない。

「そうだよー。私は優也の彼女。そう、彼女。女の人って意味じゃなく恋人的な意味の彼女だよ?」

私は彼女と言う言葉を強調する為にあえて何度も繰り返す彼女と

言う言葉を発する。

普段は恥ずかしいはずなのに今はスラスラと言葉が出てくる。多分羞恥より独占欲の方が勝ってるんだろう。

私、萌未ちゃんと優也が会話をしているって事が話の流れから分かって嫉妬しちゃってたな。それから盗み聞きしてたら何気に萌未ちゃん、優也に迫ってたし。これはもう許せないよね。

「んで、そんな私の彼氏に何か用？」

『い、いえ……』

「そうなの？ それじゃ私の優也に代わるからね」

満足した。これだけ釘を刺せば何も言えないでしょう。それといつも恥ずかしくて言えなかった分を言えたからモヤモヤしてたのがだいぶ晴らせた。

そんな感じで私はウキウキ気分で優也に携帯を返した。

side 優也

「あー。代わったぞ」

『お兄ちゃん。お幸せにね？』

若干涙ぐんで震えた声で祝ってくる萌未。多分結羽が何か言ったんだろう。その声は若干恐怖に染まっている様な気がする。本当に何言ったんだよ。

「まあ、結羽に何言われたか知らんがあんまり思い詰めんようにな」

『思い詰めもしますよ……だって大好きなお兄ちゃんと結羽さんが

……』

「え？ なんだって？」

『何でもありません！』

なんなんだ？ 本当に。

しかもそのまま切りやがったし。本当に何がしたかったんだ？

## 第104話 諦められない

side 優也

萌未からの電話の後、暫くゆつくりしていると夕食が届けられた。夕食は各部屋に届けられる形式らしい。

結構良い旅館なので結構美味しそうだ。ここは結構海に近い方なので海鮮ものが多いイメージ。

中でもホタテの刺身がプリプリしていて美味そうだ。俺はホタテが好きだからな。ホタテのバター醤油焼きとか凄く好きだ。最近あまり食べれてないけどな。

あとは蒸し蟹の足だったり、ホタテだけではなく色々な種類の刺身。他にも様々な料理が並んであるが、どれもこれも美味しそうだった。

「当たりの旅館だね」

「ああ、そうだな」

俺と結羽は同時に頂きますと手を合わせてから箸を手に取り、まず最初に味噌汁の汁を啜る。

俺は驚いた。美味しい、すごく美味しいのだ。疲れた体を労わるように濃い目の味付けなのだが、凄く海鮮の出汁等が効いてて凄く美味しい。

次に醤油皿に付属していた醤油を出し、その端に同じく付属していたわさびを出す。

そして箸で少しわさびを刺身に乗せると醤油を少し付けて口に運んだ。

うん、やっぱり美味しい。近くに海があるだけあって新鮮だ。こんなに美味しい刺身は少し海から離れてる伊真舞ではここまで美味しい刺身はそうそう食べられないだろう。

「美味しい〜」

結羽は俺とテーブルを挟んだ席に座っており、そこで俺と同じ飯を食って頬を緩ませていた。

美味しいものを食べている時は本当に幸せそうに食べるから見るだけでも癒されるんだよな。

「ん？ どうかしたの？」

「いや、何でもない」

じっと見ていると見ていることがバレたので俺は慌てて目を逸らして照れ隠しに飯を食べる。

まさか馬鹿正直に飯を食べている結羽に見蕩れていたって言う訳にもいかない。

それから数十分後、飯を食い終わって少しゆっくりしていると急に結羽が話をふってきた。

「そういえば優也つてき、最近急に定期テストのランキングから消えたよね。その代わり他の能力がかなり上がってるみたいだけど」

「……」

まあ、そりゃあここまでガッツリと変わっていたら気が付かれるよな。

実は俺にもこれの原因は分かっちゃいない。だけど俺が考えるにこれは心理的な問題なのだろう。

愛する者をもう二度と失いたくない。その心が俺に勇気を与え、運動能力を向上させているんだろう。

それと引き換えに何故か勉強のレベルが中学時代に戻ってしまったている。

何とか勉強はしているが、最近はボーツとして全然授業内容が頭に入ってきていない。

「これじゃあダメだよな」

「ん？」

「結羽、お前は俺の前から居なくなんないでくれよ」

その俺の一言で部屋は暗い雰囲気に含まれてしまう。

多分普通のカップル同士で「ずっと一緒に居ようね」的な言い方だったらバカツプルのな雰囲気になるんだろうけども、俺の言葉だから重みが増したのだろう。

過去に二回も大切な人を失った。一人は植物人間、もう一人はこの世から旅立った。

「はは、悪い。忘れてくれ」

重苦しい雰囲気は苦手なので俺はすぐに笑って直前の言葉を撤回する。

だけどその雰囲気は少し残ってしまったようで結羽の表情は沈んでいる。

「ねえ優也」

「なんだ？」

「私は優也と離れたくない。だから私はあなたから離れないよ。……優也は？」

俺はすぐに返答出来なかった。

なぜなら俺は人間って物は脆い存在だって事を身をもって知っていたからだ。だからそんなに軽々しく言えなかったのだ。

だけど、俺の気持ちを言えば

「俺も離れたくねえ。だから俺は結羽から離れねえ」

「うん。それならいい」

結羽はその俺の答えに満足したよう満面の笑みを浮かべた。

絶対とは言い切れない。だが、この言葉を絶対にするかしないかは俺の行動次第だ。

「……でも本当はそれはしたくないんじゃないかな？」

「どういう事だよ」

「だって、あなたの心には常に七海ちゃんが居る」

結羽は単調にそう言うと言つ直ぐと俺の目を見てきた。

俺が結羽から離れたいと思ってる？ いったいどういうことだよ。

俺は本気で離れたくないと思ってるつてのによ。

しかもそれと七海、何が関係あるんだ。

「優也。本当は都会に出て医学を学びたいんでしょ？」

「違う！ 俺は結羽から離れるくらいだったら、んな所行かなくても良い！」

「違わないよ。優也にとって一番大事な人は妹の七海ちゃんだもんね」

そう言われて俺は何も言い返せなかった。

正直、どちらか選べって言われたら決められないくらいの感覚だ。

しかし、七海は妹で家族な分、ひいき鼻肩してしまふのだろう。  
だから俺は本心ではこの街を離れて都会に出て医学を学びたかつた。

「凶星でしょ。私、何でも優也の事なら分かるんだよ」

「……結羽には適わねえな」

結羽は俺の事なら何でもお見通しらしい。

なら嘘を話しても仕方がねえよな。

「確かに俺は今でも七海の事は諦められねえし、治してやりたいと思ってる。だけどダメなんだ。俺は怖いんだよ、結羽から離れてその間に結羽の身に何かがあったらと思うと……」

俺は嗚咽混じりに言った。

そんな俺に対して結羽は優しく微笑みかけて隣に來ると俺を抱きしめた。

俺は驚いた。結羽の顔は分からないから何考えてるのかは分からないけど、これは俺を思つての行動だつて事が分かる。

「大丈夫だよ優也。私はあなたがどんな決断を下そうともそれを受け入れる。都会に行くつて言うならば私は待つてるよ。約束する、優也が帰つてくるまでずっと……ずっと待つてるから」

「結羽……」

俺は結羽の優しい言葉で遂に堪えきれなくなって涙を流す。そんな俺の背中を優しくさす摩つてくれた。

絶対に結羽のもとを離れたくない。だけど七海も大切な人なんだ。諦めきれぬわけが無い。

「結羽……俺、俺さ、すごく頑張る。すごく勉強を頑張つて都会の医療学校に進学する。進学して、立派な医者になって戻つてくるからさ。その時まで待つてくれるか？」

「うん。何年でも私は待ち続けるよ。だって私は優也の彼女なんだから」

「そうか……んで、帰つてきたら……結婚しよう」

「……ふえっ？」

結羽の顔は熱に浮かされたように真っ赤になると、可愛い声を出し

て驚いた。

正直、まだ結婚なんて考えるのは早いだろう。なんせまだ高二の秋だからだ。だけど俺は自然と結羽と生涯を共に過したいとそう思ったのだ。

「優也……。本当に私でいいの？」

「んだよ今更。俺は、結羽が良いんだよ！　結羽じゃ無きゃダメなんだよ！」

結羽がとても大切だからこそ俺は結婚と言うワードを口にした。

こんなことを口にしたら大人には小童こわっぼが何言ってるんだと笑われるかもしれないが、俺はこの時点で覚悟していた。人生を共にするって。

「それじゃあ、その証明を……頂戴？」

「証明……か」

俺は一つしか思い浮かばなかった。

だから俺なりの証明をする為に俺は結羽の肩を掴んで真っ直ぐ結羽の顔を見据えて徐々に顔を近づけていく。

それによって結羽は察したのか目を閉じた。

「結羽……」

「優也……」

そして俺達の影は一つに繋がった。



## 第105話 悶える結羽と百合

side 結羽

あの旅行から帰って来て数日がたった。

旅行から帰ってきた後、優也はいつもなら漫画を読んでいる時間帯だけど脇目も振らず必死になって勉強をしていた。本人曰く、今までの分を取り返さなければならぬかららしい。

少し構って貰えないのは寂しいけど、私だって優也の事は応援したい。だって……未来の旦那様なんだから。

適当な時間になると私はコーヒーを淹れて優也の部屋に持って行く。

扉をノックする。だけど余程集中しているのか返事が帰ってくる方が稀なので私は静かに「失礼します」と言っておコーヒーを持って優也の部屋に入る。

部屋に入るとそこにはデスクの上で真剣な眼差しで勉強している優也の姿が。

その姿はとつても凛々しくて、かつこよくてキュンキュンしてしまう。だけどそう言うのは表には出さずに静かに優也の近くにコーヒーを置いて退散することにする。

そして私がコーヒーを置くと優也はこういうのだ。

「ありがとうな」

静かな。耳を澄まさなければ聞こえない様な声かもしれない。だけど、私はいつもその声を聞いてキュンキュンしちゃう。優也は私をキュン死させるつもりなのかな？

私は足早に部屋を出ると扉の前に座り込んでしまう。

「はあ……やつぱりダメだなあ」

優也が悪いよ。あんな、あんなことを言うせいで余計に意識しちゃうし、どんどん好きって気持ち溢れてきちゃう。

もう！ 優也のバカバカバカ！

こうやって私は毎日悶えることになるのだ。

でも本当なら甘えたいし、頭撫でられたいし、デートにも行きたい

し……。でも、私の感情を押し付けるのは良くないよね。

「はあ……。優也がかっこよ過ぎるよお」

「なんですか？ 自慢ですか？ 嫌味ですか？ 私の心を抉りたいんですか？」

「ち、違うんだよ。別にそんなんじゃない」

「柴野先輩は私が先輩の事が好きだって知ってるんですよ？ なんですか？ 幸せアピールでそんなに私を精神的に殺したいですか!？」

私は今、とある喫茶店にきています。それも一人でではありません。学校では休み時間中の優也と居る時間が一番長いであろうと思われる露木ちゃんと共に来ています。

で、今は優也がかっこよすぎる問題について話し合っていました。

別に心を抉るためではありません。別に露木ちゃんが優也にデレデレとあんなにお昼ご飯を食べる時近づいて、更には露木ちゃんは優也に手作り弁当を「あ〜ん♪」していた事に嫉妬ジエラシーを感じていたから嫌がらせをしている訳では無いです。それと別に嫉妬ジエラシーもしていません。

「で、なんですか？ そんな惚気の為に私を呼び出したんですか？」

「いや、本題は別にあるんだよ」

「だったらそつち先に言ってください」

「……ご最中です。すみません。」

「じゃあ単刀直入に言うね。私とデートして!!」

「へ？ デートですか？ デート……デート!？」

「うん！」

私が単刀直入に言うと露木ちゃんは顔を上気させて、仰け反りながら驚いた。

少しオドオドと恥ずかしそうにしながら一旦逸らした目を意を決した用にこちらへ向けると聞き返してきた。

「デートって……あのデートのことですか？」

「どのデートかは分からないけど多分合ってるよ」

私が露木ちゃんの問に答えた瞬間、更に顔を真っ赤に染めた。まるで百面相だ。

「で、でも女の子同士だし」

「関係ないよー」

そう、関係ない。

実は優也とは遠出してのデートは良くするけどショツピングデートとかはあまりしないのだ。だからその予習をしたいと思いますし、更にあんまり優也の近くに居すぎても集中したいだろうし、迷惑になるかなと思つて行動に出たのだ。

「か、関係ない……。で、でも場所を考えましょうよ。ここ、喫茶店で」

「そうだね。確かに気が回らなかったかも」

（し、柴野先輩がかなり積極的だ!? 女の子同士なのにデートに誘ってきたし、何かがおかしい! それとももしかして、男には飽きちゃつて次は女の子に乗り換えたとか!? だ、だとしたら私、私!?）

「え、えつと……。どうして私をデートに? それなら先輩を誘えば」

「……邪魔だったから」

私かね。

（じ、邪魔!? つ、つまり柴野先輩は百合に目覚めてしまつて先輩の事が邪魔に!? 私で性欲を満たそうとしている!?!）

「か、考え直してみては?」

「考えてみたよ。でも、露木ちゃんにしか頼めなかつたんだ!」

「私に……。しか!?」

こんなデートの練習なんて事情を知っている露木ちゃんにしか頼めるわけが無い。

しかも、平日は二人一緒に居る事が多いし、何かと優也の好みを知っているかもしれない。

ちよつと露木ちゃんには申し訳無いけど手伝ってもらうしかない。

「で、でもなんで私なんですか?」

「えつと……。いつも近くにいたから」

優也のね。

（え!?! これって完全に黒だよね!?! だって結羽先輩、私の事を見ながら恋する乙女のような表情を浮かべていたんだもん! でもどう

しよう。こうなったからには受けるしかないのかな？ うん。これは柴野先輩を先輩から引き離せばチャンス……いえ、百合からノーマルに戻してあげないと)

「分かりました！ 受けます！」

「え、本当!? ありがとう！」

こうして私と露木ちゃんはデートをすることになりました。

## 第106話 ジヤストタイミングとデート開始

side 結羽

露木ちやんとデートの約束も出来たし、優也のテスト勉強が終わったからお祝いに最高のデートが出来るように予習しなくちゃね。

服装なんかはだいぶ優也の好みが分かってきた。優也は私が好みの服を着ていると少し目をそらすのだ。

それで分かったんだけど、優也は清楚系が好きみたい。でもこんなにかわいい服は私には似合っていないんじゃないかって思う。着るなら私よりずっと大人っぽい人じゃないと……。

「うーん……うーん……」

「なあ、さつきから俺の隣でなに唸ってんだ？」

「ひゃあっー！」

そう言えばさつきコーヒーを持ってきてそのままぼーっと考え事を始めちゃってたんだ。長居するのは良くないってわかってるのに！

「ご、ごめんね」

「いや、良いさ。ちようど勉強も詰まってきた所だし……おいで」

優也はそう言うのと膝をポンポンと叩いて私を誘ってきた。

す、座れって事かな？ キスもした関係なのに座るのは少し照れくさくなってしまおう。

でも、勇気をだして……えい！

「おっと」

勢いよく座ると優也は後ろから抱きしめてきた。もう……優也は私を萌えさせる天才だよな。

顔がかあつと熱くなってくるのが分かった。

すると優也は私の耳元に近づいて囁いてきた。

「いつもありがとな」

ズッキューン。そんな囁き声でお礼なんて言われたら……私、私っ

！

多分私今、だらしな顔をしてると思う。だけど嬉しすぎて嬉しす

ぎてもう何も考えられないよお。

「コーヒー、いつもありがとう。すげえ美味いよ。料理も出来て気遣いも出来る。こんな彼女が居て俺は幸せ者だ」

もう、今日が私の命日なのかな？ 幸せすぎて死んじやうよお。このまま優也の膝の上で死ねるなら本望だね。

でもしたらもう優也に会えなくなるからやっぱいいや！ ずっとこのまま居たい。

私は優也に体を預ける。するとまるで小さい子をあやす様に私の頭を撫でて来た。今までは子供扱いはされたく無かったのですが、こういう風に撫でられると……ちよっと嬉しかったけど少し嫌だったの。だって女の子として見られたいから。だけど今は恋人として撫でられているから嬉しさが爆発しそうだよ。

「優也。今、私幸せ」

「ああ。俺もだ」

そして私達の顔は徐々に近づいて行き――

ピンポーン

「……」

いい所でインターホンが誰かが来た事を告げた。

私達はあと数センチの所でお互いの顔を見て固まった。優也の顔が珍しく赤くなっている。多分私も同じ。優也よりも真っ赤になっている可能性もある。

ピンポーン

再度インターホンが鳴った。催促だろう。

しょうが無いよね。……はあ。

遂に露木ちゃんとの約束の日。私が待ち合わせ場所に着くと既に露木ちゃんがそこに居た。

「ごめんね。待たせちゃったかな？」

「いえ、私は今来たばかりなので」

（ここで完全にあっち側に落とせば先輩と上手くいかなくなり、私とゴールインする可能性が高くなります。しかしその上で一番の懸念

点は私の貞操のピンチです。もしかしたら柴野先輩に襲われる可能性が……っ！ 自分の貞操は自分で守るものです！ 守ってみせます！）

何やら露木ちゃんが私を決意に満ちた目で見てくる。何を考えるんだろう。

何か嫌な予感がするけどまあいいや。今日付き合ってくれただけでも感謝しよう。だって自分の好きな人とのデートの事を相談されたら私だったら三日三晩枕を濡らしながら寝込むレベル。だけど露木ちゃんはとつても強い目をしている。私と違って大人だなあ。

（先輩略奪大作戦です）

私達は少し歩き、この街で一番大きなスーパーに来た。

ここなら色々あるし、デートの視察にピッタリだろう。と言う事でまずはファッションコーナーに来た。

デートはやはりオシャレが大切。特に自分の好きな人には気に入りたいから好きそうな服装でデートに臨みたい！

「露木ちゃん。この中で私に似合いそうな清楚系の服ってあるかな？」

「え？ なんで私に？」

「露木ちゃんってオシャレじゃん。だから参考にしたいなって」（なるほど、つまり柴野先輩はカップルが良くやる服を選ぶをやりたいう事ですね。これは別にやっても私には害はないでしょう）

「分かりました……ではこれとこれ、どっちが好きですか？」

露木ちゃんが手に取ったのは水色と薄桃色のワンピースだった。

「はやっ！ もう候補あげたの？」

やっぱり露木ちゃんはファッションの天才かもしれない。私が選んだらこんなに可愛い服はなかなか見つけれないもんね。

優也には結構「オシャレだね」って言われるんだけど、私って実は疎い方なんだよね。だから優也が家に居る今、オシャレを少しでも頑張ろうって事で。

「じゃあ、着てみようかな」

（こ、これは伝説の、カップルに良く起こるイベント。『この服似合っ

てる?』ですね。ここはきっちり良いのを選んで百合に落とします)  
まずは一着目、水色のワンピース。このワンピースは私が着て見た感想だと、可愛くてとても清楚。だけど私が着ると何かが違う。

そして試着室のカーテンを開けて露木ちゃんにも見てもらうと――

「まあ、結構良いですが随分マニアックになってますね」

「と言うと?」

「子供なのに大人ぶってる感が満載で逆にエロいです」

「何その感想!?!」

エロいって! 私達女の子同士なんだからそういう目で見てはいけません!

(百合な柴野先輩なら女の子にエロいと言われて嫌な気はしなかったでしょう。この調子で行きます)

次は薄桃色のワンピース。こちらは結構デザインも可愛くてそして清楚感はあるけど大人ぶってる感が出ない。私は結構好きかな?

そして試着室のカーテンを開けて露木ちゃんにも見てもらうと――

「面白くないです」

「何が!?!」

「いや、普通に似合ってる可愛いので」

「そ、そうなんだ……ハハ」

露木ちゃんにまともな感想を期待した私が馬鹿だったよ!



## 第107話 小さな見栄

side 結羽

結局フアッションコーナーでは何も買わず、次に来たのは喫茶店。優也は喫茶店やカフェなんかが好きだから喜んでくれるはず。

だけど、そうなるかと私が誘ったと言うのに優也の方が詳しくて結局はいつもと同じように私がリードされてしまう羽目になる。それを避けるためにリサーチをするのだ。

それにしても色々美味しそう。特にパフェ、女の子だったら結構すぐに目に止まるんじゃないかな？

優也は大抵こういう店に来たらコーヒーを注文するんだけど、私は苦いのが苦手で飲めないんだよね。砂糖をいっぱい入れたら飲めるけども。だけど優也と同じものを飲めるようになりたい！

(確か先輩はこういう店に来たら必ずと言っていい程コーヒーを飲んだはず。この前、私に相談してきた時もそうでした。そこまでは良いです。しかし問題なのは私が苦いコーヒーを飲めないことです。これではお揃いの飲み物を飲むことが出来ません)

正面の席に座った露木ちゃんを見てみると何やら露木ちゃんも考え込んでいる様子。何を考えているんだろう。たまに露木ちゃんって小難しいことを言うことがあるから私じゃ想像つかないような事とか考えてるのかな？

(どうすれば先輩を落とせるんだろう。やっぱり趣味を共有とか？となることやっぱい)

苦いのは嫌だ。だけど少しでも大人の女になる為にも、避けられない道だよね。

そう考えて私は苦手なブラックコーヒーを選んだ。すると露木ちゃんも何にするか決まったようでメニューを閉じた。

私はそれを確認するとテーブル脇にあった呼び出しベルを押す。すると店員さんがすぐにやって来てくれて、私と露木ちゃんは注文を伝えようとして声が被った。

「コーヒー、ブラックで！」

え、露木ちゃんもブラックコーヒー!? もしかして露木ちゃんって  
コーヒー飲める人!? ま、まさか成長だけじゃなく味覚まで抜かされ  
ていたなんて思いもしなかった。って成長が抜かされていると言っ  
ても僅差、僅差だから!

「え、柴野先輩ってコーヒー飲めるようになったんですか?」

その瞬間、私の時間は全て停止したかのような衝撃を受けた。そう  
いえば私が苦いコーヒーが飲めないことは優也の周りにいる人達に  
とっては有名な話だった。

それはもちろん露木ちゃんも例外ではない。だから、ここでコー  
ヒーを飲むことは見えを張っているとバレてしまう。優也にバレる  
のは良いけど、他の人にバレると少し恥ずかしい。

羞恥で顔が熱くなるのがわかった。絶対凶星だってバレたよ……。

(え!?! なんてこのタイミングで柴野先輩は頬を染めたんですか!?)

そうか! 私が見つめてるから百合な柴野先輩は恥ずかしくなっ  
てしまったと。この調子、この調子で行けば確実に落とせますね)

何やら露木ちゃん表情が変だ。まるで勝ち誇ったような表情を  
している。何を考えているのか頭を開いて見てみたくなるような顔  
をしている。

そういえば露木ちゃんの事って優也と普段良く居るって事しか知  
らないな。ご飯とかも一緒に食べてることが多いし、その点では妬け  
ちやうな。でも優也は本当に可愛い後輩としか思っていないらしく、  
可愛がっているようだ。

その点、私は彼女と言うアドバンテージがある。この分があるから  
少し安心。しかも私は優也にすごく大事にされてるなって感じる。

よく優也は私を抱きしめるんだけど、その時の優也がすごく優し  
い。そう言う瞬間に私は優也が好きになって良かったなと思うのだ。

「も、もちろん飲めるよ」

取り敢えず返答を返しておく事にした。

だけどもめんなさい! 嘘です。実は全く、これっぽっちも飲めま  
せん!

(え、柴野先輩がコーヒーを飲めるように!? これは事件です。この

ままでは私が柴野先輩に勝てる可能性が低くなってしまいました。そしてコーヒーが飲めることで更に仲が深まってしまおうでは無いですか)

急に露木ちゃんがガタガタ震え始めた。もしかして私が嘘を着いたことに気がついて怒ってるのかな？ でもこれくらいの見栄、張らせてくれたっていいでしょ!? 人間は皆見栄を張って生きてる物なんだから!

少し待っているとコーヒーがすぐに運ばれてきた。

私はこの香りが好き。飲めないけどこの香りは好きなのだ。飲めないけど。

そして恐る恐る一口。ここは悟られないように注意しなくてはならない。

その瞬間だった。コーヒーが舌に触れた瞬間、ものすごく強烈な苦味が私を襲った。

苦い苦い苦すぎる。やっぱり私にとってコーヒーはかなり危険な飲み物。だけど露木ちゃんの手前、絶対に苦しみを外に漏らせない。何とか耐えないと。

(あ、あの柴野先輩が飲んだ!? 本当に飲めるの? でも飲まないと柴野先輩に遅れを取ってしまう。私、やるよ!)

すると露木ちゃんはマグカップの中のコーヒーを一気飲みしてしまった。

あの苦いのをあんなに一気飲みできるなんて!? これは本物だ。

負けた、また負けた。優也は私の方が好きとか言ってるけどいつかは露木ちゃんほ方に言ってしまうんじゃないかな? と心配になる。

何か露木ちゃんに勝てる点を探さないと。

## 第108話 本屋戦争

side 結羽

次にやって来たのはゲームセンター。なのだが、私達は二人とも気が乗らなかつた。

確かに来たことがあるし、一般的な男子高校生だったら好きな人も多いだろう。

しかし、優也は一般的な男子高校生ではない。ゲームも全くせず、やる娯楽としたら読書くらいな物だ。

そんな優也がゲームセンターを楽しむとは思えない。

だけど一般的な理論では結構好きな人も多いからあわよくば的な感じで来てしまったが失敗だったかもしれないと引き返そうとしたその時、

「ん？ あ、結羽と露木ちゃんじゃん」

「結羽と、優也といつも飯食ってる後輩ちゃんか」

そこに居たのは悠真と童明寺君だった。この二人はこのゲームセンターに入ろうとしている所で鉢合わせたのでここに遊びに来たのだろう。

そうだ、折角だから二人に案を聞いてみても良いんじゃないかな。

「あの、聞きたいんだけど」

「なんだ？」

「優也ってどんな施設が好きなのかな？」

悠真なら中学からの付き合いだし、童明寺君とは妙に仲が良くて一緒に遊びに行ったりとかがあるから良い情報が得られるかも。

そんな訳で聞いたのだが、二人とも少し考え込み始めた。

どうやら中学の頃から優也はあんまり遊びに行かない人だったらしく、どう言う所で遊ぶのが好きなのかはつきりとは分からないと言  
う。

「でもまあ、優也の奴が好きそうな所と言えば喫茶店だよな」

それは知ってるんだよ……。だって優也、休日は朝バイトで、昼で終わるんだけど終わったら喫茶店で勉強してから帰って来るんだよ。

これで好きじゃなかったら逆になんなんだよって話だよ……。  
すると童明寺君も思いついたみたい。

「優也は最近、読書に嵌っているらしいんだが、喫茶店に寄ったあと本屋に寄ってから帰るのが習慣になってるんだとよ」

喫茶店だけじゃなくて本屋にも行ってたんだ。通りで休日はすごい荷物と共に帰宅する訳だ。

あんまり何を買ったの？ とか問い詰めるのは好きじゃないから聞いた事がなかったため、知らなかったけど多分ねあれは大量の漫画や小説なんだろうな。

ちなみに本は沢山あったけどその全てが健全な内容だったのが彼女としては安心ポイント。もしエッチなやつとかあったら……燃やす。

エッチなものはわ、私が居るんだから要らないよね。……全然そんな素振りは見せてくれないけど。

「本屋かあ」

今はどんな本があるんだろう。

優也は意外とSFとかの小説、漫画をよく買っているからそれ系の物が好きなんだろう。話を合わせられるように私も何か買ってみようかな。でも優也の持っているのはレベルが高すぎて分からなかったけど。

「そーいや最近何か優也の奴、周りをキョロキョロしながら本屋に入って行くのを見たな」

周りをキョロキョロ？ あ、怪しすぎる。もしかしてエッチな本とか？ いや、でも昨日もエッチな本チエックしたのにそんなもの無かったし……。でも普通の本を買うならそんなに挙動不審に周りを確認する必要がない。

これは帰ったら問い詰める必要があるね。

「じゃあ本屋に行ってみましょう」

「うん。そうだね」

何故か物凄くやる気の露木ちゃん。そんなに協力的にってもらって嬉しいな。

(百合に目覚めつつある柴野先輩が何故先輩の事を聞いたのかは分かりませんが、これはチャンスです。ここで先輩の好きそうな本をプレゼントすればきつと先輩の心も揺らぐはずです)

そんな訳で私達は本屋に行く事にした。

本屋に着くと私は直ぐにSFコーナーへ向かった。勿論優也の趣味を理解するためだ。

中でも私が理解しやすそうなSFを見てみる。

私の後ろでは露木ちゃんもSF小説を見ている。もしかして露木ちゃんもSFが好きなのかな？

(普通に好きなのを見るのも良いけど何か先輩の好きそうなものとか見に行こうかな？ あ、これ出てる。買おうかな)

あ、露木ちゃんが本を手を取ってる。面白いのかな？ 結構続きが出ているものみたい。確かこの小説は優也の部屋の本棚にあったはず。

見る限り私でも理解出来そうな内容だし、これ買ってみようかな。そして私はその本を手にとってレジへ向かった。

露木ちゃんはと言うと今度は難しそうな政治の本の方へ行った。

私も一瞬、優也と話を合わせようと思ってそれ系の物を見てみようかなって思ったけど前にボソツと純粋な政治の話とかはあんまり好きではないって言うていたから私は別にいいかな。

買ってから私は露木ちゃんの後を追っていく。

露木ちゃんはこういう物も好きなのかな？ なんか露木ちゃんの事がすつごく大人に見えてきた。

(先輩の心を掴みたいけど、全く理解が出来ない。そもそも私、社会が苦手なのを忘れてた。中学の社会すらうろ覚えになつててあんまりついて行けない)

なんか露木ちゃん、難しそうな顔をしてる。何かあったのかな？

「これでいいかな」

そう呟いて手に持ってた本を露木ちゃんは買って来た。

そこでもう既にかかりの時間になっていた。

冬なので既に空は茜色に染まっていて、そろそろ帰らないと危ない時間。だからデート練習はここで終わりにすることにした。

「ありがとうね。露木ちゃん」

「いえいえ、私もなんだかんだ言って楽しかったですから」

それなら良かった。勝手に連れ回して悪かったなと思っていたから。

そして別れの挨拶をして別れた。

家に帰ると優也が料理をしていた。

「何作ってるの?」

「ポテトチップス」

「ポテチって作るものなの!?!」

しかし、私の事は気にせずどんどんとじゃがいもを薄く包丁でスライスして揚げるを繰り返していた。

出来上がった物を食べさせてもらったら塩味の加減が良くてまだ暖かくて美味しかった。

料理出来過ぎる彼氏を持つと将来、何もする事が無くなりそうで怖いのです。

## 第109話 恋は盲目

side 優也

今日は二学期終業式。学校が終わり、冬休みに入る。

そして今日は12月25日。俺の誕生日だ。今までは誕生日になると憂鬱に思っていた。あの馬鹿が変な事をするからだ。プレゼント然り行動然りだ。

しかし今日はそんなに憂鬱に感じていない。今までは俺の家だった為、すぐに来られてしまっていたが、今俺は柴野家に住んでいる。誕生日パーティをするにしても柴野家で行う事になるだろう。

俺が柴野家に住んでいる事はあつしと白井さんしか知らない。これは完璧だろう。俺は今年こそ静かな一日を……。

「ゆ、優也。優也」

終業式中、俺は寝てしまっていた。

男女で並んで座っているのも必然的に教室と同じく結羽と隣になっっているのだが、その結羽が俺を起こそうと必死になっているみたいだ。

「先生が見てるよ」

そんな声は俺には届かない。

俺は昨日、夜中中ずっと勉強していた為、ものすごく眠いのだ。

しかし最近の勉強のお陰で期末テストはなかなかの出来だった。

その疲れが出てしまったのかもしれない。

「ど、どうしよう……」

そこで俺の元へ今倉先生がやって来た。

俺を揺すり起こそうとしてくる。しかし起きない。

「優也。起きろ」

後であつしから聞いた話によると結羽はずっと起こそうとしてくれていたらしい。それは悪い事をしたな。

「もう……そんなになる前に休んでよお」

家に帰り、結羽に眠っていた事を謝ると結羽は俺の体の事を心配し



てくれていたようでお説教混じりに言ってきた。

「いや、そういう訳にもいかな——」

「私にとっては優也の体が大切なの！」

結羽が俺に抱き着いてくる。

その抱擁がなんだか暖かくて安心する。それだけで「ああ、俺はやっぱり結羽の事が好きなんだな」と実感する。そして好きな人に心配して貰えるのは嬉しい。これからは少し休憩を摂りつつ頑張ろうと決意する。

「ありがとな結羽。俺は目が覚めたよ」

「ま、まあ、私は優也の彼女なんだから心配するのは当たり前なんだから！」

その彼女と言う言葉を恥ずかしがっている結羽が可愛すぎて思わず強く抱きしめてしまった。

俺の腕の中に居る結羽が「ゆうやあく」と蕩けきった声を出して更に俺の胸に顔を埋めてきた。

その時、

「あ、」

玄関から声が聞こえてきた。

ゆつくりとそちらを見るとそこには冬馬が居た。随分と久しぶりだな。

それにしてもタイミングが悪い。従姉のこんな蕩けきった表情を見せてしまった。

「えつと……お兄様？」

「なに？ 君の家庭ってそんなに厳格なお家なの？」

「いやいや、なに久々に来てみたら姉ちゃんと兄ちゃんがイチヤイチャしてるんだよ！ あれか？ 俺はもうおじさんになるのか!？」

「ならねえよ」

何言ってるんだよいきなり。冬馬がおじさんになるって事は俺と結羽の間に子供が出来るってことだぞ。そんなのはまだ早いって、結婚すらしてないのに。

と言うか今までどうしてたんだ？ なんか家には居たっばいけど

……監禁されてたの？

「あれ？　とうまっ！」

遅い！　今気がついたのか？　だから冬馬が居るつてのに俺の胸に頬擦りしてきてたのか!?

物凄く恥ずかしいんだが。だけど、冬馬に気がついた今でも俺から離れようとはせずしつかりと俺に抱きついている。なんとまあ大胆な。

「ねえ優也。今日って誕生日だったよね」

「ああ、そうだな」

「えへへ。いっぱいお祝いしてあげるね」

「待って待って！　俺の事を無視しないで!?!」

一回気がついた物の、すぐにデレデレモードに戻ってしまった。何が原因なんだろうか？　最近はデレモードになると長い様な気がする。しかも冬馬位じゃ正気には戻らないと……。

それにしてもさすがに冬馬が可哀想すぎる。

「なあ、少し冬馬の方を見てあげたら——」

「はい、優也。あーん」

今度は近くにあったチョコの袋を持ってきてあーんしてきた。まあ、俺も嬉しいが冬馬の事も……って言っても無駄か。

「お母さんは優也の誕生日パーティーの買い出しに行ってるから二人きりだね」

「なんだか美樹さんにばかり悪いような……二人きりじゃ無いけどな」

準備を任せっぱまなしつてのは少し罪悪感が湧いてくる。俺も少し料理の手伝いをしようかな。

そんな事を考えていると結羽は急にムスツとした表情になった。

「優也。私達は優也をお祝いしたいの。だから私達だけでやらせて」  
そうか。俺も覚えがある。結羽の誕生日は俺らで準備がしたい。なるほど、そういう事か……。

ってか口に出してないのに心を読んできたな。俺の周囲の人間はやはりエスパーらしい。

冬馬はもうすっかり空気になっただけで一人でテーブルに着いてチョコを静かに食べ始めた。

「ごめんな。俺も君から結羽を奪いたい訳じゃないんだ……。」

「良いんだ……。姉ちゃんが幸せならそれで」

「ごめん。本当にごめん！　なんだかすごい罪悪感が湧いてきたよ。」

「結羽、そろそろ」

「ゆうやあ。優也はこうしてるの嫌？　もしそうなら離れるけど」

「そういう訳じゃ」

「なら良いよね！」

俺の意思が弱いせいでごめんね。

俺はこの後ずっと冬馬に謝り続けた。

## 第110話 結羽の暴走

side 優也

「ふんふんふーん」

今は美樹さんが買ってきた食材を使って結羽が鼻歌を歌いながら料理をしている。

いつもクリスマスと言えば七面鳥を買ってパーティをしているらしいのだが、今年は結羽が自分で作りたいと言い出した事によって結羽が作るようになった。

そしてその食材を買ってきた美樹さんと言うと、

「これが親離れってやつね……グスン」

俺の隣でしくしくと泣いていた。

実は美樹さんも張り切って腕を振るうつもりだったらしいが、結羽にキッチンから追い出されたのだ。なんでも、「私が作るの！」と言って聞かなかつたらしい。だが、これは親離れと言うよりもわがままでと思うんだけど……？

だが、今はそつとして置くのが優しさだろう。大丈夫ですよ、今日が終われば彼女はきつとあなたの元へ帰ってきますよ。

しかし気になるのは結羽の張り切り様だ。張り切りすぎて変な失敗を起さなければいいが……。

まあ、結羽の事なら心配無いだろう。結羽の料理の腕はよく知っている。

「姉ちゃん、すげーな。キッチンの上が料理で埋まって来てる」

うん、あれはこの人数のパーティで食べる量じゃねえ。

キッチンの上じゃ足りなくて、簡易テーブルを取り出してきてその上にも並べ始めた。

作り始めて15分だが、かなりの手際で既にもう10品以上ある。美樹さんの買ってきた食材だけであれだけのバリエーションを出せるなんて流石結羽だと言うしかない。

俺なんかじゃあんなに量は作ることは出来ないだろう。

しかもまだまだ食材が残っている。結羽の奴、まだまだ作るつもり

だ。流石にそろそろ止めないと食べ切れない。

「ゆ、結羽。ちよつと待て」

「止めないで優也。私は今、幸せなの」

そっか。幸せなのか、なら仕方が……って流されるところだった。

「待て結羽。それ以上作ったら食べ切れなくなる！」

「え？ 優也、まさかとは思うけど、聞くよ？」

「ん？ おう」

「まさか、まさかだよ？ まさか、私のご飯、食べれないわけ……ナイ

ヨネ？」

「狂気禁止！」

俺は結羽にチョップした。

今の台詞、かなりの狂気を感じた。

俺のためだとはわかってる。だが、あんまりにも暴走し始めたら止めなければいけない。その役目は俺の役目だと思う。だからここで止めなくては！

「ゆくやあ、酷いよお」

「言ったよね？ 狂気禁止って」

「狂気じゃないもん！ 優也が好きって気持ち溢れてるだけだもん！ お母さんの手料理と言えども私以外の女の料理を食べてる優也を見るとムカムカするだけだもん！ 優也は私以外の料理を食べちゃダメなんだよ！ あ、私以外を食べてもダメだよ……って恥ずかしいこと言っちゃった」

ダメだこりや、言っても聞く気がしない。

これを狂気と言わずしてなんなんだよ。しかも美樹さんにまで嫉妬してたのかよ、君の母親だぞ？ 旦那が居るんだぞ？

「大丈夫だ、安心しろ。俺は結羽一筋だから、いい子だから料理はここまでにしようね」

「え、なんで？」

「なんでもだ！」

こうして何とか結羽をキッチンから引き剥がすことに成功した。あと少して俺の腹が裂ける所だった。

「誕生日おめでとう!」

「おめでとう優也!!」

三人が俺の誕生日を祝ってくれている。なんか約一名だけテンションがまるで違うんだけど。

と言うか美樹さんと冬馬が居るのにまた抱きついて来ている。すみません美樹さん、娘さんがこんなになってしまつて。

「仲が良いわねえ」

仲が良いで済ませていい事なのかな? ただ仲が良いんじゃないかって恋人だから甘えてきてるんだと思う。

「はい、優也プレゼント!」

突然プレゼントを渡してきた結羽。

受け取つて開けてみていいかの了承を得てから俺は開けてみたとすると中に入っていたのは、

「……ネックレス?」

「うん! 貯金を貯めて買ったんだ」

そうか、俺にアクセサリーなんて似合うのか? 俺なんかよりもチャラ男とかがしているイメージなんだけど。

だが、結羽が買ってくれたものだから大切にするか。

にしてもこのプレゼントの意味が気になる。ちよつと聞いてみるか。

「ちなみにネックレスって永遠に繋がっていたって意味があるらしいんだが、知ってたか?」

「勿論、だつて優也は卒業したらこの街を出て行っちゃうんでしょ?

だからその間も繋がっていたいなつて」

可愛すぎる。やっぱり俺の彼女は世界一の可愛さだ。

少しだけここに居たいって気持ちが出てくるが、俺は必ず都会で医者になつて帰ってくるつて約束したからな。

「ああ、俺もだ」

「俺らも居るのになあ」

「仲がいいわねえ」

冬馬に呆れられてしまった。美樹さんは平常運転のようです。

「ありがとうな。大切にする」

「うん！」

結羽の笑顔が花開いた。それを見るだけで俺は今よりも何倍何十倍と頑張れそうだ。

俺は改めて決意した。結羽の期待に答える為にも絶対に医者になつて戻つてくる。

こうして俺らは結羽の作った大量の料理を食べて俺の誕生日兼クリスマスは終わった。

その日の夜、突然俺の部屋がノックされた。

「ん？ どうした結羽」

「ちよつと寂しくなつて……。あと一年しか一緒にいけないと思う」と

そうだ。一年後、俺はこの街には居ないだろう。多分何年かしたら帰つて来れるだろうが、そうは上手くはいかないかもしれない。それならもつと長くなるかもしれない。

「結羽、おいで」

「うん」

そして俺らは一緒にベッドで寝た。

一緒に寝ると驚く程安心して寝る事が出来た。俺らは心の奥底で繋がっている、そう思う事が出来る。

おやすみ、結羽。

## 第最終話 いつかまた、帰ってくる日まで

side 優也

時間は流れ三年生、卒業式。

俺はあれから猛勉強をした。学力が落ちた時の事をカバーする様に中学の頃みたいに全ての娯楽を無視して勉強をした。

まあ、流石に結羽達の事は無視することは出来ない為、息抜きに雑談なんかはしたが、殆ど部屋に籠もりきって勉強をしていた。

結羽には寂しい思いをさせているかもしれないと思ったが、結羽が「気にしないで」と言ってくれたのでだいぶ安心した。本当に好きになったのが結羽で良かった。

そして俺はその勉強の甲斐もあってか都内でもハイレベルと言われている医師学校に受かる事が出来た。

運に関してはダメダメなので運ゲーでは無く確実に受かる様に猛勉強をした甲斐があった。何せ教科書を洗いざらい全て復習したのだから、かなり疲れたものの、受かった時の嬉しさって言ったら物凄いものだった。

そして受かった事を結羽に伝えると物凄い祝福してくれて、何故か俺よりも喜びパーティを初めてしまった。そんな結羽の姿を見れて余計に嬉しくなってくる。

俺は卒業したらすぐに飛び立つ。俺がみんなと居れる時間もあと少しだ。

因みに悠真は近所の専門学校。星野さんは近所の大学。結羽も星野さんと同じ近所の大学に行く事となった。

俺らの学校は結構レベルが高かった為、結羽がダメに見えたが、結羽も本来はそこそこの学力はあったようで今回はまだ易しい大学を受験した為、合格はそう難しくは無かったようだ。

そしてついに来た卒業式。俺らは最後となる伊真高の制服に身を包んで体育館の自席で自分の名前が呼ばれる事を待つ。

出席番号順、更に俺らのクラスはAなので俺が呼ばれるのはすぐだ。



俺らのクラスは担任の今倉先生が名前を読み上げて行く。

「絆成 優也」

「はー」

大きく返事をして俺は壇上に登り、校長先生の前で礼をする。すると校長先生は一枚の卒業証書を手に取り、読み上げ始める。

「卒業証書、絆成 優也」

以下同文だ。内容的には良くある全ての過程を終了しました的な事を書いてある。

俺は壇上で卒業証書を受け取りながら色々な事を思い出していた。

医療研究会と言うくじ引きの部活に入れ無かったこと。入学早々に寝坊して遅刻しそうになった所、同じく遅れそうになって走っている結羽と十字路で出会った。

そして初めて公園で話をして友達となった。

悠真と再会、生徒会長の白波さんとの出会い。そして副会長の神乃さんとも出会った。

バイトを初めて如月と北村さんに出会った。

二年生では神乃さんの妹さん、露木ちゃんと出会った。最初こそ辛辣だったものの、段々と打ち解けてきた感じがして少し嬉しかった。

萌未と久しぶりに会うと悪化していた。昔からだ、更に悪化していた。何がとは言わないけどな。

その他にも沢山色々なことがあった。俺の人生の中で一番濃い学校生活だったと思う。

俺が壇上から降りると次の人の名前が呼ばれる。

「柴野 結羽」

「はー」

ついに結羽の番だ。

結羽はあの壇上で何を考えるのだろうか？ だが、誰でもあの上に立ったら今までの事を思い出すのでは無いだろうか。それは良い思い出も悪い思い出もあるだろう。だが、それら全てが高校での思い出なのだ。青春の1ページなのだ。

「白井 つみぎ」

「はいー」

白井さんは最初こそ引つ込み思案であつしとしか話せなかったが、いつの間にか俺とも話せるようになっていて今では結羽とは仲良しだ。

よく結羽とは遊んでいるのを見るため、仲良くなった二人を見て安心する。

「童明寺 あつし」

「はいー」

あつしは学校ではクールキャラで通つてて、イケメンなので隠れファンクラブなるものも存在する。まあ、白井さんが彼女権限で近づかせないだろうけども。

いつもは弱気の白井さんもあつしの事となつたら異常な行動力を発揮する。

そして俺らのクラスは終わり、次のクラスへ移る。

「坂戸 悠真」

「はいー」

悠真は俺の中学時代からの知り合いだ。途中であいつが転校して行ったが、進学を期に戻ってきた。騒がしい部隊の一人だ。

奴に俺はいつも振り回されていたなあ。

「星野 光」

「はいー」

星野さんは文学少女的風貌で、人と絡むのを好まない。だが、そんな彼女が俺の事が好きだと知った時はびっくりした。

星野さんもかなりの学力なので俺と一位二位争いをしていた。良い思い出だ。

そして全員に卒業証書を手渡され、卒業式が終了した。

「おつかれ〜」

「ん？ ああ、お疲れ様」

卒業式が終わり、玄関に出ると隣を歩いていた結羽が突然声をかけた。来た。

確かに疲れた。卒業証書を受け取るだけだが、普段ああ言うところ

に登らない俺はかなりの緊張で疲れてしまった。

「で、でき優也。あの、第二ボタンって貰えるかな？」

「ああ、いいぞ」

「あーあ……やっぱり勝てませんでした」

「露木ちゃん!? いつの間に」

俺が結羽にボタンを手渡しているといつの間にか露木ちゃんが真横に居たため、驚いてしまう。

「先輩はこれから空港ですか？」

「だね。向こうで色々とやっておきたいことがあるから早めの方が都合がいいんだ」

皆とはここでお別れだ。結羽は最後まで見送りをしてくれるらしい。本当にありがたい、良い彼女を持ったなとしみじみと思う。

「そう言えば神乃さんも結羽と同じ大学なんだっけか……露木ちゃんはどうするんだ？」

「先輩が娶ってくださいるのなら専業主婦って言いたいところですが……残念です」

当然露木ちゃんは娶らない。娶るとしたら結羽だ。俺の恋愛として好きな人は結羽だけだ。

普段の結羽の事を見ていたら結羽以上に良い女性が居る気がなくて浮気する気にもならない。まあ、もとより浮気なんてする気は無いがそれだけ結羽は良い彼女って事だ。

「優也、寂しくなるね」

「だが、全く連絡をしてはいけないわけでない。こまめに連絡はするさ」

「うん、期待して待つてるね」

そして俺と結羽は空港へと向かった。

じいさんとばあちゃんにも途中で挨拶して行つた。ばあちゃんは年相応の感情表現で涙をポロポロ流して別れを惜しんでくれ、じいさんは「早く行け、バカ孫が」と口は悪いが表情からじいさんも寂しいと思ってくれているようで少し嬉しくなった。

「それじゃあ優也、ここでお別れだね」

「そうだな。じゃあ、何年後になるかは分からないがまたここで再会しよう」

「うん！」

俺は最後に結羽と唇を重ねた。ほんの一瞬くつつけるだけだったが、幸せな気分になれた。

ポンポンと頭を撫でてから俺は飛行機に乗り込んだ。

飛行機の窓から最後のこの街の景色を眺める。

「しばらくの間、さようならだ。伊真舞市」

こうして俺は都会へと飛び立った。これからもっと辛いことが待っているだろうが必ず七海を治してみせる。

「七海、兄ちゃんは頑張るからな」

最後にみんなで校門前で写真を撮った。その写真を見ながら俺は飛行機に乗ること数時間後、俺は都会にたどり着いた。

ここから俺の新生活が始まる。

とある空港。そこに一人の男がいた。

その男は真っ黒なスーツに身を包み、大きな鞆を持っていた。その中には白衣が入っており、その他にも大切な物が色々入っている。

空港で飛行機を待つ間、男はもう五年も前に撮った写真を見ながら微笑んだ。

その写真は男にとって友達のみんなが集まって撮った集合写真。その写真を見ながら男は五年前の事を思い出していた。

もう五年も経つと言うのに物凄く大切に保管されていたせいか、色褪せること無くその時の状態で残っていた。

『次は龍川空港行き。ご登場は7番ゲートです』

そのアナウンスを聞いて男は写真を鞆に仕舞うと飛行機に乗る為に歩き出した。

「あそこに行くのは久しぶりだな。伊真舞市」

伊真舞市のとある店前で人集りが出来ていた。

それも全員が同じ学校の友人。つまりは同窓会に出席しに来たメンバー達だ。

既に全員20歳を越えているため、居酒屋で飲み会をする事にしたのだ。

だが全員が来れた訳でもないのだ。約一名ほど同窓会に来れていない人物が居た。

その人物にもちゃんと招待状は送ったのだが、全く返事が無い。その為、メンバーは少し不安になってしまっていた。

「ったく、あいつはどこほつつき歩いてんだ」

「あ、あつし君。そう言う言い方はあんまり良くないよ……思うよ。多分忙しいんだよ」

「そうは言うけどよ、つみき。お前も全員で集まりたかったのは同じだったんじゃないのか？」

「た、確かにそうだけど……」

そう会話する二人の左手の薬指にはお揃いの指輪がハメられて居た。

この二人の結婚は別に意外でも無かった。ここに居た全員が既に予想は出来ていたのだ。

二人は高校生の時から既に付き合っており、高校を卒業したら直ぐに結婚するのかと思われたが、二人はなんと20歳の時にあつしから告白し、結婚。予想外の遅さに祝福とブライディングの嵐だった。

だがその時のつみきの嬉しそうな顔を見ると直ぐにブライディングの雨は止んだ。

そんなつみきのお腹はポコッと膨らんでいた。

「結婚は今結婚している人の中で遅い方なのに赤ちゃんが一番速かったね」

「うん」

「赤ちゃんを身ごもった感じってどんな感じなの？」

「なんかね、ちよつと体が重く感じて今まで以上に疲れるんだけど、全身で幸せを感じてるみたいでなんだかその疲れも嬉しいっていうか……えへへ」

つみきは嬉しそうにお腹を撫でながらえへえへと笑う。

「結羽も早く絆成君が帰ってくるといいね」

「うん……でも私は急かすつもりは無いんだ。優也には自分のペースで生きて欲しいから」

結羽は遠い目をした。

羨ましかつたのだ。確かに自身にも恋人が居たが、彼氏は都会の方へ出て行ってしまったから事実上の遠距離恋愛となってしまった。

それから会っていないし、電話をしたりメールをするだけだ。けど結羽は全く彼氏への愛は尽きていない。寧ろ期間が長引く度に会いたい会いたいと強く思うようになって更に愛が強くなって行くのを感じていた。

「そういう事を言っていると帰ってきた瞬間に寝取ってやりますよ柴野セ・ン・パ・イ」

「む？ 露木ちゃん。それはどういう事かなあ」

「痛い痛い！ ぐめんなさい！ 許してください！」

露木も結羽の彼氏の事が好きだった人物の一人。偶にこう言うネタを口走るが好きだった事を知っている結羽は気が気じゃなく、思わず過剰反応をしてしまう。

露木はもう諦めており、現在は隣の県で一人暮らしをしながら会社で働いていた。

「露木ちゃんが悪いよ〜」

「真依先輩!? どうしてここに!?!」

「居ちや悪いかしら？ 私も一応『友達』の括りだと思うのだけど」

現在、露木と真依は同じ会社で働いていた。そして真依は露木の上司に当たる人物なのだ。

「それにしても来るのか？ 全く……同じ遠方からはるばる来た神乃さんも来てるってのに」

「多分優也は来ると思う」

「へえー。まあ、確かにあいつは何も言わずにすっぱかすようなタマじゃねえもんな」

悠真と光の坂戸夫婦。みんなにとって一番意外だったのはこのカップルだ。

悠真と光が付き合いだしたのは卒業後。卒業後、二人は偶然再会したことにより一緒に遊ぶようになった結果、悠真から告白し、今に至る。

光はあつしとつみきよりは遅いものの、身ごもっている。

「うう、親しかかった人同士が次々と結婚を！ しかも結羽ちゃんまでそっちに行くのね！ およよおよ」

「会長。そんな泣き真似は辞めてください。恥ずかしいです」

「そ、そうです！ それに私も結婚してませんから！」

「でも婚約者が居るのでしょ？ そんなの、結婚しているのと同じじゃない！」

結羽はそんな元生徒会長の様子を見ながら引き笑いをしていた。

「でもまあ、あいつも来るかは分からないしもう入っちゃうか？ 来るなら招待状に店の名前も書いてあるから来るだろうし」

そして全員が待つことを諦めて今居るメンバーで始めようとしたその時だった。

店の目の前に1台のタクシーが止まったのである。

そのタクシーからは真っ黒なスーツを来てサラリーマン的な風貌のおとこが降りてきた。

サングラスをかけており、顔がはつきりとは分らないが、みんなは一瞬でその人物が誰なのかを見抜いた。

「ありがとうございます」

男はタクシードライバーに礼を言うと、振り返って店を眺める。そして間違いない事を確認してから店に入ろうとしたその時だった。

「遅れちゃったし、みんなもう始めてるか……な………つ!」

男は驚いた表情をした。その表情を見て全員確信を持った。そして決定打は驚いた表情をした後に男がサングラスを外した事だった。

『優也っ!』

「おわつと、みんな!」

優也はいきなり取り囲まれた事にビックリしたものの、直ぐに元の雰囲気に戻った。

「遅せえよ。今まで何やってたんだよ」

「そうだ! 珠には連絡よこせ馬鹿野郎」

「悠真……あつし……」

口調は強いが、心配してくれていた様子の二人に感謝する。

「そう言えば悠真と星野さん、結婚したんだってな。おめでとう。これ、結婚式に出席出来なかった詫びだ」

「うわあ、高そうなお菓子だな。大事に食べさせてもらうよ」

「ありがとう」

事前に優也は手紙で結婚した4人の事は伝えられていた為、結婚祝いを買って来たのだ。流石に悠真と光が結婚した事には優也も驚いていたが。

「あつしと白井さんも。おめでとう」

「サンキュー」

「ありがとうね」



同じようにあつしとつみきにも結婚祝いを手渡した。

そして他の面々の方も見る。

「手紙を読んだんですが、白波さんと露木ちゃんって今、一緒に働いてるんですよね？」

「ええ、そうね。彼女は本当によくやってくれているわ」

「そうでしょう。俺の自慢の後輩ですからね」

「なんで先輩が誇らしげなんですか……」

優也的には露木は一番可愛がっていた後輩だった為、少し心配だったのだが、手紙で真依と一緒に働いてると聞き、少し安心したのだ。

「神乃さんもお疲れ様です。長旅で疲れましたよね」

「絆成君程じゃ無いわよ」

そして一通り挨拶が終わった所で優也は最後に結羽の方へと向いた。

「結羽」

「優也、おかえり」

「ああ、ただいま結羽」

久しぶりに会えた感動からか優也は人目もはばからずに結羽を抱きしめた。それによって結羽の顔はリングゴみたい真っ赤に染る。

「まあ積もる話もあるだろうし、立ち話もなんだからとりあえず中に入ろうか」

それから席に着くと各々今までであったことを話し出した。

その中でもみんなに会える確率が低い優也と夕香の事が一番話題に上がった。

「俺は何とか医師免許を獲得出来た。んで、こっちの病院に配属される事が決まってこっちに来ようとしている時に招待状が届いたからタイミングが良かったんだ」

「そうなんだ。どちらにせよまたあえて良かったよ」

「俺もだ結羽」

二人とも、随分と会えなかった反動で愛おしさが限界突破している。今にもこのままキスを始めてしまいそうな雰囲気だ。

「良かったわね。彼氏が帰って来て」

真依は不貞腐れてチューチューと飲み物を飲む。それに同調して露木も不貞腐れてチューチューと飲み物を飲んだ。

「そう言えば結羽、プレゼントがあるんだ」

「え、何？」

そう言つて優也が取り出したのは小さな小箱だった。

「開けてみてくれ」

結羽は手渡されたので言葉通りに直ぐに開けるとその中身を見て先程優也が抱きしめた時よりも顔が真っ赤に染まり、頭から湯気を出している。

みんなはどうしたのだろうか。結羽の方を向き、全員の視線を集めた。

「ゆ、優也！ こ、これって……そう言う意味だよね？」

「ああ、そうだな」

その中に入っていたのは——指輪だった。

「結羽。俺、約束通りに医者になって帰ってきたぞ。だから俺と、結婚してくれ」

「……うん……私も、優也と結婚したい」

「結羽、ありがとう。待っていてくれて」

「ううん。こっちこそ約束守ってくれてありがとう」

こうしてまた一組のカップルが誕生した。

「よし！ 今日は同窓会兼絆成夫婦の誕生を祝して、飲むぞ！」

『おーっ！』

悠真の司会により会が再開した。

これからどうなるのかは誰も予想は出来ない。だけど優也と結羽はどんな困難もぐぐり抜ける事が出来るような謎の自信があった。

そして数ヶ月後、優也と結羽はみんなに見守られながら結婚式をあげた。

Fin

## A f t e r

「お兄ちゃん！ 起きてお兄ちゃん！」

「あと3960時間……」

「そんなに寝てたら一年終わっちゃうよ!!」

寝ている兄を妹が起こそうとしている。

休日なのだが、兄は結構な寝坊助で、妹が起こさなければ永遠に寝てしまう可能性があるので毎朝起こすようにしている。

兄の名前は優翔<sup>ゆうと</sup>。妹の名前は柚結<sup>ゆい</sup>。とても仲良しな兄弟だ。

そしてその隣の部屋でも似たような光景が繰り広げられていた。

「あなた、起きて。あなた」

「お兄ちゃん……そんなに寝坊ばかりすると結羽さんに愛想つかされちゃうよ」

「それだけは嫌だ！」

愛する妻に愛想を尽かされる。

あんまり恐れたりするタイプじゃないものの、それだけはどうしても怖いのだ。

結羽はエプロンをして如何にもさつきまで料理をしていた格好だ。

ほんのりとリビングから良い匂いが漂ってきている。

男は観念して起き上がると伸びをする。

「おはよう。結羽」

「おはよう。優也」

絆成 優也は数年前、医師になりこの地へと戻ってきた。その時に  
柴野 結羽と結婚し、式も挙げ、籍も入れて今は絆成 結羽となっている。

結羽はその名前を貰えたことが嬉しくて嬉しくてしようが無く、絆成 結羽と書く度に頬が緩んでしまうほどの甘々っぷりだ。

「しかしお兄ちゃんがこんな素敵な人と結婚するとは思っても無かつたよ」

「まあ、あの頃はな……」

優也をお兄ちゃんと呼ぶ元気な女の子。名を絆成 七海と言う。

七海は少し前までは昏睡状態だった。しかし、なんと優也はそれを治してしまったのだ。有言実行をし、その時はない喜び、目を覚まして退院した日にはパーティも執り行った。

「お兄ちゃん。そろそろ朝ごはんを食べないと時間がまずいんじゃない?」

「うわ、もうこんな時間か。早く飯食わねえと」

「あ、ちゃんと噛んで食べてね」

リビングへとダッシュしていく背中に結羽は言った。

そんな優也の様子を見て結羽はクスツと笑った。何だか慌てる優也を見るとあの再会の瞬間を思い出すからだ。

数年思い続けた相手に再会出来た時の嬉しさは計り知れないものがあつたのだ。

「さて、私も学校に行く準備をしますかね」

七海はもう二十歳だ。しかし、つい最近まで昏睡状態だったため、勉強に取り組めていないって言うことで定時制の学校に通うこととなった。

定時制だから夜からなのでまだ準備はしなくていいのに七海はだいたいこの時間から準備を始める。

「そう言えば優翔君と柚結ちゃん。見ていると昔を思い出すな」

優也も七海に叩き起されていた。ただ一つ違うのは優しさだ。

柚結は優しい。揺らしたりと優しい起こし方をする。

対する七海は起きない時はボディープレスをするのだ。それか豆腐を食べさせる。優也は豆腐が嫌いな食べ物なのだ。

「いやあ、まさかお兄ちゃんが医者だね……それに結羽さんって言う奥さんと優翔君と柚結ちゃんも居る。お兄ちゃん、良かったね」

☆☆☆☆

他の皆も結婚した人は子供が生まれて育児をしている。

そんな中、今も昔も関係が変わっていないのは、

ピンポン

「はーん」

結羽がドアを開けるとそこにはつみきが居た。二人とも親になっ

てから良く絆成家に集まって遊ぶようになったのだ。

「こんにちは結羽」

「待ってたよつみき。いらっしやいすずちゃん」

つみきの後ろに隠れている女の子、名前はすず。つみきとあつしの間に生まれた子供だ。

すずは人見知りで何度も来たことはあるが、一向に結羽には慣れない。

「ん？ お、すず」

そこへ優翔がやつと目を覚ましてやってきた。

優翔を見るとすずは優翔へと走って行く。そしてそのまま抱きついた。

なぜだか知らないが、すずは優翔にベツタリなのだ。連れてきた時はずっと一緒に遊んでいる。

最初こそ優翔にも警戒の意思を示していたが、今となってはデレデレである。

「お兄ちゃんは冷たいもんね。だから優翔君の優しさに惹かれたのかな」

すずにも兄が居る。ここに来る時も誘ったのだが、誘いを断わってゲームをしていた。

兄は少しすずに対して冷たい。つみきは照れ隠しだと分かっているが、冷たいので優翔が優しくしたら簡単に惹かれる様な性格になったのだろう。

ただ、結果的には優翔に惹かれて正解だったのだろう。優翔はそこそこルックスも良いし、何よりも優しい。

この優しさは優也と結羽の優しさのDNAを両方引継いでいるから物凄く優しく、困っている人を見たら見過ごせない性格になっていた。

その性格に結羽は昔の優也を見た。

あのサッカーボールで結羽を助けた時の優也を。優翔も将来、サッカーボールで人を助けるようになるんじゃないかなと思ってクスツと笑った。

「じゃあお茶を淹れるね」

「うん。お願い」

さすが優翔に抱き着いているのを見て柚結は頬を膨らませる。柚結にとつてすずは大好きなお兄ちゃんを奪おうとする敵なのだ。

なので柚結も無言で近づいて優翔に抱きついた。

「ちよ、柚結?」

「ふふ、モテモテだねえ」

「これはモテモテって言うのか?」

優翔は満更でも無さそうだった。

優翔は誰かさんに似てシスコン、そしてすずはに少しだけ好意を持っているので抱きつかれて反応に困っている。

「それじゃあお茶会、始めよう」

「そうだね」

今日もいつも通りの毎日が過ぎていく。